

---

# パワーショック・ジェネレーション

あずまや

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パワーショック・ジェネレーション

### 【Zコード】

Z5172F

### 【作者名】

あずまや

### 【あらすじ】

2016年より28年以上も続いている謎の電気消失状態「パワーショック」は、世界中を混乱と飢餓の底に陥れていた。国立エネルギー研究開発局長のルウ子は、長年パワーショックの原因を解明できずにいたが、元地下賊を名乗る少年バクと出会ったことで、あっけなくその秘密を解いてしまう。これで人々は救われる……そう思つたのもつかの間、復活した電気をめぐつて日本は存亡の危機にさらされていく。

## プロローグ

2016年10月1日

『優先席付近では電源をお切りください  
車内放送がむなしく響いた。

席がなかば埋まり、ほどよく人が散つた電車の三両目。優先席の  
ど真ん中。

なに食わぬ顔でケータイと向きあう女子高生がいた。

橋本ルウ子、十六歳。

ルウ子は残像が見えるほど勢いで親指を動かしていた。

『せつかくの日曜だつてのに、なんであたしらだけガッコ行かなき  
やなんないの？』

ルウ子は同志に短いメールを送る。

窓の外はとっくに日が落ち、今は帰りの電車だ。

今日は文化祭の重要な打ちあわせがあるとかで、しかたなく登校  
したのだった。日頃の夜更かしが祟つたのか、行きの電車では爆睡。  
よだれをふきふき終点で折り返してくるとすでに一時間の遅刻。降  
りた駅の改札をボーリング玉のごとく駆け抜け、道ゆく人々を三連  
続ストライク（ターキー）で跳ね飛ばし、近寄つてくる校門番にガ  
ン飛ばし、教室のドアを突き飛ばし、男子二名を保健室送りにした。  
で、煮つまることのない会議が終わるまでそこに缶詰。ケータイに  
さわる時間などなかつた。まったくもつて今さらなのが、それだけ  
は言わせて欲しかつた。

数日前のホームルーム。開始早々、重い沈黙が漂つていた。文化  
祭の実行委員をクラスで一名以上選出しなければならない。この面  
倒極まりない役目をきっと自分以外の誰かがやつてくれるだろう。  
そんな顔、顔、顔。いつまでたつてもお見あいが続いた。責任ある  
委員を選ぶときはいつもこうだ。

それが我慢ならなかつた。

挙手。教室のざわめき。黒板にルウ子の名前。黄色いまなざし。

「どうよー」と言わんばかりの得意顔。

そのときはそれでおかつた。そのときは。

同志から返信があつた。

『だつたら立候補なんかするんじゃねーよー。』

予想通りのキレ気味回答。

『ところでさ、決まつたばかりのイインチヨ（委員長）がいきなり長期病欠つてなんか怪しくない？』

ルウ子が送信すると、すぐに返事がきた。

『先輩が言つてたけど毎年のことらしによ。お次は副委員長だらうね』

ルウ子は指先に力をこめた。

『つたく、どいつもこいつも！ じゃあ、あたしがイインチヨやるよ』

『どうぞご勝手に～』

ルウ子は勢いよくケータイを閉じた。

ため息をつき、ふと車内を見まわす。

向かいあうロングシートの面々は、ちょっととした見世物だつた。

くたびれたカバンを携えたメタボ腹。全身偽物ブランドで固めた似非セレブ。イケメンカツフル。イケナイカツフル。ギャルゲーの紙袋を抱えるチヨンマゲ。貧乏搖すり上等のヤンキー等々。

皆、ちがう顔をしている。ちがう服を着ている。ちがうことを考えている。ちがう人生を歩んでいる。でも……彼らはなぜか、同一のプログラムをインストールした汎用ロボットのように共通の作業にいそしんでいた。首を前に突き出し、眉間にしわを寄せ、寄り目で画面を見つめ、ときに口を尖らせ、ときに半笑いで、あわただしく親指を動かしている。

ルウ子は正面の窓に映つた自分を見つめた。

ソフトクリームを逆さにしたような天然くせ毛が、顔の左右にぶ

らさがつてゐる。

うん、可愛い。

いや、そうじゃなくて。

自分も彼らのような愚かしい姿でケータイに食いついてるんだろ  
うか？ そうだとしたらなんか嫌。どんなに粧しても、その小さな  
物体に関わっているとき、人々はあまりに無防備だ。せいぜい気を  
つけねば。

不要な着信履歴を消そうとしたとき、突如、画面が暗転した。  
予告もなしに電池切れ？ ま、いつか。家に帰つて充電すれば。  
ルウ子はケータイを閉じてカバンにしまい、退屈しのぎに中刷り  
広告に目をやるうとした。天井の蛍光灯がやけにまぶしい。  
床下のモーターがうなりをあげた。原油価格が高騰しているとい  
うのに、無駄に速い電車。

中刷りは料理雑誌のものだった。手作りプリンの写真。  
う、よだれが……。

ルウ子はそれで一つ思い出した。三日前、自宅の冷蔵庫が故障し  
た。奥に隠したまま忘れていたかぼちゃプリンは諦めるしかなさそ  
うだ。

別のこと思い出した。

しまつた、ドラマの留守録忘れた！ ケータイは電池切れで遠隔  
操作できない。両親の機転が利いたとしても、一人は機械音痴だし。  
チイツ、最終回だつてのに！

便利な世の中になつたと誰もが言うけれど、配線一つ、電池一つ  
切れただけで、生活の質は一気に急降下する。

二年前の夏、ネオ・フランシスコ市大停電のニュース。あれはひ  
どかつた。世界をリードするハイテク都市がわずか数日で一転、不  
衛生な難民キャンプと化した。もし、それが世界同時に起こつたと  
したらどうなるんだろう？

ルウ子が想像をめぐらせてゐると、今度は視界ぜんぶが暗転した。  
床下で吼えていた電動獣は、情けない吐息をもらしながら萎んで

いく。

「え？ マジ！？」

ルウ子は思わず座席を立つた。

乗客たちはざわつくものの、パニックまでは至らない。男の舌打ちがいくつか聞こえるだけだ。街灯やビル群の窓からもれる光はいつもと変わらない。どうやら停電したのは電車だけのようだ。

「つたく！」

ルウ子はどかっと着席。

こういつときは不安よりも不満のほうが大きくなる。

夕食を温め直したら味が変わるだの、『小僧の使い』（お笑い番組）まで見逃してしまったの、とぶつぶつ言つていると、いつしか車内が異様な焦燥感に包まれていて、ルウ子は気づいた。乗客たちはこの状況を家族や知人に伝えようとケータイを握りしめているのだが、しきりに同じキーを押しては、電源が入らない入らないと腹を立てている。

ルウ子は眉をひそめた。

これだけの人数がいっせいに電池切れ？ ありえねー。

惰性を失った電車がついに止まった。

ルウ子は力無くふり向き、電車を追い抜いていく車を恨めしそうに見送……るつもりだったが、線路沿いの幹線道路は写真のように静かだった。渋滞があるわけでも、事故や検問があるわけでもない。信号は煌々と青ランプを灯しているというのに。

ヘッドライトが消えたのをきっかけに、車の中からドライバーたちが出てきた。ボンネットを開けバッテリーを調べている。

不思議なことが続くものだと思っていたら、今度は街灯が消えていった。近くから遠くへ、まるで誰かがバースデーケーキのロウソクでも吹いているかのようだ、およそ電気らしくないふるまいが、地上のスポンジの上に広がっていくのだった。

ルウ子はさつと立ち上ると、正面のシートに膝立ち、窓にへばりついた。

「ひつちもだ！ あ、今度は信号もビルの明かりも……。

ルウ子は自分の目と脳を疑つた。まるでこの電車を震源として闇が広がっていくように見えるのだ。しかもそれは震源から遠ざかるほどに加速していくのだった。

車窓はあつという間に一面の暗黒で塗りつぶされてしまった。

ルウ子だけではなく、誰もがこう思ったことだろう。

……これはただの停電なんかじゃない。

世間がそれを理解したのは、事件からひと月も後のことだった。世間が『絶望』という言葉を使いはじめたのも、ちょうどその頃だった。

2019年X月X日

「ハアハア……」

「ある廃家の庭先。ルウ子は夕暮れのひつじ雲を呆然と見つめていた。

右手に血のしたたる包丁。左手には煮豆の缶詰一つ。

豆缶は庭の物置で見つけたものだ。

だが、先に見つけたのはルウ子ではなかった。

左胸を赤く染めた仰向けの死体。

ルウ子はつぶやいた。

「また……殺しちゃった……」

捨てられた倉庫を漁つたのか、それとも誰かから奪つたものか、真新しい白のセーターを着た同じ年くらいの少女。

ルウ子は包丁と缶詰を傍らに置くと、少女の服を脱がしていった。

下着までぜんぶ剥ぎ取ると、今度は自分が素っ裸になつた。

古びてどす黒くなつた返り血。餽えたような異臭。川で何度洗つ

ても落ちなかつた。ずっと着てゐるつもりだつたが、いつかは限界がくる。母校のブレザーともこれでお別れだ。

血染めのセーターにジーンズ姿となつたルウ子は、その場で豆缶を開け、包丁の先を使って中身を一気に口へ流しこんだ。

たいした塩氣もないというのに、胃袋にひどく滲みる。この前、味のあるものを口にしたのはいつだつたろう。

ルウ子は血と汁の入り混じつた包丁を見つめた。

汁は半分残した。ルウ子はその缶を少女の青ざめた口の前にそつと置き、涙を一粒だけこぼした。

「今日のこと、無駄にはしない」

ルウ子は懐から電源の入らなくなつたケータイを取り出し、少女に見せた。

「これが使える世界……絶対、取りもどすから」

## 第一章 地下賊

2044年10月1日

その坂には無人の雑居ビルが立ちならんでいた。通りに面したショーウィンドウはどれも欠け、残りカスがかろうじて窓枠にしがみついている。歩道はガラクタだらけで足の踏み場もない。窓ガラスの破片。墜落した極彩色の看板。照明器具の残骸。骨組みだけの車。そこでは街路樹だけがすくすくと育ち、アスファルトを突き破つて太い根を這わせていた。

坂の途中。路地に身を隠す二人の少年がいた。

背の高いほう。先が破れて七分袖と化したパークーの少年は、バクといつた。黒い髪に黒い瞳。それらの表面はなめらかでありながら、まるで光沢というものがない、不思議な質感<sup>テクスチャ</sup>の持ち主だった。

バクは丸刈りでニキビ顔の少年に指示した。

「若い奴にはかまうな。老いぼれを狙うんだ。いいな？」  
ニッキは親指を突き立てた。

「オッケ」

バクはビルの角から顔をのぞかせ、坂下の交差点を見つめた。かつて、この国のある流行がこの街ではじまったという。その煌びやかな街は、日が昇り日が沈み、また日が昇るまで若者であふれていた。天災と老朽化で崩れた一部の建物を除けば、その面影は色濃く残っている。だが現在、そこに人間らしい人間はほとんど住んでいない。

その交差点を、老若男女の小さな集団が一つ一つと横切っていく。彼らはその手や背中にふくられたカバンを携えていた。

中身は見えないがバクにはわかつていた。あれは新政府による配給品、その本日分なのだ。ここのことろ不作続きで口クなものがまわってこないしそうだが、彼らの表情は他のグループとちがつて明る

い。

バクはピンときた。収穫があつたのだ。

このゴーストタウンのあちこちに、人知れず眠っている食料品があるといつ。その多くは缶詰やレトルトパックや干物などの加工食品だ。他にも、酒から菓子までなんでも出てくる。どれも三十年くらい前の代物だ。賞味期限などとつくりに切れているが、調味料不足のせいで味のない雑炊やイモやカボチャばかりの毎日に比べれば、それはもう宫廷料理のようなものだ。収穫をそのまま食してつかの間の快樂に浸るのもいいだらう。闇市にくり出し、スーパープレミアム価格で売りさばく手もある。

最後尾の集団がぽつんと一つだけ遅れていた。脚の悪い者が混じつた老人ばかりの一団だ。ざつと見て二十人。瘦せたナイフを片手に、なにかの幻影に怯えながら歩いている。

今日は獲物なしと諦め、バクたちは獵場にしている隣町から予定より早めに帰つてきたところだつた。そこへ、縄張りのど真ん中を横切ろうとする愚か者がやつてきたのだ。

いや、あと一分、こちらの判断が遅ければ連中は逆に英雄となつただろう。都合上、わずか十分間だがこの界隈の見張りがいなくななる空白がある。彼らはその情報をつかんでいたにちがいない。

坂通りをはさんで向かいの路地。

バクはそこに潜んでいる十人余りの少年少女たちに合図を送つた。先頭に立つ、穴あきベストを着たおさげの少女がうなずく。バクたちは持つていたスケボーに飛び乗り、いっせいに坂道を下つていつた。

五感の鈍つた老人たちに身がまえる時間はなかつた。

バクたちはスケボーに乗つたまま、あたから発掘品で満載のカバンをひつたくると、奇声を発しながら交差点を駆け抜けていった。

「全員ついてくるか？」

バクは顔を左右にふつた。

一人足りない。チーム最年少のニッキだ。

ニツキが狙つたのは大きなリュックを背負つた老婆だった。ニツキは体に密着した荷物を強引にひつたくるつとして、老婆ともども派手に転んでいた。

「あんのバカ！」

バクはスケボーを捨て、交差点へダッシュでもどつた。幸いニツキは額のすり傷だけで、すぐに立ち上がった。

一方、老婆は放置された土嚢のように、車線の上で動かなくなっていた。

「死んだ」

老婆を診ていた禿頭の男がうなだれた。

老婆は心臓を患つていた。ニツキの急襲に驚き発作を起こしたのだろう。何度胸をたたいても、彼女が息を吹き返すことはなかつた。老人たちは少年一人を取り囲んだ。皺の谷底にたたえた瞳を赤くし、ふるえる手でナイフをかかげる。

バクは眉一つ動かさず言つた。

「これは事故だ。殺す気はなかつた」

「盗人がなにを言つか！」ニツト帽の老人が怒鳴つた。「おまえたちは人様に迷惑をかけてまで食いつなぎたいのか！？」

「ライオンが老いた鹿を狩るとき、いちいちそんなことを考えると思うか？」

「ライオンでも鹿でもない。我々は人間だ！」

「見た目は同じでも、生き方がちがうんだよ。俺たち地下人とあんたら地上人は、すでに別の生き物なのさ」

「別の生き物……だと？」

老人はナイフの切つ先を下げた。魚の干物のように涸れた唇をなかば開き、白みかかつた瞳でバクと見つめあつ。

地下人の瞳は光を返さない。まるで乾ききつた墨のようだ。

老人は目を伏せた。

言葉の意味を理解したのだろう。

「とにかく、この罪は償つてもらひうぞ」

「老人たちの包囲網がじりじりと狭まつていく。

「殺りあおうって言うなら……」

「バクは笑みを浮かべた。

その背後には引き返してきたチームの面々。ナイフやハンマー、スリングなどで待ちかまえている。

「無駄な殺生をしないのが狩人の流儀。だが、今はこの限りじゃあない」

数は互角。だが勝負は見えている。バクのチームは平均で十五歳。バクが最年長で十六。育ち盛りの孫と足腰きしんだ祖父母が戦うようなものだ。

「くぬ……地下賊めが」

老人たちは包囲を解き、遺体を数人で抱えると、恨めしい顔を残して去つていった。

「行つたか……」

バクはほつと息をついた。

婆さんの他は誰も死なずにすんだ……。

バクはニッキの頭をゲンコツで小突いた。

「生き残りたかつたら欲張るな」

「ごめんなさい」

ニッキは小さくなつた。

「奴らがあと二十若かつたら、今頃どうなつていたか……」

バクはそこで言葉を切つた。

交差点を囲む廃墟ビル群の一つ。その屋上に誰かいる。

「武警だ！ 殺しを見られた！」

少年少女たちはあわてて辺りの物陰に散つた。

武装警察。通称『武警』。賊やテロ組織などの武装勢力を取り締まるべく結成された、新政府の一組織だ。普通のお巡りとちがい、彼らには特権があつた。現行殺人犯とその一味は、逮捕の代わりにその場で全員殺してもかまわないというのだ。

バクたち地下人には戸籍も人権もなかつた。国民の飢えを少しで

も減らしたい政府にとつてその存在は、人々の配給品を横取りしていようがいまいが、甚だしく不都合なものらしい。

武警の男は弓をかまえていた。

なぜ銃ではないのか。今どきそんな疑問を持つ者などいない。この街が遺跡となる少し前の『ある日』から、そうするしかないのだ。他の仲間は要領よく逃げおおせたようだが、ニッキだけは一人顔をしかめ足もとがおぼつかなかつた。転んだときの頭のダメージがまだ残つているようだ。

バクはニッキに肩を貸すと、逃げ場所を探した。

五十メートルほど前方に地下鉄の出入口がある。かつてはこのひび割れたアスファルトの下を、鉄の塊が連なつて疾走していたという。今はバクたち地下人の住居や通路となつている。

武警の男は弓をかまえたまま、こちらを見据えていた。

いつでも狙い撃ちできたはずなのに、あの黒ずくめの男はなにを考えている。どちらを先に狙うか迷つているのか？ そうであればチャンスだ。

「あそこだ！」

バクは地下鉄口を指すと、ニッキの背中をひっぱたいて気合いを入れた。

目が覚めたニッキはバクとならんで駆け出す。

あと三十メートル。瓦礫とガラクタで半分塞がつた地下への階段が迫つてくる。アジトに帰つてしまえばこっちのもの。暗闇の迷宮は地下人のホームグラウンドだ。新政府の狂犬といえども、そこだけは本能的に足を踏み入れようとななかつた。

あと十メートル。空からはなにも降つてこない。逃げ切れるとバクは思った。男は諦めたにちがいない。あの正確無比で知られる武警のスナイパーがだ。遠くから動く的にあてるというのはそれほど難しい。

だが、常識は覆つた。

「ガアアアアアッ！」

一ツキの右肩は無惨に貫かれていた。

「一ツキ！」

バクは負傷した一ツキを励ましつつ、背後に鋭い視線を送った。男はすでに一の矢を繼ごうとしている。

バクはうずくまる一ツキを引っ張り上げて肩を貸し、重い足どりで一步、また一步と進んでいった。

「バク兄<sup>にい</sup> 先<sup>へ</sup> 行つて」

一ツキは絞り出すように言った。

「……」

一ツキはさらに訴えた。

「これじゃア一キまで……」

「俺にあたれば一人とも助かるかもしれない。たとえ奴が魔神でも一度に一本は引けないからな」

バクは笑顔を作つてみせたが、内心は絶望感でいっぱいだった。さつきの一射。急所を狙つてわずかに逸れたのだとしたら、こんな牛歩ではもう外すことはないだろう。もし一人とも殺すつもりなら、先に狙うのは……。

バクは半身でビルを見上げた。

男は今まさに弦から手を離そうとしている。

バクは一ツキを放り出し、一人逃げ出したい衝動に駆られた。

バカな……。

バクは苦笑した。

仲間を犠牲にしてまで生きのびても、自分に課したあの『誓い』を……唯一の生きがいとしているあの誓いを守つたことにはならない。

これまでか……。

バクは敵に背を向けた。少しの間そのままだった。苦痛も死の闇もなかなかやつてこない。

「？」

バクはおそるおそるふり返った。

「 ひら、そこーつ！ 調査の邪魔！」

紺色のブレザー。チエック柄のスカート。時代錯誤な格好の少女が一人、狙撃線上で仁王立ちしている。少女は虎縞のメガホンを武警の男に向け、甲高い声でなにやらわめきはじめた。

黄金色に染まつた長い髪。竜巻の襲来を思わせる派手な巻き毛を左右に装備。短すぎるスカートの下で露わになつた太腿には、生々しい傷痕が縦横に走つてゐる。

バクはこれまで地上地下と多くの人間を見てきたが、これほど違和感のある女ははじめてだつた。なにかこう、同じ時代に生まれたはずの自分とはかけ離れた、まぶしさと哀しみを秘めているようを感じるのだ。

「……」

屋上の男は射的体勢のまま微動だにしない。

「あつそう」少女は右肩にかかる竜巻毛をバツと払つた。「あたしが誰だか知つてて」引いてるワケね！」

「！」

男はさつとかまえを解いた。

バクが次の瞬きをしたとき、男の姿はもうそこにはなかつた。

「つたく！ 賊を狩つてるヒマがあつたら、電源探し手伝えつての！」

少女の部下らしき者たちが、物陰から続々と集まつてくる。その間、少女は延々と武警への批判を口にしていた。少女はバクたちの存在にはいつさい氣をとめず、二十三十は年上の部下どもにせつせと指示を出している。

なんだかわからぬが、とにかく助かつた。

バクは意識のなくなつたニッキを背負うと、地下への階段を降りていつた。

武警の襲撃から一週間たつた。

夕刻。バクはアジトの出入口で見張りをしていた。

中年男が階段を上がってきて交代を告げた。

バクは男と入れちがいに階段を降りていった。

地下一階。通路の左右にずらりとならぶ小さな区画たち。地下街の名残だ。当時は衣装やカバンや下着専門店などが入っていたというが、その面影は色あせた看板くらいのもので、多くはバクが属する武闘系チームの住処となっている。

三段ベッドがひしめく部屋のところどころで、ランタンの炎が揺れている。地上人ならかろうじて本が読めるほどの明るさだが、『夜目』のモードに入つたバクには、これでも少しまぶしい。地下人は昼目と夜目（視覚以外に発達した感覚を含めてそう呼んでいる）を使い分けることができるのだ。

バクは行き交う仲間たちに声をかけつつ、奥へ進んだ。  
わがチームの部屋はもぬけの殻だった。メンバーたちは食堂へ行つてしまつたようだ。

部屋の隅の事務机に、小柄な少女が一人だけ残つていた。バクの右腕、ミーヤだ。彼女はまだ十四。どちらかといえば年少のほうだが、チームにとつては貴重な頭脳だ。

机の隅に積み上がつた手作りノートを見ると、食料庫に預けた日々の収穫、安全かつ効率的な狩りの新しい戦術、武警から逃げるルートの研究、修理中の武器のリストなどが几帳面にまとめてある。彼女なしにはバクのチームは機能しないといつても過言ではない。

おさげの少女は狩りの日誌を書き終えると、イスを半分だけまわした。

「バクの分はあたしが代わりにもらつておくから

ミーヤは床をちゃんと指した。

「悪い」

バクはミーヤの肩をポンとたたくと、近くの階段からさらに下へ

降りていった。

地下一階は、かつて地下鉄の改札やきつぷ売り場があつた場所。旧地下街のような細かい区画は少なく、広々とした通路が空間の多くを占めている。人々は各自でそこに屋台や東屋のようなものを建て、わが家としていた。ときどき天井からゴキブリやネズミ、劣化したコンクリートや錆びたパーツなどが降つてくるため、地下でも屋根は必要なのだ。

この階層では、サービス系と呼ばれるチームが主役だ。仕立て屋、鍛冶屋、雑貨屋、交易所、図書室などなど、アジトの生活を内から支える非戦闘員が集まっている。

バクは騒がしいメインストリートから少し離れた、元『定期券売り場』へ足を運んだ。

その小さな区画は今、医務室となつてている。無数のヒビを無数のビニールテープで補修したガラス張りの部屋。その中では、煤けた白衣を着た初老の男が、ベッドに横たわる患者たちの間を忙しそうに行つたり来たりしている。

口を開けたまま文化遺産と化した自動ドア。バクはその縁に立ち、白衣の男に声をかけた。

「先生。ニッキ、大丈夫なのか？」

バクは包帯でふくらんだニッキの右肩に手を落とした。

ニッキはあれから一度だけ意識を取りもどしたものの、手術の後で高熱を出し、再び寝こんでしまった。

「運がよかつた。抗生素を切らしていたんだが……つい昨日だよ。病院に忍びこんだ夜盗チームがやつてくれた」

白髪混じりの頬髭が弾んだ。

男の名は百草林太郎。もくさりんたろう 肩書きは医師だが免許はない。医大は卒業しているし証書もあるが、戸籍を失っているため世間では通用しなかつた。二年前、百草はこのアジトへふらりとやってきた。以前は別のアジトや地上のバラック街、限界集落にいたこともあるという。

「そつか……」

バクはほっと息をつくと、ベッドの縁に腰かけた。すると百草は笑顔を萎ませ、ため息をついた。

「なにか問題でもあるのか?」

「うん? うーん……」

百草は腕を組み、うなるばかりだ。

ニッキの容態のことで悩んでいるわけではなさそうだ。あれがこれかとバクが問い合わせていくと、百草は重かつた口を動かしはじめた。

「抗生素を盗んだせいで、代わりに命を落とす者がいると思うと、な」

「俺たちは……生きるためにやつてるんだ」

「今日を生きるだけならそれもいいかもしかん。だが、明日は必ずやつてくる」

百草は子供たちに視線を送った。

バクは彼につられて他のベッドを眺めた。肋が浮き出し腹のふくれた子供ばかりだ。素人が診ても重い栄養失調だとわかる。

今からちょうど二十八年前、世界中で電気に関わるものがすべて使えなくなつた。一時の大混乱が収まつた後、学者たちはこの非常事態を『パワーショック』と名づけた。その原因も解決法も、未だ手がかりさえつかめていないという。

パワーショックがはじまると、人々の生活レベルは一気に中世へ逆もどりした。電気のない生活は武士や貴族の時代にもあつたが、あの頃とは人口がちがう。特に、科学文明に頼り切つていた先進諸国の食糧難は深刻なものだつた。

わが国は配給制度を導入し、これまでなんとか持ちこたえてきたが、状況は決して芳しくはなかつた。配給に依存する地上が貧窮すれば、地上に依存する地下も自動的にダメージを受ける。地下人は長い間、地上人がもたらす物資をあてにしてきたが、これ以上の略

奪は自分で自分の首を絞めることに等しかつた。

明日のためにバクたちができそなことは、ライバルを減らすか、ターゲットを変えるか、あるいは社会のしくみを根本からひっくりかえすことだつた。ライバルを減らすことは、すなわち同業者を討つということ。手の内を知つた者同士の抗争は共倒れとなることが多かつた。また、かつては革命を夢見て新政府に楯突く者もいたようだが、狂犬どものオモチャにされるだけだつた。

バクは哀れな子供たちを見つめたまま言つた。

「農村や漁村に遠征するつていう手はどうかな？」

「交渉するにしても略奪に走るにしても、配給生産者と出会うだけでも至難の業だよ。彼らのバクでは、新政府の狂犬、武装警察が目を光らせている。その道のプロでもない限り命がいくつあつても足りないな」

「じゃあ、俺たちはこのままジリ貧かよ」

バクはうなだれた。

「……」

「結界とか神々に守られた秘密の田園とかさ……どつかにないのかな？」

「言つてすぐ、バクは赤くなつてうつむいた。  
我ながらなんてガキ臭い妄想だ。」

百草はぼそつと口にした。

「まあ、守つているのは神々ではないが……」

「どこだ！」

バクは顔を上げた。

百草はハツとした。

「わ、忘れてくれ。ただの勘違いだ」

「下手な芝居はよせよ。話すまでは帰らないからな  
百草は觀念したようにため息をつくと、言つた。

「日本各地の秘境には、飢えと流血の時代を無傷で生きのびてきた農民の土地があるという

「それはどこにある

「……」

百草は首を横にふった。

バクは低く言つた。

「帰らねえつて言つたはずだ」

「ダメだ」

「なんでだよ！」

「賊でもなく、政府の保護も受けていない彼らが、その土地を何十年も守り続けてこられたのはなぜだと思つ？」

「……」

バクは難しい顔を返すだけだった。

「ひと言でいうならば、天然の要害に囲まれた小さな小さな独立国だ。住民は至つておおらかで、放つておけばなんの害もない。だが、従わせようとすると痛い目に遭つ。彼らは農民であると同時に戦士でもあるんだ」

秘境の民は再三の命令にもかかわらず、配給用作物の提供を拒み続けていた。新政府は武力制圧を試みたが、堅固な守りに跳ね返されるとあつさり諦めてしまった。新政府がくり出す戦力は、都市や農地を賊やテロから守るだけで精一杯だった。山や谷が一つちがう色の地図になつたところで、いちいち騒いでいる場合ではないのだ。

「でも、そこにはたつぱり食い物があるんだろう？」

「凶作続きでも一定の人口を維持できるということは、それなりの蓄えはあると見ていいだろ。農業研究も熱心に進めているにちがない」

「そつか……あるところにはあるのか……」

バクは口もとを緩めた。

「まさかおまえ……」

百草は刺すような目でバクを睨みつけた。

「やらないよ」バクは苦笑を見せつつ、出口のほうへ逃げ腰で退いていった。「ハリネズミに進んで噛みつこうとするバカな獣はいな

い

「ならいいがな

バクは医務室を出ると、独りつぶやいた。

「どうしようもなく食えていたら、バカにもなるさ」

それからすぐ、バクは同じ階層にある図書室（旧書店）を訪ねた。カウンターに小柄な老司書が一人。イスに腰かけたままうたた寝している。

バクは老人を揺り起こすと、さっそく武装農民の地について尋ねた。

老人は話の半分も聞かないうちに瞼を閉じ、言つた。

「死ぬぞ」

「よかつたじやないか。ほんの少しだが、あんたの食い分が増える」老人はシミだらけの額に手をやると、ため息をついた。

「お主、自分の立場がわかつておらんようだの。有能な狩人が一人減れば、子供の三人四人はたやすく逝つてしまふのだぞ」

「なら、今までのよう暮らしていれば、アジトは豊かになるのか？」

「うぐ……」

老人は返す言葉につまつた。

このまま地上の不況が続けば、我々は次の春を迎えないだろう。そのことを進んで口にする者はいなかつたが、誰もが実感していることだった。

「ちょっと偵察に行くだけさ。隙がなければ諦める」

老人は机の引き出しから一冊の手帳を取り出すと、バクに放つた。

「各地の情報屋から集めた話をまとめたものだ。地図はともかく、真偽の程はいつさい保証できんからな」

バクは手帳のページをめくつてみた。

『コミュニティ』という、自給自足共同体についての散漫な記述があつた。少々頼りないが、資料らしきものはこの一冊しかない。

バクは懐からタバコの小箱（現在は一本＝黄金一グラムの貴重品）を取り出し、老人の手にそっと忍ばせると、その場を後にした。

深夜。

仮眠から目覚めたバクは、仲間を起こさぬようこつそり部屋を出ると、一人地上の出口へ上つていつた。

出口を守つている大男が、疑いの目でバクを見下ろした。

バクは夜襲の助つ人だと告げた。

男はあつさり納得し、バクを闇の中へ送り出した。

ミーヤには一週間以内に必ずもどると、書き置きをしてきた。

バクはアジトを背にしたまま、低く言つた。

「悪いな。少しの辛抱だ」

10月9日

バクは朝から目眩がしていた。

毒々しい黒煙を噴き上げる鋼鉄の火山。大巨人の背骨のようなマスト。

それまで書物の中の出来事でしかなかつたことが、今までにこの足もとにあつた。大きな物体なら街中でいくらでも目にしてきたが、それが動くとなると話は別だ。

バクが乗つたのは、パワーショック時代では初となる動力つきの船 あくあ丸。新政府下のある科学機関が、無用の長物だったフエリーを改造し、蒸気船として試験的に運行していた。船は統京湾の一つの主要港を週に二度ほど結んでいる。

あくあ丸の前後には小さな帆船がついていた。海上警察の護衛船だ。車も飛行機も使えないこの時代、海運は唯一の大量輸送手段といえた。統京湾は一攫千金を狙う海賊の巣窟だった。

バクは屋上デッキの欄干にへばりつき、幼い子供のように首をめ

ぐらせた。

遠くに霞む朽ちかけた摩天楼。

バクはそれを眺めているうち、ひとりでに口が動いた。

「あんな狭つ苦しい檻の片隅しか知らないくせに、俺は偉そなことを……」

バクはまだ若かつたが、アジトの生活を支えている自負は強かつた。アジトの中では英雄三傑の一人だ。

「英雄……か」バクは苦笑した。「鳥籠ん中でチャンピオンになつたつて、世の中はたぶんにも変わらない。アジトの連中をつかの間食いつながせたつて結局は……」

バクはため息で独り言をしめくくつた。

欄干にうつ伏せようとしたそのとき、背後から男の声がした。

「人生、あまり深刻に考えすぎないほうがいい

「！」

バクの肩がびくつと跳ねた。

気配がなかつた。まともにバックを取られた。相手は素人じやない。武警か？ それとも海警か？

さつと身を翻すと……拍子抜けした。

そこには、小ぎれいなスーツ姿の中年男が立つていた。

サインペンで一本だけ引いたような細い目。薄い唇。常に笑つているような顔で感情が読み取りにくいが、狩人に怯える街の地上人とちがつて余裕がうかがえる。左の袖が風にたなびいている。事故かなにかで腕を失つたのだろうか？

バクは男の真の実力をはかりかねていた。トラブルで殴りあいになつてもまず負ける気がしない。だが、本能は油断するなとささやいている。

バクはとぼけた。

「俺、なんか言った？」

「いいや、なにも」

「嘘をつくな」

「では、なんと言つたのかね？」

「……」

無意識に口から出た言葉だ。イメージは浮かぶものの、実はあまり覚えていなかつた。

男は不意に顔を突き出し、バクの純黒の瞳をのぞきこんだ。

「君はいい目をしているね。なにもかも吸いこんでしまってそうだ」

「どういう意味だよ」

「そのままの意味だよ」

「……」

バクは口を開いた。

なにか言えれば言つほど、男の術中にはまつてしまいそうな気がする。

男は笑つた。

「誤解を招く表現だつたかな？ 教えればどんなことでもできそうだよ、言いたかつたんだよ」

「どんなことでも？ たとえば？」

「たとえば……」男は遠い目をして、中身のない左袖を右手でぐつと握りしめた。「天地をひっくり返すこととかね」

「……」

返す言葉がすぐに思いつかなかつた。

「私、おかしなことを言つたかい？」

「あんた、革命家かなんかか？」

「まさか。私はこういう者だよ」

男はバクに名刺を差し出した。

「N・E・X・A？」

「ネクサと読む。国立エネルギー研究開発局だ」

男の名は孫英次<sup>そんえいじ</sup>。肩書きはNEXAの副局長（兼電力開発部長）である。

「NEXAか……。そういえばこの船の切符にもそんな名前が書いてあつたな」

孫は苦笑した。

「本来はパワーショックそのものを終わらせるために起ち上げた組織なんだが……。現実は皮肉にも、電気に依らない古い機械文明の掘り起こしに力を傾けざるを得ないところでね」

「そもそも、パワーショックつてなんで起きたんだ？」

孫はちらと腕時計に目をやつた。

「おつと、打ちあわせの時間か。我々はその今世紀最大の難問を解き明かしてくれる、優れた人材を求めてている。門は狭いが試験は隨時行つてているよ。では私はこれで」

孫は近くの階段から下層デッキへ駆け下りていった。

バクはぐつたりと欄干にもたれかかった。

「ま、小学校も出でない俺には縁のない話か」

あくあ丸　がめざす港町、木更塚きさらづかは南関東の要所だ。そこはパワーショック以後の復興が最も著しい都市といわれ、荒れ果てた都心から数多くの企業や官庁が移転してきていた。条件さえ整えば遷都するのではないか、という噂がちらほらと聞こえる。

なかなか好奇心をくすぐる街だが、そこで遊んでいる暇はない。

バクは木更塚港で船を降りると市街地には入らず、雑草と陥没だらけの旧国道を南へ歩いた。しばらく道なりに行くと、柄が鏽びて折れ曲がった標識が目に入った。青地に白で『国道16 ROUTE』と書いてある。

倒れた電柱の下敷きになり、ひしゃげた軽自動車。外れかかった運転席のドア。

中をのぞくと、形や大きさがふぞろいの白い棒や穴の開いた器が散乱していた。

これといった感情は湧いてこなかつた。地下ではカルシウムが慢性的に不足している。バクたちは死んだ仲間のそれを粉にして、あらゆる食材にふりかけていた。それを野蛮だと地上人は言うが、地下人は逆に、貴重な栄養を土に埋めておきながらミルクが足りない

と不平ばかり言う地上人を軽蔑していた。

地を這う電線の切れ端に光はなかつた。アスファルトを突き破つ

て生えた小さな花のまわりを、つがいのモンシロチョウが舞う。

パワー・ショック時代に入つて何年か後、観測史上最大の台風『エリカ』がこの坊總半島ぼうそうを襲つた。再開発計画からもれたこの地区にはもう誰もいない。なにもない。遠くのテトラポットが碎くかすかな波音だけがあつた。

そこから少し行くと、潰れかかつた物置の中に鎧だらけのママチャリを一台見つけた。チューブに空氣は入つてゐるもの、古くなつたゴムがいつ裂けるかわからない。

バクはチャリにまたがると、雑草を避けながら慎重に走つた。やがて目印となる川を見つけ、流れに沿つて緩い上り坂を行つた。道路は途中、崖崩れで寸断されていた。バクはその場にチャリを捨てると、河原へ降りて巨石や倒木の上を飛び伝つていた。

再び道路にもどつてしばらく歩くと、霧がちな峡谷の先にダムを見つけた。

「あれか？」

バクは道の終点まで行き、ダムを見上げた。

絶壁の高さはビル十階分、およそ三十メートルといったところか。壁の下のほうに大きな穴が開いており、ちょっととした滝になつてゐる。このダムは水瓶としての機能はすっかり失つてゐるようだ。

手帳の地図が正しければ、この壁が富谷ふたにコミュニティー唯一の玄関、富谷関だ。角度にして六十度はあろうかというコンクリートの壁。並の装備ではよじ登れそうにないが、よく見ると堤上に向かつて一筋のタラップがのびてゐる。壁の頂は霧で隠れていて様子がわからない。

バクは堤の底へ近寄り、タラップに手をかけた。三段上つてすぐにやめた。

見張りらしき人の気配がした。見つかったら弓矢の的になるだけだ。

バクは夜を待つことにした。

日が沈むと、ダムの頂にかがり火がならんだ。その頃には霧はすっかり晴れ、提頂に控えている戦力が露わになつた。

欄干に張りついている『兵が十人、その背後に同数の歩兵らしき気配。タラップの延長線を軸に布陣を敷いている。闇に乘じて正面から行くつもりでいたバクは、富谷関からの侵入を諦めざるを得なかつた。

ダムを避けるとすれば、あとは村を包んでいる険しい山々を行くしかない。バクは川下のほうへ歩きながら登れそうな場所を探したが、どこまで行つても河原の左右は富谷関より数段高い断崖が連なるばかりだつた。

ダムが見えなくなるほど離れたところで、よつやく崖は低く緩やかになつてきた。だが、今度は密集した木々が行く手を阻んだ。山へ入つたのはいいが、アスファルトの平たく固い地面しか知らない筋肉は、すぐに悲鳴をあげてしまつ。十歩進むごとに息を整える。夜行性の獣どもが不気味なうめき声をあげ、そのたびに手足が止まる。

バクは小山を一つ登りきつたところで頂上の大木にもたれかかり、改めて越えるべき山岳のスケールをたしかめた。

本当だ。富谷関はやはり、あの村唯一の玄関だつた。

ダムにもどつて一か八かの強行突破をするか、それとも尻尾を巻いてアジトへ帰るか。バクは悩みに悩んだ。なかなか決断できない。気分を変えようと、手前の高山の麓を見下ろしたときだつた。

杉林のすき間、斜面の途中にぽつかり口を開けた水道管の切れ端が目に入った。草木をかぶせてカムフラージュしてあるが、バクの目はごまかせない。それにしても大きな管だ。大人でも屈むことなく通れるだろう。

水道管の直径よりは小さい、黒い影が三つ。富谷の警備兵とみた。あそこにはなにがある。

バクは風が強まるのを待ちながら、音を立てぬよう小山を下つて  
いった。

水道管口まであと五十歩といつとき。

パキッ！

不覚にも枯れ枝を踏んでしまった。バクはあわてて木陰に隠れた。  
「うん？ なんだ？」

若者は短剣を片手に、音がしたほうへ足を進めた。

「猪がなんかだらう？」「ビビりすぎだぜ」

中年の一人が冷やかす。

「どんな小さな異変も見逃すな。隊長の言葉を忘れたんスか？」「  
若き兵は、サク……サク……と慎重な足どりで枯葉の道を行く。  
「わかつたわかつた」「つたぐ、そんなに隊長に気に入られたいの  
かね」

一人はランタン片手にのろのろと持ち場を離れた。

「あんたらだつてそうでしちゃうが」

「バレてたか」「ま、富谷で隊長に惚れない男はいなからな  
「あ……」

「どうした？」「熊の腹でも踏んづけたか？」

そのとき、バクと若き兵は木陰で向きあつていた。

若者がすうつと息を吸いこんだ瞬間、バクは鳩尾に一発入れた。  
中年どもは何度か若者を呼んだ。応答はなかつた。異変に気づいた二人は駆け出し、バクとうつ伏せの男を見つけると、ぱっと半歩  
退いて叫んだ。

「き、貴様！」「山賊だな！」

「なあ、夜中にこんなところでなにやつてんだ？」

兵士たちは答えず、近くの小枝に明かりを引っかけると、短剣を  
抜き、血走った目でバクにつめ寄つた。

彼らは若者が殺されたものと勘ちがいしているようだ。

「ち、ちょっと待つた……」

一人はかまわずバクに斬りかかった。

「おつと」

「一つの刃は、半身で避けたバクをサンドイッチにした。  
一人が次撃のために剣を引くと、バクはダンと地を蹴つて彼らの頭に両手を突き、宙を舞い、一瞬で背後にまわった。

普段ならこんな芝居じみた戦い方はしない。無駄に余裕が湧き出すのは夜のせいだ。この心と体の昂ぶりは、長く地下で暮らす者は自然と備わるらしい。なかでもバクはそのピークが飛び抜けていた。

兵士たちは身を翻すと、しゃにむに剣をふるつた。

バクはそれらを巧みに避けながら後退していく。

水道管の口が真横に来ると、バクはぴたりと足を止めた。

二人は氣合いもろとも剣を突き出す。

バクは両手の指先だけでこれをはつしと受け止めた。

「なあ、この穴はいつたいなんだ？ 奥になんかあるのか？」

男どもは必死に剣を引き抜こうとするが、万力で押さえた鉄板のようにはびくともしない。

「は、放せ！」 「貴様には関係ないことだ！」

「そうか。なら、しかたがない」

バクが持ち手をぐいと手前に引くと、二人の手からするりと剣が抜けた。

二刀流となつたバクは、空をX字に切つて威嚇した。

男どもはひきつった顔で見あつと、水道管の中へ駆けこんでいった。

バクは管を伝つて反響する足音を聞きながら後を追つた。地下水道管のトンネルは川のように蛇行をくり返しながら、少しづつ勾配を登つっていた。ずっとこの調子なら楽に追いつけると思つていたら、途中でいきなりすべり台のようになつた。しかも傾斜の部分に限つて管の内面が氷のようになめらかになつており、バクは一步踏み出しても、べしゃつとうつ伏してすべり落ちるのだった。

バクはエの字に伏しながら考えた。逃げた連中はロープを持つて

いなかつたし、特別な靴を履いているようにも見えなかつた。とすれば……。

立ち上がりて管の表面をよく調べてみると、坂の起点から一メートルほど上ったところから先に、小さな穴が点々と掘つてあるのが目に入った。なるほど、それをガイドに登つていけばいいようだ。ガイドの穴は上下や左右の間隔をランダムに散らしてあつた。常人ならば視界はまったくないはずだから、先を行く一人はきっと体で覚えたのだろう。

坂を登りきると、トンネルはまた緩やかになつた。二人の足音は小さくなつてしまつたが、バクはあわてなかつた。『夜の脚』ならいつでも追いつける自信があつた。

勾配の緩急を何度も越えると通路は平らになり、先のほうにかかる星明かりを認めるようになつた。縦穴がある。あそこが出口のようだ。

バクはぐんと加速した。追尾するミサイルの「」とく一気に間をつめ、短剣の柄で兵士たちの背中を強打。二人は出口まであと一歩といふところで倒れ伏した。

「相手が悪かつたな」

縦穴の中心にすわる丸太をよじ登つていぐと外に出た。コンクリートの壁や鏽びた鉄橋の断片が、出口を取り囲むように散乱している。間道の終点は取水塔の跡地だつた。

どこからともなく、薄甘い香りがしてきた。

なんだろうと、バクは遠くを見た。

取水塔跡地をぐるりと囲む木々のすきまから、山あいの湖のような広がりがのぞいていた。風が吹くとそこはゆらゆら波立つのが、なぜか水面は澄んだ星空を映していない。

バクは田をこじらした。夜のせいで色がよくわからない。ぐるぐるー

腹の虫がなつた。なるほどそういうことか。

あぜ道をしばらく歩いていくと、石造りの建物の一群を見つけた。

どの建物も窓がほとんどなく、住居にしてはあまりに無骨な造りだ。きっと倉庫かなにかだろう。辺りに人の気配はない。

近づいて鉄扉を引いてみるとあっさり開いた。中は真っ暗だが、地下人バクには関係ない。

農具でもしまってあるのかと思いきや、所狭しと積んであるのは米俵だつた。この飢餓の時代、黄金に値するほど大事なものを、こんな鍵も見張りもない場所で無造作に保管してあるとは。そういうば田畠も無人だつた。村の防衛には絶対の自信を持っている、ということなのか。

バクは俵の一つに短剣を突き刺すと、すき間からこぼれだした粉米を両手ですくつてバックパックにつめていった。

ひとまず今回の目的は達成した。これを証拠に保守派を説得し、食料を奪う計画を立てるのはアジトに帰つてからだ。

袋が一杯になり、バクは喜々としてその肩ベルトに手をかけた。空気の爆ぜる音。

「！」

バクはさつと身を翻した。

「あの間道を一晩かからず突破する者がいたとはな」

倉庫の戸口。上背のある若い女が松明をかざした。

バクは反射的に目を細めながらも、女の美しさに時を奪われた。

眉の上で切りそろえた長めのおかつぱ頭。日本人離れした長い手足と整つた顔立ち。ドレスを着せて舞台や銀幕の中心に立たせたら、さぞかし見映えがするだろうに……。なんの因果か彼女の身を包んでいるのは、上下で柄のちがうつきはぎだらけの迷彩服だった。

バクは袋から手を離し短剣を拾うと、切つ先を女へ向けた。

「死にたくなれば、俺に関わらないほうがいい。特に月のない夜はな」

「夜がどうかしたのか？」

女は身じろぎ一つせずに言った。

腰の左には鞘に収まつた短剣。右手に松明。どう見ても利き腕が

塞がっている。

「百姓の女と遊んでいる暇はない。失せん」

「いいだろう。だが、その米を一粒残らず僕にもどしてからだ」  
バクは身の程を知らない女にイラついていた。あの松明のせいで、  
村人がなにごとかと集まつてきたら厄介だ。

「そんなに死にたいか！」

バクは一步踏みこむと、女の鼻先へ剣を突き出した。

女はそれを目で追うだけだ。

「どうした？ それでおしまいか？」

バクは舌打ちすると短剣を脇に放り、女めがけて突進した。

拳はたしかに女の鳩尾をとらえた……はずだつた。感触がまるで  
ない。

女はバクを見据えている。

「！」

バクはハツとして飛び退き、短剣を拾つた。  
地面の土に残つたわずかな足跡……利き腕がどうとかいう問題で  
はなかつた。遊ばれているのはこちらのほうなのだ。だが、あの松  
明さえなれば……。

バクは女の右手を狙つて短剣をふり上げた。

炎は左へ右へ、上へ下へとたなびく。

何度もやつても、動いたのは女の肩から下だけだつた。

バクはついに息を切らし、膝に手を置いた。

「ハアハア……」

「筋は悪くないが……私と出遭うのが早すぎたようだな」

「クッ！」

バクは女を睨め上げた。

「その丑……ただの山賊ではないな」女はバクを見下ろした。「だ  
が、おまえがたとえ一国の王だろうと捷は厳守せねばならない。お  
まえの犯した罪はここでは死に値するのだ。覚悟してもらおう」  
女は松明を左手に持ちかえ、右拳を固く握つた。

バクはこみ上げる幾多の衝動を抑えつつ、固い笑みを作った。

「まさか、腕一本で殺やれるとでも？」

「心配無用だ。せめて苦痛のないよう、一撃で葬ハりつてやる！」

女はすつと一歩踏み出した。

バクはわが目を疑つた。女の拳がクレーンにつないだ鉄球に見えてならない。

こんなところで人生を諦めたくはなかつた。たとえ頭蓋を割られようとも、見届けなければならぬことが一つ、あるのだ。ふと松明に目が行つた。ひらめいた。持つていた短剣を女に投げつけた。

女は苦もなくそれをかわす。

その隙にバクは俵山の裏へ駆けこんだ。

女は言つた。

「なんの真似だ」

「どうせ肥やしにするんなら、臭わないほうがいいだろ？」

「む……」

女は倉庫の隅の用水バケツに松明を放り投げた。

倉は闇に包まれ、バクを探す女の視線が曖昧になつた。

「これで満足か？」

「へへ。火の用心火の用心、と」

バクは俵をガサガサ引っかいて喜びを表した。

「自分の土俵で力を出し切れば、悔いもあるまい」

女は戸口で待ちかまえている。

バクは女の手の内が読めた。足音が近づいてきたところを、その長い脚でなぎ払つつもりなのだ。

ならばと、バクは『夜の脚』で俵山の傾斜を駆け上がり、頂の俵を蹴ると、突き出した右脚に全靈をこめた。

「！」

女はバクの飛び蹴りを肩に食らい、仰向けに吹っ飛んだ。

着地したバクは驚かずにはいられなかつた。狙つたのは首の骨なの

だ。

「こいつ！ 気配だけでかわしやがつた！」

女は星空の下に横たわったまま低く言った。

「邪念のない、いい蹴りだつた。殺すには惜しい……」

バクの心と体は一瞬にして樹氷と化した。

身がまえたときにはすでに遅く……鳩尾に女の拳がめりこんでいた。いつ跳ね起きたのかさえわからなかつた。

薄れゆく意識の中、女のつぶやきが聞こえた。

「受け損なつたのは、わが師を除けばおまえがはじめて。その生への執着……おまえ一人のものではあるまい」

10月10日

雲上へつながる階段を上りつめると、そこは針の筵わらべだつた……。  
童わらべという名の凶悪な毒針だ。

「み、見るな！ あつちいけ！」

バクは好奇の目で見上げる子供たちに唾を吐きかけた。

目覚めたとき、バクは全裸で磔にされていた。広場の中心にある小さな丘の頂で。

すぐ横の立て札を、幼い少女が読んでいる。

「こみにくいいきものは『ちかぞく』といいます。ひとのものをうばつたりころしたりするわるいけだものです」

「ションベン引っかけるぞ『ロラア！』

バクが吠えると、子供たちは奇声を発しながら散つていった。

まったく、なんて恐ろしい刑を考えつく連中だ。どつちがケダモノだかな。

「ばあいによつては、このままひあぶりになります」

さつきよりは大人びた声が背中に聞こえた。

「な、なに！？」

バクはかんじがらめでふり返る」とさえできない。  
女は地声にもどして続けた。

「フフ、冗談だ」

「クツ、昨日の迷彩女……俺が地下の者だと、どうしてわかつた?  
「あれほど夜目の効く人種は他にはあるまい。だが、私が不覚を取  
つたのは闇に目が眩んだせいではない」

「なんだと?」

「死地に立つたときのあの気迫……本能以外のものを感じた。おま  
えは己以外のなにかのために、どうしても生き続けなければならな  
い。そうだな?」

「……」

「フン、まあいい。ともかく、おまえ」ときがこんな危険を冒すほ  
ど、地下賊の生活は追いこまれてこようことだ。その理由がわ  
かるか?」

「地上の連中が受けける配給が減つてゐるからだろ? まつたく迷惑な  
話さ」

「そうか……」

女は悲しげに田を細め、空を見上げた。

長い沈黙があつた。

女は続けた。

「人間を狩るのは楽しいか?」

「……」

「どうした? なぜ答えない?」

「心から望んでやつてるわけじゃない。食い物がもつと楽に手に入  
るなら、それにこしたことはない」

「楽、とは言い難いが……もつと人間らしいやり方はある  
「どういうのが人間らしいんだよ」

「ヒヒ」でしばらく暮らせばわかる

「冗談じゃない。アジトじや飢えたガキどもが待つてゐるんだ」

「ま、気が変わつたらいつでも呼んでくれ。じゃあな」

「お、おーーー、待てよー。」

女が広場を去った後、バクは連日、村民の注目を浴び続けた。威嚇や唾攻撃にすっかり慣れ、朝から晩まで広場を離れようとする子供たち。ある一点ばかりを指し、それを表す単語を飽きさせずに連発する。

遠くの木陰で談笑する若い女ども。会話が止んだときは、必ず直後に失笑の嵐が待っている。

冷やかし半分に近くを通る中年の農夫たち。女はからから笑い、男はちらちら下を向く。

催したときはその場にたれ流しだった。秋雨が心の傷にしみた。寒さと飢えと極度の羞恥に耐えかね、バクは三田田に觀念した。

「従う！ 従うから……人並みの扱いをしてくれ！」

すると例の迷彩女が現れ、憔悴しきったバクを毛布でくるむと、診療所へかつついでいった。

11月3日

「……ハツ！？」

バクは三秒だけ記憶が飛んだ。  
富谷関の警備は睡魔ばかりが襲つてくる。動かない景色と睨めっこしてなにがおもしろいというのか。

提頂にはバクの他に兵士が九人いる。その誰もがあくび一つせず、頬を紅潮させつつ下界を見張つている。なぜなら、そこに例の迷彩女……高森昭乃が見まわりに来ているからだ。彼女が隊長だからといふこともあるが、もう一つの『理由』のほつが彼らにとつて重要ならしい。

バクが磔にされている間、村の有力者たちによる裁きがあった。本来、富谷において食料窃盗犯は極刑なのだが、唯一の目撃者である昭乃の計らいでバクは死を免れ、彼女の下に就くことになった。昭乃是二十五歳。富谷「ミコニティー」防衛の全権を握る、若き警備隊長だ。自給自足社会である富谷では、なににおいても農畜業に人手を割かねばならず、警備隊は慢性的に人員不足だつた。賊の者を村に入れるなど前代未聞のことだつたが、昭乃是バクの才を惜しんで長老たちに嘆願したのだった。

バクは命を助けられた恩と、仲間の貧窮との板ばさみとなつた。しばらくは従つたフリをして、富谷の食料をこつそり流すことはできなか。そんな虫のいいことを考えていた。

バクは双眼鏡から目を離すと、おかまいなしに大あくびした。  
「こんな高い絶壁、誰が上つてくるつていうんだよ。見張りなら一人も置けば充分だろ？」

昭乃是言った。

「おまえは上るうとした。ちがうか？」

「すぐに諦めたよ」

「そう判断させた理由はなんだ?」

「数、だけどや……」

「弓や刀をふるうだけが兵士の役目ではない。血を流さずにはめばそれでいいのだ」

「……」

バクは不満げに口を尖らせた。

「わかつたのなら、もっと仕事に集中しろ」

昭乃はその長い脚で、バクの尻を蹴り上げた。

「！」

バクはあまりの痛さに跳び上がった。

先日、格闘術の訓練でバクは昭乃と正式に手合わせした。結果は惨憺たるもの。プロレス流の力比べでは指を折られそうになり、柔術では絞め落とされて失禁、ムエタイではキック用のサンドバックにされた(尻の負傷はそのときのものだ)。ついでに習つた弓術の模範演技では、百メートル先の的に連續ピンホールショット。まるで戦うために生まれてきたような女だ。

昭乃はここ富谷で生まれ育つた。小さな頃はひ弱な少女だつたが、道場で体を鍛えるようになると、兄弟子たちをごぼう抜きにして、十代のうちに師範代まで上りつめた。現在、道場の師範は昭乃である。道場を開いた彼女の師は、ある事件がきっかけで失踪したらしいのだが、村人は詳しく語るうとはしなかつた。彼らにとつてバクはまだ昭乃の弟子ではなく、賊上りの少年でしかなかつた。

午後三時の鐘(廢寺の鐘を拝借している)がなつた。

交代の時間。これで今日の仕事は終わりだ。

「やーれやれ」

バクが大きくのびをしながらその場を離れようとすると、昭乃の手がバクの襟首をつかんだ。

「おまえはここで特別授業だ」

昭乃は見張るべき峡谷とは反対側、富谷の慎ましくも豊かな田畠

や、その先に広がる薄黄葉色の山海を指した。

バクはそばにあつた木箱に腰かけた。

「 またその話かよ」

「 なにを言つてる。初等の子供らと一緒に受けるのが嫌だというから、こうして貴重な時間を割いてやつていいんだぞ」

バクの富谷における教養レベルは七歳児以下だった。自然と共生することが人間にとつていかに大切か、などと言われてもさっぱりわからない。

「 俗っぽい話の一つくらい、ないのかよ」

「 なら、今日は趣向を変えて、現代史にしよう」昭乃は小さくせき払いした。「さて、今から一十八年前、原因不明の電気消失事件が起つた。いわゆるパワーショックのことだ。それまで人々の生活を支えてきた電化文明や自動車文明は一夜にして崩壊した。その後の過酷な食糧難の末に起つた秩序なき暴動……俗に言う『飢餓闘争』のことだが、それによつて旧政府が倒れると、日本人は四つの種族に分かれた。一つは我々のようなコニコニティー、一つは離島連盟、一つは賊、そして人口の九割以上を占める一般市民だ。電気を失つた人々は、それまでの消費社会を反省し、かつてのように自然とともに生きる道へ還つていくと思われた。

ところがだ。正しい道を選んだのはコニコニティーと離島連盟だけだつた。大多数の国民は、豊かだつた時代をいつまでも懐かしみ、光に満ちあふれていた当時の物語を語り継いで、親子ともども電気の復活を信じてやまない。彼らは新政府による欠陥だらけの配給制度にすがりつき、どうにか今日まで生きのびてきたというが、地域によつては配給が滞り、餓死者は十万とも百万とも言われている

「 ふーん」

バクは一応は話を聞いている、という返事をした。

「 それでも、私はこのまま電気のない世界であつてくれればいいと思う。少々不便かもしれないが、長い目で見れば、より多くの人々に平和をもたらすはずなのだ」

「じゃあ、今まさに飢餓の淵で苦しんでる多くの市民は放つといいでいいのかよ。できることなら電気が復活してくれたほうがいいんじゃないのか?」

「人類は自らを育んでくれた自然を破壊していった。パワーショックはその報いだと我々は考えている。その大罪を償おうともせず、電気を復活させようというのなら、私が身をもってそれを阻止する!」

「何万人が餓死しそうが疫病にかかるうが、あんたらには関係ないわけだ」

「自業自得だ」

「それってさ、あんたらの嫌いな賊となにも変わらないぜ?」「なんだと?」

「結局、自分のことしか考えてないのさ。賊は仲間が食つていればそれでいい。市民が腹ペこでのたうちまわろうと知ったこっちゃない。あんたらだつて同じだろ? 富谷を残してこの国が滅んでもなんとも思わない。俺たちと同じ、獸だよ。クツ!?」

昭乃はバクの胸ぐらをつかみ上げた。

「それ以上言つたら……」

「殺すかい?」バクは息苦しさに顔を歪めつつも笑つてみせた。「なら、あんたは獸以下だ」

「……」

「そんなに怒るなよ。もしパワーショックが本当に人類への罰なら、あんたの望み通り、要らない人間の屍がいい肥やしになる世界になつていくさ」

昭乃は手を放し、低く言つた。

「宿舎に帰れ」

翌日、バクは警備隊から外され、しばらく田畠で働くことになつた。

11月11日

「どうだい坊主。百姓も悪かあないだろ?」

真つ黒に日焼けした老農夫が大根の収穫に取りかかっている。

バクは大根の茎に手をかけた。要領が悪いのか、なかなか抜けない。

「強制労働じゃなければな」

バクは苦笑いを返した。

バクは昭乃の命令でこの老人の助手となつた。農作業というのは無駄な動きを極力減らさないと、思いのほか体力を消耗する。長期の栄養不足でスタミナのなかつたバクは早々に根を上げた。宿舎に帰つて夕食をすませると、あとはもう寝ることしかできなかつた。だが、食欲が満たされる喜びを考えたら、どんなに疲れていても翌日は自然と体が動いた。アジトの仲間にはとても見せられない恥ずかしい野良着も、三食がそろつていることに比べたらなんとも思わなくなつてきた。人間、飢えたときにはどんな誇りも捨ててしまうらしい。食うためなら盜賊もやるが、百姓にだつてなれる。配給をもらうだけなんて半端な態度だ。今は誰もが飢えている時代だから、皆が畠や海に出るようになれば少しは満たされるのではないが、そんな発想が浮かんだ。

「なあ、爺さん」

「ん?」

「この国をぜんぶ富谷のようにできたとしたら、飢えも争いもなくなるかな?」

老人は力々と笑つた。

「それができりやおめえ、人間はこんなに苦労しねえつて。協力しなけりや死ぬしかねえ。そこまで追いつめられてやつと、すべての『一人』が全員のために動く……それが人間つてやつよ」

「……」

バクの脳裏に、アジトの老司書が語った小説のイメージが浮かんだ。

イジメ軍団に抗う少女たちの話。大国に屈しなかった小国の人話。宇宙人に侵略された地球人の話。実話もあればSFもあるが共通しているのは、一つまちがえば死、というところまで追いつめられて、ようやく皆が己を捨てて手を結びあうところだった。

「それにな、オイラたちのような生活を実践するにや、この国は土地が全然足りねえんだ。富谷の人口、知つてつか？」

バクはうなずいた。

「一千……たつた一千でこんなに広い土地が必要だつてのか？」

土地の名前こそ『富谷』だが、小さな盆地といつてもいいほど利用できそうな平地が多い。住むだけなら今の十倍の人数は収容できるはずだ。

「自然に負担をかけず、ともに生きる。つてのがここでの流儀だからよ。そうなると、そこに平地があるからつて、むやみに耕すわけにはいかねえのよ」

「そつか……」

富谷のやり方では、この国の人口を支えることなど到底できそうにない。

バクは大根の茎に手をかけた。要領が悪いのか、なかなか抜けない。

い。

2045年2月9日

バクが富谷にやつてきてから、五ヶ月がすぎた。

バクは富谷関の堤上でふるえていた。真冬の地下もそれなりに寒かつたが、そこが常春の楽園に思えるほど、乾いた北風が吹きさらすコンクリートの上は冷える。

ここにところインフルエンザが流行つており、警備兵に欠員が多

く出た。そこで、バクが臨時で駆り出されることになつたというわけだ。

昭乃是白い息を吐くだけで、身じろぎ一つせす監視を続けている。バクは人影一つない峡谷を見つめながらつぶやいた。

「女はいいよな。『一トを余分に一枚着てるようなもんだ』

「なにが言いたい」

昭乃是下界を見つめたまま言った。

「その体脂肪、俺によこせよ」

バクは昭乃のわずかな腹の肉をつまんでやろりと、片手を差し出した。

すかさず昭乃是手刀をふり下ろす。

バクはさつと手を返してそれを受け止める。思わず笑みがこぼれた。

昭乃是鼻をならした。

「フン、少しばらやるよになつたな」

バクは農夫となつてからも昭乃の道場には通つていた。この間の暴言を根に持つていいのか、昭乃是バクを直接指導することはなかつたが、道場をうろついていても追い出すことはしなかつた。バクは昭乃の技を盗むべく目を凝らすのと同時に、耳も凝らしていた。昭乃是ときどき、歯がゆい胸の内を友人たちに明かしていた。殻に閉じこもらなければ維持できない、ひ弱な社会の発想では、この腐りかけた世の中は変わらない。なんとかしたい気持ちはあるのだが、自分の立場ではこれ以上どうすることもできない、と。

「なんだ、またおまえか！」

そばにいた兵士の大声に耳を打たれ、バクは記憶の海底から浮上した。

左右の兵たちの矢尻がそろつて下界を向いている。

何事かと欄干から身を乗り出すると、バクは堤下の川辺に漬せこけた少女を認めた。

それまで死人のようだつた少女の瞳に光がもどつていく。

「バク！」

「ミーヤ！？ ミーヤなのか？」

ミーヤは胸に両手を重ねて吐息をついた。

「よかつた……元気そうで……」

バクはミーヤの哀れな姿から目が離せなかつた。

糠床で暮らしていたのかと見紛うほど汚れきつたコート。フードの下からのぞいたかつての幼顔は今や、棺の中で千年の時をすごして生け贋のようだ。いつたいアジトでなにがあつたというのか。バクは富谷で暮らすようになつて以来、小さな無理を積み重ねてきていた。昭乃の監視からは逃れられないと知り、残してきた仲間への憂いを意識の地底に溜めこんでいたのだ。

煮えたぎつた地底の湖水は洞穴を埋め尽くし、ついに地上へ噴き上げた。

バクは無断で壁のタラップを降りていつた。

「待て！」

弓兵たちは狙いをバクに変えた。

昭乃はそれを片手で制す。

「私が行く」

谷底に降り立つたバクがミーヤと互いに駆け寄ろうとしたとき、二人の間に昭乃が立ちはだかつた。

バクは今降りてきたばかりの壁を呆然と見上げた。わずかな取つかかりしかない三十メートルの絶壁を、あいつは足一つで駆け下りたつていうのか？

バクは気を取り直し、短剣の柄に手をかけた。

「また、と言つたな。どういうことだ」

昭乃はそれに答えず、ミーヤに言つた。

「何度も来ても無駄と言つたはずだ。バクはもう富谷の人間なのだからな」

ミーヤは昭乃を睨め上げた。

「本気でそう思つてるの？」

「本気かどうかは問題ではない。我々の機密を知った者が誰の許しもなく村を出ることは、人生の終わりを意味する」

「なら、許可をくれ」バクは短剣を抜くと、切つ先を昭乃に向けた。  
「恩を忘れたわけじゃない。ただ、俺は……やっぱり……家族同然の仲間を見捨てることはできない。ここで暮らすあんたなら、俺の気持ちがわかるはずだ」

「今すぐ私とともに帰るなら、今日のことは不問にしよう。だが、淀に背くというのなら、私はおまえを裁かねばならない」

昭乃は短剣を抜いた。

闘神の化身のような女と、まともにやりあうのはバカげている。

バクは剣を下ろすと、頭をたれた。

「わかったよ。俺はここに残つてもいい」

「バク！」

ミーヤの叫び。

「その代わり、ほんの少しだけでいい。アジトの仲間に食料を分けてやつてくれないか」

昭乃は言った。

「私にそのような権限などない。仮に私が富谷の長だつたとしても、賊になにかを施してやる理由など一つもない」

「助けてくれたつていいだろ？ 同じ人間じゃないか！」

「都合のいいときだけ同族意識を持ち出すな。地上の市民を動物並に見なしていた、おまえの言えたことか！」

「クッ……」

悔しいが反論できない。そののだ。カラスが鷹を説得しようとしても無駄なのだ。これで腹は決まった。

バクは昭乃が目を離した隙に、そつと目配せした。

ミーヤは前髪の先にすつと手をやる。

バクは持っていた剣をしばらく見つめ、やがて昭乃の足もとへ放り投げた。

「それでいい」

昭乃が目もとの陰を解き、刃を収めようとしたそのとき。

「む！？」

昭乃は剣を取り落とし、力無く片膝を地につけると、その体勢のまま動かなくなつた。

「クスリ、効いたみたいだね」

ミーヤは結んでいた手を開いて種を明かした。

先端を折った小さな褐色アンプルの底。わずかに残つた液体。風下にいた昭乃は、揮発性の毒を気づかぬうちに吸つてしまつた。手の内を心得ているバクは息を止めていた。

もともとは医者の百草が開発した『薬』なのだが、濃度が高いと『毒』になる。彼には内緒で外部の者に作らせた、一人の切り札だつた。

バクは剣を拾うと、苦悶する昭乃を見下ろした。

「もしもこの世界が、富谷だけだつたらよかつたのにな。世話になつた」

バクとミーヤは川沿いの雑草道を駆けていった。

2月12日

「追つ手の気配がなくなつた。諦めたか？」

バクはブルーシートのすき間を塞いだ。口にしていた干し肉を引きちぎり、切れ端をミーヤに差し出す。

「……」

床で膝を抱えるミーヤは、首を小さく横にふつた。

バクたちは三日間の逃避行の末、ある捨てられた町の廃工場に忍びこむと、崩落した屋根の下にできたわずかな空間に身をすべらせて一夜を明かした。この食肉工場はずいぶん前に略奪に遭つたようだが、運よく二人の腹を数回満たすだけの干物が残つていた。

助かつたという確信はあるにはあるのだが、バクにはどうしても

腑に落ちないことがあった。逃げ切った、というより、逃がしていく  
れた、という気がしてならないのだ。捷や規律に厳格な連中にして  
は執念が足りない。

と、ここである一つの可能性を思い描いた。

「フフ……まさかな」

バクは尻の古傷をさすった。

それはともかく、ミーヤには感謝するしかない。

バクの右腕として常に傍らにいたミーヤ。彼女と離ればなれにな  
ったのは、知りあって以来、まったくはじめてのことだった。再会  
したばかりのときは必死でなにもわからなかつたが、こうして落ち  
着きを取りもどしてみると、どういうわけか恥ずかくてしかたが  
ない。

「その……久々の割にはいい連携だったな」「うん」

ミーヤはそう答えたものの、田は虚ろだ。

「あ、あの、なんていうか、その……」

バクは顔を赤らめ、口もつた。

「うん？」

ミーヤはバクを見上げた。

「迷惑かけちまつたな」

「ううん」ミーヤは微笑んだ。「生きててくれて……ほんとによか  
つた」

生きててくれて……その物言いが妙に引っかかった。

「アジトでなんかあつたのか？」

「……」

ミーヤは激しくかぶりをふるだけだ。

「ミーヤ……」

バクはミーヤの傍らにすわると、そつと肩を抱いた。

するとミーヤは堰を切ったようにわっと泣き出し、バクの胸に顔  
をうづめた。

バクはおさげ髪をなでながら、ひたすら待つだけだった。

言葉は要らない。ミーヤもそれをわかつている。仲間が死んだときはいつもこうしていた。

しばらくしてミーヤはふと顔を上げ、ときおり鼻汁をすすりながら、ショックで混乱した記憶を一つ一つ整理するように語つていつた。

それは去年の暮れのことだった。

「新政府がね、治安対策として武警に地下賊掃討作戦を指示したの。武警は見せしめとして、まずあしたちのアジトを選んだ。血に飢えた狂犬どもは、ここぞとばかりにアジトの入口に大挙してきた。あしたちは明かりをぜんぶ消して地底に立て籠もった。武警は暗闇からの反撃に為す術なく、早々に撤退していった。あしたちは勝利の美酒に酔いしれた。でも……」

ミーヤはうつむいた。

「でも？」

「それから数日もしないうちに、アジトの仲間は全滅してしまった」「な……」

バクはそれしか言えなかつた。

「武警が送りこんだスパイが地底で火をおこしたの。煙でいぶり出された仲間たちは一人また一人と矢の雨を浴びていった。せっかく元気になつたニッキの背中にも……」

ミーヤは両手で顔を覆つた。

バクはミーヤの昂ぶりが引くのを待つてから訊いた。

「ミーヤは……なんで助かつた？」

ミーヤは顔を上げた。

「あたしはその日、武器と食料を交換するために、別のアジトに出てきていた。帰ってきたときはもう、武警の奴らがみんなの遺体をどこかへ運び出そうとしているところだつた。それを見つけたあたしは逆上して、一番近くの男に斬りつけようとした」

「……」

バクは生睡を飲んだ。

相手はプロだ。叶うはずがない。

「それを、百草先生が引きとめてくれた」

「先生が？」

「先生は無医アジトへ往診に行つてて、あたしより一足早く帰つてきたところだつたの。先生は興奮するあたしを粘り強く説得して、一緒にそこから逃げ出した。逃亡の途中、あたしがどうしてもつて催促すると、先生は目撃した虐殺の一部始終を語つてくれた。なかでも黒ずくめの男の話は……」

ミーヤはそこで言葉を切り、牛の生き血をはじめて口にする人のような顔をした。

「……」

「たしか、先生はこう言つてた。あの男の行動は常軌を逸していた。武装した者には目もくれず、無抵抗の子供ばかりを狙つていた。子供をしとめたときの男の顔は狂喜に歪んでいた。冷酷非情な武警の連中もさすがにそれには引いていた。気に入った子供は生かして奴隸にすることも妾にすることもできたはずだ。なにも皆殺しにすることはないだろ、と」

人権のない賊は国民の頭数に入つていない。武警が賊を退治してくれるなら、市民は願つたり叶つたりなのだ。だが、武警も人の子。幼い子供を無差別に虐殺することには、さすがに抵抗があるようだつた。

「その後は？」

「あたしと先生は、それから蒸気船に乗つて木更塚まで逃れた。栄養不足が足に祟つた先生は、これ以上遠くへは行けないと言つて、橋の下のバラック街に入つていった。医者を続けるつて。あたしは年越しを機にそこで先生と別れ、一人で富谷を訪ねることにした」

復興著しい都市の裏では悲惨な現実があつた。木更塚の郊外には、二十年以上も前の台風や震災ですべてを失つたまま、未だにまともな住居を得られない不幸な人々が大勢いたのだ。新政府は配給問題

の対応に手一杯で、この事実を看過していた。

ミーヤは微笑んだ。

「十回目から先はもうわからなくなっちゃったけど、諦めなくてほんとによかった」

ミーヤがその間どうやって飢えをしのいだのか、バクはあえて訊かなかつた。微妙な年頃の女の子に、冬眠する獣や樹皮や草の根……毒でないものならなんでも口にした、などとは言わせたくなかつた。

ミーヤの話を聞き終えたバクは、かける言葉を探せないでいた。生きてくれて本当によかつた。そう言いたいのはこっちのほうだ。一人ぼっちの野宿でどれほど寂しい思いをしてきたのか、想像しただけで目頭が熱くなつた。とにかく再会できてよかつたと、ここは笑顔を見せてやるべきなのだが……。

バクが固い顔を崩せずにいると、ミーヤはいつにない笑顔を見せた。

「あたしはもう大丈夫だよ」  
たまらなくなつた。

「ミーヤ！」

バクはミーヤをがばと抱きしめた。

「バク？」

ミーヤはバクのなすがまだ。

「はじめて会つた日のこと、覚えてるか？」  
「うん」

バクとミーヤともに孤児だつた。バクは生まれながらの地下人だが、ミーヤは地上の生まれだ。

数年前のある日、バクはビルの崩落事故で瓦礫の下敷きとなつていた少女を助け出した。少女は奇跡的にかすり傷だけですんだが、ショックで記憶のほうを失つていた。少女は事故より前のことほとんど覚えていなかつた。両親が自らを犠牲にして守つてくれたことさえ、彼女は知らない。

「絶対おまえを一人にはさせない。俺はたしかそう言つた」

「……」

「俺は……嘘つきだ」

「バクのせいじやないよ」

ミーヤはバクの背中に腕をまわした。

「ミーヤ……」

バクはミーヤを放すと、うつむいた。

「うん?」

「なぜこんなことになつちました」

「……」

「なにがいけない！ 誰のせいだ！」

「世の中は複雑すぎて……誰か一人だけを責めることなんてできな

いよ

「いや……ちょっと待てよ

「？」

神々の裁きか悪戯か、それとも何者かの陰謀か、それはわからな  
いが、かつて人々を決定的に支配していた『なにか』が失われたせ  
いではなかつたか？ ある日を境に、それは突然なくなつたといふ  
が、手品じやあるまいし、たしかにそこに在つたものが突然無に帰  
すなんてバカげている。正解はどこにある。それを覆う布を、今  
までの知恵では取り除けないだけだ。正解には至らないまでも、努  
力を続けている者はいるはずだ。そんな奴に一度どこかで会つたよ  
うな気が……。

悶々と考えているバクを見かねたのか、ミーヤが声をかけた。

「どうしたの？」

「NEXAだ！」

バクはバツと立ち上がると、ミーヤの手を引っつかんで外へ駆け  
出した。

「え？ あ、ちょっと！ バク！？」

3月16日

「研究主任、動物実験の結果はどうなつてんの？」

橋本ルウ子は手中のケータイをしきりに開け閉めしていた。

白衣の男は言った。

「生体電流に関しては、これといった異常はありませんでした」「ケータイはウンともスンともいわないと、なんで生体にだけ電気が流れるのよ」

「現段階ではまだ、その……申し訳ありません」

男は持っていたクリップボードに目を落とした。

「そう……」ルウ子はパチッとケータイを閉じ、スカートのポケットにしまった。「持ち場にもどつて」

部屋のドアが閉まった。

ルウ子は後ろへ向き直ると、窓外に広がる夕暮れの統京を見つめた。

すぐ目の前には天を貫く尖塔、新統京タワーがある。

統京。あの頃この時間この街は、もうとっくに光の粒であふれていた。今はまるで、黄色い紙にモノクロ刷りしただけの無粋なチラシのようだ。

「あたしは諦めない」

ルウ子は窓に映つた自分の姿を見つめた。

首筋やむきだしの太腿に走る傷痕。それを一つ一つ確認するように触れていく。

「見ていて。あのときの世界、あのときの暮らし、絶対取りもどすから」

ノックの音がした。

ルウ子が入室を許可すると、隻腕の男が入ってきて口を開いた。

「局長。就職を希望する少年と少女がゲートに来ていますが、追い返しますか？」

ルウ子の肩書きはNEXA、国立エネルギー研究開発局の局長だ。

「なんで、いきなり『あたし』に訊くのよ」

通常ならば、人事部を通してからルウ子のもとへまわってくる話だ。

「申し訳ありません」

「ところで孫。前から気になつてたんだけど、そのメガネ……なんか意味あんの？」

ルウ子はつかつかと孫に迫ると、男の顔をじつとのぞきこんだ。男は局での仕事のときだけ黒縁のメガネをかけていた。度は入つていない。

孫はウツと身を退いた。

「そ、それですよ」

「どれよ」

「その眼力です。私のごとき凡人は、なんらかのフィルターを通していれば、そのプレッシャーに耐えられないのです」

「ふーん」

ルウ子は孫の顔から目を離さない。

孫英次。NEXA副局長、兼電力開発部長。組織のナンバー2である。かつては新政府の外務省にいたが、外交では飢餓問題は解決しないと悟つて失望し、別の仕事を模索していた。科学省にいたルウ子と知りあつたのはちょうどその頃だ。孫はルウ子が秘めていた構想に魅せられ、NEXA発足に陰から貢献したのだった。

「ま、まだにか？」

「別に。あんたが持ちこんだ話なら、とりあえず聞いてくわ」

孫は元地下賊を名乗る少年と少女の素性や志望動機について簡潔に報告した。

ルウ子は腹をかかえて笑つた。

「あの絶境に一人で飛びこむバカがいたとはね……。バクつてコ、

おもしろやうじやない」「

「少女のほうは捨てますか?」

「セットのままでいいわ。男つてのはね、女の視線があるとよく働くものなのよ」「

3月17日

曇下がりの晴天の下、バクとミーヤは新統京タワーを見上げていた。

地下にいた頃、この青白き塔を靈の彼方に何度か見かけたことはあつたが、こんなに近くで見るのははじめてだつた。

それは今から三十五年前（2012年）に完成した、当時世界一の高さを誇った電波塔だ。完成から数年はテレビ放送用アンテナや展望台として使われていたが、パワーショック時代（2016年～）に入ると、無駄に背が高いだけの高層ビル群と同様、電化文明の墓標と化していく。その後、2030年に発足したNEXAは、放置されていたタワーと周辺の建物を改修、そこを総本部として活動をはじめた。

バクとミーヤは街角の配給の列に混じつてその情報を得たが、それ以上のことはよく知らない。

「やあ、待たせたね」

すぐ手前の高層ビルの玄関から声がした。バクが蒸気船で同乗した隻腕の男、孫英次だ。この前は裸眼だつたが、今日はメガネをかけている。

二人を連れてきた大男は持ち場へ帰つていった。

孫はバクに歩み寄つた。

「来てくれるだろうと思つていたよ」

「たつた一度会つただけで?」

「私はたくさん人に会つてゐるからね」

孫は微笑むと、バクとミーヤを連れてビルの中へ入った。

バスケの試合ができそうなほど広大な一階ロビー。その中心に受付カウンターがあり、白い顔の女一人が会釈する。

バクが女の化粧顔を物珍しそうに見ていると、サングラスをしたスーツ姿の男女が現れ、バクとミーヤの背後に立つた。……と思つたら、いきなり暗闇になつた。

「なんの真似だ！」

バクは田隠しを取ろうとしたが、男の匕ついに手がそれを阻んだ。孫は言つた。

「まあ、落ち着きたまえ。当局は高度な機密が多いのでね。正式な職員になるまでは、それで我慢してもらつよ」

バクが文句を言いかけると、孫が先に耳もとでささやいた。

「君はNEXAに入りたいのだろう？」

バクはひとまず彼らに従つことにした。

立つてゐるだけで気分が悪くなる小部屋。短くベルがなる。シューーという空氣の音。ドアがスライドする。やけに足音の響く通路を歩く。何度も直角に曲がる。専門用語を交えた男女の熱い議論の前を通過。シリンドラーをまわす音。錠が外れる音。ドアが二度スライドする。少し歩く。ノックの音。籠もつた女の声。ドアが開く。三歩進む。ドアが閉まる。

「田隠しはもういいわ」

聞き覚えのある少女の声。

バクとミーヤは田隠しを取つた。

左右の壁には無数の本が敷きつまつてゐる。左手は盾にも使えそうな分厚い専門書ばかり。『電』という文字を含んだタイトルの表紙が多い。右手はどこで発掘してきたのか、少女マンガだらけだ。

幅広の机の向こう、窓際に金髪少女の後ろ姿。

紺色のブレザー。挑発的に短いスカート。太腿の傷跡。そして一度見たら忘れられない左右の竜巻毛。まちがいない。バクを狙つた

武警の男を一喝で蹴散らした、あの少女だ。

少女はくるりと向き直った。

「はじめまして。NEXA局長、橋本ルウ子よ  
バクは記憶をたどった。はじめまして……か。

ルウ子の双眸は、はなからバクに釘づけだった。

赤光りする左右の鎧がバクの双肩を焼いた。

「あ、えっと……俺、俺は……」

国立機関の最高責任者が高校生だと？ 理性では担がれたのかと  
頭に血が上っているのだが、感性では肩書き以上のプレッシャーを  
感じており、混乱したバクは自分の名前を思い出すことわざままな  
らないでいた。

緊張するバクを見かねたのか、ミーヤが代わりに紹介した。

「彼はバク、名字はありません。で、あたしは……」

ルウ子はそこで遮った。

「あんたはいいの」

「……」

ミーヤはむりと口を尖らせた。

ルウ子は続けた。

「動機はわかつた。でもね、ウチは一般企業みたいに、学力とか経  
歴とか人柄とか適正とかやる気だけで採用するほど甘くはないわよ  
「それ以外になにがあるってんだよ」

ルウ子は人差し指をびしとバクに向けた。

「失われた電気がどこへ行ってしまったのか。それを見つけてきな  
さい。そしたらあたしの権限で即採用したげるわ」

「そ……」

バクが不服を言いかける、と同時にミーヤが怒号砲をぶつ放した。

「そんなの無茶苦茶だよ！ それってNEXAの事業そのもの……

「あんたには言つてない」

ルウ子はすかさずそれを撃墜した。

「ここに呼ばれたってことは、あたしにもテストを受ける資格が……

…

「あなたはバクが合格したら合格、不合格なら不合格なの。これ以上無駄口たたくなら人体実験にまわすわよー。」

「……」

「両手に拳を作り、屈辱に耐えるミーヤ。」

バクはその片方にそっと手をかぶせ、話を続けた。

「ノーベル賞級の科学者たちがどんなに頭をひねってもダメだった。そんな噂を街で耳にした。採用するつもりがないなら、ハッキリ言つたらどうなんだ」

「しようがないわね。じゃあ有力なヒントでも我慢したげる」「まともな教育を受けていないと知つていながら、いきなり世界最高の難題を突きつけ、しかもしようがないからヒントで我慢してやるとは……傲慢を通り越して子供のイジメだ。それでもバクはこの駆け引きに乗つた。

「いいだろう」

「バク！」

ミーヤは驚きを隠せない。

「ただ、その……俺たちは今、住所不定で無職なんだ」

「あたしが指定した仕事を文句一つ言わずにやるなら、施設は自由に使っていいわ。ただし、試験期間中にかかった費用は後の給料から天引きよ」

「見習いの料理人以下だな」

「衣食住がそろつてるだけでも、恵まれてると思ひなさい」

「わかつたよ。で、期限は？」

「期限？ そんなものないわ。死ぬまでこき使つてあげる」

ルウ子は目を細めると、高飛車な令嬢を真似た、いかにもわざとらしい嘲笑をふりました。

「上等だ！ 行くぞミーヤ！」

「あ、ちよつ、バク……」

バクはミーヤの手を引っつかむと、足早に局長室を出ていった。

孫は局長室に入るなり、ルウ子に言った。

「あんな無茶な採用試験など聞いたこともありません。二人はまだ大学さえ……」

「天才や秀才ならもう間にあつてゐるわ。あたしが欲しいのは子供らしい発想なの」

「子供、ね」

孫はルウ子の女子高生ぶりをまじまじと見つめた。

十年ほど前のある日のこと。ルウ子はいつたいどこで拾つてきたのか、パワーショック以前に存在していたある高校の制服を何セツトか手に入れていた。以来、彼女はその制服で出勤することにこだわつている。

「なによ」

「いえ、別に」

孫がはじめてルウ子を見たのは2027年、科学省を訪ねたときのことだった。あのときの衝撃は大きかった。いつから現役高校生を採用するようになったのかと、同僚に訊いてまわつたほどだ。それから十八年たつた今、ルウ子は当時と変わらぬ瑞々しい肌をしている。いつたいどんな魔法を使えば、どんな靈薬を飲めば、そのような若さを保つていられるのか。孫は不思議でならなかつた。

「ところで、おおしな大品発電所の改造計画はどうなつてんの？」

「順調です。あと一週間もあれば、石炭用火発として稼働できます。ただし……電気そのものを取りもどせねばの話ですが」

「ひと言余計だわ」

「失礼しました」

「冗談よ」ルウ子はフツと眉を上げた。「仕事にもどつて

孫は一階へ降りると、手帳に田を通しながらガラス張りの玄関を抜け、そのままビル前広場を行つた。

そこでふと、女の気配がして孫は立ち止まつた。

「君か」

孫は手帳を懐にしまった。

広場の木陰に豊艶な女が一人たたずんでいた。和藤栄美。わとうえいみ 電力開発部に所属する直属の部下だ。

七年ほど前、孫はある科学雑誌に載っていた一つの論文と顔写真に目をとめた。女は民間の小さな研究所に勤める、三十前の才気ある新鋭だった。研究そのものはどうでもよかつたが、孫は迷わず和藤をNEXAへ引き抜いた。

昼休みが終わって間もないせいか、辺りは一時限目の校庭のようにはつそりとしていた。NEXAの敷地は堅固なフェンスに囲まれている。市民街のような喧騒や人目とは無縁だった。

和藤は言った。

「浮かない顔ですね」

「たとえば、コップから蒸発した特定の水をすっかり元通りにみせよ……と言われたら君はどうする?」

「それは……」

和藤は視線を落とした。

春を告げるつむじ風が一人を煽つた。

和藤の長いくせ毛が顔にからみつく。

孫は右手でそれを解いてやつた。

「あの輝きを再び味わうことはできそうにないな。少なくとも、私の二十一世紀ではね」

孫は2000年生まれの四十五歳。彼の人生は二十一世紀の繁栄や荒廃とともにあつた。

「なら、現実的な『古い機械文明』のほうに力を入れたらどうですか?」

「すでに一度究められた技術では、世界をふり向かせることなどできませんよ」

「ふり向かせる、ではなく、復讐……でしょ?」

和藤は孫に寄り添うと、あるべきものがないそのつけ根に手を触

れた。

「考えたことがないといえば嘘になる。だが、私は根っからの臆病者でね」

孫は口もとを緩めると、すっとメガネを外した。

「……」

「このまま電気のない世界が続くのならば、私はただ歳を重ねていくだけだよ」

「可哀想な人」

和藤は孫の首筋にそっと唇を寄せた。

「まあ、このままで一つくらいいいことはあるか」

孫は寂しげに微笑んだ。

4月1日

バクとミーヤはNEXAの敷地内にある宿舎で暮らし、タワー周辺の研究所群（旧ショッピングモール）に通い続けた。一人はまず基礎的な科学知識を得ようと所内の研究員たちを捕まえたが、彼らは担当する仕事のことで頭がいっぱいで、誰一人まともに取りあつてはくれなかつた。

昼は自由をあたえられたが、夜は便所掃除の仕事が待つていた。バクとミーヤはモップを動かしながら不安な胸の内を語りあつた。このままでは本当に消耗品として、死ぬまでルウ子にこき使われかねない、と。

裏方衆の間ではダークな局内伝説がささやかれていた。焼却炉の周りの土が他とちがつて白みを帯びているのは、そこに人骨の粉が混じつているからなのだという。

その日の夕方、バクとミーヤはタワー一階のラウンジで途方に暮れていた。

ボルトとアンペアのちがいさえよくわからない。夜の仕事は臭いしかつたるい。そんな話をしていたときだつた。

柱の陰から見知らぬ女が現れ、いきなりミーヤの隣席に腰かけた。縁なしメガネに大人しげなボブ頭。年頃の日本人女性の顔を平均したような、どこにでもいそうな感じの女。

バクは正面のミーヤと無言の会話を交わした。

空席だらけだというのに、なんなんだいつた。

女は使いすぎたパンツのゴムのように緩みきつた口調で言つた。「ごめんなさいね。彼らにも厳しいノルマがありまして、必死なんですよう」

女の名はまつしょたけい松下蛍。人事部からやつてきたといつ。見た目は普通すぎるほど普通だが、中身の歯車は若干噛みあわせが悪そうだ。それにもしても、まるで現場を見てきたような物言いが気になる。バクは言つた。

「で、あんたはここへなにしに来た」

「え？」蛍はきょとんと目を丸くし、ほどなく我に返つた。「ああ、そうでしたそうでした。私はこれからお一人の教育係を務めさせていただきます、松下……」

「名前はもう聞いた」

蛍は自分の頭をコチンと小突く。

「アハ……ハ……ハハ……」

なにもないところで転んだときのよつな、痛々しい繕い笑い。ずり落ちるメガネ。

大丈夫なのか？　この人。

ミーヤは訊いた。

「あたしたちの知りたいことを教えてくれるってこと？」

「あ、はい。局長はそのくらいのハンデはやってもいいだろう、とおっしゃつていました」

「意味わかんないよ！　いつから採用試験が真剣勝負にすり変わつたワケ？」

「その……私のような末端では、詳しい事情はひょっと……」

「虫は首をすくめ、眉をハの字にした。

バクは虫に気づかれぬよう、密かにふつと吹き出した。

いちいちわかりやすいリアクションを取る人だ。

そこでふと、バクと虫の目があつた。

虫は澄んだ瞳をまっすぐ向けたまま、首をくいとかしげる。

バクは直感した。少なくとも、イジメ要員とか刺客の類ではなさそうだ。それにしても……。

バクはつうつと視線を下げていった。

はじめて見たときから、その豊かな胸もどが気になつてしかたがなかつた。この飢餓の時代に、なにをどれだけ食つたらそうなるのかという疑問が半分。あとの半分は……。

「なに考へてるの？」

ミーヤは身を乗り出し、バクの顔をじつとのぞきこんだ。

「い、いや別に」バクはミーヤの小さな胸をちら見して、すぐ虫にふつた。「これからよろしく、先生」

7月14日

バクとミーヤがNEXAに転がりこんでから四ヶ月。パワー・ショック時代に入つて以来、人類が化石燃料を使う機会はずいぶんと減り、地球温暖化の人為的な元凶はその影を薄くしていった。乱れていた気象は少しずつ回復していくにちがいない。学者でなくとも誰もがそう考へていた。

では、この異常な天気はどう説明してくれるのか。

早朝、みぞれが降つた。梅雨が明けて暑さが本格的になろうかといつこの初夏にだ。みぞれはやがて小雨に変わり、朝食が終わる頃には止んでいた。

バクの眼下には干涸らびた統京の街があつた。雨が降つても水を吸いこむ余地はなく、新しい命はひとつ生えてきそうにない。

バクの脳裏に昭乃の姿が浮かんだ。「その街をしかと見よ。電化文明のなれの果てだ」とでも言いたいのだろう。こうして上から眺めてみると、その怒りが少しだけわかるような気がした。

「こ<sup>ノ</sup>は地上450メートル、かつて特別展望台と呼ばれていた新統京タワーの要所だ。現在は研究用の植物園となつていて。朝の凍えそうな寒さとはうつて変わつて、室内は蒸し暑い。タワーから少し離れた区画に、大きな煙突を備えた清掃工場のような形の建物が見える。エレベーターの動力や温室の暖房はそこで生み出した蒸気でまかなかつてているのだろう。

今日は日曜日。虫の授業はない。図書館めぐりも取り止めた。バクとミーヤは久々に朝から宿舎でだらだらすごしていた。忙しい日々の中にあつてこそ怠惰は満喫できるもの。ときにはこんなガス抜きも必要だ。

二人が小さな幸せに浸つていて、面接以来沙汰なしだったルウ子から、いきなり呼び出しがかかつた。今すぐタワーのてっぺんに来いと言つのだ。

使いの者が去つた後、一人でさんざん文句をたれた。だが、独裁者ルウ子の「口答えするなら人体実験よ」には逆らえない。というわけで、こうしてはるばる天空へやつてきたのだが……。

「つたく……そつちから呼び出しといつて遅刻かよ！」

バクはガラス張りの窓壁を蹴つた。

強化ガラスはびくともせず、足が痺れるだけだった。

「でも、おかげでこ<sup>ノ</sup>うして……」

「うん？」

「いや、なんでもない」

ミーヤは顔を赤らめ、かすかに身をよじつて下を向く。

「……」

バクはミーヤをじつと見つめた。

「な、なによ、人の顔じろじろ見て  
ミーヤ。実は今まで言えなかつたことが一つ、あるんだ  
え？」

ミーヤは潤んだ瞳でバクを見上げた。  
「風呂は毎日入れよな。フケが出てる」

「バカア！」

乾いた打撃音が一つ、密林に響いた。

「はいカツトう！」

木々のすき間からにゅっとルウ子が現れた。

「て、てめえ……」

バクは腫れあがつた頬を押さえながらルウ子に迫つた。

ルウ子は鼻をならした。

「せーっかく氣い遣つて待つてあげてたのに、十円~~せん~~届見せられただけだつたわ」

「あんたの辞書に氣遣いなんて言葉はないだろうが！」

「あら、そんなことないわよねー？」

ルウ子はミーヤの肩に手をまわした。

「……」

ミーヤはうつむき、黙つたままだ。

バクは皮肉たっぷりに言つた。

「それで、超多忙の局長様ともあうつお方が、用務員見習い<sup>いじい</sup>い」ときになんの用ですかね」

ルウ子はそれに動じることなく、穏やかな顔で促した。

「まあ、すわんなさい」

二人は草の上に腰をおろした。

ルウ子は窓のほうを向くと、一人を背にしたままずつと押し黙つていた。

バクとミーヤも黙つていた。余計なことを言つて火傷したくはなかつた。

しばらくして、ルウ子は口を開いた。

「で、どうなの？ なんかいいことひらめいた？」

「……」

「そり……」ルウ子は肩を落とした。「あれからもう十五年になるのね」

十五年。NEXAが発足してからのことを言つていいのだらう。「日本で最高の人材を集めたわ。最高の研究設備もそろえた。最高のセキュリティーを確保して、最高に集中できる環境をえたえた。それでも……電気を取りもどすきつかえつかめなかつた」再び長い沈黙があつた。

その間、バクはルウ子の後ろ姿から目が離せなかつた。短すぎるスカートの下から縞柄のパンツが見え隠れ……じゃなくて、ルウ子が見た目通りの高校生だとすれば、十五年前といつたら……。ちょっと待て。やつと立てるかどうかの幼児になにができるつていうんだ。

バクは言つた。

「一つ、訊きたいことがある」

「なあに？」

ルウ子は背を向けたままだ。

「あんた、実際いくつなんだ？」

「いくつに見える？」

「十六」

ルウ子は低く言つた。

「じゃあ、そういうことにしといて」

歳のことは聞かれたくない、か。ルウ子が普通の女ならばこれ以上追及すべきではないが、彼女は素顔以外のなにもかもが、現代の少女とは異質に思えてならない。

バクは質問を変えた。

「なら、その十五年前、あんたはどうなにをしていた」

「今と同じよ」

「どこか矛盾を感じないか？」

「なにも」

ルウ子は手強い。当時はたしかに十六だった、とするなら今は三十一か。「童顔だから」「老けるのが遅いだけでしょ」「努力してんのよ……なんとでも言える。だが、バクにはわかつていた。同年代間にしかわからない直感とも言つべきか。ルウ子は明らかに十代の少女なのだ。

バクはそれまでの疑問をふまえてよく考え、一つの仮説に手をかけた。

「思つたんだけどさ、この世にかけられた呪いつて、パワーショック以外にあるような気がするんだ」

「！」

ルウ子の肩がぴくっと跳ねた。

バクは立ち上がった。

「きつとなにか大事なことを見落としてる。パワーショックの第一回……電気が失われたまさにその当日その時間。教科書的な歴史のことじやなく、あんた個人の話をしてくれないか？」

「その他大勢とたいして変わらないわ」

「いいから早く」

ルウ子はようやくこちらを向いた。

「その夜、あたしは高校の課外活動を終えて帰りの電車に乗った。少しして、いきなり車内が真っ暗になつたかと思つたら減速しはじめて、最後は止まつてしまつた。ここまでなら『ああ停電か』と誰もが考へるでしょ。でも、そのすぐ後、乗客のケータイや外を走る車まで沈黙したのよ。街灯が消え、ビルの明かりが消え、闇はじわじわと外へ広がつていつた。まるでその電車が暗黒の震源であるかのように、すごく不自然な光景だつたわ……。

それから十四年たつて、NEXAを興したあたしは記憶をたどり、パワーショックはやはりあの電車からはじまつたと見るようになつた。そこで、当時の車両の残骸を見つけて徹底的に調べた。でも、わかつたことは何一つなかつた。これでぜんぶよ」

「むう」

バクは草の上にあぐらをかけて腕組みした。

ミーヤは言った。

「頭丸めて座禅したほうがいいかも？」

「うるさいなあ」

バクはルウ子の姿をぼつと見つめた。

ルウ子はたしか『高校の課外活動』と言った。パワーショックがはじまったのは2016年。今は2045年だ。どんなに若作りをしようつたつて無茶がある。

バクは確信した。ルウ子の体は老いることを忘れている。ルウ子の肉体的な時間は、パワーショックがはじまったまさにそのとき、止まつてしまつたにちがいない。

「電車が停電になる前、なにか気になることはなかつたか？ 些細なことでもいいんだ」

「そうね……」

ルウ子は言うと、ブレザーのポケットに手を突つこんだ。二つ折りのケータイを取り出し、せわしなく開け閉めしたかと思うと、すぐによまたポケットにしまつた。

考え事をするとき無意識にやる癖なのだろう。それはともかく、ずいぶんと物持ちのいい人だ。三十年も前に使えなくなつたケータイなんかなんのために……。

「そのガラクタは御守りかなんかか？」

「うん？ これ？」ルウ子は再びケータイを取り出すと、なにかを思い出したのかぐつと目を見開いた。「あ、そういえば、ケータイでドラマの予約録画しようつと思つたら、電池切れだつたんだ。朝、満タンにしたはずなのに」

「今なんて言つた？ 電池がどうしたつて？」

「だから、電池切れで……」

「それが電池切れじゃなかつたとしたら？」

「なんでそうなるのよ。あたしのケータイが切れたのは、パワーシ

ヨックの前……

「前じゃなくて、ゼロ秒後だつたとしたり？」

「！」

ルウ子は身を固くした。やがて体中に微震がはじまり、ほどなく中震、激震となり、頭が大噴火した。

「どういうことよー。ちゃんと説明しなさいー。」

巨艦の砲声のような轟きだった。

バクはしばらくの間、髪が後ろ向きに逆立つたままよろめいていた。

「ぶんぶんと頭をふり、故障した耳をたたいて、ようやく復帰。

「そのケータイはよく調べたのか？」

「測定機器一つ取つたつて、電気が必要よ」

「そうか……じゃあ、ケータイはひとまず置いておこう

「他になにがあるつてのよ」

「その持ち主のほうを」

バクはルウ子を指した。

「あたし？」

「自覚がないとは言わせないからな」

バクは微笑んだ。

「なんのことかしら？」

ルウ子は微笑んだ。

バクとルウ子は笑顔のまま、何分も睨みあつた。

ミーヤは息を殺し、せわしなく一人を見比べている。

「ふう、まいつたな……」

ルウ子は目を伏せ、うなじをぽりぽりかいた。

「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」  
「」

か、勝つた……。

気づくとバクは、街角での殴り合いの後のように、全身汗にまみれ肩で息をしていた。

「まさか、自分が問題の核心かもしれないとは一度も考えなかつたのか？」

「考えたわ。ついさっき」

その後のルウ子のスケジュールはすべてキャンセル。バクとミーヤは特務研究員としてルウ子の直下に就くことになった。翌朝から、ルウ子の人体研究がはじまった。

7月15日

せわしなく行き交う白衣たちの中、薄桃色のガウンを着たルウ子は、取材に飽きた一流アイドルのような面で一人イスにすわついた。

なにしろ電気が使えないため、分析できることは限られている。身体検査、血液検査、体力測定、精神鑑定、催眠術にスピリチュアルカウンセリングにタロット占い、などなど。あれこれ試してみたものの、ルウ子は至つてありふれた人間だった。

7月16日

その日から、バクとミーヤはルウ子の全スケジュールにつき添うことになった。わからないときはとにかく觀察せよ、というわけで会議中でも食事中でも入浴中でも読書中でも下痢をしているときでも、二人はルウ子についてまわった。デリケートな分野は同性のミーヤが専属となつたが、ルウ子は觀察者が偏ることに不満をもらっていた。

7月28日

ルウ子の観察がはじまつて十三日目の深夜。

「あ、あの……ほ、ほんとに俺でいいのかよ」

バクは直立不動で寝室の出入口に立つっていた。

「どつちかといえば、あなたのほうがひらめきがあるからね」

ルウ子は下着姿でベッドに横たわつたまま、手招きしている。

ルウ子は家を持っていない。NEXA本部はすなわち、ルウ子の自宅だった。専用の寝室は局長室の隣にあった。

今日からバクはミーヤと代わり、一晩中ルウ子の睡眠をモニターすることになった。ミーヤは激しく反対したが、ルウ子の命令は絶対だ。

不規則に揺れるランタンの炎が本能の奥底をくすぐる。

バクは健康な男子として複雑な気分だった。過ちが起きたとなれば命が危ない。ただ見ているだけで一夜をやりすごす自信もない。

「な、なにがあつたつて、知らないからな」

「なにがつて、なによ」

「だから、その……俺、男だし……」

「あ、そつか。その検査はまだだつたわね。なんなら、今試してみる?」

ルウ子はブラのホックに手をかけ、肩紐をするりと外す。

バクは思わず後ずさろうとしたが、閉めたばかりのドアがそれを阻んだ。

「ま、待て。こ、こ心の準備が……」

そしてルウ子は胸を露わに……とはならず、別のブラが出てきた。

ルウ子は外したほうをちらつかせた。

「防刃下着よ。ほら、あたしつて超VIPだしい」

バクはほつと息をついた。

ともかく、皮一枚かぶついてくれればひとまずお互い安全だ。  
そう思つた矢先……ルウ子は本命まで脱ぎだした。

「お、おい！」

「寝るときは外すものなのよ」ルウ子は今度こそ胸を露わにすると、一枚目のブラを床に放り投げた。「そんなとこに突つ立つてないで、ちゃんと観察しなさいよ。じゃ、おやすみ」

ルウ子は布団をかぶつた。

バクは額に手をやつた。

この人の脳は醸酵しすぎて本物の味噌になつてしまつたにちがい  
ない。中身はオバサンなんだ。理性ではそう言い聞かせていても、  
下半身はなぜか熱を帯びている。少女と熟女が混在して……。バク  
は金縛りにも似た半夢半実感に襲われた。

「まるで拷問だな」

バクはそつづぶやくと、寝床のそばにある丸イスに腰かけた。

ルウ子は早くも寝息を立て、寝返りを打ちはじめた。

掛け布団が乱れる。

バクはふるえる手でそれを直す。

「なんでこんなことしなきやならないんだ……」

「なんでここで我慢しなきやならないんだ。」

一つの本音が錯綜する。狸寝入りだつたらまずい。安全なほうを  
表に出しておく。

やがてルウ子の寝相は落ち着き、退屈な時間が続いた。

どこからともなく睡魔が現れ、バクの背中に取り憑いた。

慣れない環境を渡り歩き、疲れがたまつているのだろうか。大事  
な観察時間の最中に眠つたりしたら、噂の人間焼却炉の仕事にまわ  
されかねない。

バクは両手で何度も顔を張つた。

もう大丈夫だと思った三秒後、バクは睡魔のしなやかな指先から  
流れ落ちる、甘い汁をすすつていた。

\* \* \*

2016年10月7日

「もう商品がないですって？ どういうことなのよー。」

行列の先頭、太った中年主婦がスーパーの店長らしき初老の男につかみかかった。

「も、申し訳ございません。なにしろ流通が完全に麻痺しております、飛行機も電車もトラックもまったく動かないというんです」

「定価の倍出してもいいわ。倉庫にはたんまりあるんでしょ？」

「倉庫も……空です」

ルウ子は先頭から少し離れたところにいた。

買い出しに来たオバ様たちの世間話が聞こえてくる。

「私はもうハ軒まわったわ」「私なんかこれで十四軒田よー」「田本中の商店から食品が消えてしまったって本当なの？」

号外を広げて議論を交わす近所の大学生たち。

『日本各地で航空機墜落事故。空港周辺で大規模火災発生も、警察消防は機能せず』という見出し。新聞はなんと手書きの原稿を刷つたものだった。

大学生たちの会話が聞こえてくる。

「官制センターが機能しないのはともかく、車一台動かないんじゃどうしようもないな」「水面下でなにか恐ろしい企みが進んでるんじゃないのか？」「いいや。企みはすでに達成されたのかもしれない。人間を地獄に落としたければ電気一つ奪うだけで充分さ」「流通を断たれたら都会はそれまでだな」「田舎に逃げて農家の世話にでもなるか？」「車も電車も動かないのにどうやって？」

ルウ子は列を抜けると、「早く知らせなくちゃ！」と家路に急いだ。

「のままじゃ 都会から食べ物が、なくなる…？」

2016年11月9日

ルウ子は近所の公園にできた「大な地域掲示板を見上げていた。近頃では紙の供給さえままならず、新聞まで止まってしまった。掲示板にはこう書いてある。

『日本は現在、深刻な食糧危機に陥っている。世界中を襲った未曾有の停電により、各國は日下、国内の混乱や暴動を抑えるべく内政に全力を傾げざるを得ない状況である。近代的流通は破綻し、海外の緊急援助も期待できない。政府はこの苦境を『不測時の食料安全保障マニュアル深刻度レベル2』に相当すると判断（レベルは0、1、2があり今回は最高レベル）、本日付で次に挙げる方針を適用するとした。

熱量効率が高い作物への生産転換（国民生活安定緊急措置法）。既存農地以外の土地の利用。

食料の割りあて・配給・及び物価統制（食糧法）。

なお、農林漁業者に対する優先的な石油供給の確保（石油需給適正化法）については、寒冷地の冬季生活を考慮し、原油輸入先との国交回復まで保留となつた

ルウ子のそばにいた、栄養専門学校に通つて居るという女が口を開いた。

「法律とかはよくわからぬけど、要するに日本の食料は敗戦直後みたいに配給制になつて、昭和二十年代後半レベルのカロリー（一日あたり約2000キロカロリー）になるつてことよ」

別枠のコラムにあつた、三食の品目例は次の通り。

朝食……白米一膳、蒸かしイモ一個、ぬか漬け一皿。

昼食……サツマイモ一本、蒸かしイモ一個、リンゴ四分の一。

夕食……白米一膳、サツマイモ一本、焼き魚一切れ。

うどんとみそ汁が一日に一回、納豆が三日に一パック、牛乳が六日に一杯、たまごが七日に一個、肉は九日に一食……。しかも、これらは電気が使える時代に考案されたものであることを忘れてはならない。

普通ならここで悲鳴を上げたいところだろうが、ルウ子たちはちがっていた。この一ヶ月、爆発的な物価の上昇で、各家庭は財産のほとんどを食品につぎこまねばならなかつたのだ。

ルウ子と栄養士の卵は手に手を取りあい……ほつと息をついた。ひとまず破産と餓死だけは免れた、と。

2017年10月1日

地域掲示板の記事。

『パワーショック』

世界中を混乱に陥れた謎の大停電は、本日をもつて一周年を迎えた。科学者らは、この自然法則から逸脱した電気消失状態を『パワーショック』と命名した。ノーベル物理学賞受賞者、統京大学のA博士は「この世に謎と呼ばれるものが残っているのは、単に科学がそこに追いついていないせいだ、という考え方があります。私もそれを支持する一人です。でも、それは科学万能主義者の勝手な思いこみなのかもしれません」とコメント。世界随一の頭脳集団をもつてしても、原因究明の糸口さえつかめないでいる。

2018年2月10日

地域掲示板の記事。

### 『厳冬の試練』

豪雪地帯では配給の遅れが目立ち、栄養失調による餓死者が続出している。同時に燃料も供給不足で、森林の無差別伐採問題が表面化しつつある。

一方、都市部では遅配はないものの、人口密集地帯での強毒型インフルエンザの蔓延が脅威となっている。肺炎による死者は例年の十倍。栄養不足による抵抗力の低下が原因であることは疑う余地もない。また、年末から続く大寒波の影響か、てつとり早く燃える紙を求めた図書館襲撃事件が相次いだ。

2018年9月9日

地域掲示板の記事。

#### 『飢餓闘争への序奏』

海外貿易の無期限凍結、春夏期の断続的な異常低温、南方からの巨大台風の連続、酷使した耕地の収穫能低下……国民の飢えは限界に達してきている。

地方では、都市から流れてきた暴徒による略奪が横行した。地方の倉が空になると、今度は『出稼ぎ』と称して、人の流れは都会へ逆流をはじめた。出稼ぎ者は徒党を組んで富裕層を襲撃。その争いはエスカレートを重ね、現在では奪った物を奪いあう弱肉強食のサバイバルに移行しつつある。全国各地で頻発する騒動に、警察はほとんど対応できず、社会の秩序は崩壊の一途をたどっている。

ルウ子は記事を読み終えると、人目を警戒しながら公園を立ち去つた。

背中のリュックには配給物資（これで最後かもしれない）がつまつているのだ。

無事帰宅したルウ子は、人気のないリビングに一抹の不安を覚え

た。急ぎ足でキッチンへ行くと、扉が全開となつた冷蔵庫が目に入つた。名ばかりの冷蔵庫には、あらゆる手段を講じて手に入れた保存食を溜めておいたのだが……。

どこからか鉄のような臭いがした。

キッチンカウンターの裏をのぞくと、ルウ子は手にしていたリュックを取り落とした。

ルウ子の瞳は渴ききつていた。

どこでもない一点を、ただ見ていろ」としかできなかつた。食卓のイスに腰かけたまま、夜が明けるまで。

翌朝。

両親の亡骸を庭に埋めると、ルウ子はシャベルを土に突き立て、空を見上げた。

雲一つない青。

「こんな世界はまちがつてゐる。なのにどうして、空はいつもと同じなの?」

2019年X月X日

今日も人を一人殺した。たつた一つの豆缶のために。どうしても空腹に耐えられなかつた。

真新しいセーターを着た、同い年くらいの少女だつた。

林檎をつけていた老婆を背中から刺した。  
卑怯などという言葉は死に絶えて久しかつた。  
力んだせいか狙いが外れ、致命傷には至らなかつた。

2020年X月X日

老婆は林檎を取り落とすと、『せー』もなくふり返った。目があつた。

老婆はなぜか微笑んだ。そして肩に刺さったナイフを引き抜くと、自ら胸を突いた。「あとを頼みましたよ」と言い残して、不可解な自決にひどく困惑した。あの目は俗人のものなんかじゃなかつた。何千何万といつ人生を背負つてきた者のそれだ。

老婆の最期の言葉。林檎を口にしながら、その真意をずっと考え続けた。

剥ぎ取つたシミだらけのトレーナー。ポケットをまさぐると、冷たくてギザギザした感触があつた。

「コードの袖を犬のように嗅いだ。ほどなく場所を探りあてた。ロウソクに火を灯し、暗がりのほうへ一段また一段と下りていく。蛆の温床に何度も足を取られそうになる。慣れ親しんだ臭気はかえつてクセになる。いびつな白い器の中からきれいなやつをつま先でシューート。

無粋なノックに応じる者はない。

ギザギザを差しこみ、地下室のドアを開ける。

正面に保存食料の山。半年分はある。

収納を開けると、黒ずんだ毛布が積んであつた。あとはなにもない。

部屋の壁には、正装した政治家たちが整列する写真が一枚。その中にあの老婆の姿があつた。

他のスペースは殴り書きばかりだ。人類を襲つた悲劇を嘆く言葉で埋め尽くされている。

その中の一行に目が止まる。

『あのときの世界、あのときの暮らし、絶対取りもどしてみせる』  
「…」

とうに涸れていたはずのものが、埃だらけの床にこぼれ落ちた。

「あたしなんかに未来を託して、ほんとによかつたの？」

写真の中の老婆は微笑んでいた。

2021年X月X日

「やっぱ神様は悪い」と、ちゃんと見てているのね……」

ガード下の壁にもたれかかり、赤く染まつた腹を押さえながら独り笑つた。

霧がかつた視界にふつと人影が湧いた。若い男のようだ。シャツのボタンが一つまた一つと外されていく。

今さらなにをされたってかまいやしない。でも……せめて最後くらいは優しく、して……。

目が覚めると、薄汚れたベッドの上にいた。

かすかな消毒剤の臭い。空の褐色瓶。針のない注射器。書類の散乱。微風。窓枠しかない窓。他にめぼしいものはない。

腹をさわった。傷口が縫つてある。

ジャリジャリと、ガラスを踏みつけるような音が近づいてくる。蝶番だけが残つた部屋の出入口に、白衣の若い男が現れた。

男は無精髭面を見せるなり、ため息をついた。

「ここに残つていた物はもう使い果たしてしまつた。あとは自力で生きのびるんだね。じゃあ私はこれで」

男は出でていこうとして、ふと立ち止まつた。

「君は悪くない。悪いのは……フフ、よそう

「あ、あの、名前……」

ルウ子は言いかけたが、男は行つてしまつた。

\* \* \*

2045年7月29日

バクは丸イスにすわったままハツと目を覚ました。  
恐ろしく鮮明な夢だった。それにも、記憶がないことがなぜ自分の中に……。

さつとカーテンを開け、朝日に目を細めながら辺りを見まわすと、パンツ一丁で眠るルウ子が目に入った。

「し、しまった！」

任務失敗。だが、肩を落としている場合ではない。  
バクはしゃり玉から落ちかかったネタのようになつていた布団を引つつかんだ。

「ん……うう……」

少女のうめき声に、バクはふり返った。

ルウ子は毛穴という毛穴に汗の玉を光らせ、顔をしかめながら、胸の下から太腿にかけて無数に走る傷痕を次々と押さえていった。  
バクは布団から手を放すと、ルウ子の顔のそばへ行つて様子を見守つた。

あの夢はルウ子の記憶を遡つたものにちがいない。昨日の自分と今日の自分とでは、ルウ子は別人だった。自分も似たようなことをやつて生きてきた。なんだか急にルウ子のことがわかつたような気がした。

夢見の時間が終わつたのか、ルウ子の寝顔が穏やかになつた。  
たまらなくなつたバクは、ルウ子に唇を寄せていた。  
ルウ子の目がカツと開いた。

「！」

バクはさつと飛び退いた。

怒声もなければ物も飛んでこない。

バクは目をこすつた。

ルウ子は眠つたままだ。錯覚だったのか？

反射的に逃げたのは、犯行を見られたからというより、喪失の恐

怖にかられたからだつた。一番大事なものを失つてしまいそうな、真つ黒な予感だつた。

ルウ子が寝返りをうち、バクに背を向ける形になつた。それまで腰があつた場所に小物が埋もれているのを、バクは見つけた。

「寝るときまで離さないのか……」

ルウ子がいつも持ち歩いている、ピンク色のケータイだつた。よく見ると表面が淡く光を放つてゐる。

気になつたバクはケータイを手に取つた。

するとケータイはバクの手をさつとすり抜け、元いた場所に舞いもどつてしまつた。

「な！？」

バクは驚くと同時にルウ子の背中を見た。仕掛けがあるよつには見えないが……。

バクは何度もケータイを手に取つてみた。結果は同じだつた。ルウ子とケータイは強い磁力のようなもので引きあつてゐる。完全に密着していないうところをみると、磁石ではなさそうだが、ともかく、裸のままではまずい。

バクはルウ子に布団をかけ直した。

数分後……ルウ子は絶叫とともに目覚めた。

「ンアアアアアッ！」

がばと上体を起こす。

「ハツ……ハツ……」

肩を激しく上下させながら、眼球がこぼれんばかりに目を剥き、自分の手を不思議そうに見ている。

「だ、大丈夫か？」

「あたし、なんか言つてた？」

「い、いや……」

バクは思わず目を逸らした。

「そう……」

ルウ子は目を伏せ、背中の張りを緩めた。

半身裸をさらしていても、相変わらず氣にする様子はない。  
慣れなのか、バクもそこに違和感を感じなくなっていた。

「悪い夢でも見たのか？」

「心配しなくていいわ。朝の日課だから」

ルウ子は汗で首筋にからみついた巻き毛をもとにもどしていった。

「日課！？ あんたは、あんなものを毎日……」

「あんなものつて？」

「いや、なんでもない」

飢餓地獄を生きのびるためとはいえ、ルウ子は容赦なく人を殺していった。今はきっとその報いを受けているのだろう。それを日課だと言う。彼女は自分のせいで死んでいった者すべての魂を背負つて生きていくつもりなのだ。

ルウ子はベッドを出ると、カゴに用意してあつたバスタオルでせつせと汗を拭いていった。

バクはそんなルウ子を横目で見ながら肩を落としていた。

ルウ子がなにもかも引き受ける太陽なら、俺はたった一人さえ満足に照らせない欠けた月。器がちがいすぎる。

バクは地下にいた頃、地上人の命を二つ奪った。それが今でも肩に重くのしかかっている。

ルウ子がいつものブレザー姿になると、バクは部屋にミーヤを呼んだ。一人には今朝の夢のことは伏せ、不思議なケークタイの話だけをした。

ルウ子は閉じたケークタイを掌に乗せ、二人に見せた。

「実は何度もなくしてるので、これ。でも、知らない間に手もともどつてるので、栄養不足で頭がイカれたのかと思つてたけど、そういうなかつたみたいね」

ルウ子が寝ている間にあつた淡い光は今はない。

ミーヤは言った。

「「」のケータイになにか秘密がありそうですね」「だとすれば……」

ルウ子はケータイを開くと電源キーを長押しした。なにも起きない。

すべてのキーを一通り押した。うんともすんともいわない。ぜんぶいっぺんに押した。沈黙を保つたまま。

「ちえ」

ルウ子は諦めたのか、乱暴にケータイを閉じた。

バクは一つ提案した。

「試しに誰かにかけてみたらどうだ?」

「電源が入らなきゃ意味ないわ」

「そうかな? 歴史の流れはもつマトモじゃないんだ。意味がないつてことにもう意味がないかもしない」

ルウ子は指先を顎にあてて考えこんだ。

「屁には屁を。非常識には非常識をつてことかしぃ」

ルウ子はふりふと尻を突き出す。

「……」

バクはあえてツツ「まなかつた。

「ま、ダメもとでやつてみるわ」

ルウ子はケータイを開くと、誰かの電話番号を押しあじめた。

頭の三桁までは順調なのだが、その先で手が止まる。何度もやり直したがやはり止まってしまう。

ルウ子は首をかしげる。

「はて?」

「どうかしたのか?」

「忘れちゃつた」

ルウ子は苦笑した。

二十九年間のブランクはあまりに長すぎた。無機的な数字の記憶などどうの昔に風化してしまい、今や彼女は実家の番号を全く思い出せない。

それがよほど悔しかったのか、ルウ子はヤケを起こした。

唯一思い出せる番号、『自分自身』にかけたのだ。仮に今、通信できる状態だったとしても、ケータイが『電話』である以上、それはまったくの無駄な行為といえた。

「バカね」

ルウ子はふと息をつき、ケータイを閉じようとその背に手をかけた。

そのとき。

それまでなにも映つていなかつた画面に、いきなり猫の画像が現れた。

「な！？」「あつ！」

バクとミーヤは同時に声をあげた。

「あ……入っちゃつた」

ルウ子は呆けていた。鍵も扉もない無敵の金庫を、馴染みのまじない一つで偶然開けてしまつた泥棒のことぐ。

猫はロシアンブルー似の雑種だつた。ソファに寝そべつたまま急そうにこぢらを見ている。

「うわ、生意気そうな口」

ミーヤはちらとルウ子を見る。

「誰かに似てないか？」

バクはちらとルウ子を見る。

ルウ子はそれにかまわず、今になつてよつやく驚きと動搖を露わにした。

「い、いつたいなにがどうなつてんの？」

「ああ、とうとう封印を解いてしまつたか」

どこかで子供のような声がした。響きの悪い不自然な音質。

「誰だ！」

バクは辺りを見まわした。

寝室に他人の気配はない。

「……」

ルウ子はケータイを握りしめ、画面を凝視したままフリーズしている。

「どうした？」

「し、しゃべった……動いた……アルが……」

「アルって？」

「うちで……飼つてた……猫」

「ま、驚くのも無理はないよね」

画面の中でアルは大あくびをした。

あまりの不条理さにショックを受けたのか、ルウ子はそれからしばらく言葉を失つたままだつた。

科学常識にまだ疎いバクが、代わりにアルに迫つた。

「どこに隠れている。早く正体を見せろ」

「ここにいるって」

アルは前肢で自分の顔を一度指した。

「なかなかよくできた連続写真だな」

「人形アニメじゃないてば！」

アルは自分の素性を相手に理解させるためだけに、一時間以上も費やした。

アルは『テスラン』という電気の精たちの代表だった。実際にはアルの姿を借りた『何者か』なのが、人の言葉では表せない名だというので、以後もアルと呼ぶことになった。

電気の伝わりを陰から仲立ちする。彼らにできることはそれだけだつた。音でいえば空気や水にあたるものだ。彼らは人知れず神々からあたえられた役目を日々果たしていく。

地上に人間が増え、技術革新が進んでいくと、彼らにかかる負荷もどんどん増していった。彼らは大きなストレスを感じていたが、仕事をサボることは許されていなかつた。

不満は募つていつた。そして2016年のある日、それはピークに達した。地球全体にまんべんなく散つていた彼らは、その瞬間を

境に制御を失つて一気に爆縮し、ある一つのケータイに押しこめられてしまったのだった。

理解に苦しむ話だが、バクたちはひとまずそこまでは信用することにした。

アルは話を続けた。

「信じられないことはさらに続いた。一ヶ所に集まつたボクらは、それまでにない能力を獲得してしまつたんだ」

電気の精たちは、ケータイのスイッチ一つで、地上に分散したりケータイに凝縮したり、自在にできるようになつた。ただ、彼らにとって残念なことに、スイッチを操作するにはパートナーの存在が必須だつた。

彼らのパートナーは宿主、つまりケータイ主のルウ子だつた。

アルはルウ子を憎らしげに見つめ、続けた。

「せめてもの救いは、スイッチの秘密を伝えられたのがボクらだつてことを」

ミーヤは訊いた。

「その秘密を解いてスイッチをオンにすれば、また電気が使えるようになるの？」

「そうだろうねえ」

アルは他人事のように言った。

バクは立てたコインをそつと指でつつくように訊いた。

「その秘密を教えて欲しい、と頼んでも無駄なんだろうな？」

「そうだろうねえ」

アルはコインが倒れるまで、ただ目で追うだけだつた。

「ん？ ちょっと待てよ？」バクは眉をひそめた。「パワーショックが続いたのはつまり、テスランが地上から消え、ケータイの中に閉じこめられたからなんだよな。そのときケータイはオフだつた。今、俺がアルと話してることはず……」

アルは目を釣り上げ、ガツと牙を剥いた。

「そう！ もうある人が実行しちゃつたんだよ！ まさか……ま、

さ、か、自分自身の番号にかけちゃうマヌケな人がいるなんて、予想の宇宙の彼方だった！」

並の人間なら生涯気づくことのない秘密。まったくバカげたことさえ一度は光を当ててみよう、というひねくれ根性が、この偶然を引き寄せたのだ。

「マヌケで悪かつたわね」

ルウ子は顔を赤らめ、そっぽを向いた。

きつかけはともかく、テスランは器を飛び出し世界中に散った。つまり、発電は可能になったということだ。

「これであんたの願いが叶つたじゃないか」

「世界を飢餓から救えますね」

バクとミーヤはルウ子に笑顔を送った。

「長かった……本当に」

ルウ子は素直に感慨にひたつていた。

「えー、お喜びのところ誠にアレなんだけど、残念なお知らせがあるよ」

アルは得意げに目を細めた。

「な、なによ」

ルウ子は不安げな顔をアルに近づけた。

「ボクらテスランには二つの大きな属性があつてね、人間界の言葉でいえば『天』と『地』とに分かれるんだ」

『天』は太陽エネルギーから直接生まれた電気の伝わりを、『地』は地上のエネルギーから生まれた電気の伝わりを、それぞれ仲介する者たちなのだという。発電という観点で見れば、前者は太陽光発電を、後者は火力や水力など長らく人類を支えてきた発電を、彼らは陰から支えていたことになる。

ちなみに、『人』にあたるマイナーな存在もあり、その者らは生体内の電気に関わっていた。幸いなことに、彼らは今回の事件ではまったく影響を受けなかつた。マイナーなんだから取るに足らない話なんだろう、と考えるのは早とちりだ。なにしろ、地球全生物の

滅亡」という一大事を免れたのだから。

アルは天属性の代表だった。彼が統べるテスランの存在だけでは、太陽光発電しかできないことになる。

それを知ったルウ子は怒鳴った。

「なによ、あんたちつとも使えないじゃない！」

「そんなこと言われたってボクのせいじゃないしね！」

アルはそっぽを向いたが、なにかを思い出したのかすぐに続けた。  
「あ、それともう一つ。得たものがある代わりに、ボクらは自由に飛びまわるための『翼』を失ってしまったんだ。もう、陸の上を這うことしかできないよ」

「つたく扱いづらい『たちね』

テスランたちはもはや、空を飛ぶことも地下に潜ることもできず、砂のように地を這い砂丘のように積もるしかなかつた。つまり、発電を再開したければ、この島国の中でこつそりやるか、大陸に持ちこんで各国の協力を得るか、選択を迫られることになる。

ルウ子は迷うことなく前者を取ると言い放った。わが国は飢餓闘争の激化によつて旧政府が倒れて以来、海外との国交がなかつた。政治の問題がからんでややこしくなる前に、まずは実用可能かどうか国内で試しておるべきだというのだ。

それはいいとして、アルの存在だけでは、ルウ子がめざす『2016年当時の電化生活の再現』からは程遠かつた。絶対的に電力が足りない、というより、ほとんど役に立たないと言つてもいい。日本各地にある太陽電池パネルは耐用年数をすぎているか、あるいは天災や暴動のせいで破損したものばかりだつた。

安価でかつ短期間に電力を回復できるのなら、飢餓問題も早期に解決できるだろう。そのためには、どうしてもアルの片割れを手に入れる必要があつた。

ルウ子はアルに迫つた。

「アル、協力してもらつわよ。そいつの居場所を教えなさい」

「お断りだ」アルは背を向けた。「人間なんかに電気を使わせたら、

口クなことにならない。あんなストレスはもつたくさんだよ」

ルウ子は思索に耽る詩人のような、遠い目つきで言つた。

「地球つて……おおらかに見えて実は纖細にできるのよねえ」

「う……」

「電気が外に伝わってくれないと困る生き物だつているはずよねえ」

「くぬ……」

アルは爪を立て、前肢をふるわせ、そして虚空を切り裂いた。

最後は首を縦にふつた。

「お昼がすんだら、すぐに会議よ」

ルウ子はケータイを閉じ、そのままと部屋を出ていった。

「さて、ここへどうやつて渡るかが問題なのですが……」

孫は赤チョークを取ると黒板に手をのばし、『赤ヶ島あかがしま』という文字を丸で囲つた。

会議室では、ルウ子、バク、ミーヤ、NEXAの幹部らがイスを扇形にならべて一つの黒板を囲んでいた。

アルの片割れは、統京の南350キロに位置する小さな離島にいるらしい。船は調達できるというのに、NEXAの古参たちは、マフィアに長年悩まされてきた刑事のような渋い顔つきでうなつていた。

話が進まないので、新参者のバクには事情がわからない。左隣にすわるミーヤも同様であろうと、退屈しのぎに話しかけよつとしたのだが……。

「ふいっ！」

ミーヤはそっぽを向いてしまった。

どうも彼女はルウ子の寝室を出てから機嫌が悪い。気に触るようなことを言つた覚えはない。夢の中でつながつたことを、こつそり打ち明けただけなのだ。

ルウ子はニヤけながら、一人の摩擦をつかがつていた。

「あのね……」

ルウ子は左隣にすわるバクに耳打ちした。

ただ、ゴーマゴーマゴーマとしか言わない。

「なんだよ。ちゃんと言へよ」

バクは小声で返した。

「えー、どうしようかなー。バク、怒るかもしれないし」

ルウ子は悩ましげな顔で上体をくねらせた。

「俺が怒るような話なのか?」

「実はね……」

ルウ子はちらりとミーヤを見ると、すばめた唇をバクの耳もとへ近づけていった。

バクのつま先に激痛が走った。

「つ！」

重要な会議中に暴れるわけにもいかず、バクはその場で口を押さえて悶絶した。

すまし顔のミーヤと田代があつ。

ミーヤは「バーカ」という口真似。

女どもの考えることはよくわからない。

「そこ！ 真面目にやりなさい！」

孫の一喝に、バクとミーヤは小さくなつた。

「孫の言つとおりよ。大事な話の途中なんだからね」

ルウ子は担任の威を儲る委員長のように追い打ちをかける。孫はせき払いした。

「局長もです」

「……」

ルウ子は手にしていた資料で顔を隠してしまつた。

孫は続けた。

「話にもどりましょう。赤ヶ島への足はある。問題は……離島連盟です。彼らを説得しない限り、領海に入ることすら叶わない」

ルウ子は目を伏せた。

「ま、無理でしょうね」

本土と離島との関係は、ルウ子の執念さえ凍らすほど冷えきつていた。

パワーショックの混乱や被害を最も回避できた土地。それは離島地域だ。離島はもともと海の幸に恵まれており、過疎化で人口が減っていたことも加わり、飢餓とは縁遠かつた。便利という言葉は死に絶えたが、必要以上に望まなければ自然の恵みだけで充分に生きていけた。

パワーショック時代に入つて数年後、本土は飢餓闘争の激化によつて無政府状態に陥り、弱肉強食のサバイバルがはじまつた。本土の食料事情がいつそう疲弊してくると、暴徒の魔の手は離島にも広がつていつた。豊富な海洋資源に目をつけたのだ。

ある日、本土難民を装つてやすやすと島に入つた暴徒の一団は、疑うことを知らない島民を片つ端から殺していつた。島側も反撃に出たが、相手はルールなき戦場を生き抜いてきた強者どもだ。その島は一昼夜にして人口の半数を失つた。島人たちは玉碎も覚悟したが、村長が故郷を捨てる決を下し、この惨劇の生き証人として事件を語り伝える道を選んだ。

こうした『離島事件』が各地で相次いだことをきっかけに、島々は独自の連盟を組み、本土との決別を宣言した。

バクは孫に訊いた。

「こつそり忍びこむつていう手はないのか？」

孫は首を横にふつた。

「離島の周りでは、近海最強を誇る海軍が昼夜網を張つて、彼らの猛勇に比べたら、海賊などかわいいものだ」

『離島海軍』は領海外でのふるまいにはいつさい干渉してこない。しかし、ひとたび境界線を無断でまたごうとすれば、古代遺跡の罠の「ごとく容赦がなかつた。

ミーヤは言つた。

「海上警察は動かないんですか？」

「これはもはや政治的な問題だ。双方の外交努力に期待するしかな

い

孫は手にしていたチヨークを専用の引き出しへ乱暴にしまった。

「あーあ。おもしろくなつてきたと思ったのにな」

バクは頭の後ろで手を組み、大あくびした。

これで同会（孫）のひと言があれば、今日の会議はおひらきだらう。

そんな雰囲気を、ルウ子は一掃した。

「ちょっと待つて。あたしはお手上げなんて言つた覚え、全つつ然ないわよ」

孫はため息をついた。

「局長……」

「あたしはね、通常の方法じゃ無理、と言つただけ」

「は？ それはどういう……」

ルウ子はそれに答えず、バクとミーヤに言つた。

「もうわかつたとは思つけど、大雑把に言えば離島連盟は「ミコニティーの海バージョンつてところよ。幸い、離島とミコニティーは交流があるみたい。そこでよ……」

「そこで？」

二人は同時に訊いた。

「富谷の高森昭乃に協力を依頼するの。あの「、親善使節として離島に何度か渡つてて顔が利くらし」のよ」

「…」

「バクはイス」）とひっくり返りそうになつたが、どうにかこらえた。昭乃……あの昭乃が？ それにしてもなぜ、ルウ子は秘境の女戦士のことにつれほど詳しいのか。

「待つてください、局長」孫は反論をはじめた。「たしかに双方は同じ自給自足社会ということもあり、協力関係にあります。ですが知つての通り、ミコニティーは離島の陸上版のよつなものです。彼らが我々の話に聞く耳を持つてはいるとは思えません」

「そうね」ルウ子はあつさり認めた。そして、含みたつぱりの笑み

と熱い視線をバクに送った。「そこですよ」

「お、俺！？」

バクは自分で自分を指した。

「あんた、昭乃と仲いいのよね？」

「別に仲がいいってワケじゃ……」

「そう？ 真っ昼間から息荒くして、身をすりあわせていたそういうじゃない？」

「それは武術指導でちょっと……ってなんでそんなことまで！」

「ミュニティーは人の出入りが極めて少ない閉じた世界。どうやら、ルウ子は懐に優れた札を隠し持つてこようつだ。さう」

「バク……」

ミーヤは潤んだ瞳でバクを見つめた。

「な、なんだよ」

「知らない」

ミーヤは席を立つと、足早に部屋を出ていった。

ルウ子はそれを楽しげに田で追つ。

「青春だねえ」

「俺、なんか悪いことしたか？」

「ちつとも」

ルウ子は首を横にふった。

「じゃあ、あいつはなんであんなに怒つてる」

「それはこれからあんたが学んでいくことよ」

「教えてくれたっていいだろ？」

「ダメよ。あの口に悪いもの」

「わけわかんねえ！」

バクは頭をかきむしった。

「それはともかく」ルウ子は人差し指をびしと突き出した。「バク。

あたしの代理として高森昭乃と接触し、離島への活路を開きなさい」

7月30日

「……？」  
「……！」

蒸気機関の轟音が車内での会話を困難なものにしている。  
NEXAが用意した蒸気自動車は、荒れ放題の湾岸道路を疾走していた。

車はトラックを改造した試作品だつた。荷台にはボイラート炭水箱。顔を煤だらけにした老機関士がせつせと釜に炭をくべている。本来ならば彼が運転をつとめ、若い助手に重労働を任せらるはずだつたのだが……。

助手席にバク、真ん中にミーヤ、そして運転席には……。  
バクは身をよじつて怒鳴つた。

「なんであんたがついてくるんだよー。」

「あに？ あんたつて？」

ステアリングを握る竜巻頭の女は耳に手をあてた。  
「バクに任せたくせに、どうして局長本人がついてきたんですかって！」

ミーヤが通訳した。

「あたしには、あなたの骨を拾つ義務があるのよー。」  
「……」

バクはため息をついた。

期待してゐるんだかしてないんだか……。この難局を乗り切れば一躍幹部への昇進もあり得るだろうが、このままでは名誉の殉職で二階級特進がいいところだ。あのカタブツ昭乃がそう簡単に首を縊にふるとは思えない。NEXAの名前を出したとたん、滝のように矢が降つてくるに決まつてゐる。

結局、これといった妙案が浮かばないまま、車はもう富谷関の麓につけていた。以前に道路を塞いでいた崖崩れはすっかり直つてた。会議が終わつてすぐ、ルウ子が土木屋に急使を飛ばしたらしい。

堤上では横一列にならんだ弓隊が待ちかまえていた。その中央に警備隊長、高森昭乃の姿。昭乃は腕組みしてこちらの出方をうかがっている。

バクは一人で車を降りると、ダムへ向かっていく道を終点まで歩き、堤底の少し手前で立ち止った。

警備隊の表情がにわかに険しくなった。

昭乃是興奮する弓隊を片手で制すと、叫んだ。

「環境破壊集団が我々になんの用か！」

「一つ頼みがある！ 大事なことだ！」

「電化文明復活を諦め、一週間以内に組織を解散すると、その命をもつて約束できるなら話を聞こう。三分だけ待つ！」

「変わつてないな！ あんたのダイヤモンド頭は！」  
「おまえの減ららず口ほどではない！」

「そのおかげをブリリアントにカットすれば、もつと輝くんじゃないのか？」

「貴様……」

昭乃是さつと口を開き、バクに狙いをつけた。

バクはこれ以上の挑発を思いどつた。今は任務中なのだ。昭乃をからかうためにはるばる富谷までやってきたわけではない。

バクはちらとふり返り、車内の様子をたしかめた。

ルウ子はステアリングに手をかけ、こちらを睨んだままにかつている。ミーヤはルウ子の腕にしがみつき、必死に説得しているように見える。まずい。なんらかの成果を見せなければ轢き殺すつもりだ。

バクは昭乃を見上げた。

「解散はない！ せめて会談だけでも開かせてくれ！」

「あと一分！」

「俺に後退は許されていない！ 頼む！」

「我々にも譲歩は許されていない！ 恨んでくれるな！」

昭乃らに射抜かれるか、ルウ子に轢かれるか、進退窮まった。ど

うすればいい、どうすれば……。

思考回路がオーバーヒートしたバクは、思い描いたばかりの生シ

ナリオを、火を通さないまま実行した。

「どのみち命はない！ そのお腹にいる、俺の子によろしく伝えと  
いてくれ！」

バクは昭乃に向けて顎をしゃくつた。

弓隊はいっせいに昭乃に注目した。

昭乃は野焼きの炎よりも赤くなると、裏返った声で叫んだ。

「ね、ねね根も葉もない嘘を言つた！ 毒でも食らつたか！」

「名前はもう決めたのか？」

バクは微笑んだ。激戦地への配属が決まつた夫が妻を見納めると  
きのよくな目で。

弓隊の男たちは狼狽えた様子で面白をはじめた。

「俺、隊長にだけは手を出すまいと思っていたのに……ケダモノめ  
……」「ほ、僕の永遠のアイドルを……ゆ、許せない……」「寝こ  
みを襲つて孕ませるなど……万死に値する！」

かかつた！ バクは心の中で拳を突き上げた。警備兵どもは老い  
も若きも昭乃一筋。憤るあまり誰かが矢を放つてくれれば、時間を  
守らなかつたと、昭乃の生真面目さにつっこむことができる。  
さて、どこから撃つてくる……。

先走る兵を見極めようと、バクが堤上を見上げ直したときだつた。

「な！？」

十本の矢が同時に放たれていた。

バクは身を翻して逃げ出そうとしたが……。

「ぐ！？」

一本の矢が背中に突き刺さり、バクはじうと倒れた。

「！」

上氣していた昭乃の顔からさつと血の氣が引いた。

昭乃はよりけるよつに身近の若者に歩み寄ると、胸ぐらをつかみ  
上げた。

「まだ三分たつていない……なぜ……なぜ約束を守らなかつた  
「は……ぐ……」

若者は昭乃の背後に閻魔でも見たのか、怯えきつて声にならない。昭乃はそこでハツとして、他の隊員たちに命じた。

「バクを診療所に運べ！」

「しかし隊長……」

隊員たちは顔を見あつて居る。

「命令だ！」

一方、ミーヤは車を飛び出すと、転げるよつにしてバクに駆け寄つた。

バクの背中に赤い地図が広がつていく。

「バク！」

ミーヤは刺さつた矢の柄に手をかけるも、大出血を怖れたのかパツと手を離し、その場にへたりこんでしまつた。

隊員たちがダムの壁を降りてきて、バクとミーヤの周りに群がつた。

「バクにさわるな！」

ミーヤは吠えた。わが子を守らんとする山猫の「」とべ。

「出血がひどい。時間がないんだ！」

隊員たちは三人がかりでミーヤを引っ張がすと、残りの一人でバクを堤上へ運んでいった。

ミーヤはバクの名をひたすら叫び、絶壁のタラップを伝つ者たちの後を追つた。

嵐のような騒ぎが収まると、いつの間にか昭乃が道端に立つていた。

ルウ子は車を降り、昭乃につめ寄ると、いきなり頬を張つた。

「……」

昭乃は顔を背けたまま、なにも言わない。

「なんとか言つたら？」

昭乃は晩夏の蝉のようにに歯切れ悪く言つた。

「……今は……とにかく、中へ」

7月31日

矢は急所をわずかに外れ、バクは一命を取りとめた。だが、手術後の衰弱がひどく、一週間は絶対安静となつた。富谷には限られた薬草しかなく、麻酔作用を期待できるものは少なかつた。バクは手術中もその後も、激痛のあまり何度も発狂しそうになつた。ミーヤは毎晩徹夜でバクの手を握りしめ、ひたすら励まし続けた。バクはその間ほとんど記憶がなかつたが、ミーヤの手がどれほど自分を安心させるものだつたか、それだけはこの手がしっかりと覚えていた。バクは虚ろな意識の中で思つた。

ミーヤ……おまえが誰かと幸せをつかむ日まで、俺は死んでもこの手を離さない。

8月3日

その日、ルウ子と富谷の長老衆は議事小屋で会談を開いた。

NEXAは赤ヶ島の調査を希望しているが、本土の民を真っ向から敵視する離島連盟はこれを拒絶するであらう。そこでルウ子たちは富谷の人間になりますまし、連盟の信頼を得てている昭乃をガイドとして、社会見学という形で渡島したい。

このルウ子の無茶な提案に対し、長をはじめとする長老衆は口をそろえて猛反対した。調査の目的以前に、第一、なぜコミュニケーションが環境破壊に最も貢献しそうな者に協力しなければならないのかと。

その意見にルウ子はこう答えた。

「人類を救うための豊富な知識を持つていながら、秘境に閉じこも

つてばかり。そんな連中なんかに、環境破壊がどうのなんて言われる筋合いはないわ。結局あんたたちのやつてることは、ただの自己満足。悪政と戦うのが怖いのか、でなければ面倒くさいのよ。そもそも今は、環境が云々とか言つてる場合じゃないでしょ？ わが国の窮状を少しでも案じていいなら、NEXAに協力しなさい」

ルウ子の挑発的な言葉に感情論をぶつける者もいたが、多くは難しい顔を突きあわせて揉めだした。ルウ子の話にも三分の理はあるが、それしきのことで動く我々ではない、というのが大方の意見だった。

論戦はその後も続いた。十数人の論客に対し、ルウ子はたつた一人。それでも彼女は一時もひるむことなく応戦し、終了时刻が近づいたと知るや、口の端をキリッと上げて一気にまくしてた。

「協力できない？ あつそう。じゃあ、バクを殺しかけたあの矢はどう説明してくれるのかしら？」あの口は完全に丸腰だつた。警備隊長はこっちの判断に三分間あたえると約束した。富谷の武人つて、私怨ごときで君主の使いを撃ち殺す人種だつたのね。野蛮よねー。コミュニティーってそういうところだったの。あつそお。あたし誤解してたわ」

「ち、ちがう！ 我々は……」

末席にいた昭乃がすくと立ち上がった。

「われわれわあ？」

ルウ子はくるくると手首をまわして耳に手をやつた。

「いや……」昭乃は口ごもつた。「この前の一一件は私の指導力不足のせいだ。責任は私にある」

「なら話は早いわね。バクが完治次第、赤ヶ島へ……」

ルウ子が言いかけると、昭乃が遮つた。

「それは」昭乃は長老の面々と一顎を交わした。「別のことで償いたい」

ルウ子は左肩にかかる童巻毛をバツと払つた。

「うちの情報力をナメてもらつちゃ困るのよねえ！」 NEXA 提供

のスクープ記事、読んだことない？　あ、新聞取つてないから知らないつかー」

「微力ながら、我々も情報収集は怠つていない。それくらいのことは私も耳にしている」昭乃は唇をぐつと噛みしめた。「今回……だけだからな」

「そんなにシリアルになりなさんな。ブツを見つけたらすぐ帰るから。悪の組織に荷担した、なーんて深刻に悩むほどのことじやないわ」

ルウ子の無礼な態度に、長老衆が「冗談じゃない！」と大騒ぎするも、長が「全国の「ミニユーティーに恥をかかすわけにはいかん」と諭し、ルウ子の提案を渋々受け入れたのだった。

8月7日

意識を取りもどしたバクのもとに、ルウ子がやってきた。

ルウ子はなにも言わずニカツと歯を見せ、親指を突き立てた。

バクはベッドで横になつたまま、弱々しく親指を見せた。

「トラブルをそつくりチャンスに変えちまうなんてな

「それがあたしの仕事だもの」

「つたぐ、その自信はどこで売つてんだよ」

「ところで、その……あのね……」

ルウ子はもじもじと身をよじると、横を向いた。

「な、なんだよ」

ルウ子はちらとバクに目を流し、さつとまたもどした。

「追いつめればなんとかなると思つてた」

バクの力量を過信し、轡き殺さんと脅したことを詫びたいのだろう。

う。

「壁に言い訳したつてしょうがないぞ」

「う、うるさいわね！」

「そのつもりはなかつた？」

「あたりまえでしょ！」

「じゃあ、ちやんと謝れよ」

ルウ子は正面を向き、歩前に出ると、顔を弓形ひづらせた。

「クッ、キッ……」

「……」

バクは必死に笑いをこらえた。

努力は認めるが、慣れないことを前に緊張しきっていた。

「ご、ご……」

「ご？」

「ごめんな！」

ルウ子はぶんつと頭をふり下ろした。

鈍い音がした。

額に手をやり、歪めた顔を上げるルウ子。

「さい？」

バクは激痛のあまり声も出なかつた。

ルウ子の頭突きはバクの胸を伝い、ふたきかかっていた背中の傷口を圧迫していたのだった。

「つ、つもりじやなかつたのよ。つもりじや」

ルウ子は苦笑いを見せつつ後ずさり……。

空の食器でいっぱいのワゴンを尻で突き倒し……。

戸口にいたナースを盆の薬湯ごと突き飛ばし……。

病床小屋から逃げていつた。

「あ、あんにや ろづ……」

バクはそれから高熱を出し、五日も余分に寝こむはめになつた。

## 第四章 マスター・ブレイカー

9月2日

統京湾を疾走する一隻の小帆船があった。

全長十メートルの中型ヨット シーメイド 号は、昭乃がはじめて離島へ渡ろうとした際に、知り合いの漁師からもらい受けたものだ。海を行く船だけに磯臭さはしかたないところだが、それを差し引いても、どことなく生臭い感じの船だった。

シーメイド は船尾デッキに凹みがあり、そこが操縦席となつて いる。舵を握るのは艇長の昭乃。向かいに乗組員のミーヤが腰かけ る。クルーはバクと二人で交代制だ。訓練期間が取れず、一人あわせてやつと一人前といつたところだった。

「コクピットの前方には船室がある。入つてすぐ小型キッチン（ギヤレー）があり、ロングソファが向かいあう居食兼用スペースがあり、その奥の突きあたり……。

収納扉の前でルウ子は壁鏡と格闘していた。

ルウ子の目立ちすぎる容姿と肩書きは離島連盟にも知れ渡つてい る。思い切った変装が必要だった。ルウ子は金色のダブル竜巻毛か ら一変、黒髪の少年のような姿になつた。ヘアメイクは出航に間にあつたが、服の選考がまだだつた。

バクはロングソファの端に腰かけ、ルウ子の華奢な後ろ姿に見入 つていた。

こうして無駄な武装を取り除いてみると、なにかこう、包んでや りたくなるような頼りない背中だ。老いを忘れた体を授かつたとは いえ、あんなか細い双肩でこの国の過去と未来を背負い続けて無理 が出ないわけがない。ある日突然、ルウ子は線香花火のように潔く 燃え尽きてしまうんじゃないかな……。そんな不安にかられた。 バクの沈思はそこで乱された。

ルウ子が後ろ向きに放り投げた割烹着が、バクの顔を覆い隠したのだ。

バクはそれを引っつかむと、衣装で散らかった手前のテーブルに放った。

野良着にツナギに作業着に迷彩服にオヤジジャージ。なにやら倒錯系コスプレ大会の様相を呈してきている。衣装は富谷の民からかき集めてきたものだ。

下着姿のルウ子。鏡にバクが映つても気にもとめない。それよりもショーツのズレのほうを気にしている。

鏡越しにバクと目があうと、ルウ子はふり返った。

「なに？ 履きたいの？」

「履くか！」

「じゃあ、なんだってのよ」

「あんたには男に対する恥じらいとか恐怖とかないのかよ！」

「ああ、そういうこと……」ルウ子は頭をぽりぽりとかいた。「ずっと前に、置いてきたまんまになつてゐわ」

「置いてきた？ どこに？」

「捨てられたガレージとか橋の下とか、いろいろよ」

「なんでまたそんな人気のないところに……」

「人の目があつたら作業に集中できないじゃない、『お互<sup>ひどけ</sup>い』」

「！」

バクは田に入った衣装をさつと手にした。動搖を悟られぬよう無理をしたせいで、鼓動が高鳴つてゐる。

あのときよぎつた破滅の予感は、そういうことだったのか。もし、あのまま眠れる裸のルウ子に触れていたら俺は……。

一瞬、目頭に熱いものがこみ上げた。

ルウ子の過去には、誰も深入りすべきじゃない。誰も。

バクは衣装をまさぐりながら、ふと上に田をやつた。

壁の小窓に昭乃とミーヤの顔があつた。二人は身をかがめて頬をすりあわさんばかりに顔を寄せ、無言でキャビンの様子をうかがつ

ている。

昭乃はバクと田があつと、さつと姿を消した。

ミーヤは物憂げにこちらを見ていたが、一人になつたと氣づくと、あわてて昭乃に倣つた。

結局、ルウ子は事務服姿に分厚いフレームのメガネを装着、とう出で立ちに決まった。

その日の夜は田とヨシトは停滯していた。

バクは一人見張りを任せられ、コクピットの暗がりに立つていた。開け放しのスライド式ハッチ。キャビンの仄かな明かりと、ソファで語りあう女たち。

あのメンバーでまともに会話が成立するのはミーヤの存在があつてこそだ。ルウ子も昭乃も、ミーヤを中継して話をしている。

ミーヤは笑顔をふりまく。

昼間の憂鬱そうな顔はどこへ行つてしまつたのか。

「ミーヤ。おまえのこと、よくわからなくなつてきた……」

9月3日

シーメイドは統京湾を抜け、ひたすら南へ進んだ。その先には、九つの有人島をはじめ島々が南北に縦列する、伊舞諸島いぶがある。離島連盟の東の玄関だ。

ヨシトが領海に近づくと、朝霞の向こうに海軍らしき船影をいくつか認めた。さらに近づいて海図上の境界に差しかかると、三本マストの帆船がこちらへ寄せてきた。富谷と連盟とはすでに書簡で話がついており、彼らに張りつめた様子はない。ヨシトと帆船は平行にならぶと、互いに帆を下ろし錨を海へ投じた。

バクと昭乃がデッキで待つていると、帆船の船室からジャージ姿の厳つい男が出てきた。

虎髭をたくわえたその男は、昭乃に目をとめるなり、親しげに声をかけた。

「よう昭乃、久しぶりじゃねえか」

昭乃は男のふくれた腹に目をやつた。

「大村さん、ずいぶん暇そうな腹だ」

大村はたるんだ腹の肉をつまみむと大笑した。  
「ダッハッハ！ 相変わらず手厳しいな。近頃は平和すぎて呑んでもばかりよ」

男の名は大村猛。おおむらたけし そこらの漁師となら変わらない風貌だが、これでも離島海軍の一将である。

「そんなことでは変装した工作員の潜入を許すぞ。味方にも少しは注意を払わないとな」

昭乃が言つたのと、ルウ子がキャビンから出てきたのとは、ほぼ同時だつた。

ルウ子に続いたミーヤが、はらはらと氣を揉んでいる。

昭乃はそれを横目に見ながら愉快そうに目を細めた。

一方、事務服姿のルウ子は、なに食わぬ顔でメガネをふきふきしている。

昭乃はむつと眉をひそめたものの、瞳が正面を向いたときにはもう、いつもの仏頂面にもどつていた。

ささやかな抵抗も、通用したのはミーヤだけのようだ。『NEX A局長・橋本ルウ子』の風貌はよほどインパクトが強かつたのだろう。そこから少しでもズレがあると、誰も本人だとは気づかない。

「他ならねえ昭乃チヤンの忠告だ。ありがたく受け取つておくぜ。なあ？」

大村がふり返ると、船員たちは鼻の穴を広げて激しくうなずいた。バクは思わず空を仰いだ。

彼らといい富谷の警備隊といい……。見た目はともかく、あの行きすぎた武人肌の性格を知らないわけでもないだろうに。

昭乃の生まれ持つた色香に、大村はすっかり緩みきつた顔で話を

続けた。

「で、社会見学したいつてのがそこのガキどもかい？」

「ああ。」「三日迷惑をかけてしまうが……」

「しかしよ、なんでまた一番ちっぽけな赤ヶ島なんだ？」見学な  
ら七丈島のほうがガイドもいるし、見所も多いし……」

「ああ……それはその……」

昭乃の目が泳いだ。

すかさず、ルウ子がすまし顔で代弁を務める。

「えー、富谷コミコニティーといたしましては自然のままの土地が一番多く残っている島が最も見学に適しているだらうといつ結論に至り赤ヶ島を希望させていただいておりまして島を一度訪問した高森先輩の正確無比な記憶を頼りに我々独自の趣向を凝らした地図を作製いたしましたのでガイドのほうも」心配には及びません

大村はぽかんと突つ立つていた。

「な……」そこで正気にもどつた。「なーるほどな。にしても、若けえのにしつかりした嬢ちやんだ。いい後輩を持つたなあ、昭乃」

大村は朝日に向かって笑つた。

「ま、まあな。やかましくて困るくらいだ」

昭乃は引きつった笑顔でルウ子の肩に手をやつた。

「……」

ルウ子はメガネの縁に手をやり、ふつと口もとを緩めた。

9月4日

赤ヶ島。伊舞諸島の最南端に位置する、人口わずか四百ほどの小さな島である。地図で見ると尋のような形をしており、尖ったほうが北を差している。

シーメイド が領海に入つてから島南部の港につけるまで、まる一日かかった。なにもない海（たまに小さな島はあつたが）ばかり

見ていたせいか、長い航海に不慣れな昭乃以外の三人は、遠いところへ来てしまったのだ、という旅情とも旅愁とも言えぬ思いを顔に浮かべていた。

一行は船を降りると、昭乃は皆に向かつて両手を広げた。

「ここは理想郷と言つてもいい。すべてが大いなる循環の中でもわつていて、無駄なもの、ゴミになるものなど一つもない」

「あの城壁は無駄なものに入らないのかしら?」

ルウ子は海岸をきれいに縁取つている石垣を見渡した。

離島連盟は結成して間もなく、本土民の襲撃に備えるべく、諸島を次々と要塞化していった。この赤ヶ島も例外ではなかつた。

昭乃は力無く手を下ろした。

「もし……世界がこの島だけだつたなら、どれほど素晴らしいか」

それはバクが感じた富谷の印象と同じだつた。

「わかつてないのね」ルウ子はイラついた顔で言つた。「じゃあたとえば、天の悪戯で世界がこのちっぽけな島だけになつたとするわ。食べものや資源は海に求めれば豊富にある。暮らしが豊かになれば自然と人口が増える。でも、土地はここしかない。建物は二階から三階になり十階になり、いざれは超高層マンションが建つようになる。それでも足りなくなる。森や山を削つてまた建てる。そしていつしか第二の統京になつてる。この巨大天空都市で暮らしていくには、水一杯飲もうとするだけでも、どうしたつて文明の、電気の力が必要……」

「そんなことにはならない!」

「ならない? ホントに?」

「互いの目が行き届く小さな社会では、どんな愚行もすぐに正せるものだ」

「ふーん。ところで富谷の若者たちって、豊作が長く続かないよう密かに『儀式』をするつていうじゃない?」

「な! なぜそれを……」

昭乃は腹痛をこらえるような顔になつた。

「村が豊かになれば人口が増え、やがて共生社会が維持できる限界に達する。すると人口が減るまでの間、夫婦はたとえ適齢期であつても子作りを禁じられる。自然保護を謳つている連中が、自然の摂理に反することをやつてる。これって正さなくてもいいことなのかな? しら?」

「我々は大地とともに生きる道を選んだ。自然を破壊するくらいなら、その宿命を受け入れたほうがマシだ」

「あんたはまだ女になつてないから、そんなことが言えるのよ」

「どういう意味だ」

「女になれば、わかるわ」

昭乃は胸に弾でも食らつたようになつた。

気持ちを立て直したのか、昭乃はくいと顔を上げた。

「富谷のやり方が万人にとつて正しいかどうかは、私にもわからな。だが、少なくともこれだけはたしかなことだ。電気には魔性が宿つている。人の欲望に巣くつて本当に大切なものを破壊していくだけだ」

昭乃はバクに歩み寄り、肩に手をまわした。

「惑わされるな、バク。ルウ子あれは電気さえもどつてくればそれでも満足なのだ。緑の大地が砂漠にならうと毒の空氣に包まれよつと、それ以外のことはどうでもいいのだ」

「……」

ルウ子は表情を作らず反論もしない。

ミーヤは昭乃に言った。

「そんなにルウ子さんを責めないで。ルウ子さんは電気を取りもどしたい一心だけで人生のなにもかもを犠牲にしてきた。他のこと考えてる余裕なんかなかつたんだよ」

「数知れぬ尊い命のこともか？」

どこで調べたのか、昭乃はルウ子の過去を責めた。

ルウ子はメガネを外し、昭乃を直視した。

「あの日止まつてしまつた、あるべき時の流れを取りもどすことができたなら、あたしを煮るなり焼くなり、皮を剥いで悪党博物館に展示するなり、好きにすればいいわ！」

「そんなもの、建てるまでもない！」

ルウ子と昭乃は、天地も裂けんばかりに激しく睨みあつた。小さな地震があつた。

揺れが収まると、ルウ子は險を緩めた。

「ま、なんにしても、今は今のことを考えましょ。あんたも責任ある立場なんだから、一度決めたことを前にぐずぐず引きのばさないの。いいわね？」

「クッ……」

昭乃は斜めにうつむいた。

バクたちは来た道を少しもどり、島北部の小さな集落に足を踏み入れた。そこから少し行った山裾の林の縁に、島の頂へ通じる登山口がある。アルの片割れはその頂にいるらしい。

今にも崩れそうな古い平屋の民家が道沿いに連なつていて、その中のある軒先を通りすぎようとしたとき、庭にいた老婆が一行を呼び止めた。

バクは緊張した。バレたか？

老婆は言った。

「疲れどるようだの。休んでいきなされ」

バクとミーヤは顔を見あわせた。

信用していいものかと、バクが眞に相談を持ちかけようとしたとき。

「ありがとうございます。お世話をになります」

ルウ子は疑うことも遠慮もなく、厚意に甘えた。

一行は用意された和室で荷を解いた。その最中、バクは不用心な決断についてルウ子を責めたが、いつさい耳を貸そうとしないので、しつこくつきまとつて口撃を加えていった。

ルウ子はそんなバクをひと言で黙らせた。

「世の中はね、敵と味方だけで成り立つてるワケじゃないのよ！」  
あるときはNEXAのトップとして、あるときは女子学生として、またあるときは飢餓地獄のサバイバーとして、ルウ子はあらゆる種類の人間を見てきている。

直感。それは持つて生まれた才能よりも、経験の積み重ねが決定的にものをいうらしい。バクは早く大人になりたいと思った。

老婆の言うとおり、一行は慣れない船旅で疲れていた。

夕食後、ルウ子は布団を敷いて横になると、五分もしないうちに寝息を立てはじめた。

それを見ていた昭乃は、「男なら弁える」とバクを部屋から追い出した。

バクは部屋を出るとき、捨てゼリフを吐いた。

「拳は男前のくせに、そういうことは別なんだな」

「……」

昭乃はさつと障子を閉めた。

するとミーヤは昭乃の前を素通りして、隣部屋へ移つていった。

昭乃はそれをとがめはしなかつた。むしろ、微笑をもつてそれを見送つた。

その部屋は、昭乃とルウ子の二人きりとなつた。

ルウ子は口からかすかによだれをたらしながら熟睡している。

昭乃はルウ子のすぐそばに正座した。懷に手をやり、隠していたナイフを抜く。

「バク、おまえの批判はまちがつていない」

昭乃は持ち手をふり上げた。

「ん……」

ルウ子は顔をしかめる。

「！」

昭乃は思わず手を止めた。

ルウ子の顔中に汗の玉が湧き出していく。「利き銀行券なんてもうたくさん……」「十円しゃぶつても銅臭いだけだし……」

などと、わけのわからない寝言を言ひはじめた。暗殺の気配を察したわけではないようだ。

昭乃は聞き耳を立てた。

\* \* \*

蝉の声なのか、耳鳴りなのか……。どうちでもいいけど、もつとボリューム絞つてくれない？

誰も使わなくなつた郵便局。無惨に壊されたATM。防犯用ミラーに映つた自分。出来の悪いミイラがなんか睨んでる。地べたにすわつて装置に寄りかかる。

額面入りの紙きれはもうたくさん。プレーン。汗ひたし。昆虫サンド……いろいろやつたけど、続けられる味じやがないわね。ふと、鼻がひくついた。

かすかな甘い匂い。これは……干し柿。工場が動いてた時代の加工品。持つてているのは若い男。風上のビルの陰にいる。

この辺はくまなく漁つたのに。どこで見つけたんだらう。どうでもいい。そんなこと。だって、もう、それは、あたしの……。

正気を取りもどすと、歩道に男が一人横たわっているのを認めた。幾筋にも分かれた赤い支流が緩い坂道を下つていく。

「ああ、ひつつかまえて、在処を吐かせるんだつた……」

頭を小突いた。

でも、明日になるとも「、今日のことは忘れてしまつてる。刺したことも、刺さずにする方法があつたと省みたことも。

誰もいない高架下で干し柿を頬張つた。

目眩がした。その甘さに酔いしれるよりも先に、味覚そのもののメーターがふりきれてしまつた。久しく触れてなかつた芳香にあつたのか、鼻の粘膜がひりひりする。ついでに耳もおかしくなつた。頭上でガタゴト電車が通りすぎる音。

いつたいいつまで待てば、エアコンの効いた部屋で見もしないテレビをつけケータイをいじりながら冷蔵庫から取り出したアイスをお腹が下るまで食べまくれる日がやつてくるのだらう。涙は出なかつた。代わりに鼻水をすすつた。

しまつた。鼻づまりは嗅覚を鈍らせる。

「！」

人の気配にふり返つたときはもう遅かつた。  
飛びかかつてくる大きな影。

為す術もなく歩道に転がされる。

六本の青臭い手が衣服を剥いでいく。

果実が露わになる。

荒げた息。血走る目。

正面の手が熟しかけの果実をつかもつとした、そのとき。

すべての手が凍りついた。

生唾が三つ、喉の奥に流れ落ちた。

正面のふるえる手が、そつと果実を包み直していく。白き大地の上を縦横に走る、赤き山脈に注意しながら。

「「、「めん……なさい。まちがえました！」

悲鳴と足音がいつせいに遠ざかつていつた。

握つっていた手を開く。キラリと光る銀色の欠片。

『作業』を諦めてくれたおかげで、こちらも『作業』せずにすんだ。

お腹の干し柿がなかつたら、ひがう運命だったかもしれないけど……。

\* \* \*

9月5日

「ハツ！？」

昭乃は正座のまま目覚めた。

窓の外はもう白みがかっている。

「同じ夢を、私も見ていたのか？」

ルウ子が日課と称していたのは、これのことだったのか。時を奪

われたルウ子は、あんな苦い夢を、果てしなく……。

「クソッ！」

昭乃はナイフをふり下ろした。

刃はルウ子の耳をかすつて枕に突き刺さった。

「もう少しだけ、時間をやろう」

「あれか」

バクは朝日が照らす山頂に目をやつた。

ゆつくりとまわり続ける白い風車。木々のすき間からプロペラの上半分だけが見える。

ルウ子は手についていたケータイに話しかけた。

「あなたの片割れはたしかにあそこなのね？」

ソファに横たわるアルは、前肢をなめながら言つた。

「そららしいね」

「ところで、そいつもあんたみたいな猫の姿なの？」

「さあね。パートナーの趣味次第じゃないの？」

それからしばらく山道を行くと、低木に囲まれた草深い広場に登りつめた。遠田にはおもちゃのようだった風車。今は開いた口を塞ぐのに苦労する。

バクたちは風車を横目に、古びた二階建ての施設に足を向けた。そこは風力発電の研究所だった。電気が使えなくなつてからは誰も通つていなければ、宿の老婆は語つていた。離島の民は自給自足生活の維持に忙しく、たいした眺望もない山頂に遠足するような暇人などいなかつた。

見たところ、施設の一階は職場で二階が宿舎のようだ。一階はどの扉も窓もブラインドも閉め切つてある。人の気配はない。

バクたちは錆びかかつた外階段を上がつた。

二階は玄関らしきドアが三つならんでおり、アパートのような造りだ。

「ん？」ルウ子の鼻がひくついた。「奥から生活のニオイがする」ルウ子はだつと通路を駆け、ターゲットの前に立つや、ノックもせずにドアノブを引っ張つた。金属棒が一度抵抗した。

ルウ子は鼻をならすと、ついてきた者たちに予言した。

「本土からの逃亡者が隠れてるわ

「なぜわかる？」

バクは訊いた。

「離島の暮らしに鍵なんか必要ないもの」

そのとき、さつとドアが開き、手斧を持った白髪頭が吠えた。

「なにしに来た！」

バクとミーヤと昭乃は反射的に飛び退いていた。

ルウ子だけは何事もなかつたように老人と相対している。

「ブツを取りにきたわ。隠しても無駄よ」

「わ、私はなにもやってない」

「諦めなさい。証拠はあがつてんのよ

「私はむしろ……被害者なのだ」

「は？ なんのこと？」

「離島事件にはいつさい関わっておらん！」

「そうじやなくて！」 ルウ子は地団駄を踏んだ。 「ああもう、自分で探すから！」

ルウ子は一步踏みこんだ。

「く、来るな！」

老人は田を剥き、手斧をふり上げる。

「待つた！」

バクがそこに割って入った。

刃はバクの鼻先一センチのところで止まった。

バクはハツとした。体が勝手に動いてしまった。まだ死ねない体だというのに。

「どきなさい」

ルウ子はバクの背中をぐいと引つ張った。

「な！？」 バクはかつとなつた。 「礼ぐらい言つたらどうなんだ！」

「この男に人殺しの根性なんかないわ。そんなことも見抜けない役立たずなら、今すぐ泳いで帰つてもううしかないわね！」

「根性はなくても手もとが狂うことはあるだろ！」

「そのときはそのときよ」

「強がんのもいい加減に！」

バクが平手を上げたとき、ミーヤがその肩にすつと手をのばした。

「ルウ子さん。 そんなに焦らなくとも……」

ミーヤは一人をなだめると、拳動のおかしなケータイについて老人に尋ねた。

老人は思いあたる節があるのか、手にしていた斧を玄関の壁に収めた。

作業服が妙になじんでいる。仕事がないときでも着ているのだろう。根つからの職人といった感じだ。

「入りなさい」

老人は言つて、奥に姿を消した。

バクは田配せしてミーヤを引きとめ、ルウ子と昭乃を行かせた。

「ミーヤ。俺……」

ミーヤを一人にさせないと約束しておきながら、他人のために身を擲つような無茶をした。その言い訳をしようとしたのだが、どう言えばいいのか、急にわからなくなってしまった。

「気持ちはわかるけど、もうちょっと冷静にね」

ミーヤは微笑むと、足早に部屋へ上がつていった。

バクは独り言つた。

「自分でもわかんないのに、なんでミーヤがわかんだよ」

部屋はがらんとしていた。紙切れで散らかった事務机、古びた理工学書がならぶ書棚、折りたたんだシミだらけの布団、電気回路の残骸が山盛りの段ボール箱が一つ。物らしい物といえばそれくらいだ。

老人は机に収まっていたイスに腰かけると、バクたちを畳にすわらせた。

「私は平賀源蔵。お嬢さんの言つとおり、逃亡者だ」

平賀に妻子はなく、自称仕事人間。2016年の大停電当時は電力会社の技術顧問をしていた。パワーショックに入つてしまは本土で配給生活を送っていたが、旧政府が倒れ治安が悪化したことを機に赤ヶ島へ逃亡。事情を話して島人の世話になろうと思つていた矢先、難民を装つた暴徒による例の『離島事件』が各地で起きた。「本土者とわかれれば、もはやなにを言つても命が危うい。私は住む場所に困り、山をさまよつて行こう、この放棄された研究所を見つけたというわけなんだ」

平賀が話をしめぐくると、すかさず昭乃が口を開いた。

「無駄と無駄。同類はよく引きあうというが、本当だな」  
バクは頭にきた。

「爺さんのどこが無駄だ！」

昭乃はため息をついた。

「まったく、出来の悪い生徒だな。そんなに私の補習を受けたいか？」

「悪いが遠慮しとくぜ。頭突きの王者になつても血闘にならないんでな？」

「なんだと！」

立ち上がろうとする昭乃に先んじて、平賀は言つた。

「君の言うとおりだ。私は無駄などころか、存在自体、有害な人間だ。島にとつても、世界にとつてもね」

「そこまでは言つてない」

昭乃はどかっとすわり直した。

と同時にルウ子がすくと立ち上がつた。

「世界にとつても、つて言つたわね。その偉そうな神経はどこから来るのかしら？」「私はこの山に籠もり、パワーショックの原因を考え続けてきた。これは電気の問題だ。世界屈指の電力会社にいた私には、解決する義務があると思つた

「それで？」

平賀はふつと疲れた顔をした。

「四半世紀かけてわかつたことは、ただ一つ。自分はこの世に何一つ影響をあたえられない、ということだけだった」

ルウ子はいつになく穏やかな顔を見せた。

「そんなに落ちこむことないわ。あたしのブレインたちもお手上げだつたから」

平賀は偉そうに語るメガネ少女に怪訝な顔を向けた。

「ルウ子さん、と言つたね。あなたはいつたい……」

「実はあたし、NEXAのトップ張つてんの。ミーヤー！」

「は、はい」

ミーヤは組織の概要を手短に語つた。

「……」

平賀は難しい顔のまま聞き入っていた。

ルウ子は眉を段にした。

「あら、あんまり興味なさそうね」

バクも意外に思った。平賀は時機到来と目を輝かすものとばかり

……。

平賀は低く言った。

「そんな大事なこと、私に話してもよかつたのかね？」

四人は息を凝らした。

バクは老人を睨め上げた。

「あんた、まさか……」

平賀はバクを一警すると、明るく言った。

「それでブツというのは、これのことですかな？」

平賀は作業服のポケットから青いケータイを取り出すと、ぽいと床に放り投げた。すると、ケータイは物理法則を無視して平賀の手もとに舞いもどった。

「パワー・ショックがはじまつたあの晩のことだ。会社に状況を聞くと私はケータイを手にしたのだが、これがうんともすんともいわない。頭にきた私はケータイを床に投げつけた。するとこれだ。無論、停電事件との関わりを疑つた。だが、電気を失つた電気屋はあまりに無力だつた」

「……」

バクは一気に疲れた。てっきり平賀は、ルウ子一味を売る代わりに島民として認めてもらうつもりなのかと思っていた。

一方、ルウ子は老技師との駆け引きを楽しんでいるようだった。

「ところで先生、お歳はいくつ？」

平賀は遠い目をした。

「六十から先はもう忘れてしまった」

「とほけてもダメよ。あたしの見たところ、リアルで九十六、七つてところかしら？ 会社を定年退職して技術顧問になつた。それから数年して急に歳を取らなくなつた。ちがう？」

「な、なぜそれを……」

「そんな怖い顔しなくてもいいわ。あたし、こう見えても2000年生まれよ。んで、原因はコイツらしいの」

ルウ子は懐からケータイを取り出し、広げてみせた。

緊張しているのか、画面の中のアルは写真のように固まっている。

「！」

平賀はガタツと立ち上がった。

「さつそくだけど先生、そのケータイ、起動してもらわよ

「う、うむ」

平賀はルウ子に言われたとおり、自分自身の電話番号を押した。画面に明かりが灯ると、彼は異境の新奇術に狼狽える老賢者のような顔になつた。

「二、こんなことがあつていいのか……」

ケータイが起動すると、ケージの穴から顔を出すマウスの画像が映つた。

マウスの名は二コ。平賀に動物を飼う趣味はなかつたが、友人が勤める研究所を訪ねた際に、箱の中で孤立していた一匹が妙に懐くので、つい持ち帰つてしまつたのだといつ。

「詳しいことは後で話すわ、先生。その前に、ごたーいめーん

ルウ子はアルを、平賀の二コと向きあわせた。

アルはぎこちない笑みを浮かべた。

「や、やあ……二コ」

「運がなかつたわね。転がりこんだところが、マヌケ女のオモチャ

だつたとは」

「二コはがぶりをふつた。

ルウ子の額にびきつと青筋が走つた。

アルは島へやつてきたことについて言い訳をした。

「その……抵抗はしたんだけどね。彼女、口が上手くつて……」

「いいんじやない？ 私は電氣があつたほうが、早く問題が解決し

てくれる気がするわ」「

そこにミーハヤが割りこんだ。

「あ、あの、お取りこみ中のところアレなんだけど、先生が……」

平賀は立ちつくしたまま、真っ白な灰になっていた。

無理もない。ただの遺影にすぎなかつたはずの二口が、いきなり人間の生中継のようにふるまつたのだから。

しばらくして平賀が蘇生すると、バクはこれまでの経緯を語つた。技術畠の平賀は『テスラン』の存在と、科学理論から逸脱した話になかなか納得しなかつた。悩んだ末、彼は暗黒物質を一つの例に挙げた。直接観測はできないが、そこにあるとしなければ辻褄があわないもの。宇宙にはそういう謎が山ほどある。テスランもその類であろう。平賀は自分に言い聞かせるように語つていた。

二口は地属性、つまり地球由来の電気の伝わりを仲介する者たちの代表だ。彼女を起動したことで、長らく続いていたパワーショック時代に幕が下りようとしていた。

平賀は興奮した様子で部屋を飛び出し、階段を駆け下りていった。バクたちも階下へ急いだ。

一階は風力発電の研究室（兼管制室）だつた。フロアの大半は研究区画だ。職員用の机、プロペラ式や垂直軸式風車の模型がならぶ実験台、電力や力学関係の資料が収まつた書棚などがある。官制区画はと、部屋の奥の隅つこの二畳ほどのスペースに、一人用ロッカーのような色形の制御盤と監視用のデスクトップパソコンが一台あるだけ。これで充分だつた。

窓の外では風車の白い羽根が勢いよくまわつてゐる。

平賀はすでに準備を終え、制御盤の前に立つてゐた。

バクたちが見守る中、平賀はスイッチを一つ入れた。

三十年の眠りから目覚めた計器針は、二度三度と身ぶるいして立ち上がつていつた。

「おおお……」

平賀はふるえる手を手で押さえつける。

やがて計器針は右四十五度のあたりで落ち着いた。

風速は十メートル毎秒。出力値が定格に達する。試験運転は成功だ。

ルウ子は壁際に走り、蛍光灯のスイッチを一つ一つ入れていった。

「電気よ！ 電気がもどつてきた！」

手に手を取りはしゃぐ、電化文明世代のルウ子と平賀。

「……」

一方、若い三人は声もなく驚いていた。

太陽やロウソクの炎とはまったくちがう、白々とした光。科学が作り上げた血管に、今、電気という名の血が通つたのだ。

バクはその雪のよくな白さに寒気を覚えた。

試運転を終えると、ルウ子は平賀に声をかけた。

「平賀源蔵。本日付けであなたをNEXAの特別技術顧問に任命します。異存はないわね？」

いきなりの抜擢に平賀は顔をひきつらせた。

「い、いいでしょ。望むところです」

「正式な辞令は本部に帰つてからね」

ルウ子は満足そうに微笑んだ。

平賀はそばにいたバクに耳打ちした。

「君のボスはいつもこんなに唐突なのかね？」

「なんだ。神経回路の長さが他人より短いらしい」「ひたーん！」

ピンクのケー・タイがバクの頬に張りついた。ルウ子が投げつけたのだ。

「な？」

バクは共感を求める。

「なるほど」

平賀は苦笑を返した。

ケータイは空中をふらつきながら、ルウ子の手もとへ帰つていつ

た。

ルウ子がケータイを開くと、アルは前肢でおでこを押さえていた。

「あ、あんまり乱暴に扱わないでくれよ。……」

「念のために聞いとく。ケータイを壊したらあんたたちはどうなるの？」

「ボクらがこの器に閉じこめられたとき、器自身もすっかり性質が変わってしまったみたいだよ。たぶん、爆弾を落としてもびくともしないだろうね」

「ならない」

「よくない！　もの言わぬ機械とはもうちがうんだ！」

「はいはい、悪かつた悪かつた」

ルウ子は面倒くさそうにケータイの背中をさすってやった。

二口を手に入れたバクたちはさっそく本土へ帰ることにした。平賀は荷物を取りに二階の自室へ上がつていった。

バクたちは風車のそばで彼を待つていた。

ルウ子は帰京が待ちきれないのか、今後の構想を一人口にしている。

「やっぱ火力が使えるのは大きい。発電所の整備しといて正解だつたわ。問題は燃料よね。外交が冷え切つてる限り、化石燃料の輸入は期待できないし……。となると、炭坑の再開発が急務ね。なんといつても発電は火力よ」

それまで石油や天然ガスや原子力に頼っていたものを、石炭一手でまかなおうというのだ。発電所一つならともかく、それが全国に広がつたらどのようになるのか。

アルと二口は、ルウ子のケータイ画面を半分に割り、通信で議論を交わしていた。

「ああ、この縁でいっぱいの国が煤だらけになつてしまつよ  
アルはごろんと横になつた。

二口は言った。

「そんないたいしたことないわ」  
アルはむくと頭をもたげた。

「そつかな？」

「自然に任せておけばいいのよ。人間が勝手に自滅する」とも含めてね」

人間に協力的かと思われた二コだが、あれは皮肉だつたようだ。リュックを背にする平賀がケータイ片手にやつてきた。

「耳の痛い話ですな、局長」

平賀は耳の裏をかいた。

「……」

ルウ子は黙つたまま、広場を取り巻く木々の揺らめきを見つめていた。

「局長？」

「ううん。なんでもない」

ルウ子は頭を伏せると、ふつと息をついた。

「ところで昭乃はどうした？」

バクは新しい事実のことで頭がいっぽいで、メンバーがそろつていないことに今ようやく気づいた。

「あれ？」

ミーヤは左右に首をやつた。

「まーつたぐ、いつまで拗ねてんのかしら」

ルウ子は一人、施設の裏手へ足を運んだ。

「……」

昭乃は裏庭で気ままに咲く野花を見つめていた。

ルウ子は両手を腰にあてて言った。

「なーに黄昏れてんのよ。帰るわよ」

「……」

「あたしらを無事帰還させるまでが約束でしょ？」

「なにかを燃やしてまた地球を汚そうとする。作った電気でまたなにかを壊そうとする」

「そういうことはね、電力で食糧危機を救える見通しが立てから議論すべきことよ」

昭乃是キッとルウ子を睨んだ。

「それでは遅い！ 一度ふくらみはじめた人間の欲望は、爆発して、自ら滅ぶまで止まらない」

「将来そうなつたとすれば、それははじめっから人類の宿命だったのよ」

「そつはさせない！ 今ここでおまえを倒せば、歴史を変えられる！」

昭乃是ナイフを抜いた。

「フフ……あんたにあたしは殺せない」ルウ子は丸腰のまま昭乃に歩み寄っていく。「あたしの背中には何億もの命がかかっているもの」

「フン！ 愚か者の命など、いくら集めようと虫一匹にも値しない！」

ルウ子は立ち止まった。

「差別……するわけね？」

「命を助けるためなら、腐った腕は切り落とすだろ？ おまえたちはその腕のほうだ。まずは私が執刀してやる！」

昭乃是ルウ子の胸もとめがけてナイフを突き出した。

達人の早業に、ルウ子は為す術がない。

昭乃是ルウ子を貫いた。

ルウ子はがくと首をたれた。

一筋の風が吹き抜ける。

昭乃是低く言つた。

「今のは最後の警告だ。電気のこととは生涯忘れると誓え。即答なら許す」

「……」

ルウ子はふるえていた。

昭乃是ルウ子の脇の下からナイフを引き抜いた。

ルウ子は顔を上げると、こらえきれずにククと笑った。

「優しいのね。見かけとおんなじで」

「！」

昭乃は真っ赤になつて歯がみし、切つ先をふるわせた。

「どうしたの？　あたしは警告を無視したのよ？」

「人の厚意を！」

昭乃は今度こそとばかりに、持ち手の腕をぐつと引く。と、何者かが昭乃の二の腕を捕まえた。

「隙だらけだな。昭乃らしくないぜ」

「バク！？　止めるな！」

昭乃は腕をぐいと揺する。

バクの手は離れない。

「な！？」昭乃は見張った瞳をそこに向けると、カクと脱力した。

「その力……」

「俺がいきなり超人になつたわけじゃない。昭乃、あんたの問題だ」

「ク……」

昭乃の持ち手が開いていき、ナイフは草間に紛れた。

「俺が知つてゐるモグリの医者は、腐りそなところも最後まで諦めなかつた。その姿を見ていた患者も最後まで病と戦つた。治つた奴はなにかが吹つ切れたように、それまでになく元気になつた。ダメだつた奴も、現実を受け入れて見ちがえるほど強くなつた。今の世の中に肝心なのは、そういうことなんじゃないのか？」

「……」

昭乃は再び腕を揺すつてバクの手を外すと、ざくざくと草むらに向こうへ去つていつた。

バクとルウ子は顔を見あわせた。二人はあえて昭乃を呼び止めなかつた。

NEXAの四人は山を下りた。

港に着くと、一行は シーメイド のデッキに女を一人認めた。

昭乃は帆をいじりながら、しかめつ面で言った。

「なにをぼやぼやしている。さつさと帰らないと連盟に怪しまれるぞ」

9月7日

昭乃は統京の港でバクたちを降ろすと、富谷をめざし一人海路を帰つていった。昭乃は航海中いつさい無駄口をきかなかつたが、別れ際、一つだけ言い残した。

「電気など無いままのほうがよかつた。そう思うときが必ず来る。必ずな」

9月8日

NEXA本部にもどつた一行は、赤ヶ島の調査報告会を開き、そこでアルと二口を紹介した。会議室に集まつた各部門の代表者たちは、人間の力では認識できないという、テスランの存在をなかなか信じようとしなかつた。そこでルウ子は議論の場を、統京の西湾岸にある大品発電所へ移すことにした。百聞は一見にしかずだ。

9月9日

ルウ子はバクとミーヤと平賀を引き連れ、発電所に出向いた。

大品火力発電所。かつては電力会社が管理していたが、今は研究用としてNEXAが所有している。外交回復の見こみは薄いと判断したNEXAは四年の歳月をかけ、この発電所を国内でまかなえる石炭仕様に改造した。あとは電気の源が見つかることを祈るばかり

だつた。

副局長であり電力開発部長でもある孫は、管制棟の玄関で一行を出迎えた。

「発電試験の準備はすでに整っています。ところで、その……」孫は平賀の手もとでたたずむ二口に目をやつた。「そんな小さな器の中に、地上のほとんどすべての電気を操る力が宿っているなど、未だに信じられないのですが……」

「別に信じなくてもいいわよ。そのほうが悩みが少なくてすむわ」二口は赤い瞳を細めた。

「う……」

孫は苦手な食材を前にしたときのような顔つきになつた。

彼もまだ、アルや二口のような非科学的存在を受け入れられないようだ。

「ど、とにかくやってみましょう

三十分後。

所内の照明がいつせいに輝いた。カバンの底で眠っていたu・P<sup>u</sup>o<sup>o</sup>は三十年前のダンスマニアージックをならし、空調はダクトにたまつた埃を吐き出し、資料室に展示してあつた裸のエンジンはうなりをあげた。これまで同じような手順を踏んでも、うんともすんともいわなかつたものばかりだ。

アルと二口が本土にやってきて、世界は一変した。特に地属性二口の人類に対する影響力は計り知れない。火力や水力をはじめとするほとんどすべての発電方式は、二口の如何にかかっているのだ。

ルウ子とアル、平賀と二口は、人の手に負えないほど強い引力で結ばれており、完全にユニット化していた。二組のユニットは、いわばこの世の電気の大元締めである。テスランのふるまいはともかく、見た目上、スイッチ一つですべての電気がオンオフするところは、配電盤の遮断器によく似ていた。

ルウ子はこのユニットを『マスター・ブレイカー』と名づけた。

平賀は技術顧問として二ヵとともに発電所に残ることになった。ルウ子はアルとともに本部へ帰つていった。バクとミーヤは特務研究員の任を解かれ、付き人兼ボディガードとしてルウ子に同行した。

9月21日

平賀源蔵が四半世紀ぶりに本土の土を踏んでから一週間がすぎた。平賀は大品発電所で充実した日々を送つていた。彼の豊富な経験と知識をめぐつて、あちこちの部署で引っ張りだこなのだ。その一方で、彼は連日二ヵの小言を浴びていた。

その日の午後。

平賀は休憩室で一息ついていた。

職員たちは皆忙しいようで、今は二ヵと一人きりだ。

平賀がソファに腰かけるなり、本日の二ヵの小言がはじまった。

「電気なんか作つたつて、愚かな使い道に浪費されるのがオチね」「私の目の黒いうちは、そうはさせんよ」

「あなたはずつと黒いままじやない」

「……」

「？」

「そのことなんだが……」

平賀は立ち上ると、さつと窓を閉め、ドアに鍵をかけ、ソファにすわり直した。

「一つ教えてほしい。私や局長から時を奪つたのは、君たちなのかな？」

「私たちじゃないわ。私たちをこんな風にした、あなたたちでしょ？」

「いつもながら容赦の欠片もないな……」

二ヵたちが能力を獲得したときの副作用なのだろう。平賀はそう

考えていたが、実際のところ、真実は誰にもわからなかつた。

歳を取らなくなつたことは、短い目で見れば喜ばしいことだが、

その先には重大な落とし穴が待つてゐる。

平賀は問わずにはいられなかつた。

「私には、死は許されていないのだろうか？」

「病気をしたことは？」

「パワー・ショック時代に入つてからは、まったく。一度も

「ま、老衰や病死は諦めるにしても、物理的に破壊すればなんだつて死ぬでしょ？」

「それもそうだ」

平賀はほつと一息ついた。

「いつの日か、世の中を知りすぎて心が壊れてしまつても、自分で命日を決められるということだ。ただ、気がかりなことが一つあつた。

「運悪く、私や局長が死んだ場合、君たちはどうなるのだ？」

「スイッチをオフにしたときと同じことが起きるわ。そして、次にケータイを起動した人が、私たちの新たなパートナーになるのよ」

「番号は？」

「そのまま引き継がれるわ」

「なら、誰かに伝えておかなくてはならんな。ええと番号は……あれ？」

平賀は首をかしげ、腕組みした。

「あきれた。自分の電話番号よ？ 私を起<sup>さ</sup>すときの一<sup>度</sup>思い出しうるじゃない」

「若さを永遠に保てるといつても、六十八ではな」

平賀は笑うと、思い出した自分の番号を確實に暗記すべく、何度も紙に書いたり暗唱したりした。

幹部会議が終わり、ルウ子は席を立つた。

会議室の出入口で控えていたバクとミーヤは、すかさずルウ子の両脇を固めた。

ルウ子はぐいっと二人を押しのけた。

「そんなにベタベタされたら、暑苦しいわ」

マスター・ブレイカーの存在を政府に報告するか否かで、会議はいつも増して紛糾した。NEXAが手にした力のスケールがありにも大きすぎて、これから起ころる事の予測がつかないのだ。

バクはルウ子を睨みつけた。

イラついているのはわかるが、こちだつて真剣にやつてるんだ。幹部の連中さえいなければ、囁みついてやるところなんだが……。

ダークな思念に感づいたのか、ルウ子はバクを睨み返した。

ミーヤがそこに割つて入る。

二人が互いにそっぽを向くと、ミーヤはため息をついた。

「こんなときに限つて副局長が欠席だなんてね」

孫は政治や経済、広報面などのこみ入った問題を収める能力に長けていた。

一方、ルウ子は責任感の強さやタフな精神力、達者な口においては組織のトップとして申し分ないものだつたが、実務面では特に優れているわけではなかつた。

孫は発電所で問題が起きたといって会議を急遽欠席した。大きな問題ではないが、部下に任せることはいささか支障があるというのだ。発電所の者がそれをルウ子に直接伝えに来た。電話はまだ復旧していない。新たに導入した本部の無線は、部品の一部に不備があつたらしく、すべて故障していた。

幹部たちが去り、部屋にはバクとミーヤとルウ子の三人だけとなつた。

バクはルウ子に訊いた。

「マスター・ブレイカーのこと、新政府には教えないのか？」

「その前に、独立を考えてるわ」

「独立？ 民間の団体になるってことか？」

「さうよ。手はすでに孫が打つてある」

「……」

「なんでそこまでする必要があるのか、って今思つたでしょ？」

「政治のことはよくわからないな」

「先生と二口が政治家なんかに渡ることになつたらどうなるか……。そういうあんたみたいのを、クソ難しい名前の法律作つて巧みに騙して、自分らだけは権力も豪邸も欲しいままにできるよう、国のシステムを作つていくのよ」

「そんなの、今も昔もたいして変わつてないんじゃないのか？」

「だからよ！」

ルウ子が叫んだとき、会議室の出入口に女が現れた。電力開発部の和藤栄美だ。

ルウ子は言った。

「あら、和藤。発電所の問題は解決したの？」

「万事順調です」

和藤は笑顔で言った。

「で、なにがあつたわけ？ 詳しく説明してちょうだい」

「聞こえませんでしたか？ 私は万事順調だと言つたのです」

和藤は懐から拳銃を抜くと、銃口をルウ子に向けた。

すると、和藤の両脇から戦闘服の男たちがなだれこんで三入を取り囲み、いつせいに銃をかまえた。

それには目もくれず、ルウ子は笑顔を返した。

「ほほーん。謀反つてワケ？」

「いえいえ、ちょっとした人事異動ですよ」

黒光りする銃身。二口の目覚めは発電所だけでなく、長らく沈黙してきた雷管まで蘇らせてしまつたようだ。

ルウ子はわざとらしく辺りを見まわした。

「孫はどこ？ あいつが首謀者でしょうに」

「よくおわかりで」

「そりやわかるわ」ルウ子は笑つた。「あんたを使いによこしたんだから」

「黙りなさい！」

和藤は撃鉄を引いた。

「で、あたしをどうしたいワケ？」

「ケータイの電話番号、教えていただきましょうか。従つていただけるなら、『局長の名において』、命だけは保証しますよ」

「なるほど、そういうこと……」

ルウ子はパズルが解けたと言わんばかりに、何度もとなくうなずいた。

ルウ子と和藤は見つめあつた。

十秒、二十秒、三十秒……。

ルウ子は息一つ乱さない。

一方、和藤は唇の先を次第にひくつかせていった。

和藤が目配せすると、兵隊たちはバクとミーヤの後頭部に銃口を突きつけた。

「選択の余地などないはずよ」

「フフ」

ルウ子は唇の左端をきゅっと上げ、いびつな笑みを浮かべた。部下の命など装甲板ぐらいにしか思っていない非情な司令のことく。

「……」

和藤は銃口をふるわせた。

怒りに任せてトリガーリードを引けば、アルの秘密は永久に闇の中だ。ルウ子はふつと笑みを消した。

「殺したのね？」

「！」和藤は腑に落ちないという顔で銃口を下げた。「本部に缶詰だつたあなたが、なぜそれを……」

「いったいなにがどうなつてんだ！」

バクが怒鳴ると、和藤は平賀と二ゴが交わした密談の要点を語つ

た。

二人の会話はすべて盗聴されていたのだ。

和藤に笑顔がもどつた。

「休憩室を出た後、平賀<sup>せんせい</sup>は自分の犯したミスが世界を脅かしかねないと、機密を口にしたこと自室で反省していたわ。先生はお疲れのようだったから、よく眠れるよう素敵なお香を焚いてあげたそうよ」

バクはようやく事件の展開が読めた。

契約の秘密を知った孫は、平賀をガスで毒殺。パートナーを失つた二口は、自動的にスイッチがオフとなり眠りについた。すかさず、孫は聞いた話の通り二口を起動し、新たな契約を結んだ。本部の無線が壊れるよう手をえたのも、孫と和藤の仕業なのだろう。二人の連絡用だけを残して。

ルウ子は言った。

「二口が先生に話したように、あたしもアルから同じことを聞いたわ。そのときから、いつか誰かがやるんじやないかと心配だった。あたしは先生のピンチを予感していながら多忙に負け、本部へ異動させることを怠った」ルウ子はうなだれた。「あたしの一生の不覚よ」

和藤は言った。

「もう一度だけ言つわ。ケータイの番号を教えなさい」

ルウ子は顔を上げた。

「誰を撃つても同じことよ。あたしの口からはなにも出でこない」和藤は苦笑した。

「さすがは他人の人生を土足で踏み越えてきただけのことはあるわね。ま、番号の件は保留にしておきましょう」和藤はルウ子を指した。「橋本ルウ子。本日をもってあなたを局長の任から解きます。そして引き続き、名誉顧問として私たちの活動を陰からサポートしていただきます」

「まわりくどい言い方はやめなさいよ」

「そうですね。要するに、あなたは予備です」

ルウ子とアルが関わる太陽光発電は、今の段階では未知数だ。資源枯渇などの非常事態に備えて確保しておきたいのだ。

和藤は続けた。

「従つていただけないなら、今度は本当に一人を殺りますよ？」

ルウ子は伏し目でふつと微笑み、そしてソーツとのびをした。

「働きづめだつたから、しばらく休ませてもらひつわ」

和藤は退屈そうにため息をついた。

「孫の言つたとおりの結果になつたわ。それにしても、ずいぶんと丸くなつたものね」

「……」

ルウ子は知らん顔だ。

「せいぜい脳味噌にカビが生えるまで休むといいわ。連れて行きなさい！」

二人の戦闘員がルウ子の腕を取つた。

「待ちなさい！」

爆撃のようなルウ子の一喝に、厳つい男たちはハツと手を放した。

「バクとミーヤの解放が先。下手な真似したら……」

ルウ子はそばにいた男の腰からさつとナイフを奪つと、切つ先を自分の喉もとに向けた。

その据わつた目に、和藤は息を呑んだ。

「い、いいでしょ。二人とも、さつさと出でいきなさい！」

ルウ子は二人に最後の辞令を下した。

「バク、ミーヤ。本日をもつて君たちを、解雇します」

バクは部屋を出る瞬間、ルウ子に一警をくれた。ルウ子は敵に捕まつたというのに、なぜか肩の荷が下りてほつとしたような、場違いな表情をしていた。地下の狩人が現役を退くとき、よくそういう顔をしたものだ。バクはそれが気がかりでならなかつた。

はあってもなくうろついていた。壁の高さは十メートルほどあり、道路の向こう端へ寄らないと内部の様子はほとんどわからない。

「クソ！」

「バクは壁を蹴った。

「バク……」

ミーヤはバクの一の腕をそつとつかんだ。

「ルウ子の仕事がこれからってときに、孫の野郎、なにを企んでやがる……」

「儲けを独り占めにする気かな？」

「……」

バクは長大な城壁の向かいに立ちならぶ、朽ちかけたビルの一つに目をやっていた。

「どうしたの？」

「走れ！」

バクはミーヤの手を引くと、近くの路地へ駆けこんだ。

間一髪、バクが蹴ったばかりの壁に矢があたつて跳ね返った。

二人はでたらめにひた走り、ビルのすき間を縫つていった。

追つ手や待ち伏せはなかつた。敵は一人のようだ。

バクは見通しの悪い路地に入ると足を止め、壁にどつともたれかかつた。

「ハアハア……危なかつた」

ミーヤは両膝に手を置き、肩で息をしている。

「ハアハア……武警かな？」

「ちがうな。俺たちはもう地下賊じやない。これでも三十分前まではNEXAの職員だつたんだ」

「じゃあいつたい……アツ！」

ミーヤが路地の奥を指すと、バクはそちらに顔を向けた。

それまで誰もいなかつた袋小路に、黒ずくめの大男が立つていた。袋小路を作っている三方の廃墟を含め、この界隈は高いビルが密集している。見つかるはずは……。

バクは視線を上げていった。

屋上からだと！？

バクはさつと身を起こしてミーヤをかばうように立った。黒ずくめは腰の左右からナイフを引き抜いた。

この男……どこかで……。

バクの脳裏に一年前の記憶が駆けめぐつた。

「あ！ あんたは……」バクは男を指した。「俺とニッキを狙い撃ちした……」

ミーヤはバクの脇へ進むと、怒りに声をふるわせた。

「未来ある子供たちを……お腹に赤ちゃん……いる子だつていたのに

バクはまつむき、拳をぐつと握った。

「そうか……せんせい百草が言つてたのは、こいつのことだったのか

男は冷えた溶岩のようだつた表情をかすかに崩した。

「今は後悔している。賊狩りはもう、一度とやらん」

「なら、それはなんの冗談だ」

バクは男の手もとに向けて顎をしゃくつた。

「……」

男はじれつたいほどゆつくりと、ナイフを鞘に収めていった。眉間に幾筋もの溝が走る。淀んでいた瞳が揺らぎ、淀み、揺らぎ、そしてまた淀んだ。刃が半分収まつたところで男は手を止めた。

「すまん」

男は二刃を放った。

バクとミーヤは動けなかつた。男の迷いが災いした。と、ここでバクの時間感覚がいきなり何百倍にも延びた。ナイフは少しづつ、だが確実に迫つてくる。

ちくしょう！ せめてミーヤだけでも……。

気持ちだけは百万回身を挺したのだが、手足にかかる重力は百億倍だつた。

諦めかけたそのとき、バクの脇をにゅつと草色の影がすり抜け、

視界の前方へ割りこんでいった。影はやがて人の形となり、敵の姿を遮つた。

と、ここで現実の流れにもどつた。

「お、おまえは……」

男の顔を覆つていた溶岩に亀裂が走つた。

つぎはぎ迷彩服の女は、左右の指先だけでナイフを受け止めていた。

バクは思わず叫んだ。

「昭乃！」

ミーヤが続く。

「どうしてここに？」

昭乃は一人を背にしたまま言った。

「おどといのことだ。石林の中でひと際高くそびえる塔に、黒い稻妻が落ちる夢を見た。それがどうしても忘れられず、偵察に来てみたらこれだ」

「昭乃……綺麗になつた」

男は昭乃のことを、身内を懷かしむような目で見つめている。

昭乃の目つきは、繩張りを見まわる鷹から、物憂げな少女へと変わつていった。

「熊楠<sup>くまくす</sup>先生。なぜ黙つて出て行つたのですか――どうしてこんな人殺しの仕事なんか……」

「今語ることはなにもない」

「先生――」

「……」

「どうしても話していただけないのですか？」

「……」

「言葉がダメなら……」

先ほど受け止めたナイフを両手に、昭乃は胸もとでさうと腕を交わすと、地を蹴つた。

銀光の対が男の首をはねようとしたとき、男は女の持ち手にひた

と手を触れた。

一刃は空を舞つて地に墜ちた。

女はハツとして飛び退く。

熊楠は大喝した。

「自惚れるな！」

「ク……」

昭乃は傷ついた顔になった。

「おまえの命はもう、おまえだけのものではない。私のことはかまうな。それから、既に一つ忠告しておぐ。ＺＥＸＡには……一度と関わるな」

熊楠は高く飛び上ると、窓枠のわずかな出っ張りを伝い、あつという間にビルの屋上へ躍り出た。

「先生！ 私、本当は……」

熊楠の姿はすでになかった。

昭乃は天を仰いだまま、枯れ木のようになってしまった。乾いた風が路地へと吹きこむ。壊れた窓、崩れた壁、すき間とうすき間が共鳴しかし、不気味なオーケストラを奏ではじめた。バクは少しためらつてから昭乃に声をかけた。

「その……また借りができちまつたな」

「……」

昭乃は小さく首を横にふるだけだ。

彼女の頭の中は今、再会の喜びと、変わり果てた師への戸惑いと、砕かれた自信のことでいっぱいなのだろう。

昭乃はため息をついた。それを境に、いつも警備隊長の顔になつた。

「私とおまえとはなにか因縁があるようだ

「『因』は余計だろ？」

「そう思わせたいのなら、村でしつかり働くんだな」

「え？ だつて俺は……」

「私にあたえられた暇はあと半日しかない。遅れるな！」

昭乃は路地を駆けた。

仲間も住処も失つてしまつたのだから、一も二もない。バクとミーヤは、疾風船<sup>はやぶね</sup>が放つた浮き輪にしがみつくしかなかつた。

## 第五章 救出作戦

2046年1月15日

NEXAの局長更迭から四ヶ月。

ルウ子はある廃刑務所に囚われていた。ルウ子の独房は、伝染病患者用の隔離小屋の一室で、本舎からは離れた森の縁の草深いところにあった。

コンクリートの壁。頑丈な鋼鉄扉と鉄格子。傭兵隊による二十四時間体制の見張り。

脱獄を諦めたのか秘策を練っているのか、獄中のルウ子は見張りに不気味がられるほど大人しかった。口数はほとんどなく、一日中粗末なベッドに寝転がって、鉄格子越しの冬空あるいは灰色の天井ばかり見ていた。

この日もルウ子はいつも通り、昼間から寝床に横たわっていた。

「ああ退屈」

画面の中のアルはルウ子の眼前で大あくびした。

「……」

ルウ子は人形のように無反応だ。

「そんなんじゃ、いざつてときに動けないよ？」

「……」

「たまには絡んでくれよ」

「……」

「まだ、あの和藤とかいう女の言つたこと、気にしてるのかい？」

「！」

ルウ子の目がようやくアルの方へ流れた。

「……よかつたじやないですか。電氣復活の夢が叶い、なつかつその身が人様の役にたつのですから本望でしょう？ あなたはここで

過ちの記憶に苛まれながら、NEXAとわが国を陰から永遠に支え続ける。それがあなたに課せられた真の償いなのです。では、『きげんよ』。（鉄扉の閉まる音）……

「あいつの言ったとおりよ。あたしはこうこう機会を待っていたのかもしれない」

ルウ子はいつしか、悟りきつた僧のよつた顔になつていた。

「本当にそれでいいのかい？ この国は結構ヤバイ道を行こうとしてるよ。欲望の種が一点に集まつたようなものだからね」

「……」

「神様が自分にあたえた役目はもう果たしたから、後のこととは知つたこつちやないつてワケかい？」

「……」

「また、だんまりか。困った人だ」

アルが再びあぐびをしようと大口を開きかけると、「ふえつくしょ！」と、それはくしゃみに変わり、口の中から紙切れが一枚飛び出した。

アルは引力のある肉球で二つ折りの紙を開いた。

「あ、二口からメールだ。なになに？ 孫の恐るべき構想を耳にした。この男は日本の電力網を復活させた後、海外から見捨てられていることを逆に利用して、世界で唯一の科学大国に発展させようとしている」アルは目を細めた。「フフン。なんだかんだいつて、気にかけてるんじゃないか」

興味を誘つたのか、ルウ子は再び沈黙を破つた。

「そういうこと……臆病者のあいつらしい復讐ね」

「復讐？ なんでまた……」

「あいつがなんで左腕をなくしたか、知りたい？」

「ぜひ知りたいね」

「……」

「やつぱやめとくわ

「……」

「ええーーっ！」

ルウ子は物憂げなお嬢様風に言った。

「今日はお話したくない気分なの」

「なにが『今日は』だよ。最近じゃあ珍しく口きいたクセに」

ルウ子はあっさり演技を止めた。

「チッ……しようがないわね。あいつは栄養失調の母親を食わせるために、自分で自分の腕を切り落とした。看病もむなしく、母親は死んじやつたけどね。以上」

「それだけ？ いつ、どこで、どうこう状況でそうなったのか、とか……」

「それだけ知つてれば充分よ」

アルは食い下がつた。

「母親が飢え死にしたくらいで、あんな大それたことを企むとは思えないな！」

「じゃあ、一人っ子の母子家庭だったとしたら？」

「そりやまあ、唯一の身内を亡くしたのは辛いだろうけど……」

アルはまだ不満そうだ。

「その飢餓を生んだ原因が海外にあつたとしたら？」

「む……」

「混乱の時代を生き抜き、新政府の外務省に入つたあいつは、わが国の飢餓に関する真実を知つた。たしかに当時の世界は、自国の混乱を治めるのに必死だつたけど、大陸内での相互援助はあつた。それに対し、日本はかつての友好国にさえ徹底的に無視される始末だつた」

「ま、食べ物も資源もない島国じゃあ、存在するだけ無駄つて感じかね」

「どんなに努力を重ねても外交は通じる気配すらなく、わが国は世界地図から消えたも同然だつた。旧態依然の現政府を廢したとしても、国内だけでのやりくりには限界がある。もはや政治ではこの地獄を覆すことはできない。そう悟つたあいつは、ふらふらと科学省

のあたしのデスクへやつてきた。『この前はトンデモ構想だとバカにして悪かった。もう一度はじめから、君の話を聞かせてくれないか』って、一年先輩のあいつは深々と頭を下げたのよ。で、NEXAが起ち上がつたつてワケなんだけど……あれ？ あ、だから、もし海外からの食料援助が少しでもあつたら、あいつの母親は生きのびたかもしれないってことよ』

ルウ子は話していくうちにだんだんと熱が入り、いつの間にか余計なことまでしゃべつていた。

「改めて聞くよ。ルウ子はこの先、どうしたい？」

「気が変わったわ。償いのかたちは他にもあるはず。まずは、ここをどうやって出るか考えるのよ」

1月16日

バクとミーヤは、昭乃の計らいによつて、富谷コノコーティーで暮らすことになった。バクは牧場の仕事、ミーヤは食料庫の管理に就いた。

昭乃がなぜ二人を誘つたのか、長老衆がなぜ入村をとがめなかつたのか、疑問は尽きなかつた。外界であつたことを特定の村人以外には語るな、という条件をつけてきたところをみると、俗世間の生きた資料として利用価値があると考えてているだけはたしかなようだ。パワーショックが終わり、時代は大きく変わろうとしている。長らく文明を遠ざけてきた彼らも、今度ばかりは敏感にならざるを得ないのだろう。

その日の夜。バクたちは宿舎の談話室に集まり、三人だけで薪ストーブを囲んだ。

NEXAから逃れてきて以来、バクは囚われたルウ子のことをずっと気に病んでいた。

バクはなんとしてもルウ子を助けたいと、一人熱弁をふるつた。

「ルウ子はあんな性格だが芯は曲がってない。正しいレールに乗せる」とさえできれば、この国を救える逸材の一人だと俺は思つ

「……」

昭乃は黙つたままストーブの鉄蓋を開け、薪を足した。

空気の爆ぜる音。

ミーヤは言った。

「でも、どうやつて助けるの？ どこにいるかもわからないのに」「探すんだ」

「どこを？」

「日本中を」

「バク……」

ミーヤは駄々つ子に困り果てたような目でバクを見つめた。

「新生NEXAが手にした力はとてつもなく大きい。その気になれば、天下を取ることだって夢じやない。連中の企みを挫こうとするなら、ルウ子のようなりーダーシップは欠かせないはずだ」

「そうだとしても、闇雲に動いたつて奴らの兵隊に捕まるだけだよ」「……」

バクは口をつぐんだ。

ミーヤの言うとおりだつた。それにしても……。

バクはちらと昭乃を見た。

宿敵ルウ子の話題だというのに、昭乃はただ、炎の揺らめきを見つめるばかりだ。

近頃の昭乃はらしくない行動が目立つ。自主トレをサボつているのか、筋肉が痩せ、体が一回り小さくなつたように感じる。道場では、筋がいいとはいまだ十四の少女に危うく敗れそうになつた。それも同じ相手に三度もだ。警備の交代時間に遅刻することもしばしばあつた。たとえルウ子の居所がわかつたとしても、昭乃がかつての精彩を取りもどしてくれない限り、NEXAの傭兵には太刀打ちできそうにない。

バクは頭を抱えた。ふとミーヤを見た。目があった。一つ手を思いついた。

「あ！」

「え？ な、なに？」

「どぎまぎするミーヤ。」

バクはそれに答えず、昭乃にふつた。

「昭乃。一つ頼みがある」

「……？」

昭乃は虚ろな目をバクへ流した。

「明日からミーヤを鍛えてくれないか？ あなたの補佐として

「ミーヤを？」

昭乃は眉をひそめた。

富谷の警備隊は以前より数がそろひづになつたが、実質的な指揮官は相変わらず昭乃一人だった。隊員たちは忠実だが、監督者は向いていない（それは昭乃もこつそり認めていた）。隊の実力を維持するには、昭乃に次ぐ指揮官を最低でも一人は育てる必要がある。というのがバクの主張だ。

昭乃のスランプ。原因はよくわからないが、少なくとも過労気味であることはたしかだつた。昭乃が立ち直つてくれない限り、味方に引き入れるも救出作戦もクソもない。

ミーヤはバクと目があうと、コクとうなずいた。

「昭乃さんが欲しいっていうならあたし、やってみます」

「まあ、ミーヤならいい線行くとは思うが……」

昭乃はあまり乗り気ではないようだ。それでも自分のバックアップはやはり必要と感じたのだろう。のそと立ち上ると、ミーヤに告げた。

「明朝六時、富谷関堤上。遅れるなよ」

昭乃は重い足どりで部屋を出ていった。

2月3日

今後、三ヶ月に一度実施するという定期検診。その初回の日がやつてきた。

まめな検診といい、栄養バランスを考え抜いた食事といい、鉄壁の監視体制といい、ルウ子はある意味、絶滅危惧種並の扱いを受けていた。

錠が外れる音がして鋼鉄の扉が開くと、トランクと折りたたみイスを携えた、白衣の男が入ってきた。白髪混じりの頬鬚。足が悪いのか片足を少し引きずっている。医師はトランクから聴診器を取り出し、イスを広げると、ベッドにすわるルウ子の正面に腰かけた。簡単な問診を終えると、上の着衣を脱ぐように言った。

ルウ子がシャツを脱ぎ捨て、ブラのホックに手をかけたときだつた。

医師はさつとふり返り、鉄扉に開いた小さな穴を睨みつけた。

「これでは患者が緊張して正確な診断ができない！ 窓を閉めたまえ！」

小窓の蓋がパツと閉まった。

医師は鉄扉の小窓と鉄格子つきの窓にガーゼを貼りつけると、それぞのそばに一つずつ、小さなオーディオスピーカーのようなものを置き、ルウ子に微笑みかけた。

「ノイズキャンセラーですよ。三十年前の代物ですがね。周波数は人の声にあわせてあります、万能とは言えませんの……」

医師は人差し指を口にあてると、再びイスに腰かけた。そして、今一度ルウ子の傷痕だらけの体を眺めると、小さくうつなつた。

「これはまた……」

聴診が滞りなく終わると、医師は水銀式の血圧計を用意した。ルウ子は裸のまま左腕を差し出す。

医師は怪訝な顔をした。

「もう着てもいいんですよ？」

「あ、そうなの？」

ルウ子は面倒くさそうに「ブラだけをつけ、改めて腕をのばした。

「……」

医師はさりに言いかけたが、変わり者なのだと諦めたのか、そのまま患者の二の腕にカフを巻きつけた。聴診器を肘窩わざわに置き、ゴム嚢をスコスコやると、ルウ子はちょっとだけつゝとりした。

測定が終わると、医師はたわいもない世間話をはじめた。話はすぐには脱線し、彼は自分のことを語った。

「実を言つと私、以前は賊や難民たちの中で仕事をしていたんですよ。ただ、その、どうも私は疫病神のようでした。流れ着いた先々で診療所を開くと、決まって数年もしないうちにその地が滅んでしまふんです。そして私は放浪をくり返すばかり。だが、本物の神様は私を見放しはしなかつた。河川敷のバラック街が強制撤去となり、その跡地で一人途方に暮れていたところ、ある若い女性が声をかけてくれたんです。渡された名刺には、NEXAの人事部とありますた」

「人事部……」

「戸籍の復活を保証するから専属の医師をやって欲しい、といふので私は二つ返事で応じました」

「まさか蚩のやつ……」

ルウ子はつぶやいた。

「？」

「ところで先生」ルウ子は半裸のまま医師の顔をじっと見つめた。

「さつきから気になつてたんだけど、あたしらどつかで一度会つたことない？」

「はて……私はこれまで何万という人を診てきましたからね……」

医師はルウ子の凝視に耐えかねたように視線を落としていき、「む

……これは」と眉をひそめた。

「うん？ ああこれ？」ルウ子は腹の傷痕に手を触れた。「昔、包丁でやられたのよ。因果応報つてやつね。出血がひどくてもうダメ

つてとき、胡散くさそうな白衣の男があたしをちらつてつたの「驚いたな。この術痕は……」医師は指先でそこをなぞつた。「私のだ」「え？」

「そうか、あのときの……」

「じゃあ、先生はあのときの……」

医師は苦笑した。

「その胡散くさい男は私だよ。うん？ ちょっと待てよ？」医師は笑みを消すと、ルウ子の幼顔をまじまじと見つめだした。「たしか、君はそのとき高校生くらいだったはず……」

「……」

ルウ子はぎこちない手つきでシャツの袖に腕を通すと、のそのそとボタンをかけていった。

「まいったな……」医師は目頭に手をやつた。「患者をまちがえるなんて、私もモウロクしたものだ」

「別れ際、先生は言ったわ。君は悪くないって

「！」

医師は手をどけ、眼をかつ開いた。

「ハンパな意識の中で一度顔を見ただけ。名前も聞きそびれた。会いたくても探しよがなかつたわ」

「そ、それじゃあやつぱり……いや、でも、それなら君は今、四交代のはず……」

「実はね……」

ルウ子はケー タイを開くと、アルを医師に紹介し、加齢が止まつたことの経緯を語つた。

医師は頬鬚をさすりながら、片時もアルから目を離さうとしない。「そ、その……AIプログラム、ではないんだよね？ 君はアルは田を細めた。

「ま、疑いたくなるのも無理はないよ。君らにとつては、サンタクロースの実在を信じると言つてるようなもんだからねえ」

ケータイに宿つた精霊モドキ。永遠の少女。

医師はそれらを交互に見つめ、そして微笑んだ。

「今年の暮れからまた、大きめの靴下を一つ用意しなければならんようだ」医師はそこでハツとして膝を打つた。「そうだ名前……。

百草だ。百草林太郎」

「橋本ルウ子よ」

「知つているとも。世に出回つてゐる『真とちがつていたから一瞬、おや、とは思つたんだが……』

ルウ子は一度少年のような短い黒髪になつたが、あれから少しのびて、今はできやしないのプリンのようだ。

「いや、もつとも、あの独特の竜巻ヘアーを何度も目にしてもおきながら、自分の患者だと気づかないなんて……常識とか先入観つてやつはまつたく……」

百草は頭をかいた。

ルウ子はむつとして言つた。

「竜巻つて……バクみたいなこと言わないでくれる？ いつくら注意しても聞かないんだからあいつは」

百草は身を乗り出した。

「バクだつて！？ バクを知つているのか？」

「あら、知りあいだつた？ ちょっと前、地下賊上がりの子供を拾つたのよ。バクとミーヤ」

「そうか……生きてたか。そうかそうか……」

百草は目尻を皺だらけにして何度もうなづいた。

「ちょうどよかつたわ、先生。一つ、お願ひしたいことがあるの」

ルウ子は百草に耳打ちした。

百草は話が進むにつれて眉間の谷を深くしていき、やがて出発前夜の宇宙飛行士のような顔でため息をついた……かと思いきや、一転して派手な苦笑いを見せると、うなじをぼりぼりかいた。

「いや、まいったなあ。やつと定職を得たと思つたんだが……」

「無理にとは言わないわ。下手をすれば命はない」

「いいや。是非やらせていただくよ

「おい、いつまで待たせる気だ！」

男の籠もつた怒鳴り声。

百草は立つた。

ルウ子も立つた。

「先生……」

ルウ子は百草の胸もとに頬を寄せた。

百草はにっこり笑うと、ルウ子の頭をそつと撫でた。

5月10日

富谷では山藤の花が満開を迎えるとしていた。その矢先にどつと雪が降り積もり、農民たちは天を仰いだ。電化文明が遺した環境破壊の爪跡は薄れるどころか、逆に白く冷たい膿を出しはじめている。

昭乃のもとで修行していたミーヤは先月、十六歳を迎えた。武術の腕はまだまだ頼りないが、指揮官としての早成ぶりには目を見張るべきものがあった。地下時代にチームの軍師的役割を担っていた経験が生きたのだ。地下人の狩りは、地上人、武警、敵対する賊、刻々と変化する街の状況に対応しなければならない。また、規律を嫌う荒っぽい少年少女たちを説き伏せる必要もあった。要害の内側でぬくぬくと育った連中を動かすことなど、ミーヤにとつては造作もないことだつた。

昭乃は指導をはじめてわずか四ヶ月で、ミーヤを副隊長に任じた。

その日、富谷関下にボロを纏つた醜い男が現れた。手足は使い古しの針金のように細曲がり、頭の半白髪はまだらに脱け落ちている。男はバクかミーヤがそこにいたら呼び出して欲しいと言つている。堤上にいた昭乃は男を警戒した。

「『また』地下賊の難民か？」

昭乃が警備隊に入る前のある日、富谷の守人たちは、元地下賊を名乗る難民の一団と対峙した。富谷側は掟を理由に受け入れを拒否。その後に起こった悲惨な事件は、村人たちの間で今でも語り草となつていて。

昭乃は人知れずつぶやいた。

「あんなことさえなれば、あの人は……」かぶりをふる。「もうすぎたことだ」

当時の難民は狩人としての誇りを捨て、そろつて土下座までする有様だった。だが、今度のボロは気迫がちがう。棺桶に片足突つこんでいるくせに、眼光だけは異様な輝きを放つていて。

昭乃は迷つた。ひとまず副官のミーヤを呼ぶことにした。  
あのボロを追い払えば、私はきっと後悔する。男を見たときからそんな予感があった。

十分後。

堤上に現れたミーヤは男を見るなり、ぱっくり開けた口を両手で押さえた。

「も、百草先生！？」

「……」

ミーヤの姿を認めた百草は、微笑みながらにかつぶやくと、その顔を保つたまま雪の上にどうと倒れた。

5月17日

黄泉の国へ通じる跳ね橋。

男はその手前にいた。一步踏み出す。

橋は目にも止まぬ早さでせり上がった。

男は口を開きかけた。

今度は来た道がすべり台のように傾斜していった。

男は這いつくばつてそれに耐えた。

傾斜はどんどん増し、垂直に近づいていった。

それでも男は耐えた。

女たちのため息が聞こえた。

男がハツと顔を上げると、視界はいきなり一つの右足の裏でいっぱいになつた。

男は悲鳴をあげながら、光の原へすべり落ちていった。

バクとミーヤは、百草が一週間ぶりに目覚めたと知ると、さつそく病床小屋へ駆けつけた。

百草はベッドで横になつたまま、かすれた声で言つた。

「ルウ子君の監禁場所を教える」

「な!? なんで先生がそれを……」

バクが言いかけると、百草は遮つた。

「その話は後だ」

ルウ子のいる刑務所は、統京湾をはさんだ対岸の半島にあつた。見た目には山林に埋もれた廃墟でしかないが、そこらじゅうに武装した精銳が潜んでおり、正攻法での救出は極めて難しいとのこと。

「なんでそんなヘンピな所なんかに……」

「一つは、NEXAの秘密を探る者の裏をかくためだらつ」

「もう一つは?」

「形としてはルウ子君は『重病による長期療養のため、局長の座を孫に譲つた』ことになつてゐる。だが、局長が替わつたといつても、職員の多くはそのままだ。生半可な隠し場所では、ルウ子君との接触を許す恐れがある」

「ルウ子が突然いなくなつた理由、誰も疑つてないのか?」<sup>わけ</sup>

「そこまではわからんが、不穏な動きがないところをみると……」「消された?」

「おそらくな」

孫のやり方に異を唱える者は、いずれ同じ運命をたどるのだろう。

そうしてNEXAは、孫の野心を叶える道具としての純度を高めていくのだ。

「なるほど。連中の事情はともかく、相手が少數精銳つてことなら」  
「こっちには好都合かもな」

「ほう？ その心は？」

「富谷にはシヤチみたに凶暴な女がいてさ」

そのとき、バクの頭上に燃えさかる隕石が落ちた。

「あれ、仕事じゃなかつ……」

バクは頭を抱えたままその場にダウンした。

昭乃は言った。

「続けてくれ」

百草はうなずくと、ルウ子から聞いた孫の陰謀を語った。

昭乃は一瞬拳を固くしたもの、環境破壊者に見せるいつもの露骨な怒りは鳴りをひそめていた。

百草は最後に一、二口からの最新情報をつけ加えた。

「NEXAは別の場所に新しい独房を準備している。それは爆撃さえも通じない、核シェルターのようなものらしい」

完成予定日は今月の末。あと一週間しかない。

バクは言った。

「昭乃、助けに行こ」

昭乃は冷たい目をバクへ流した。

「なぜ？」

「なぜって……」

しまった。昭乃を復調させること一本に心を碎いてきたせいで、まだそこまで頭がまわっていなかつた。

バクは歯切れ悪く言った。

「立場や思想はちがうが、志は同じ、つていうのじゃダメか？」「志？」

「さつきの話、孫の企みを聞いてあんたはどう思つた？」

「……」

昭乃は首をかしげる。

「聞いてなかつたのか？」

「そんなことはない」

さつきから昭乃は呼びかけに反応するだけで、自分からはなにも言ひ出そつとしていない。

イラついていたバクは声を荒げた。

「どうしたつてんだ！」 昭乃

「……」

「孫の帝国ができあがつていぐのを黙つて見ていろつもりか？」

「……」

「「」の国を科学の塊にしてしまつてもいいのか？」

「……」

「次の世紀には、森や野原つて言葉はもつ辞書にないかもな」

「……」

「なんとか言えよ！」

「仕事にもどる」

昭乃は足音一つ立てず、すりつゝと部屋を出でていった。

その重力を感じさせない動きに、バクは言葉を継ぐことができなかつた。

一方、ミーヤは百草の容態を心配していた。

「ところで、先生はなぜそんなひどい目に？」

「ああ、それは……」

百草がルウ子を検診したのは一月。なにもなれば数日で行けるところを、実に三ヶ月も要してしまつたのは、ルウ子と接触した百草に厳しい監視がついたからだつた。百草は一瞬の隙を見て監視の目を逃れると、真冬の野山で凍え死にそうになりながらも、ときには鹿のように逃げ隠れ、ときには狐のように食いつなぎ、関東を大回りしてきたのだった。逃走の失敗は世界の絶望を意味する。百草の気力を支えていたのはその一心だった。百草が迷うことなく富谷へやつってきたのは、NEXAをクビになつたバクたちは必ず昭乃を

頼るだらう、ヒルウ子が予言したからだつた。

百草の話を聞いていたバクはミーヤに言つた。

「先生の苦労を水の泡にはしたくない。俺たちでなんとかするぞ」

5月18日

夜明け前。

バクとミーヤはこつそり宿舎を抜け出し、取水塔跡へ足を運んだ。ずっと前に塔が崩れて環状列石のようになつた場所。その中心に剥き出しどなつた取水口があつた。管の真ん中に昇降用の丸太が突き出でている。

バクとミーヤはうなずきあつた。

バクが丸太に飛び移ろうとしたとき、背後から声があつた。

「おまえたちごときでは、百人そろえたつて犬死にだ。私が行く」木陰から出でくる昭乃を、月明かりが照らした。

バクは言つた。

「どういう風の吹きまわしだ」

「せめて森や野原という言葉くらいは後世に残したい。そういうことだ」

本氣で言つているとは思えないが、本氣で動くつもりはあるようだ。動機はともかく、そのすば抜けた戦闘力を取りもどしたのなら救出のチャンスはある。

「この借りは必ず返す」

「気にするな。あの女には言い足りないことが山ほどあるからな

「と、言いたいところだが

「？」

「一人じゃあ行かせないぜ」

バクは取水口を背に両手を広げた。

「足枷がつくのはゴメンだ。一人とも帰つて寝ていろ

昭乃はバクをどかそうと手をのばした。

バクは踏ん張った。

「いいや。あんたがちゃんと作戦を全うするか、見届けないとな」「どういう意味だ」

「今のあんたは壊れかけの筏さ。潮の流れ次第で、どこに消えるかわかったもんじゃない」「フン。私もナメられたものだ」

バクと昭乃の睨みあいはしばらく続いた。

昭乃はふつと息をついた。

「しかたない。おまえが捷の厳しさに耐えきれず、脱走したことにしてよう。私は二日でもどるとミーヤに告げ、おまえを捕まえに追いかける。そういう手筈でいいな?」

「なるほど……いいだろ?」

バクは昭乃の策に乗った。

昭乃ほどの人物が無断外出するには、それに見あつ事後報告が必要だ。昭乃にとつてバクは、戦力にはならずとも口実のいい材料にはなる。それにミーヤを残していけば、富谷の守りがガタ落ちする心配もない。

バクは念のためミーヤにたしかめた。

「それで、いいよな?」

ミーヤは小さくうなずいたものの、暗い顔でうつむいた。

「でも……」「でも?」「でも?」

ミーヤはバクの両手を取つた。

昭乃はさつさと丸太に飛び移り、取水管を降りていった。

ミーヤは黙つたまま、なかなか手を放そうとしない。

「行かないと」

バクは小さな手をそつと解いていき、昭乃に続いた。

バクと昭乃は川沿いの道を歩いて下り、やがて河口に出ると、近

くの小さな漁港に足を向けた。桟橋に見覚えのあるワットがあつた。

シーメイド 号……バクたちが赤ヶ島へ行つたときの船だ。

ルウ子は港の対岸に見える小さな半島の山中に囚われている。陸路ではかなりの遠まわりになる。無敵独房の完成まで時間がない。

バクと昭乃是迷うことなくワットに乗りこんだ。

桟橋を離れたのはいいが、いつこうに港が小さくならない。

バクは反りのない帆を見たり、黒板のように平らな海を見たりと、落ち着きがなかつた。

昭乃是灰色の空を見上げて低く言った。

「すわつていろ。半刻も待てば動く」

バクは艇長スキッパの指示に従い、昭乃の向かいに腰かけた。

風が吹くまでやることがなく、バクは思いを巡らせた。

昭乃是なぜ、敵同然のルウ子のために命を懸ける気になつたのか。真の敵は別にあると理屈ではわかつてゐるはすだが、あの気性がそつ簡単に変わるとは思えない。

バクはどうしても訊きたくなつた。

「昭乃……富谷を出た本当の理由はなんだ？」

「……」

昭乃是湾岸一帯をぼうつと見つめている。

「ルウ子を助けたいわけじやないんだろ？」

「……」

バクは昭乃の横顔を見つめた。

ふとした瞬間に見せる寂しそうな顔。大地に身を委ねるおおらかな人々の中につてそれは、白衣についた油染みのように田んぼくものだつた。

バクは昭乃と再会して以来、あえて触れずにいたその名を口にした。

「熊楠……つて奴のことか？」

「……」昭乃是ウツと息を呑んだが、すぐに苦笑を見せた。「おまえ

『』ときが氣づいたのなら、隠している意味はもうないな

「……」

バクは口をキッと結び、侮辱に耐えた。

昭乃は熊楠にまつわる過去を語った。

「熊楠一摩は天才だつた。弱冠二十一にして十余の武術を究め、中でも『千載一弓』といわれた彼の弓は、『あの男が生きている間に富谷に近づこうとするような奴は、なにも知らないか、そうでなければただのバカだ』と賊の頭目どもに言わしめるほどだつた。

私は彼の道場ができたその年、七つで弟子入りした。病気がちだつた体を鍛えるだけのつもりが、十年たつてみると、私の稽古相手はもう師範である彼しかいなくなつていた。彼は『私を越えてみせろ』と、さらなる鍛錬を課した。私はそんなことより、二人で気持ちよく稽古できる日々がずっと続いてくれれば、それでよかつた頬をかすかに赤らめる昭乃。

なぜかバクも顔が熱くなつた。

「要するにその……稽古とか関係ないんだろ？」

「それに気づいたときはもう、彼はどこにもいなかつた

「……」

「私が十七になつて間もないある日のことだ。彼が富谷関で下界を見張つていると、ボロを纏つた一団が近づいてきた。元地下賊を名乗る難民だつた。地域の抗争に敗れ、飢え果てるのを待つしかなかつたところに、この地の噂を聞きつけ、最後の望みをかけてやってきたのだという。

彼は難民の苦惱を憐れみ、長老衆にかけあうべきか迷つていた。よく見ると、難民の半数は年端もいかない子供で、うち数人は餓死寸前だつた。なによりも子供が好きだつた彼は感傷的になり、長老衆を強引に集めて話しあつた。長老衆は自然と共生する社会の脆さを説いた。生態系を守りたければ許容人口も守らなねばならない。正論だ。彼は『せめて子供たちだけでも』と切り返した。長は首を横にふつた。『一度でも前例を作つてしまえば掟の意義が薄れる。耐えてくれ』と。彼はそれでもしつこく食い下がつた。長は事を收

めるべく、彼に対し、外部との接触を固く禁じた。

彼は長の監視のもと、谷底の川辺で次々と餓死していく子供をただ見ていることしかできなかつた。最後の子の死を見届けたその日、彼は密偵から報告を受けた。飢えに耐えかねた難民たちが、最初で最後の戦いを挑もうとしている。それを迎え討つべく作戦会議の招集があつた。彼は警備隊長でありながら、体調不良を理由に姿を現さなかつた。警備隊は隊長不在ながらも、一糸乱れぬ矢の雨で難民を滅ぼした

バクは昭乃を見た。

「あんたも弓を取つたのか？」

「警備隊は十八にならないと入れない。そういう掟だ」

「ちょっと待てよ。俺は十六で……」

「おまえの身分を保証したのは誰だ？」

「そ、そつか……」

バクはほつと息をついた。

「その後、彼は消息を絶ち、富谷に帰つてくることはなかつた。子供の死に心を痛め、仕事を放り出したことはまだい。その気持ちは私にもわかる……」

「どうしてあんたになにも告げず、出でていったのか……」

「親しくはしていたが、所詮、私のことは弟子としてしか見ていかつたのかもしない。だとすれば……」

昭乃は斜めにうつむいた。

バクは待つた。

昭乃は顔を上げた。

「だとすれば、それもしかたがない。だが、どうしても解せないことが一つある。その理由を聞くまでは、私は死んでも死にきれない。内容次第では……」

昭乃の目もとが般若面のよつと強ばつしていく。

バクは思わず身ぶるいした。

言葉を飲みこんだせいで、心に過大な負荷がかかっている。昭乃

は嘆いているのだ。自分の思い人が、賊とはいえ、罪なき子供を故意に虐殺したことを。事件の噂は富谷にも及んでいる。

そんな思いを秘めていたとは……これは作戦どころではないかもしない。

「一つ、念を押しておきたいことが……」

「わかつていい。約束は守る。あの女に一度も笑われてたまるか」

「まさか……はなから片道切符のつもりだつたのか?」

「だから同行を許した」

「くあ、やられた!」

バクは頭を抱えた。

すべては昭乃の手の内にあつたのだ。道理で手筈がいいわけだ。お膳立てはしてやるから、ルウ子はおまえ一人で連れて帰れ……と

いうことだ。

昭乃の予報通り、風が吹いてきた。

シーメイド は対岸めざして走りはじめた。

「隊長! 岸からヨットが一隻、こちらに向かってきています!」

望楼の男は甲板に立つ熊楠を見下ろすと、そう報告した。  
統京湾の口には海堡かいほうという、その昔統京を戦火から守るために築かれた軍事用の人工島がいくつか遺つている。

一隻の巡視船 美咲 と くりはま は、その朽ちかけた海上要塞跡の陰で辺りを監視していた。

熊楠は 美咲 の欄干に身を寄せると、手にしていた双眼鏡を目にやつた。

「遠いな。逃亡者がどうかはまだわからん」

黒ずくめの長躯の横、火炎のように赤髪を尖らせた男が口を開いた。

「出やがつたな」

獲物を前に気が急ぐのか、男は短弓をかまえ、彼方のヨットに狙いをついている。

彼らの主力装備は小銃なのだが、海上は一回の影響下になく雷管が反応してくれない。本土から少しでも離れるときは、従来の武器を持ち出すしかなかつた。

「なぜそう思う？」

熊楠は訊いた。

「わかるもんはわかんだよ」

赤髪は煙たそうに上官を睨め上げた。

「海賊の勘というやつか」

「元海賊だ。言葉に気つけな」

熊楠は双眼鏡を下ろすと、氷瀑の一筋のよつたな視線を部下に突き刺した。

「氣をつけるのは貴様だ、シバ。私は孫局長ほど寛大ではないからな」

シバは顔をひきつらせ、半歩後ずさる。

「さ、さつきのはナシだ。あんたとやりあつ氣はねえよ」

「賢明だ」

シバは船室へ引き下がつていった。

熊楠は再び双眼鏡を目にやると、小さく舌打ちした。

「バカめ……一度と関わるなと言つたはずだ」

しばらくして、望楼の男は続報を告げた。

「クルーは女と少年です！ 女は初見ですが、少年は元職員のバクと思われます！」

「拿捕しろ！」

熊楠が叫ぶと、一隻の巡視船は煙突からもおつと黒煙を吐いた。

海堡の左右の岸から姿を見せる一隻の船。

バクは声をあげた。

「なんかやばい感じだ」

一匹のバカでかい海ネズミどもは、シーメイドの船首と船尾をそれぞれ押さえてやろうと、全速力で向かってきている。

バクは艇長スキッパーからの指示を待っていた……が、昭乃に動きはなかつた。舵から手を放し、蒸氣船の片割れをぼうつと見つめている。

「どうしたつてんだ！ 昭乃！」

「……」

「この仏頂魔神！ 鉄骨頭！」

「え？」

昭乃はそこで我に返つた。素早く帆を逆に孕ませ、方向転換をはかつたがもう遅かった。

一隻はあつという間に シーメイド をサンドイッチにした。速度をコットにあわせ、『川』の字を作るよう並走している。両船あわせて十余名の兵たちがいっせいに短弓クルセードをかまえると、みさき の船央にいた赤髪の男が停船命令を告げた。

昭乃は帆を下ろし、バクは錨を海に投げる。

一隻が機関を止めて同様にすると、シバはバクを見て笑つた。

「てめえか。立場がわかつてねえ、『バカ』ってガキは」

「バクだ」

シバは昭乃に言つた。

「女。面はいいが運がなかつたな。NEXAの秘密に関わつた奴は生かしちゃならねえんだよ」

「……」

昭乃はすつと短剣を抜く。

シバは兵に命じた。

「討てい！」

「やめておけ！」

船室の入口から声があがつた。

みさき の甲板に立つ黒ずくめの男を見ると、弓兵たちはそろつてかまえを解いた。

「矢など百本あつても役には立たん。その女は私の一番弟子。倒すことができるるのは師である、この私だけだ」

「なんだと？」シバは師弟を見比べると、ククと低く笑つた。「こ

いつあ、おもしろいことになつてきやがつた

「船首を空ける」

熊楠が指示すると、そこにいた三人の兵士は引き下がつていった。すると昭乃はバクをひょいと抱え上げ、みわきの船首へ一跳びして、バクを下ろした。

バクはキッと昭乃を見みつけた。

女の体からは冷たいものが昇華している。

些事に腹を立ててゐる場合ではなかつた。バクは舳先の突端のほうへ避難した。

熊楠は昭乃に近寄ると言つた。

「こんなところでなにをしている

「先生……」

昭乃は訴えるように男を見上げる。

「……」

熊楠は失望しきつたように女を見下ろした。

「考え方直してください。あなたは人殺しを生業にできるような人じやない！」

「組織にとつて不都合な者を消す……。所属が変わつただけで、やつていふことは昔から同じだ」

「ちがつ……ちがつ……」

昭乃は激しくかぶりをふつた。

「私はもうおまえが思つてゐるような男ではない」

熊楠はシャツと短剣を抜くと一歩進んだ。

昭乃は一歩退いた。

熊楠は進む。昭乃は退いて退く。間合は少しづつ広がつていく。

昭乃は小さくかぶりをふりながら、なおも退くとするがもう後がない。バクを巻きこむまいと逆に半歩出る。

「先生……」

「昭乃。自分が正しいと思つのなら、私を倒してみせや」

「……」

「昭乃は抜かない。

「それもいいだろう」

抜き身の剣をロウソクのよつて胸もとにかかげると、熊楠はすつと歩き出した。

「なぜ子供たちを虐殺したのですか？」

「！」熊楠は立ち止まつた。「知つていたか……」

「あなたがどんな職に就こうと勝手です。でも、子供ばかり選んで殺していたことだけは、どうしても解せません。難民の子に情けをかけた人のやることじゃない。いつたい、あれからなにがあつたと

いうんです！」

「なにもありはしない。あの事件がすべてだ

「わからない……全然わからない！」

「だが、もう子供を殺す必要はなくなつた。輝ける未来の偉大なる指導者、孫英次局長がこの飢えた世を救つてくださるのだ。私はそれを一日でも早く実現するために戦う」

「あんな不義の男を信じるなんて……壊れてる……あなたの心……」

「なんとでも言うがいい。ではいくぞ！」

熊楠は床を蹴つた。

昭乃はついに剣を抜いた。

二人は互いに百もの連なる分身を生み、千もの突きをくり出して

いつた。

牽制のなす幻影なのか、それとも実体の軌跡か。あまりの速さに誰も目がついていかない。神々の戦いを前に、舳先のバクも船央のシバも生唾を飲みこんだ。

散つていた幻はやがて一点に集まっていき、激しいハウリングを起こした。

五分と五分。

昭乃はすかさず脚をふり上げる。

熊楠はさつと飛び退き、蹴りをかわした。

「昭乃……あれからわざかな期間でよくそこまで鍛えた」

「以前のあなたなら、私は今の一閃で果てていた」

「私が衰えた、と？」

「いいえ。私が強くなつたのだとしても、あなたの背中がほんの少し近づいただけ。なのに、なぜですか？」

「私の知つたことではない」

「知りたいですか？」

「死刑囚の説教などいらぬ！」

熊楠がグッと剣を突き出すと、昭乃は渾身の力でこれを払い上げた。

男の短剣は宙を舞い、海に消えた。

「バ、バ力な……」

「あなたは完全に狂氣の底へ墮ちたわけじゃない。今のがその証拠です」

「どういう……」

「それは……」

昭乃が答えようとしたとき……。

戦いに氣を取られていたバクはわが目を疑つた。両船の全弓兵が射的体勢に入つていたのだ。

熊楠め、どこまでも卑劣な……いや待て、ターゲットがちが……。

「一摩さん！」

昭乃は敗北に消沈する男を肩で突き飛ばした。

不意の一撃に、熊楠は受け身を取るしかなかつた。目の前で立ち尽くす女をふと見上げると、男は言葉を失つた。

「！」

昭乃の背中には、矢羽の花が咲き乱れていた。

口から赤いものがもれ出し、主を失つた人形のよう膝が折れてゆく。

すかさず熊楠は女を抱きとめた。

「なぜだ！ なぜ私をかばつた！」

昭乃はふるえる手で男の頬に触れると、ふつと微笑んだ。

「よ、かつた……いつもの……一摩さんのか、お……」

昭乃の手はすべり落ちていった。

熊楠はぎゅっと目をつぶり、昭乃の胸もとに顔をうずめた。やがて顔を上げると、誰にともなく叫んだ。

「貴様ら、なんの真似だ！」

「計画が予定通りに進めば、いずれあんたは組織を裏切ることになる」

船室の屋上から声がした。シバは満足げに目を細め、こちらを見下ろしている。

兵士たちは一の矢をつがえる。

「まるで確定しているような言い方だな」

「さつさと消すつもりだったんが、さすがは狂犬の中の狂犬、まともなやり方じやあ手も足も出ねえ。だが、その女を見てからあんたは変わった。邪魔は入ったが結果オーライ、女が残つても厄介だからな」

「なにが狙いだ！ 孫はなにを企んでいる！」

「なーに」シバは眉を段にした。「ちょっとした工事をやるだけさ」「ちょっととした工事を押し進めるためなら、ちょっととした犠牲には目をつぶるというわけか」

「人聞きの悪い口は塞がねえとなア！」

シバがすっと片手を擧げると、兵士たちはいっせいに矢を放つた。血の匂いをかぎつけた一角の獣たちは風を切り、手負いの一獅めがけて殺到する。

彼らは見事しとめた！ 薄汚れた甲板を。

シバは誰もいない船首を見下ろしたまま、かすれ声をふるわせた。

「そ、それは……ナシだろ……」

熊楠は シーメイド のデッキに立つていた！ 育ち盛りの少年と手足たらした女を軽々と両脇に抱えて。

女を抱え上げ、少年を引っ捕まえ、甲板を蹴り、一人を一瞬放して前から迫る矢を手刀で裁き、再び一人を捕まえ、ヨットのデッキ

に着地する。シバの肩の筋肉が動きはじめてから、すべての矢がむなしく果てるまでの間に、熊楠はそれらをすべてやつてのけたのだ！

熊楠はバクを放すと海原に目をやった。

「君は泳げるか？」

「あ、ああ……」

バクは生返事を返すのがやつとだった。矢箋から紅色の汁を滴らす女の屍から目が離せない。

「ここで死にたくないければ、私についてこい」

「え？」

バクが聞き返す間もなかつた。

熊楠は昭乃を抱えたまま駆け出すと、激しいしぶきを上げた。

闘神といわれた男の真の実力を知つてすくんでいるのか、シバは追跡命令を出せないでいる。熊楠を追う視線の先には、台座のよつな形の小島があつた。

「クソ！ どうにでもなれ！」

バクは熊楠を追い、潮風の中へ舞つた。

バクは小島の砂浜までどうにか泳ぎ切つた。ズブぬれの体を起こし、来た海をふり返る。追つ手はやつてこない。

砂浜にいくつか足跡が残つてゐる。先に上陸したはずの熊楠の姿は見あたらない。足跡を目でたどると砂浜はすぐに終わり、島の奥へ続く坂道があつた。道の左右には大きな岩が立ちはだかつていて、島の様子がよくわからない。海岸に家らしきものはない。無人島なのだろうか？ 島の内部へ入る道はその坂一本しかなさそうだ。

ひとまず熊楠を捜そと、バクは一步踏み出した。

すると岩陰から蓬髪の小男が現れ、さつと短弓をかまえた。小柄ながらも筋骨はたくましく、どこか古代北欧の戦士を思わせる風貌だ。

疲れ切つていたバクは、両手を挙げるしかなかつた。

「なあんだ。シバじやねえのか」

髭がちな男は弦の張りを緩めた。

「シバ？あの赤髪がどうかしたのか？」

バクは手を下ろした。

「傭兵の落ちこぼれにゃ 関係ねえ話よ。十秒だけ待つてやる。帰りな」

「俺は傭兵なんかじゃない！」

「あんだと？ てめえ、蒸気船のほうから来たじゃねえか

「俺が来る前にあと二人いただろ？？」

「ああ、あれはいいんだ」

「奴こそ傭兵だ！」

「細けえことはいいインだよ！ ほれ、あと一秒」

男は再び弓をかまえた。

「待つてくれ！ せめて……墓ぐらいは建てさせてくれ」

「墓だあ？ 誰の？」

「く、熊楠の……」バクはぶすっと横を向いて言った。「女のだ」

「ああ、そいつなら今、し、しゅじゅちゅ、じじちゅ」男は舌打ちした。「手術中だ！」ヒュー、やつと言えたぜ

「手術？」

死体に手を加えても、それは解剖としかいわない。といふことは

……。

「生きてるのかつ！」

バクは猛猪も逃げ出す勢いで小男に迫った。

「！」

小男がとつさに右手を放すと、矢はバクの左頬をかすめた。バクはかまわず小男の襟もとをつかんで、体ごと持ち上げた。

「昭乃はまだ生きてるのかつて聞いてんだ！」

小男はじたばたした。

「女は……てめえの……なんだつてんだよ！」

「……」

「は、放しやがれ……」

バクが手を放すと、小男は咳きこみながら言った。

「ヌシが執刀してる」

「ヌシ?」

「終わるまでは誰にも会わねえとよ

「なら……熊楠に会わせろ」

「奴はてめえのなんだ」

「仲間の……」

バクはそこまで言つてためらつた。

心の中の相容れない東西が激しくせめぎあつてゐる。

「仲間の?」

「……仇だ」

小男は二ツと歯を見せた。

「ついてきな」

二人は坂道を上つていった。

小男はタチと名乗つた。タチはこの小島くろふねじま……黒船島にアジトをかまえる海賊『ペリー商会』の幹部だった。正確には彼らは自らを賊とは呼ばず、『海の掃除屋』と称していた。

黒船島はかつて、旧日本軍の要塞として機能していいたことがあつた。苔生した石造りの兵舎や弾薬庫、砲台跡、煉瓦造りのトンネルなど、遺跡があちこちに残つてゐる。ペリー商会にとつてこの要塞跡は格好の盾だった。旧来の武器でここを正面から攻め落とそうとするなら、敵の数倍の被害は覚悟しなければならない。海上警察や他の海賊はこの島を素通りするしかなかつた。

バクはタチの話を聞いて納得した。NEXAの連中が追つてこないのは、そういう理由わけもあつたからなのだろう。

土壁を石組みで固めた切通しを渡り、残響が残響を呼ぶ不気味なトンネルを抜けて少し行くと、もう反対側の崖だった。黒船島はドーム球場がせいぜい五つ入るかどうかの広さしかない。波しぶきが舞う崖を背に山道を上ると、密林のすき間から山頂広場が見えてき

た。広場の中心には背の高い矢倉がそびえ立つてあり、芝地の隅には丸太小屋が一軒あつた。そこがヌシの家だ。

小屋の壁際に、大きな体を紙ぐずのように丸めて頭を抱える男がいた。

隙だらけだ。地下仲間の恨みを晴らすなら今しかない。

バクはナイフの柄に手をかけ、ぐつと握った。それだけだつた。千載一遇の機を自ら手放した。手放すしかなかつた。

バクに気づいた熊楠は小さく頭をもたげた。

「期待はするなと言われたよ」

「なぜ俺たちを助けた」

「昭乃が私に微笑みかけたあのとき、ようやく互いの思いを知つた。自分が犯した過ちの大きさを知つた。私は富谷を出るべきではなかつた」

「富谷を出たのはいい。子供好きのあんたがなぜ、子供を狙つた?」「難民の子の餓死は私に深いトラウマを残した。それが災いした。子供の餓死が子供殺しへつながつたと言つても、他人には理解できまい。そのときはそれが正しいと思つてやつていた」

「そんな答えで納得すると思つてんのかよ!」

バクは熊楠の胸ぐらをつかみ上げた。

「病んでいたから許されるなどとは思つていない。抵抗はしない。君の好きなようにすればいい」

「なら……」バクは手を放した。「祈れ」

「?」

熊楠はしばし呆けていたが、やがてうつすら微笑んだ。

「祈ろう。昭乃と運命をともにできるなら、それ以上望むことはもうなにもない」

バクと熊楠はそれからひと言も口をきかなかつた。真上にあつた太陽が空を赤く染めるまで、二人は待ち続けた。

玄関のドアレバーが傾くと、男たちの首はさつと反応した。

作務衣姿の老人が腰をたたきながら出てきた。大きくのびをし、

汗にまみれた禿げかけの白髪頭をかく。

「どこが皺でどこが目鼻なのかよくわからない。しかし、どこかでどこかで見たような顔だ。」

「ヌシ先生！」

熊楠は老人に駆け寄った。

ヌシはぶっきらぼうに言った。

「期待はするなと言つたはずだ」

「そう……ですか……」

熊楠はうなだれた。

「昭乃……」

「バクはあふれ出すもののはままだつた。残つたものは悔いばかりだつた。」

「汚れた祈りでは通じなかつたか」熊楠は腰のナイフを抜くとバクに手渡した。「殺つてくれ」

「……」

「バクはナイフを手にしたもの、今はなにをする氣にもなれなかつた。」

ヌシは一人に背を向けた。

「不幸な娘よ。死んだほうがマシだつたと、言つて出さなければよいがな」

「え？」「それはどういふ……」

バクと熊楠は同時に訊いた。

「一摩よ。おまえはあの娘がどうなるつと、すべてを受け入れると言つたな？」

「はい。たしかに言いました」

「偽りはないか？」

「ありません！」

「では、入りなさい」

書斎と寝室を兼ねたような居間を横切り、客間のドアを開く。

客間とは名ばかりで、実際は病室と診療室を混ぜたような部屋だ

つた。入つてすぐ、壁際の棚に診察器具や手術道具、薬草箱などがならんでいる。奥に粗末なベッドが一つ。向かって右は平らで、左は盛り上がっている。

昭乃だ。全身包帯まみれとはいえ五体満足につながっている。一見しただけではヌシの言った意味がわからない。

ヌシは患者に布団をかけると口を開いた。

「命はどうにか取りとめた。それだけでも奇跡に近い。ただ……頸椎のダメージがな……」

「……」

熊楠は眉間の隙を緩めつつ、きゅっと口もとを引きしめた。

バクはヌシに言った。

「俺にもわかるよう言つてくれ」

「つまり……この娘は生涯、寝たきりだ」

5月19日

熊楠は昭乃の看病に徹したいと、客間に籠もりつきりだ。バクには時間がなかつた。こうしている間にも、新しい独房の建設は着々と進んでいる。昭乃が倒れた今、代わりが務まる戦士は熊楠しかいない。だが、熊楠はとても戦えるような精神状態ではなく、バクも彼への憎悪を鎮めることなど当分できそうにない。ペリー商会をアテにしてみたが、タチは首を横にふつた。たいていの賊は目先の利でしか動かない。折れたバットをかかげて、何年か後に価値が跳ね上がるのだと力説しても、相手がその道の素人ではむなしいだけだ。

バクはヌシの家を後にした。坂を下り、トンネルを抜け、石壁の切通しを渡つて、アーチ型の横穴が点在する場所で立ち止まつた。

旧兵舎（今は海賊たちの住処）の前で、タチが待ちかまえていた

のだ。

タチは壁に寄りかかつたまま言った。

「行くのか？」

「ああ」

「死ぬぞ？」

「そうだな」

「おめえ、バカだろ？」

「かもな」

「送つてやるよ」

「え？」

「たいして泳げもしねえくせに、ビリヤツて半島へ渡るつもりだつたんだ？」

「あ……」

「やつぱバカだ」

タチは大笑いした。

二人は切通しを抜け、続く坂道を下つていった。

バクは海賊でなければヌシの関係者でもない。今回は特別に滞在を許されたが、次回はないと考えたほうがいい。ヌシと熊楠、そしてペリー・商会。彼らをつなぐ線が未だに見えないのだが、そういう疑問は今のうちに解決しておくべきだろ。

それについて訊くと、タチは語つた。

「ヌシと熊楠がなんでダチなのかは、俺たちがここをアジトにする前の話だからよくわからねえな。ヌシはただ『難破した船にただ一人生き残つた少年を手術したことがある』としか言わねえんだ。

で、ヌシは俺たちの襲来にもびくともしなかつた唯一の先住民よ。立ち退かねえなら殺つちまうかってことになつたんだが、ボスはジジイが医者だと知ると、仲間の怪我人病人を全員治療できたら共存を考えてやろうと言い出した。するとジジイは、末期に近い、見捨てのしかなかつた奴まで見事治しちまった。以来、俺たちはジジイをヌシと呼び（島主の意らしい）、隠居に干渉しねえ代わりに、重

病人だけ診てもらうようになったのさ」

ヌシのメス裁きはたしかなものだつた。彼がどこで生まれ、どこで学び、どんな経緯で島へ渡つたのか。ヌシは語ろうとしないし、海賊たちも訊こうとはしなかつた。ヌシはヌシ。それで充分だつた。バクにはもう一つ、気にかかる関係があつた。

「そういえば、シバがどうとか言つてなかつたか？」

タチは虚空を睨みつけ、ぼうぼうの髪をなで下ろすと、言つた。

「奴か……あれは俺たちが賞金首にしている海賊の一人よ。もう十  
年以上前のことだ。当時、奴はまだ青臭えガキで、縄仕事かパシリ  
しかできねえ下つ端だつた。そう、元は仲間だつたのさ。犬みてえ  
に素直なガキだと思つていたんだが、これがとんでもねえジヤック  
ナイフよ。ある日、俺たちは湾上で新手の海賊と一戦交えたんだが、  
奴はその最中、いきなり寝返りやがつた。足し算もできねえ頃から  
奴をシゴいてきた五人の首を土産にな」

「でも今は……」

「そうよ。奴は逃げやがつた。陸おかの組織の兵隊になつちました。だ  
が、奴は海で生まれた男だ。海岸をウロチョロせずにはいられねえ。  
そこを討つ。俺様の手でな」

タチは見えない弓を引いてみせた。

高い崖の谷間を一気に下ると、砂浜に出た。

バクは眉をひそめ、今来た道のほうへ顎をしゃくつた。

「港はあつちじやないのか？」

「バカヤロウ。ガキ一人送るのに、何十人もこき使えるわけねえだ  
ろ？」

「ああ」

バクは納得した。

彼らの帆船は最小のものでも三十人の水兵が要る。一人や二人で  
操作できるようなヨットとは、大きさも複雑さも桁がちがつた。

タチは大きな岩の裾に空いた穴蔵へ入つていつた。しばらくする  
と、海草の化け物のような黒い塊をかついでこちらへもどつてきた。

「これでシコシコやりな」

タチは足踏みポンプをバクに放つた。

「泳ぐよりはマシか

バクはしかたなくポンプを踏み、ゴムボートをふくらませていった。

「なにしろ一十年は使ってねえからな。いつ破れるか……」

「……」

バクは足を止めた。

タチは笑つた。

「ギャグだよ、ギャグ。闇市成金から分捕つた新品だ」

昼すぎに踏みはじめて、形になつたのは日が沈む間際だった。実はそのギャグとやらは二段構えで、ポンプのほうが二十歳だったのだ。バクは汗だくになりながら、電動製品に満ちた（できれば詐欺師のいない）未来社会に思いを馳せた。

ボートが完成して一人でいざ出航といつとき、岩陰から男が現れ、波打ち際に近づいてきた。

バクは黒ずくめを睨め上げた。

「なにしにきた」

「それに乗つてどこに上陸するつもりだ？」

「最短距離に決まってるだろ」

熊楠はため息をついた。

「まったく……敵を知らないといつのは、本当に恐ろしいことだな

「な、なんだよ」

「そこは傭兵隊の秘密基地だ。シバのような一級の戦士が『ロロロロ』控えている。君は女の顔を挙むことすらできんだろ」

「……」

「バクを頼む。そう言われたよ。寝言だがな」

「……」

バクは田を背けた。

「私を恨みたい気持ちはわかる。だが、今の君にとつては必要な人間のはずだ。私は半島の地理と警備の弱点を知っている」

「……」

「私のことは盾と思って、使い捨ててくれればいい」「ふざけんな！　あんたは昭乃に命を拾つてもうつたんだ。それを忘れるな」

熊楠は胸に手をやつた。

「肝に銘じよう」

タチは一人をボートに乗せると、夕闇に煙る半島めざして漕ぎ出した。

5月20日

ボートは半島の東に突き出た岬を迂回し、真夜中、細長い浦の中へ入った。

流されたのか、それとも沈んでしまったのか、港には船一つない。かつて湾岸一帯を苦しめたという台風や震災の爪跡はごくわずかなもので、沿岸の住宅地や埠頭の設備はしつかり原形をとどめている。にもかかわらず、人の気配がまるでない。あるのはかすかな波の音だけだ。

ボートが岸壁に近づくと、バクと熊楠はコンクリートの地面に飛び移った。

「生きてたらまた会おう」

タチは笑顔を残し漕ぎ去つていった。

二人は明かりも地図もないまま、いきなり歩きはじめた。

古代より要衝とされてきた港町は、山がちで道が複雑に入り組んでいるというが、ここもその例にもれず、手ぶらで一人歩きできるような素直な道筋などなかつた。しかも通りには街灯一つ点っていない。それでも二人は暗闇の迷路を惑うことなく進んだ。バクが目

を務め、熊楠がナビを務める。それで充分だった。

バクは浦に入ったときから感じていたことを口にした。

「本当に誰もいないな。ここでなにがあつた？」

熊楠は言った。

「少し前、この半島で重い伝染病が流行った。進行は遅いが致死率が高いという説明を受けた住民は皆、薬が確保できる土地へ移つていった。空になったこの地をまるごと押さえたのが、新生NEXAだ」

「まさか病気を流行らせたのは……」

「たしかな証拠はない」

「なんにしたつて、ここはNEXAの庭じゃないか」

「心配するな。庭師はまったく足りていない」

急成長を続けるNEXAは人材登用に苦労していた。至宝を収めた土地を守るには、信用のおける兵隊でなくてはならない。緊急でかき集めた雑兵ではダメなのだ。NEXAは広大な土地を手にしたが、警備面で確実に押さえてあるのは半島へ通じる陸路と、ルウ子が囚われている刑務所とその周辺だけだった。

そういうわけで、しばらくの間は会話の声に神経を尖らせる必要はなかつた。

バクは最も憎むべき男の一人とパートナーを組むにあたつて、どうしても知つておかなければならぬことがあつた。

バクは前置きもなく切り出した。

「なんで子供を虐殺したのか、話してもらおうか」「よからう」

元地下賊を名乗る難民の子供を、心ならずも見殺しにしてしまつた。そこまでは昭乃から聞いたとバクは言うので、熊楠はその後のことを語つた。

「最後の子の死を見届けたその日、私は密偵から報告を受けた。飢えに耐えかねた難民たちが、最初で最後の戦いを挑もうとしている。長老衆はそれを迎え撃つよう私に命じた。なにもかもが嫌にな

つた私は、作戦会議を仮病で欠席すると、密かに故郷を後にした。

それからしばらく放浪を続けたが、子供たちが飢え死んでいく姿が私の頭から消えることはなかった。どうすれば人が、子供が飢えずにするのか……私は寝ても覚めてもそればかり考えていた。出口なき悲観のループをめぐっているうち、歪んだ妄想に取り憑かれるようになつた。

そもそも食料に対しても人が多すぎるので、だつたらもつと人口を減らせばいい。老人は放つておけばいずれ死ぬ。重要なのは……子供を生ませないことだ。そう考えた私は、近い将来に子供を増やす可能性のある『子供』を殺し、人口が増えるのを未然に防ごうとした。

そうはいつても、罪無き市民を殺せば当然裁かれる。私は合法的に子供を殺す方法を探していた。やがて私は武術の腕を買われて武警の一員となつた。対賊専門のスナイパーに抜擢された私は陰で狂喜した。生かそうが殺そうが、賊は記録の上には存在しない人間。私はためらいもなく、賊の子供を狙い撃ちしていった

「武警は狂犬だけでなく、子を食らう鬼まで飼つていて。噂には聞いていたが、あんたのことだつたのか……」

「子供を殺すたび、私の矛盾した発想は単純化していった。『子供を殺してやれば、子供は飢えないのだ』と。君を狙つた頃は多少の理性を残していたが、地下賊掃討作戦の辺りではもう、私は暴走したロボットのように手がつけられない状態だつた」

「……」

人口が減ることで腹が満たされる子供がいる。殺されたことで飢える必要がなくなった子供がいる。その子供から将来生まれるはずだつた子は未来に存在できず、したがつてその子も苦しむことはない。熊楠の壊れた心は、それぞれ異なる意味をもつ『飢えない子供』の区別がつかなくなつてしまつたのだろう。

「それでも、私の渴いた心が潤うことはなかった。苦悩の日々は続いた。やがて、以前から私の腕に注目していたという男が個人的に

訪ねてきた。孫英次。NEXAのナンバー2だ。孫は少し会話を交わしただけで私の悩みを見抜き、私のやり方では飢餓問題は解決しないことを説いた。そして奴は言った。『私に手を貸してくれれば、君の悩みは一気に解決するだろ?』と。孫はNEXAがマスター・ブレイカーという究極の電源スイッチを手にしたことを、私に打ち明けた。それ一つでパワー・ショックが解決するなど、にわかには信じがたいことだった。そこで孫は私をある場所に案内した

バクは言った。

「大品発電所」

熊楠はうなずいた。

「奇跡の光景に打ちのめされた私は、たちまち孫の信者となり、武警を辞してNEXAへ転職した」

熊楠はそこで話を終えた。

一人はしばらく黙つたまま歩き続けた。

巨人の靈園のごとき無人団地を抜け、渴ききつた高速道路を横切り、山裾の森からいよいよ刑務所のある頂をめざそつといつとき。バクは立ち止った。

「それでも、俺はあんたを許すわけにはいかない」

熊楠も立ち止った。

「わかっている」

「それでも、俺はあんたと組まなければならぬ」

「そのようだな」

「同時に二つのことは、俺にはできない。俺には……できない」

「君にとつて一番の望みはなんだ?」

「一番の……望み……」

望みはいくつかあるが、なにかこう、表彰台のてっぺんだけがぽつかり空いている感じがしてならなかつた。

「わからなければ一番でも三番でもいい。それを叶えるために私と組まなければならぬとしたら、君は進むか、それとも退くか?」

バクは熊楠を見上げた。

「……」

熊楠はバクを見下ろした。

「……」

バクは右手を差し出した。

「ルウ子を助けることができたら、地獄で再会するまでは、あんたのことを忘れていてやる」

熊楠も右手を差し出した。

「君は地獄へなど行けないぞ」

二人は握手を交わした。

バクと熊楠は藪をかき分けながら深闇の野山を登つていった。道無き道の強行軍は、バクたちから貴重な時間とスタミナを奪つていった。刑務所のフェンスが見えた頃にはもう夜が明けてしまつっていた。

熊楠は大木の陰から刑務所の様子をのぞくと、眉をひそめた。

「妙だな。気配がない」

バクはうなずいた。

「本当に兵が伏せてあるのか？」

「私があそここの警備に関わったときは、そうだったのだが……」

「罷か？」

「だとしても、獲物を捕らえるにはそれなりの人数が要……ハツ！」

？」

熊楠はさつと身を翻した。

バクもつられて後ろを向いた。

誰もいない。木々と笹藪があるだけだ。

当代最強の戦士の顔がこわばっている。

「私の背後を取るとは……」

「シバか？」

「ちがうな。まるで邪念がなかつた。こんな相手ははじめてだ」

しばらく待つてみたが、もう誰かに見られている感じはなかつた。

バクと熊楠は笹藪の中に身を伏せ、門のほうへ這つていった。刑務所のフェンスは錆びつき、ところどころ倒れていた。

その気になれば、どこからでも侵入できそうなものだが……。

小鳥の朝歌……枝葉の小波さざなみ……羽虫の逍遙……。

静かすぎる。

バクはささやいた。

「ルウ子はもう新しい独房に移されてしまった?」

「前例のない工事だ。十日も工期が縮まるとは思えんな」

「じゃあなんで誰もいないんだ?」

「ううむ。緊急で増援を要する事件でもあったのか……」

「とにかく、調べるなら今のうちだ」

フェンス越しに刑務所の平たい施設が連なつており、そのすき間、敷地の奥に一つだけぽつんと離れて立つ小屋が見える。

「あれだ」熊楠は小屋を指した。「さつきの妙な伏兵がいるかもしれん。私から離れるな」

バクと熊楠は壊れたフェンスめがけて走った。荒れ放題の獄舎と職員宿舎を横目に、雑草だらけのグラウンドを横切り、森の縁の草深いところまできた。

コンクリート造りの小屋がある。その周りに戦闘服姿の男が何人か倒れている。

バクは言った。

「こいつら……NEXAの傭兵だ」

「血の臭いがしない」熊楠はうつ伏せの男を調べた。「眠っているだけだ。ガスを吸わされたか、あるいは……」

「そんなことより、独房だ!」

バクは熊楠に見張りを任せ、小屋の鉄扉を引き開けた。

中に入ると短い廊下があつた。右側の壁に、入口よりも重厚そうな鉄扉が三つならんでいる。

手前の二つは開け放しだ。

向かいあう三段ベッド、ロッカー、武器弾薬、わずかに汁が残つ

た食器の重なり、散らかったトランプ、ヌードのポスター、床に転がる死体……ではなく死んだように眠った男ども。争った形跡はない。

奥の一つは閉まつたままだ。

バクは突きあたりまで進み、鉄扉の正面に立つた。

釘か刃物の先で削つたのだろう。雑な字でなにか書いてある。

『鍵は後ろです』

バクはふり返つた。見上げると採光用の小窓があり、その枠に鍵束が置いてある。

「バカにしやがって」

手にした鍵束を床にたたきつけようとして、途中でやめた。

三番目の部屋の鍵を探つて鍵穴に差しこみ、鉄扉を手前に引く。

「え？」

バクは思わず首を突き出した。

正面の窓際。ジャージ姿のルウ子がベッドに横たわつている。意識はないようだが、血色は悪くない。

バクは駆け寄つてルウ子に声をかけた。反応なし。搖さぶつた。

反応なし。頬を指でつついた。

するとルウ子は顔をしかめた。

「んうん……そのスルメ……あたしの……」

ルウ子はバクの人差し指を探りあてると、満足そうにしゃぶりはじめた。

バクは一瞬のぼせたが、なんとかこらえた。

「ど、どうやら暗殺や拉致が目的つてワケじゃなさそうだな」

ルウ子の待遇は想像していたよりは悪くなかった。服やシーツは清潔であり、虐待を受けた様子もない。独房の隅には、他の部屋にはないシャワールームまで設置してある。

ブーン！ ブーン！

ルウ子の脇の下でなにかがふるえる音。

バクがその腕を持ち上げると、ピンクのケータイが下敷きになつ

ていた。

救出してやるのとケータイを手にすると、それはするりと抜けるルウ子の腹の上にびたつと引っついた。

「そういえばそうだった」

そのままケータイを開くと、画面にアルが現れた。

「ふう、まいったまいった。ボクは開けてくれないと話ができないんだ」

「いつたいここでなにがあつた？」

「なにがつて……なにかあつたのかい？」

「知らないのか？」

「うーん、普段よりは静かな夜だとは思つたけど？」

「傭兵連中がみんな眠らされていたんだ」

「そうかあ。じゃあ、ルウ子もそうなのかな？ 昨日の夕食の後からずつと眠つたままなんだ」

「犯人の狙いがよくわからないな」

「天然なんだよ、きっと」

バクはルウ子の頬を何度も張つた。反応なし。罵詈雑言。反応なし。

「だめだこりや」

バクはケータイを閉じると、ルウ子を引っ張り起こして背負つた。するとルウ子は急に笑みを浮かべ、なにやら寝言を口にもつた。

「ん……んふ……れしい」

ルウ子はいきなりバクの首筋に口づけした。

「なー？」バクはびくつと首を反らした。「にしやが……る？」

「……」

ルウ子は寝息を立てたままだ。

「と、とにかくここを出よう」

戸口で待っていた熊楠は、ルウ子を田にすると眉をひそめた。

「どういひことだ？ どうぞ持ち帰つてくださいと言わんばかりだな」

「まあいいや。これが罠だとしても、あなたが来たのは想定外だつたろうよ」

「いや、それでもなさそつ、だ！」

熊楠はバクの顔面めがけて投げナイフを放つた。

「！？」

刃はこめかみのすぐ横の虚を切り裂いた。

頭蓋を割らんばかりの衝撃音。

欠けた刃が跳ね返つてきて、バクの足もとに落ちた。

破裂音の残りカスがおんおんと響く。

バクがなにか言いかけると、熊楠は小屋のコンクリート壁を指した。

くすんだ金色の粒がめりこんでいる。熊楠が軌道を変えてくれなければ即死だつた。

「やめておけ！ シバ！」

一発目は熊楠の頭上をかすめた。

熊楠は動じず「あそこか」と言つたが早いか、縁の中に消えていた。

千切れた若葉が何枚か風に舞つた。

一分ほどして熊楠はもどつてきた。

「罠ではなかつたようだ」

シバはなんの仕掛けも誘いもなく逃げ去つていつた。廃刑務所はシバの担当外だ。動物的な勘が、男を私的な偵察に駆り立てたのだろう。

バクはルウ子を背負い直した。

「じゃあ、いつたい誰がこんなことを？」

「兵隊が目覚めると面倒だ。まずは山を下りよつ」

バクたちは浦の廃港をめざした。

夕暮れ。

廃港まで降りてきたのはいいが、この先の足がない。

バクと熊楠は開け放しの倉庫に隠れ、これからどうしたものかと

相談をはじめた。

そこでようやくルウ子が目を覚ました。

「はれ？ あたし……」

奥の木箱の上で身を起こし、せわしなく辺りを見まわすルウ子。

「やれやれ。起きたか」

「バク！？ あんたなにしてんの？ こんなとこで」

「なにって……助けにきてやつたんだろうが」

ルウ子は寄ってきた男たちの姿をざつと眺めると、眉をひそめた。

「たつた二人で切りこんで、かすり傷一つもらわらず、連中を壊滅させたワケ？」

「いや、その……それがどうも謎だらけで……」

バクが横目を流すと、熊楠が続けた。

「我々が来たときにはもう、決着がついていた。まるで手柄を我々に譲つたような、奇妙な感じだけが残つていた」

「あんた誰？」

ルウ子は訊いた。

「元NSF……NEXA秘密部隊の熊楠だ」ネクサシーアクレットフォース

「いいや。富谷の元警備隊長、そして昭乃の師匠さ」

バクが訂正した。

「ふうん」ルウ子は熊楠の顔をまじまじと見つめた。「昭乃のダイヤモンド頭ヘッドは師匠譲りってわけね」

「……」

熊楠はノーコメント。

「ふん？」ルウ子はふと辺りの匂いを嗅ぎはじめた。やがて、倉庫の出入口近くに放置してあるフォークリフトに鋭い視線を送った。

「出できなさい！ いるのはわかつてゐるわ！」

「アハ……ハ……ハハ……」

車の陰から若い女がひょいと顔を出した。

直毛氣味の長い髪というだけで、狐顔でも狸顔でもなく、メガネもかけておらず、他に特徴らしい特徴がない。誰だつけ……。

バクは小首をかしげた。

一方、熊楠はルウ子の動物的な嗅覚に驚いているようだった。

そのきこちない笑い方……バクはやつと思いついた。

バクとミーヤの元教育係、松下蛍だ。

「せ、先生！？ なんでこんなところに？」

「もう隠してもしようがないわね」ルウ子は蛍の素性を明かした。  
「表向きは人事部の平局員だけど、本当はあたしの陰の従者なの」  
蛍はルウ子専用の特別諜報員だった。その存在は私費で雇つたルウ子本人しか知らない。諜報員といつても、蛍は熊楠のような超人ではなく、孫のような才知も、昭乃のような美貌もない。何度会つてもすぐに忘れてしまいそうな、地味な女だった。ただ、逆にそれは地域や組織に溶けこむことを得手とさせた。ルウ子が富谷の事情に通じていたのはそういうわけだった。

「もしかして、連中を眠らせたのって……」

バクが訊くと、蛍は縁なしメガネをかけながら「クとうなずいた。  
「私は傭兵隊の補給係に紛れ、刑務所を守る方々に食事を配つてい  
ました。兵士たちの夕食に睡眠薬を入れたのは私です」

ルウ子は虚空を睨んだ。

「んん？ ジヤあなんであたしまでぐつすりコロリだったワケ？」

蛍は木箱に腰かけるルウ子に駆け寄ると、ペニペニペニペニ頭を  
下げた。

「す、すみません！ 「ごめんなさい！ 申し訳ありません！ どれ  
がルウ子さん用の食事だったか、わからなくなつてしまつて……」  
こんな危なつかしい人物を、ルウ子はよくも従者に採用したもの  
だ。

「しかし妙だな」今度は熊楠が眉をひそめた。「救出作戦の選択肢  
は無数にあつた。我々はこの廃港に上陸し、過去の情報だけを頼り  
に、一夜で山を駆け上がる強行軍を選んだ。迅速だがリスクも高い

選択だ。君はあの夕闇の中、ゴムボートが島を離れたのをたつた一度見ただけで、それを確信していたというのか？」

「あ、いえ、その……はい」

蛍は遠慮がちに肯定した。

「みんな先生の仕業だったのか」

バクは驚きと尊敬をこめてかつての教師を見つめた。

「も、もう先生じゃないから、蛍でいいですよ」

蛍は照れながら、荷物を置き去りにしてしまつたと、鎧びたフオーリクリフトのほうへ歩んでいった。

バックパックを背負つた蛍が車の陰から出てくると、なにを思つたか、初対面のはずの熊楠が一人、彼女のほうへ近づいていった。すれちがいざま、二人は低く言葉を交わした。

「『あれ』は君だったか。なるほどいい従者だ」「私にできることは、『それ』だけですから」

熊楠はそのまま倉庫を出て行く。

「どこへ行くつもりだ」

バクが呼び止めると、熊楠は背を向けたまま立ち止まつた。

「昭乃の世話だ。私一人なら船はいらん」

「待てよ。俺たちも一緒に……」

「ダメだ」

「なんでだよ」

「君は海賊をやりたいのか?」

「それは……」

バクはうつむいた。

黒船島で暮らすということは、すなわちペリー商会に入るということだ。ヌシの旧友である熊楠だけが特別に、見習い看護師として隠居の供を許されていた。

「私は残りの人生すべてを昭乃に捧げたい。もう君たちと会うこともないだろう」

「一線から退くっていうのか?」

「さらばだ！」

熊楠はだつと駆け出し、夕田に染まる海のほうへ消えていった。昭乃はもう、彼なしでは生きていけない体なのだ。バクは男を追いかけることなく、女たちに言つた。

「これからどうする

「董は言つた。

「ひとまず、富谷へ逃れましょ。この苦境を覆すにはどうしても拠点が必要です」

ルウ子は腕組みすると言つた。

「足はあるんでしょうかね？」

「別の倉庫に小さなコシトを隠してあるので、」と案内します「倉庫を出て行く董の背中を見送りながら、バクはルウ子にぼそと言つた。

「タイムマシンでも持つてるんじゃないのか？　あの人」  
「欲がないと、いろんなものが見えるらしいわね」

「さて」

董を見失わないよう、バクが追いかけようとしたときだつた。バクの背に、がばとルウ子が抱きついた。

「！」バクは硬直した。「ルウ子？」

「よく……来てくれた」

ルウ子はバクの羽交いを外側からぎゅっと締めつける。

バクは肘をたたんでルウ子の腕に手を添えた。

「あんたがいないと退屈だからな」

「バカ」

ルウ子はバクの背中に額をコシンとぶつけた。

「……」

「どうしたんですかー？　なにか問題でもありましたか？」

董の声が近づいてきて、倉庫の出入口にひょいとメガネ面が現れた。

「一」

二人はバツと離れた。

「？」

きょとんとする強。

ルウ子はバクにふつた。

「あ、あー、そういうえば昭乃はどうしたの？ 世話って？」

「そつか……ルウ子たちは知らないんだつたな」

バクは昭乃を襲つた悲劇を短く語つた。

ルウ子は無言で目を伏せ、螢はひたすら涙した。

富谷に帰れば当然、昭乃の失踪について疑われる。だが、今のところ他に逃げ場所はない。この先のことを考えると、バクは吐き気がしてきた。

5月21日

「バク！ よく無事で……」

富谷関の堤上。ミーヤは欄干から身を乗り出し、雨上がりに田差しを受ける花のような笑顔を見せた。

それに対し、他の兵士たちの表情は険しい。

無理もない。本来ここにあるべきなのは、昭乃が脱走犯の首根っこをつかんで闊歩している姿なのだ。富谷の人々にとつて昭乃の失踪は、滝の逆流よりもあり得ないことだつた。

バクは谷底で声を張りあげた。

「俺が悪かった！ 俺の居場所はやつぱつこしかない。今やつとそう気づいたんだ！」

ミーヤは自分の立場を思い出したのか、そつけない口調で言った。

「脱走は第一級の重罪です。特別な恩赦がない限り、自首をしても許されるのは命だけ。それでもかまわないというのですね？」

「ああ。血に飢えた外の世界なんかより、檻の中で暮らしたほうが

全然マシさー」

「それで……その……隊長はどうしました？」

「知りたいか？」

「当然です」

「話すには一つ、条件がある」

バクが短く口笛を吹くと、百メートルほど下手の崖の陰からルウ子と螢が現れた。堤に向かって歩いてくる女たちを指し、バクは言った。

「あの二人を中でかくまつてくれ」

ざわつく兵士たち。

「あれ、橋本ルウ子じゃないのか？」「なんか前と雰囲気がうけどな」「敵を一度も中に入れるバカがどこにいる」

「……」

ミーヤの視線は、堤上堤下を行ったり来たりと落ち着きがない。誰かが呼んだのか、ミーヤは急に後ろを振り返った。一つうなづき、すぐに向き直る。

「今日はこれから、長老衆がそろって富谷関の視察に来ることになります」ミーヤは堤上の端にある小屋を指した。「そこで話しましょう。ただし、こちらからも条件があります。その二人をかくまうか追い出すかは、内容次第です」

「いいだろう」

ほどなく数人の兵が壁を伝つて谷底へ降りてきた。彼らは三人から武器を没収し、手枷足枷をつけ、三人まとめてロープで縛ると、堤上で控えている仲間に合図を送つた。堤上の兵たちは、まるで材木を扱うかのように人間の束を釣り上げていった。

「昭乃は……死んだ」

開口一番、バクは言った。

長をはじめとする長老衆、ミーヤ、警備兵たちは言葉を失つた。卒倒して小屋の外へ運び出される若い兵もいた。

ルウ子と蚩は、バクの大嘘に驚きの色を隠せない。

バクはかまわず続けた。

「昭乃はある男をかばって全身に矢を浴びた」

白刷毛のような眉をした、富谷の長が口を開いた。

「ある男とは？」

「傭兵だ」

「もつたいたぶらんで、ちゃんと話さんか」

「男はNEXAの傭兵隊長だつた。そいつはある陰謀によつて味方の矢で殺されかけた。昭乃との決闘の最中にな」

「その男の名は？」

「熊楠一摩」

「！」

富谷の者たちは、昭乃の凶報にも劣らぬほど驚愕していた。

兵士たちはささやきあつ。

「まだ生きていたのか……」「狂犬すら避けて通る殺人機械だつたとか」「子供ばかり狙つていたらしいぜ？」「隊長はなんであんな奴のことを……」

バクは続けた。

「きつかけを作つたのはこの俺だ。俺は囚われとなつたルウ子を助けたいがために、昭乃をそそのかして外に連れ出した。死刑以外ならどんな罰でも受けつもりだ。その代わり、ルウ子と蚩はここに置いてやつてほしい」

「恥を知れ！」「貴様の問題だ！」「女どもは関係ねえだろー。」「

富谷衆から怒声が飛ぶ。

長は派手な咳払いをしてそれらを制した。

「あえて筋の通らぬことを言うからには、それだけの理由があるのだろうな？」

バクはうなずくと、マスター・ブレイカーとパワーショックの関係について語つた。

長老衆はその話に半信半疑だ。彼らはひそひそと議論をはじめた。

もしそれが事実だとすれば、ルウ子が権力者の手に渡ることは富谷にとって、否、地上の全生命にとって好ましくないことである。だが、その話を裏付けるものがいつたいじこにあるのか、と。

長老の一人が言った。

「文明を拒絶しているとはいへ、我々は科学について無知なわけではない。その、アルとかいう不可思議な存在を見ぬつちは、何一つ信じるわけにはいかんな」

ルウ子は口もとを緩め、そばにいた若い兵に手枷を見せた。

「とりあえず、ブラン中からケータイ出してくれる?」

若者は真っ赤になりながらも言つとおりにした。

「あつ！」

するとケータイは若者の手をするとと抜け、ルウ子のもとへ舞いもどつた。

騒然。

「じゃあ次。開けてみて」

若者は女の胸もとに吸いついたケータイを慎重に開いていった。中身は二十個の平たいキーと、猫の静止画だった。

若者は画面に顔を近づけていく。

と、アルは音量MAXで咆哮した。

「グワラアアアアー！」

「うああ！」

若者は腰を抜かした。

生まれて初めて猫を目にした室内犬のような怯えっぷりだ。

「彼がアルよ」

ルウ子が得意げに胸を突き出すと、アルは得意げに素性を語り出した。

長老衆はしかめ面でささやきあつた。

ルウ子は魔女にちがいない……と。

どうやら彼らは、アルそのものの存在は信じておらず、ルウ子が妙な術を使って幻影を生み出しているにすぎない、と考えているよ

うだ。それは無理もないことだつた。見慣れているバクでさえ、ときどきそう思いたくなるのだから。

やがて長は言った。

「バクのほうは後日、裁判にかける。連れて行け！」  
すかさずミーヤが言った。

「待つてください！ 昭乃さんは自分の意志で行くと決めたんです。私はそのとき一人と一緒にいました。だから、これはたしかなことです！」

「おまえが嘘を言つていないと、誰が証明できる？」  
ミーヤは魂を抜かれたような声で言った。

「防衛の全権を託した者の言葉を……信じないというのですか？」  
ミーヤはその後も食い下がつたが、長老衆は聞く耳持たなかつた。  
所詮、彼らにとつてミーヤは余所者の助つ人でしかないのだ。

長老衆は口々に言った。

「かつての師を慕つていたとはいえ……」「大敵をかばつて命を落とすなど、論外じや」「あればバクの作り話だ」「バクに謀殺されたのだ」

彼らはある意味、昭乃のことを人間扱いしていなかつた。彼女も一人の女であることを、この政治家たちは忘れてしまつてゐる。  
兵士たちはバクを連行していった。

ルウ子と強は、世に災いをもたらす魔女とその召使いとして、厳重な監視のもと、富谷で管理することになつた。

6月24日

もしかしたら昭乃は帰つてくるかもしれない。一縷の望みをかけ、裁きはのびのびとなつていたのだが、それに加えて村で唯一の医師が急逝、台風による川の氾濫、山賊の襲撃と凶事が相次いだため、バクの裁判は予定よりもひと月も遅れて、その日ようやく行われ

た。

富谷では長老会議も裁判も討論会も、大勢による話しあいはすべて『議事小屋』を使うことになっていた。そこは議事堂や法廷というよりも学校の教室に近く、演壇と演台が一つずつと、イスを壁に寄せて『口の字』状にならべただけの簡素なものだった。今回の場合は、演台の正面が傍聴席で、そこから向かって左が長老衆、右が被告の席だった。弁護人は存在しない。自分のことは自分で守るしかなかつた。

裁判長は空位だった。十年以上前から、適任者がいないという理由で長が代理を務めることになっている。裁判官は彼ただ一人だ。裁判長席につくべく、長が演壇に上がろうとしたときだった。

傍聴席から声があがつた。

「権力が集中しすぎている！」

百草林太郎。病で急逝した老医師に代わり、今月のはじめから正式に富谷の医師となつた。まだ衰弱から立ち直つてはいないものの、百草は車椅子を持ち出して裁判に臨んだ。

百草はその叫びを皮切りに、三権を独占する長老衆を痛烈に批判しあじめた。

傍聴していた村民の多くは百草を支持。不当な裁判だと騒ぎ出した。

『氣さくな性格の百草には味方が多かつた。長老だと臆してしまって、彼ならちよつとした悩みでも気軽に相談できると、村での評判を上げていたのだ。

村民たちの声。

「長老以外に裁判の務まる賢者なんかいたつけか？」「百草先生がいるじやろ」「先生を出せ！」「公平にやれ！」

長老衆は村人たちの騒ぎに負け、臨時の裁判長に百草を指名した。百草が壇上を中心にすると、ようやく裁判がはじまつた。

バクは富谷の絶対的守護神ともいえる昭乃の立場を充分に理解しておきながら、このたびのような所業に及んだ。長老衆は、侵入や

脱走と、バクは今回が初犯ではないことをしつこく強調した末に、当然死刑であると言い放った。それに対し、バクはひと言、裁判長に判断を任せるとだけ口にした。

百草は長老衆に言った。

「バクを死刑にすれば、昭乃君の後釜にミーヤを据えることは絶対に叶いません。よく考えてみてください。兄を殺された妹が、仇の地を命がけで守ろうとするでしょうか？ 一人は眞の兄妹ではないが、絆の深さは肉親以上のものがある。かつて同じアジトにいた私の実感です。ミーヤまでいなくなつてしまつたら、いつたい誰が富谷の防備を取りまとめるというのですか？」

すると長老の一人が叫んだ。

「賊上がりの裁判長など笑止！ 裁判ははじめからやり直しだ！」

だが、他の長老たちは互いに見あうだけで言葉がなかつた。百草の発言はそれほど効いたのだ。昭乃の後継者問題は切実だった。結局、長老衆は条件つきで、死刑の要求だけは取り下げるにした。バクは絞首を免れる代わりに、富谷からは永久追放となつた。ただし、ミーヤが新たな警備隊長となつて生涯ここで暮らすというのが絶対条件だ。

ミーヤは迷うことなくその条件をのみ、富谷に骨を埋める誓いを立てた。

バクは明朝、富谷を出なければならなくなつた。

夜遅く。

石造りの空き倉庫に放りこまれたバクは、藁山の上で眠れぬ夜をすごしていた。

天窓から差しこむかすかな星明かりを雲が隠していく。

バクは目を閉じた。

「俺の役目はここまでか」

錠が外れる音がして、鉄扉が少しづつ開いていった。

バクはあわてて身を起こした。

「あ、起きてた？」

入ってきたのはミーヤだった。ミーヤは後ろ手に扉を閉めると、戸口に立ち止まつたままじつとバクを見つめた。

「な、なにやつてる。見張りはどうした？」

「外の両脇に立つてゐるよ」

「は？」

「大丈夫。ちゃんと話、ついてるから」

長老衆は賊上がりのミーヤを疎んじていたが、村人たちは昭乃の妹分として彼女を密かに可愛がつていていた。判決はもう覆ることはなつたが、牢番たちは一人の気持ちを酌んで、ミーヤの捷破りに目をつけたのだった。

ミーヤは続けた。

「ルウ子さんから話は聞いた。どうしてあんな嘘ついたの？」

「そつとしといてやりたいからさ。富谷は昭乃に頼りすぎるからな

「そつか……そうだね」

それから二人は、お互ひ黙つたまま田をあわせられずにいた。しばらくして、ミーヤがつぶやいた。

「あたしはたぶん、一生ここから出られない

「メシだけはちゃんと食えよ」

そつけないバクに、ミーヤは暗い顔でうつむいた。

「バクは……いいの？」

「なにが？」

「もう会えないかもしねないんだよ？」

「そうだな」

「その前にしておきたいこと、ないの？」

「しておきたいことつて……」

バクは首をかしげた。

「もういい！ バクなんか誰もいない地の果てで、のたれ死んじゃえ！」

ミーヤはバクに背を向けた。

バクはミーヤの細い背中を見つめながら思つた。

もう一度と会えないのか。もう一度と……。

ミーヤとのつきあいはもう八年近くになるが、お互い見えなくな  
るほど離れることは滅多になかった。狩りのときはもちろん、食事  
のときも遊ぶときも寝るときさえも、ミーヤはいつもバクのそばに  
いた。それが当たり前だった。ミーヤの存在を意識したのは、昭乃  
に捕まつて富谷に軟禁された、あの時期がはじめてだつた。

空気のような存在……とはよく言うが、そうじやない。

彼女は水だ。

「！」

全身に電光が駆けめぐつた。

バクはすぐと立ち上がり、ミーヤを背中から抱きしめた。

「悪かった。俺はまだ自分の本当の気持ちと向きあつてなかつた」

「……」

ミーヤはバクの腕にそつと両手を添えた。

「ミーヤ。おまえは砂漠の水だ。見える所に置いておかないと気が  
すまない」

「！」

ミーヤはぎゅっとバクの腕を握りしめた。

「でもな、どうしても……その……ダメな理由があるんだ」  
「え？」

ミーヤはするりと体をまわしてバクを見上げた。

「あれはミーヤを拾つた日のことだ」

バクは八年前の話をした。

「その日、俺が属していた狩人チームは、配給品発掘品をごつそり  
抱えた一団を見つけた。先輩たちは逃げまどつ獲物を巧みに路地へ  
追いこんでいった。逃げ道を失つた地上人たちは命乞いをした。

俺はまだチームに入つて間もない駆け出しで、先輩の仕事を見る  
ことが最大の務めだつた。骨組みしか残つてないビルの支柱の陰で、  
連中が食料を分捕られていく場面を見守つていた。俺のそばには先

輩が一人ついていたが、予想以上の収穫があつたらしく、リーダーに呼び出されていった。『その柱、絶対さわん』ってひと言残してな。

解放された地上人たちは、恨めしい顔を残して路地を出でいった。だが、たつた一人だけ残つて抵抗を続ける奴がいた。まだ七つか八つくらいの女の子だ。その子は奪われた米袋にしがみつき、先輩の一人と揉みあつていた。そこに女の子の両親が駆けもどつてきて、娘を引きはがそうとした。女の子はそれでも抵抗を続けた。キレたリーダーは、その子を腹ごと蹴り飛ばした。それを見た俺は思わず前にのめり、支柱に肩をぶつけてしまった。

家畜の悲鳴みたいな音がして、鉄骨の雨が路地に降りそそいだ。俺たち狩人は素早く逃れたが、女の子は両親とともに瓦礫の下敷きになつた。狩りを終えた先輩たちは、獲物の死には目もくれず去つていった。だが、俺はそこからどうしても動けなかつた。瓦礫の山に近づいて、できる限り鉄屑をどけていった。潰れた死体が出てきた。じつとしていれば、こんなことにはならなかつた。俺が……殺したんだ

「バクはそこで口をつぐんだ。

ミーヤは心配そうにバクを見つめる。

「バク？」

「狩人の狩では過失での死は問われない。それは知つていた。だが、俺のルールの中にそんなものはなかつた。罪の意識に苛まれ、俺は泣いた。そのときだ。どこからか子供のうめき声が聞こえてきた。死体の下。さつきの女の子だ。俺は折り重なる二つの体をどうにかめくつた。その子は奇跡的に頭の小さな傷だけですんでいた。俺はその子を振り起こした。頭が痛いと言つたが、意識はしつかりしていた。そこまではよかつた」

「……」

「女の子はそばにあつた死体を見ると、ひどく怯えて俺にしがみついてきた。死体が誰なのか、その子にはわからなかつたんだ。顔は

それほど崩れてなかつたのにな。女の子は自分の愛称以外、なにも思い出せなかつた。その名はミーヤ、おまえのことだ。俺はミーヤを孤児にしてしまつた。責任を感じた。だから、地下に連れて一緒に暮らすことにした

そして……ミーヤの記憶はつこにじるとはなかつた。

「ふうう……」

話を聞き終えたミーヤは長い長いため息をついた。

「もうわかつただろう？ 俺はおまえの仇なんだ」

「バクのせいじやないよ」

「俺にできるせめの償いは、おまえを守り続けていくことだつた。おまえが誰かと幸せをつかむ、その日まで……」

「……」

「悔しいが……俺の役目はここまでだ」

「責任とか役目とか……そんなのビリでもいい」

ミーヤはふくれ面をした。

「ミーヤ……」

「必ずまた会うつて約束して」

「……」

「会えなければ、あたしは一生幸せになれないよ。さ、どうする？ バクとミーヤは見つめあつた。

「約束する」

二人は唇を寄せあい、藁山の上で身を重ねた。

その頃。黒船島。

ヌシは患者の世話を熊楠に任せ、居間の寝床で熟睡している。今どころ入院患者は昭乃しかいないため、夜の客間はいつも二人きりだつた。

熊楠は油の切れかけたランタンの替わりを持つべく、席を立つた。ベッドの昭乃は瞳をかすかに流し、それを見ているだけだ。

神経をやられて肩から下はびくりとも動かないものの、もとは強

鞠な体ゆえに、昭乃の傷の回復は驚くほど早かつた。ただ、意識のほうが今一つしつかりせず、なにか言つたと思つても意味が通らないことが多かつた。

熊楠は微笑んだ。

「安心しる。私はもうどこへも行かない」

部屋を出ようとしたとき、昭乃のすすり声が聞こえた。

「せつかく……せつかく願いが叶つたのに、こんな体じゃ……」

熊楠はハツとしてふり返つた。

「昭乃！ いつから正気に……」

「食事だつて、着替えだつて、手洗いだつて風呂だつて、一人じやなにもできやしない！」

「私に任せておけばいい」

「せめて一摩さんの手で……逝かせてください」

「バカなこと言うな！」

熊楠はランタンを脇に置くと、ベッドへ駆け寄り、少し細つた昭乃の手を取つた。

「おまえはまだ若い。治らないと決まつたわけじゃない」

「死にたいんです……」

「不自由な体はたしかに辛いだろう。だが、それでもまだできることがある」

「そういうことじやない！」

「じゃあなんだ！」

「……」

昭乃は顔を真つ赤にして歯がみみると、きいちなく顔を背けた。

「すまない……」

熊楠はうなだれた。

昭乃は潰れきつた浮き袋から最後の空氣を絞り出すよつて言つた。

「あなたにだけは……醜い姿をさらしくなかつた……」

「私は気にしていない」

「嫌なものは嫌なの！」

「そりが……すまなかつた」

熊楠は昭乃の手をそつと布団の中にしまつた。

介護を拒否されたことに落ちこんでいる暇はなかつた。明日あさつてにでも自分の代わりを見つけなければならぬ。ヌシは腰が悪く、床ずれしそうな患者を持ち上げることなど到底できない。島には女に飢えたケダモノしかいぬ。さて、どうしたものか……。熊楠が難しい顔をしていると、昭乃はぼそと言つた。

「ごめんなさい」

「うん?」

「一摩さんしかいな」ことはわかつてます

「でも、ダメなのだる?」

そのときランタンの燃料が切れ、部屋は闇に包まれた。

「私があなたに溶けてしまえば……少し、楽になれるかもしれません」

「!」

熊楠は息を呑み、さつと床に目を落とした。

昭乃は顔を背けたままだ。見つめられたわけでもないのに、そうせずにはいられなかつた。

「心が病んでいたとはいえ、私は子供に手をかけた男だ」

「一緒に稽古していた頃の一摩さんにもどつてくれた。私はそれだけで充分です。犯した罪は、あなた個人だけの問題じゃない」

「いや、あれは私の……」

「もし、富谷の村が世界のすべてだつたら、あなたは同じような罪を犯したでしようか?」

「……」

「一緒に考えましょ。子供を死なせない世の中のこと」

「昭乃……」

熊楠は昭乃の頬に手をやり、顔をこぢらへ向かせた。

女は瞳を閉じ、男は唇を寄せた。

その夜、ランタンの替えはもう必要なかつた。

6月25日

バクは朝日に目を細めながら、富谷闇のタラップを降りていった。警備兵たち、バクと親しかった農夫たちが、堤上でそれを見守っている。

バクが谷底に降り立つと、松葉杖を携えた百草が川辺の道端で一人待っていた。

見送り衆の中にミーヤの姿はなかつた。藁の上で目覚めたとき、バクはすでに孤独だつた。

バクは百草と別れの握手を交わした。

「先生。ミーヤのこと……頼みます」

「私の田の黒いうちは病気になどさせんよ。そんなことより、これから先どうするつもりだ？」

「……」

バクが返答に窮していると、何者かがタラップを伝う音が聞こえた。

「バーカ！ 一番大事な人を忘れてるわよ！」

ルウ子は数段を残して「とう！」と飛んで、科学忍者隊のようにな着地した。

「ひどいですよう。私たちを置いて……テテテ」

続いて蛍だ。口を開いたばかりに足が疎かとなり、最後の段を踏み外してすっ転んでいた。

魔女と召使いは終身、地下室に閉じこめておくはずだつた。ところが、一人の会話を聞いていた牢番が、長老衆にその内容を伝えると状況は一変した。ルウ子とアルは、富谷とNEXAの戦争の種になりかねない。そう判断した長老衆は、今朝になつて急遽二人を追放することにした。

バクはそれを担当の牢番から聞いていたが、ルウ子たちを迎えて

は行かなかつた。頭の中は一面、最果ての荒野だつた。今は誰とも  
関わりたくなかった。

ルウ子は堤上に向かつてひと言吐き捨てた。

「なーにが『ついでに出てつてくれ』よ。失礼しちゃうわー。」  
バクには一つ、はつきりさせたおかなければならないことがあつ  
た。

「ルウ子。悪いが俺にとつて一番大事な人は、あんたじやないんだ  
「昨日まではそうだつた。今日からはあ、た、し」ルウ子はいちい  
ち自分を指した。「いいわね？」

「キヤー、いきなり告白ですか？」

丸めた両手を口もとに寄せ、赤面する螢。

バクは一人を無視して百草に言つた。

「じゃあ、先生。まだどこかで」

バクは海へ通じる雑草道を一人歩いていく。

ルウ子は怒鳴つた。

「勘違いしないでよね！」

「……」

バクは立ち止まつた。

「もし逆転サヨナラを諦めてないんだつたら、自分が今なにをすべ  
きか、わかつてゐるはずよ」

「……」

「……」

「……？」

「……」

バクは半身で怒鳴つた。

「なにグズグズしてんだ！」

「なー？」ルウ子は一瞬言葉を失つたが、すぐに続けた。「それは  
こつちのセリフよ！ 自分の立場をハッキリ認めなさい！」

「どうか私を守つてください、つて素直に言えたら俺も認めてやる  
よー！」

バクは一人を後ろに置いたまま、すたすた歩き出した。

「ま、待ちなさい！　コラ！　バカア！」

ルウ子はギャーギャーわめきながらバクを追いかけていった。

「えと、えつと……」

蚩は去つていく一人と百草を激しく見比べていたが、百草に深く一礼すると、たたたたと駆けていった。

減勢池（滝つぼ）の横に一人取り残された百草は、頭をかいて苦笑した。

「まだどこかで……か。嫌なこと言つよなあ、まつたく」

バクたちは川沿いをひたすら歩いて海岸に出た。それからどこへ行くべきか決めかねていたところ、近くの漁港にヨットを一隻見つけた。例のシーメイド号だ。いつたい誰が回収したのかと、三人が眉をひそめていると、老いた漁師が近くを通りかかったのでヨットについて訊いてみた。偶然にも老人はシーメイドを昭乃にやつた、その人だった。

船はもともとは老人のものではなく、十数年前に統京湾を漂流していたところを彼が拾つたのだった。遺留品の特徴からおそらく船主は離島の者で、本土へ渡る途中、事故かなにかに遭つたのだろう、というのが仲間内での有力な説だつた。ともかく縁起が悪いということで、拾つた船はすっかり塗装し直し、名前も新たにシーメイド号とつけたのだった。

つい先日のこと、老人はまたもや湾を漂流していたシーメイドを拾つてしまつた。所詮、小手先の業では縁起の悪さは消えなかつたと、漁師たちは回収した船を近々部品取りのために解体するつもりだつた（バラせば悪運が分散するともいうのか）。

バクは縁起など、食うに困らない者に限つた迷信だと決めつけていた。せつかくの足を解体されではまずい。どう説得すべきか相談しようとしたところ、女どもの姿がなかつた。

二人は桟橋にいた。

茧が シーメイド の脇でしゃがみこみ、船体を調べている。

ルウ子はバクを呼んだ。

「ちょっと来て！」

バクは老漁師を連れて桟橋に出た。

茧は老人の許可を得てテッキに上ると、すぐさまキャビンへ入つていった。

「この傷……やつぱりそうだ！」

茧の籠もつた声。

「？」

バクとルウ子は顔を見あわせた。

茧はしばらくガサゴソと中を漁つてから出でてみると、老人に言った。

「この船は私の父のものです。解体を取り止め、私に返していただけませんか？」

「……」

老人は答えず、小指の先を使って耳の穴をほじりはじめた。

ウミネコが一羽、シーメイド のマストに止まつた。なにやら

興味深げに桟橋を見下ろしている。

老人は指についた垢をふつと吹き飛ばすと、言った。

「一つ、訊いてもいいかね？」

「はい」

「この船の本当の名を……」

「第18 幸助丸です」

「む！」老人はしわくちゃの臉を見開いた。「それは改装に立ち会つた者しか知らんはず……」

茧は船を降りると、どこから発掘したのか、錆びた六分儀を老人に手渡した。

老人はすり減つた刻銘を見ている。

「私のです。最後の航海では父のを使っていたので、これは私の宝箱にしまつてあつたんです」

老人は六分儀を蛍に返した。

「船主の娘が現れたのではしかたあるまい。なにをしでかす氣かは知らんが、ま、幸運を祈つとるよ」

老人はそう言い残して、どこかへ去つていった。

ルウ子は瞳に好奇の星々をまたかせて蛍に迫つた。

「訊きたいことが山ほどあるんだけどお？」

「え、えと……」

蛍は後ずさる。

ルウ子は迫る。

蛍は後ずさる。

ルウ子はさらに迫る。

蛍はさらに後ずさ……れずに桟橋から海へ落ちた。

バクが手を貸して蛍を救出。

ルウ子はため息をついた。

「なぜ船が要るのか。今日はそこまで我慢しようと  
す、すみません」蛍は濡れた顔を手で拭うと、続けた。「NEX  
Aは万が一の脱獄に備えて、事前に対策を立てていました。ルウ子  
さんの捜査網はすでに展開中と見るべきでしょう。相手は諜報のブ  
ロです。陸續きに逃げてもいざれ嗅ぎつけられる。私たちはすぐに  
でも本土から脱出すべきです」

バクは言った。

「本土を出たつて、俺たちの居場所なんかないだろ？」

蛍は険しい顔で言った。

「なければ作るまで！ です」

「どうやつて？」

「わ、私に任せてくれさい！」

「お、おう……」

バクはそれ以上なにも訊けなかつた。

蛍の周りの背景がもうもうと陽炎に揺らぐ反面、瞳の奥は一面の  
霜。あと一つでもなにか刺激をあたえたら、ショートしそうな感じ

だつた。

バクはルウ子を見た。

ルウ子はうなずいた。

今は虫に従うしかなさそうだ。

その頃。NEXA本部、局長室。

「大品に続く発電所なんだが」孫は革張りのイスに腰かけると、ノートパソコンの画面に日本地図を映し出した。「全国の放置発電所を同時に修復して、いちどきに電力網を復活させようと思つてね」

「それはまた、大きく出ましたね」

和藤は孫の背後から寄り添い、首筋から胸もとへ腕をまわした。「世界は日本を見捨てた。そのおかげでわが国は飢餓地獄を味わつたわけだが、実は悪いことばかりじやないんだ」

「国家機密を守ることがたやすくなつた?」

「その通り。問題はむしろ国内のほうにある」

孫は右手で和藤の艶<sup>つや</sup>やかな腕をさすつた。

「新政府の干渉が入る前に、NEXAの絶対的優位を固めたい」と

和藤は孫の頬に頬をすり寄せた。

「せつかくの『授かり物』だ。有効に使わないと罰があたるよ

「悪い人ね」

「我々を見捨てた連中ほどじゃないさ」

「きっと平賀先生もわかつてくれるわ」

二人は唇を重ねた。

和藤は訊いた。

「発電の利権を独占して、海外経済を破壊することは考えないのですか? そうなれば世界の貧窮は本格的なものに……」

孫は目を伏せた。

「私が一番恐れているのはね、人の恨みを買つことなんだよ。敵を増やせばそれだけ、維持すべき力も大きくなる。巨大な星の寿命が短いのはなぜか、考えたことはあるかね?」

「なるほど……」

和藤は何度も小さくうなづいた。

「世界はわが国に固い鎖を張ってくれた。我々はその中で大人しく技を磨いていようじゃないか」

「それがあなたのささやかな復讐】……なのですね？」

「どうしてもその言葉を使わねばならぬのなら、そういうことになるかな」

「あら？ この星印はなんですか？」

和藤はパソコン画面のある一点を指した。

「ああ、それか。修復の目処はついているんだが、一ヶ所だけ、このままでは機能を果たせない場所があつてね」

和藤は印のそばに書いてある問題点を見て、微笑んだ。

「簡単じゃないですか。穴を一つ、埋めるだけのことでしょう？」

「そう。簡単なことだ」

「でも、さつきの言葉とは矛盾しませんか？」

「なあに。電気を否定するような人間など、現代社会にひとつては存在しないのと同じだよ」

6月26日

シーメイド は昨夜のうちに統京湾を抜け、この日の午後、離島連盟の領海に近づこうとしていた。ヨットはそれまで順調に航海を続けてきたが、領海の境を目前にして浮標のよう<sup>ブイ</sup>に動けなくなってしまった。天候も風も申し分ないはずなのだが、肝心の艇長<sup>スキッパー</sup>がキャビンの隅っこで一人縮こまっているのだ。

ルウ子は「あたしが言つと、あの子は身を滅ぼしても従おうとするから……」と、バクをキャビンへ送り出し、自身は見張りとしてテッキに残つた。

蚩は床の上で膝を抱えたままふるえていた。

バクはその隣にすわつた。そこまではよかつたのだが、なにか言えがかえつて傷口を広げてしまいそうで、なかなか声をかけられずにいた。蚩の顔色をちらちらとうがいながら、どうしたものかと悩んだ末、バクは手を動かした。蚩の片腕<sup>片腕</sup>をすうつと下へなでていき、連結器のように固く組んでいた手を解いていった。

すると蚩はその手をぎゅうと握り、ようやく口を開いた。

「「めんなさい」……私、ルウ子さんを守るつて誓つたのに……」「その……どうしても嫌なら、引き返してもいいんだぜ？ 誰にだつて触れられたくない過去はある」

「ううん」蚩はかぶりをふつた。「島には必ず行きます。少しだけ、

時間<sup>時間</sup>をください

蚩は故郷の富根島<sup>みやねじま</sup>……この先にある伊舞諸島の一つ……を出たときの話をした。

「今からちょうど十一年前のことです。私はそのとき十六。漁師の一人娘です。離島連盟に加入して以来、富根島の人々は大きなトラブルもなく、穏やかな日々をすごしていました。ところがある日、

港近くの倉庫にあつた大量の加工魚肉が忽然と消えたんです。それまでの数年、不漁と不作が続き、島の食料備蓄は底をつきかけていました。

『誰かが独り占めにしたにちがいない』……どこからともなく、そんな噂が広がっていました。島の周囲は要塞化されていて、海では離島海軍が警戒の網を張っています。外部からの侵入はほぼあり得ない。疑いの目はまず倉庫の管理者に向けられました。狭い島ではなにも隠しようがなく、彼らはシロでした。次は船の所有者です。大きな荷を外に持ち出せるのは海軍か漁師しかいない。海軍の人たちは一人の漁師を疑っていました。朝靄に紛れ領海の外でなにか捨ててているのを見たと。

そこで私の父は正直に名乗り出ました。倉庫から加工食品の一部を持ち出し、無人島に捨てたのはたしかに自分であると。でもそれは、病気に汚染された禁漁区域のものだと気づいたからです。父は力説しました。『こういうミスは稀にあるし、故意じやないこともわかつてている。だから不問にしたかった。問題のない食品にはいつさい手を触れていない』と。

それでも、海軍は執拗に父を攻撃しました。決め手の証拠……大量の無害な食品が見つからないにもかかわらず、犯人は父に決まっているというんです。とはいえ、彼らに島民を裁く権限はなく、その後は表立つて干渉してくることはありませんでした

蛍が一息つくと、バクは言った。

「危ないところだつたな」

「いいえ。問題はここからです。海軍が去つた後、島人たちは松下家との関わりを避けるようになつていきました。特に学校はひどかつた。島の学校は小さく、全員が顔見知りです。そんな環境で無視され続けることは、多感な年頃だつた私にとってなにより耐えがたい苦痛でした。絶海の孤島に一人取り残されるほうがまだよかつた」「逃げ道はなかつたのか?」

「はい。転校しようにも学校は島に一つだけ。退学して独自に勉強

を進めようとしても、通信教育などは存在せず、島に存在する書物のほとんどは学校の図書館の中でした」

「……」

「富谷と同じ理由で、離島の人口規制は厳しいものです。火山が噴火するか疫病でも流行らない限り、他の島へ移住することはできません。両親は私の将来を考え、離島連盟を出る決意をしました。出航の日のことを思い出すと、今でも胸が痛くなります。船には卑劣な落書き。背中に浴びる島民の罵声……」

茧はそこで息をつまらせ、両手を胸に重ねた。

「だ、大丈夫か？」

バクは茧の背中に手を添えた。

「す、すみません……」

茧は息を整えると、話を続けた。

「船はやがて統京湾に入りました。松下家の悲運はここまで。漁師としてどこかの海岸に潜りこめばきっとうまくやつていける。本土の戸籍がないから学校へはやれないけれど、島に比べたら自慢する機会はいくらでもある。三人でそんな話をしていたときです。気がつくと三隻の帆船がこのワットを包囲していました。海賊です」

「ああ……」

バクは話の結末がなんとなく見えてきた。

「逃げ場がないと察した両親は娘、つまり私の命だけは助けてくれるよう海賊の船長に嘆願しました。船長は『約束は守り』と言つて、そばにいた赤髪の少年に田配せした。そして……」

茧は両手で顔を覆つ。

「茧？」

茧はその手をどけると、水浸しの顔で叫んだ。

「少年はこちらの船に飛び移ると、長刀を抜き、いきなり両親の首を切り落としたんです！ 私の目の前で！」

「……」

バクは茧の肩をしつかと抱いた。

蛍は泣きすすりながらも、続けた。

「少年には罪の意識の欠片もない。むしろ誇らしげに、刀についた血を拭っていました。私はあまりのショックで泣くことも叫ぶこともできず、気を失つてしまつた……。ふと目を覚ますと、そこは海賊たちの船室。私は磔にされ酒宴の中心にいました。たしかに船長は約束を守つた。でも、それは海賊特有の屁理屈だつたんです。船長は私を人身売買にかけようとしていました。若く豊満な女は高く売れると」

バクは怒りと蔑みと諦めの念をこめ、言つた。

「それが海賊だからな」

「やがて船員たちは酔いつぶれて寝てしまいました。でも一人だけ、途中で酒宴を抜けた者がいました。赤髪の少年です。彼はこのチャンスを待つていました。『孕ませて商品価値を下げたらその場で処刑だ』という船長の厳命など無視して。私は両親の死と体を弄ばれた屈辱に耐えきれず、舌を噛み切つとしました。そのときです。海のほうから少女の怒鳴り声が聞こえました」

「ま、まさか……」

「はい。ルウ子さんです。『こり、そこ一つ！ 調査の邪魔！』と

「ルウ子の奴……」

偶然の一致なのか、それとも演出なのか、そこがよくわからない。

「一度は捨てようとした命。私は残りの人生をルウ子さんに捧げることにしました」

かくして蛍はルウ子の陰の従者となつた。

壮絶な過去と真正面から向きあつてみせた蛍。バクは彼女に大きな拍手を送つてやりたい気分だつた。だが、同時に大きな不安も生まれていた。蛍はたつた今、持ちあわせの精気を使い果たしてしまつたのでは？ そんな状態でこの先に待ち受ける難関に立ち向かえるのか？

蛍はほんのり頬を染めて言つた。

「その……バク君。ちょっとだけ……いいかな」

「え？」

バクがきょとんとしていると、蛍はいきなりバクの胸に顔をつづめた。

「！」

バクはのぼせた。

少しだしてそれが落ち着くと、蛍の背中にそっと腕をまわした。一人はしばらくそのまま寄り添っていた。お互いどうを見るところとも、なにを話すといふこともなく。

やがて蛍はすぐと立ち上がり、照れ笑いを浮かべた。

「えへへ。チャージ終了です」

「あ、あの……」

バクは一つ釘をさそうとした。

「わかつてます。」「めんなさい。ありがとうございます」

蛍は微笑むと、駆け足でキャビンを出て行った。

バクはそれを田で追いつつ、ふつと口もとを緩めた。

「ま、いつか……」

離島連盟の領海に入つて間もなく、辺りを警備していた武装帆船が近づいてきた。船長らしき虎鬚男が巨大なメガホンで停船命令を告げる。離島海軍の一将、大村猛だ。

デッキにいたバクは、せつせと帆を引き下ろしていく。

大村はニヤと黄ばんだ歯を見せた。

「誰かと思えば、昭乃の子分の……」笑顔が消え、眉をひそめる。

「あー、なんてつたつけ？」

「バクだ」

「そうよ、バクだ。昭乃は元気か？」

「ん……ああ、それなりにな」

「隣の変ちきりんな頭の嬢ちゃん」大村はルウ子に田を移すと、首をかしげた。「どつかで見たことあるんだが……」

「髪がのびたのよ」

ルウ子は黒縁のメガネをかけてみせた。

中途半端な長さの竜巻毛に、白黒どつちつかずのプリン頭。ルウ子は往年の輝きをすっかり失っていた。

「ああ、昭乃の後輩の……」

大村はそれだけ言つて、ど忘れをごまかすようにガハハと笑いをふりました。

そのとき、バクの陰からひょいと蛍が顔をのぞかせた。大村はメガホンを取り落とした。それに気づかないまま蛍を凝視している。

「あ、あんたは……」

「松下の娘です」

「な、なにしに帰つてきた。復讐か？」

「復讐？ 復讐されるようなことをしたんですか？」

「あんたらを……島から追い出す形になつちました」

大村の額や頬が汗で光りはじめた。

「私の父は潔白です。汚染された食品を持ち出したのはたしかに父ですが、それ以外の健全なものは他の誰かが……」

蛍がそこまで言つたとき、大村の部下の何人かがさりげなく弓に手をかけた。

それを見たバクは、後ろ手にナイフを抜いた。

「バク君、待つて……」

蛍はささやくと、大村に向き直つた。

「他の誰かがやつたことにまちがいはない。ですが、私が今日帰つてきたのは、真犯人を突き止めるためではありません」

海の戦士たちは顔を見あつている。

大村は訊いた。

「どういう、ことだ？」

「一つ、お願ひがあります。なにも訊かず、私たちを富根島に入れてください」

「そ、そんなことは俺の一存じや決められ……」

「……」

蛍は瞬きもせず、大村の目をじっと見続けた。

波のせいなのだろうか。横綱のように腰の重そうな大村が一瞬よろめいた。少なくともバクの目にはそう映った。

「わかった。俺に任せろ」

6月27日

バク一行は驚くほどあっけなく、富根島の新たな家族として迎え入れられた。大村の取り計らいだけでそうなったわけではない。蛍の父は真犯人ではないと、島人たちは薄々感づいていた。一度できあがつてしまつた松下家を忌む島の空気。自力ではそれをふり払うことができず、最後には一家を島から追い出す形にしてしまつた。松下親子が島を去つてから、島人たちはそのことをずっと気に病んできたのだった。蛍の両親が海賊に殺されたと知ると、人々は泣き崩れた。

6月30日

バクたちは近隣住民の協力を得て、火山の麓に広がる林の中に丸太小屋を建てた。集落へ行けば蛍の実家が残っているのだが、もともと古い上に十二年間も無人だったせいで傷みがひどく、倒壊の危険があった。いつたん壊して建て直す手もあつたが、重要な作戦会議中に「白菜余ったから食べなされ」などと、婆さんに勝手に入つてこられて困る。

かくして、バクとルウ子と蛍は、人里離れた閑居で再起を図ることになった。

8月20日

なにしろここは離島の山の中である。

本土の情報から疎くなるという心配は常にあった。電気が豊富な環境では、恐ろしいほどのスピードで時代が変わっていくものだ。一年前の湧水が今日の大河。パワーショック以前は、そんなこともさして珍しいことではなかった。

バクたちは毎日のように作戦会議を重ねた。その内容はたいてい、孫とルウ子の戦力差についての議論だった。孫は政治家を裏で操つて莫大な予算を取りつけ、全国に支部を設け、傭兵軍団を有し、コンピューターまで扱いはじめた。一方、こちらは利用額に上限のある地域通貨、味方はまだ三名のみで、手持ちの刀剣しかなく、計算機といえばそろばんだ。

これでは最初から勝負にならない……と思われたが、バクたちには一つだけ救いがあった。アルと二コだ。

二コは孫の目を盗んでは、アルにメールを送っていた。メールといつても、アルと二コの間でしか通じない独特なやり取りなので、NEXAは情報が漏れていることなど知る由もなかった。ただし、二コがメールを送信できるのは、孫がケータイを閉じている時間に限られていた。メール作成時にどうしてもその画面を消すことができず、バレる恐れがあるというのだ。孫は好奇心が強いのかそれとも疑っているのか、よほど邪魔にならない限りケータイを閉じようとしなかった。

それでも、二コからの新しい情報は断続的に届いた。

NEXAは産業遺産と化していた全国の放置発電所を修復し、電力網を整備はじめた。その裏では、国勢情報を海外にもたらそうとする不穏分子たちを徹底的に消していく。孫は内に秘めていた構想をついに実行に移したのだ。世界が日本を思い出したときにはもう、埋めようのない文明の差ができるがっているというわけだ。

構想が実現すれば、たしかに日本は豊かになる。その一方、他の国は相変わらず不便や飢餓や争乱に満ちた苦難の時代が続くことになる。世界の人々は一国で利便を貪る日本を非難するだろう。とはいえ、すでに築かれた千尋の壁を前に手も足も出ない。人々はかつて日本を見捨てたことを、幾世代にも渡つて後悔し続けることになる。

これが孫の『ささやかな復讐』の全貌だ。億万の飢えた目に見つめられながら、一人ふくぶく太つていいくことなど、孫本人はともかく、まともな国民であれば耐えられるわけがない。バクたちは怒りにふるえた。

このように、遠く離れていても敵情を把握できるのは有り難いことなのだが、それは強大化していくNEXAと、相変わらずの三人との、較差の広がりを思い知らされることでもあった。

バクたちに残された最後の希望……離島連盟。

果たしてバクたちは、強力な海軍を擁する連盟を動かすことができるのか？

2047年1月6日

バクたちが富根島にやつてきてから半年がすぎた。

離島連盟の住民は、本土の情勢にあまり関心がないようだつた。連盟はコミュニティーと同様、本土や外国にいつさい頼らない自給自足社会なのだが、富谷とは決定的にちがう点があつた。離島と本土を隔てる海洋だ。そこを繩張りとするのが近海最強を誇る離島海軍。この理想郷が内外から脅かされる心配は、今のところ皆無といつてよかつた。

バクたちは親しくなつた島人たちを公民館に集め、NEXAの脅威について何度も説いた。島人たちの反応は冷ややかなものだつた。日本が恨まれようが世界が飢えようが、自国の問題は自国で解決し

てもらいたい。自分たちは島の環境や生活を維持することで精一杯なのだ、と。それは島人の総意といっても過言ではなかつた。

バクたちは講演をするたびに落ちこんだ。この半年、NEXAの暴挙を阻止するための作戦は何一つ煮つまつていない。仲間を増やさないことには、現実的な作戦の立てようがなかつた。

その日の夜。丸太小屋。

ランタンを据えたちやぶ台を囲み、三人が討論しているときだつた。

アルが大きくしゃみをした。二コからメールが入つたのだ。内容を読み終えたルウ子は、すぐと立ち上がりてケータイを閉じた。

いつもと空気がちがう。

そう感じたバクは、すかさずルウ子に言つた。

「二コからのメールは隠さない約束じゃなかつたのか？」

ルウ子は人差し指を立てた。

「ルールの第一、忘れてないでしようね？」

「NEXAに関わる事件が起きたときは、問答無用」

つまり、黙つてリーダーの指示に従えといふことだ。

「よろしい」

ルウ子はケータイを開くと、画面に映つた文章を一人に見せた。

「！」

バクは全身の毛穴から体中の水分が抜けていく感覚に襲われた。

「ああ……」

蚩は両手で顔を覆つた。

「嘘だ」

バクは画面から目を逸らした。

ルウ子は低く言つた。

「認めたくないのはあんただけじやない」

「嘘だ」

「でも、二二七は孫が受けた報告をそのままいつぱに流してゐる」

「嘘だ」

「良くも悪くも信頼できる情報源なのよ」

「嘘だ」

「バク……」

「嘘だ」

「バクはすぐと立ち上ると、正口のほうへ足を向けた。

「あそこはもう、あんたの知つてゐる場所じゃないのよ」

「……」

「バクはふり向きもせず、ドアノブに手をかけた。

「バク！」

「バクはドアを開ける。

するとルウ子は壁にかかっていた短槍をさつと手にした。  
それを見ていた螢は叫んだ。

「ルウ子さん！ な、なにを……あああ！」

1月5日

二二七のメールがバクたちに届く前日。富谷関。

堤上にミーヤ率いる警備隊。堤下にシバ率いる傭兵軍団。片や二二七、片や小銃をかまえ、二つの勢力は対峙していた。

軍団の後方に立つ赤髪の男は、谷底で地鳴りをあげた。

「黙つてそこを譲り渡すんなら、住民の安全は保証してやるぜ！」  
隊の中央に立つおさげの女は、天空で雷鳴をあげた。

「ふざけるな！ ここは我々の土地だ！」

「土いじりがしてえンなら、別にそこじやなくたつていいインだろ？」「水没していった土地を一から耕し、村民を養えるだけの豊かな土地にするまで、いつたいどれ程の苦労があつたか。あんたにはわから  
ないでしょうね！」

「わからんねえなあ」シバは笑つた。「つたく、困んだよなあ。あんたらがどいてくんねえと、何万つづつ国民様が迷惑するんだがなあ！」

「何万のためなら、一千の民はどうなつてもいにいっていいの？」

「そんなこたア言つてねえ。あんたらがキツイのはほんの一、三年さ。あとは万事 NEXA 様にまかせときや、昔はそんな苦労もあつたなアつて笑つて語りえるよつになる。お互に賢く生きのびよつぜ！ な？」

「外道の犬」ときとなれあう筋合いなどない！ 今すぐ立ち去れ！」

シバは声をひそめて笑つた。

「クク……若いな」

シバは部下の男に目配せした。

男は銃口をミーヤに向け、小銃のトリガーを引いた。

ミーヤは透明な盾をさつとかかげ、これを跳ね返した。

かつての機動隊が使つていた防弾盾だ。こつしごともあるかど、ミーヤは部下を定期的に闇市へ送つていた。長老衆の目を盗んでのことなので、こつしごと文明武装は数えるほどしか集められなかつた。

「総員……」

ミーヤは失意に沈んだ声で命じかけた。

隊長がこれでは、味方の士気に鬱わる。

ミーヤは自分で落とした影をふり払つよつに叫んだ。

「迎え撃て！」

戦力は正規兵に農民が加わつた富谷勢が十倍以上勝つていた。それにもかかわらず、富谷関での攻防は互角だつた。なにしろ弓対銃だ。威力差は言つまでもない。三十メートルといつ壁の高さを活かし、むしろ富谷勢のほうが『健闘』したといえる。

だが、富谷関下に陣取つたシバ隊は陽動にすぎなかつた。山に入つた別働隊が例の取水管、つまり間道を見つけ出して内部へ侵入、

小銃を乱射して刀剣の守備兵を圧倒した。さらに居住地区へ押し入り、長をはじめとする長老衆を人質に取つた。急所を突かれた富谷の民は戦意喪失で総崩れとなり、長は全面降伏を申し出た。

NEXA軍は富谷の全住民に即刻退去を命じた。

富谷の生き残りが土地を去つていく中、ただ一人広場の中心に残された者がいた。ミーヤだ。彼女は『NEXAの寛大な条件を聞き入れず、多くの住民の命を奪つた』という罪で、シバが死刑を宣告した。

磔にされたミーヤは、葬列のように沈んだ富谷の民を悲しげに見送っていた。

退去の列はミーヤの哀れな姿を田にしつつも、一糸乱れることなく富谷関のほうへ続いていた。不服を言えば即銃殺だと兵士たちが脅していたのだ。

長蛇の末尾が広場の彼方に震んできた頃、ミーヤの正面にいた五名の小銃隊がかまえた。

シバは隊の背後に歩を進めると、言つた。

「なにか言い残すことは？」

ミーヤは頭をたれたまま言つた。

「バク……『じめん……あたし、約束守れなかつた』  
『殺れ！』  
」

小銃隊はいっせいにトリガーハンドルを引いた。

1月12日

「さてどうしたものか

ペン先のように尖つた岬の先端。みぞれがちらつく中、百草は一人腕を組み、白い息を吐いた。

海の向こう手の届きそうなところに、ベイエリアの象徴、ミライマークタワーが見える。かつては観光やビジネスで賑わつたらしく

が、現在は家を失つた地上人のスラムマンションと化していた。不法居住ではあるが賊ではないので、新政府は問題を放置していた。船があればそこまで三時間とかからないはずだが、あいにく海岸には和船一つ転がっていない。

富谷を追い出された村人たちは、運を天にまかせて日本各地へ散つていった。集団でいても食料が確保できないのだ。自分のことは自分でなんとかするしかなかつた。

行き先を考えている最中、百草は背後に入る気配を感じた。

「手を挙げな！ それからゆつくりこつちを向け」

男の声に百草は従つた。

小柄ながらも頑強そうな、蓬髪の男が短弓をかまえていた。

百草は臆せず言つた。

「海賊か。残念ながら私は今、なにも持ちあわせていない。住んでいた村が滅ぼされてしまったのでね」

「海賊と一緒にするんじゃねえ。ペリー商会だ」

「いざれにしても、私にはなにもない。この干からびた肉でも食つかね？」

百草は微笑むと、片方の袖をまくつた。

髪がちな男はかまえを解くと、真顔で言つた。

「あんた、医者だろ？」

百草は笑みを消した。

「なぜわかつた？」

「匂いだ。あんたからはヌシと同じ、消毒の匂いがする」

「ヌシとは？」

「あの島が見えるか？」

男は対岸の少し手前にある、海面のわずかな隆起を指した。

「黒船島……君たちのアジトだろ？？」

「ヌシの隠居は俺たちが守る。ヌシは俺たちの治療をする。仲間じやねえが、島には欠かせねえ男だ。そいつが病で倒れちまつた。長くはねえと、ヌシは自分で診ていて。そこでだ」

「ペリー商会は彼の後継者を探している、と？」

「話が早いな」

百草はため息をついた。

「もう誰かの後任はたくさんだよ」

「嫌とは言わせねえ」

男は再び百草に狙いをつけた。

「一つ忠告しておこう。こんなことは過去に何度もあった。限界集落、バラック街、地下賊アジト、『ミコニティー』……私はそのたびに後任を引き受けってきた。だが、私が就いた土地はことごとく数年で滅んだ。私は筋金入りの疫病神なのだ」

男は急に威勢をなくし、うめくように言つた。

「そのよ……麻薬をよ……切らしけまつてよ……」

「……」

百草はそれだけで男の言わんとすることがわかつた。この男は又シとやらを、せめて苦痛だけでも……と思つていたのだが、仲間どもが快樂のために使いきつてしまつたのだ。

男は弓を放り出すと砂地に正座し、頭をたれた。

「頼む」

男の頭や肩、太腿にシャーベットの山ができあがつていぐ。潮が満ちてきて、男の膝下を冷たく濡らした。

それでも男は地蔵のように動かない。

百草は負けた。

「死んでも医者はやらないと決めていたんだが……」そこで長いため息をつくと、急に笑いがこみ上げてきた。「私のあらゆる細胞に仁術をすりこんだ、かつての師を呪いたい気分だよ」

男は顔を上げた。

「来て、くれるのか？」

「百草林太郎だ」

百草は手を差し出した。

「タチつてんだ」

タチはその手を取つて立ち上がると、海のほうへ会図を送つた。

ペリー・商会の帆船が近づいてきた。

百草とタチは黒船島へ急いだ。

百草がヌシの家に駆けつけたとき、タチの労もむなしく、ヌシはすでに危篤だつた。

ベッドの周りでは、ペリー・商会の厳つい面々が肩を落としている。百草は意識ながばのしわくちゃの老人を見て愕然とした。

「先生！ 孫先生じゃないですか！」

「だ、誰だ……その名はどうの昔に捨て……」

ヌシはむせながら片田を開けた。

「私ですよ！ 百草です！」

「ああ、忘却小僧か。教えたことを片つ端から忘れおつて……」

「一番大事なことだけは忘れてませんよ」

「ならばよろしい。医師としての建前はな」

「えつ？」

「小僧、家庭は持つたのか？」

「一度ほど」

「過去形か」

「子を作る間もなく、妻は一人とも疫病で……」

「その二人は最期、笑顔だつたか？」

「は、はい……」

「ならば万事よろしい」ヌシは微笑んだ。「身内すら幸せにできんようでは、赤の他人を救う資格などない」

「おつしやる通りだと思います」

「実はな」ヌシの笑みが陰つた。「情けないことこ、言つた当の本人がそれを守れておらん。これから起つてゐるうつ災いは、すべてこの私が発端なのだ」

話し疲れたのか、ヌシは苦しそうに田を細めた。

「それはどうい……」

「私の本名を言ってみろ」

「孫登馬先生です」

「NEXAのトップは誰だ?」

「孫……えつ！？ まさか……」

「良い医師は育てた。だが、家庭は疎かにしてしまった。それが……」

「心残り……だ」

ヌシはそこで息を引き取つた。

葬儀の後、百草は黒船島の二代目『ヌシ』を襲名した。

1月20日

百草は海賊の医者となり、ヌシの家を引き継ぐことになった。

悪徳ペリー商会の片棒を担ぐ形になってしまったのは甚だ不本意だが、片足引きずつた人権のない老人では、孤独にさすらついても野良犬の餌になるだけだろう。悪党に落ちぶれたことに悩むより、今はともかく昭乃のリハビリだ。わが師はサジを投げたが、諦めるのはまだ早い。

客間のドアを開けると、昭乃は寝床で退屈そうにしていた。百草は昭乃を車椅子に乗せ、広場を散歩することにした。

冬のただ中だというのに、厚着では汗ばむほど陽気だ。いつたい何時になつたらこの天候不順は収まるのだろう。それはともかく、昭乃は私の訪島以来、目があつたびになにか訊きたそうな顔をしていた。一方、私はこの一週間『ヌシ』をめぐる騒動で多忙を極めていた。処理すべき問題はおおかた片づいた。今日は話すのにいい日和だ。

百草は車椅子を止めると、口を開いた。

「なぜ私一人だけがこの島にやってきたのか。そう訊きたいんだろう？」

「…」

昭乃はさつと首を横に向けた。

さつとふり返りたかったのだろうが、その体では無理だ。

百草は手押しハンドルから手を放すと、昭乃の正面にまわった。

「それを話す前に一つ訊きたい。私の助手はどこへ行つてしまつたんだ？」

「私、夢を見ました」

「夢？」

「日の出の方角にあるどこかの谷が、洪水で水浸しになるんです。水浸しといつよつ、湖か」

「…」

「それがなにを予知したものなのか、私はどつしてもたしかめたくて、彼に様子を見に行つてもらつたんです」

「富谷へ、かね？」

「はい」

「熊楠君のことはバクから聞いているが、それらしき男の姿は見かけなかつたな」

「きつとなにかトラブルを抱えているのでしよう。そのつゝ帰つてくると思います」

「わかるのかい？」

「彼の鬪氣はほとんど衰えていません。大丈夫です」

昭乃は寝たきりとなつてから、五感以外の感覚が発達するようになつたといつ。ただ残念なことに、キャッチできるのは熊楠の氣だけだつた。

医師としては信じがたいものがあつたが、万能ではないといふが逆に信用できそつだと、百草は思つた。

「ともかく、無事なら結構」

「心の準備はできています。知つてることを教えてください」

百草はバクとルウ子の追放から富谷の滅亡までを語つた。

昭乃は怒りや沈痛の面持ちをときどき見せたものの、彼女にして

は落ち着いた様子で聞いていた。

「村人の多くは生き残った。それだけでも救いです。彼らはたくさん  
しいから、土さえあればきっと、どこででもやつていける」

「うむ。私もそう思いたい」

「それで……その」

昭乃は口ノもつた。

「うん?」

「ミーヤは一緒にやなかつたんですか? 地下の頃からの仲なん  
じょう?」

「……」

百草は背を向けた。

「……」

昭乃は百草の背中を田で射る。

百草はこらえきれず、空を仰いだ。

「処刑されたそうだ」

「!」

昭乃はがくと氣を失った。

1月22日

寝息を立てる昭乃を背に、百草は降りしきる雪を見つめていた。昭乃はあれからまる一日も眠り続いている。熊楠の歪みきつた過去は愛の力で受け入れたが、自分の身代わりに誰かが命を落としたことには耐えられなかつたのだろう。それが赤の他人ならまだしも、ミーヤは自分の可愛い妹分であり、弟分のバクにとつてはこの世のどんな物事にも代え難い、まさに掌中の珠といえる存在なのだ。

百草は窓ガラスにゴツと額をぶつけ、声を殺してむせび入った。

「すまん……バク」

4月11日

富谷陥落の報から三ヶ月。

バクは未だ悲しみの深海に沈んだままだった。ルウ子にやられた足の槍傷はすっかり癒えたにもかかわらず、バクは寝床から起き上がるこさえままならなかつた。

茧がどんなに言葉を尽くして慰めても、バクはいつさい聞く耳持たなかつた。日々小屋に引きこもり、「生きる意味がなくなつた」と口にするばかり。彼が夢見る飢餓なき未来社会とは、ミーヤが健在であることが第一前提なのだ。

バクから目を離すな。ルウ子の厳命があつた。

茧はなにをおいてもその指示を優先した。

小屋には縄も手斧も鎌もあり、外に出れば断崖から火口まである。バクは歩きまわる気力さえないようだが、しばらくの間はむしろそのほうがいい。下手に元気づけても、もどったエネルギーを負の方に向にしか使わないうだらうから。

今、彼に必要なのは、励ましでも薬でも本土の情報でもなく、穏やかにすぎていく時間だった。砂の城に閉じこめられた小さな囚人を救うためには、城が崩れぬよう少しづつ少しづつ砂をくついくしかない。

一方、ルウ子は小屋から遠く離れた畠で一人汗を流していた。バクが倒れて以来、ルウ子は普段の三倍働くかなければならなかつた。

離島連盟は富谷コミニティーとちがつて完全なる共同社会ではない。なんでも金で解決というわけにはいかないが、一文無しとうわけにもいかない。土地も漁業権もない、イレギュラーな新参者がこの島で生計を立てていくには、農家や牧場でバイトするか、あるいは漁師の下で働くしかなかつた。

じうしている間にも、孫は着々と計画を進めている。孫がなぜ富

谷を狙つたのか、ルウ子にはわかつていた。あそこは元々は水力発電所なのだ。昨日の一回の報告によれば、NEXAはダムの壁に空いていた穴を埋め、谷に水を張つてゐる最中のこと。電力網の復活はルウ子の悲願でもあつたが、住民を強引に追い払つて農村を没させたり、日本でしか発電できないのをいいことに『逆鎮国』に甘んじていようなど、到底許せるものではない。

ルウ子は持つてゐた鍬を足もとの黒土に突き刺し、青ざめる空を仰いだ。

「こんなことしてゐる場合じゃないのに……

ルウ子は堆肥や家畜にまみれ、好機をただ待つことしかできなかつた。

バクは光扁かぬ海底に伏し、心の梁をきしらす水圧をひたすら受け続けた。

蚩はバクの看病に疲れ、高熱で倒れることもしばしばあつた。三者三様、それぞれの歯がゆい思いに苦しむ日々は、それから実に一年も続いた。

2049年4月11日

バクは来月で二十一を迎えるとしていた。

ミーヤのことは一日たりとも頭を離れることはなかつたが、体を蝕むほどの憂鬱さは時とともに薄れていつた。いつまでもルウ子一人に働かせるわけにはいかないと、今年の正月から、バクは畠とともに農畜のバイトに復帰していた。

その日、三人がちやぶ台を囲んで朝食を取つていると、二コから新たな一報が入つた。

NEXAはついに日本の電力網を復活させた。

わずか一年……ルウ子が局長の頃に二十年はかかると見こんでいた事業を、孫はわずか二年で達成してみせたのだった。

国家的な大工事が進んだ裏には、常に孫の策謀の糸がからみついていた。孫はこの事業を進める裏で、マスコミの掌握に全力を注いだ。ここ数年の間に新聞社の重役が相次いで入れ替わつたり、有能な記者の『事故死』が頻発したのは、彼の手によるものだった。配給の不足や不公平をめぐり、政府と国民の間には積年の軋轢があつた。孫は情報を巧みに操つてこの摩擦をさらに煽り、電気の復活に期待する国民を片つ端から味方につけていた。

NEXAの独走を批判する政治家がことごとく落選し、あるいは買収され、あるいは消されていくと、この国の舵輪はもはや孫英次の思うがままだつた。

その日、孫は記者会見で語つた。

「パワーショック。それは我々人類に対し、言語道断の苦悩をもたらしてきました。これほどわけのわからない、これほど腸をねじ切られるような災いが、過去数百万年の人類史にあつたでしょうか？」

しかし、そこからも学ぶことはあつたのです。食糧自給率は四割に、エネルギー自給率に至つては一割に満たなかつた日本。世界がわが国を内心ではどういう目で見ていたか、この間の号外記事でよくおわかりいただけたと思います。

逆鎖国？ 望むところぢやないですか。我々だけが再び電気を手にした。彼らとはちがうのです。孤独を悲しむ必要はありません。我々日本国民は、科学文明の正直な継承者として、神々に選ばれたのですから」

この会見の内容が海外で報じられたことはなかつた。NEXAはこの国に忍びこんでいた諜報員やジャーナリストなど、あらゆる不穏分子の完封に成功していた。

二コのメールを読み終えたルウ子は、頬張つていた米粒とともに怒声を発射した。

「戦時中よりタチが悪いわ！」

「……」

バクは迷惑そうな顔で、顔中にくつついた米粒を一つずつ口にしついた。

蛍は言った。

「高速の情報網は大衆を洗脳しやすいけど、同時に抑止もかけやすい。孫が電力網の復活を段階的にやらなかつたのは、テレビやネットの普及を徹底的に遅らせたいという狙いもあつたんでしょうね」

「チツ……」

ルウ子はそれから寝るまでの間、ぶつぶつと解読困難なつぶやきをくり返し、終始不機嫌だつた。

二コのメールはその後久しく途絶えた。電力事業が一段落して、NEXAの活動が安定期に入つたのだ。彼らがほころびを見せない限り、バクたちは動きよがなかつた。

晴耕雨読。バクたちはひたすらそうして時節を待つた。

2050年6月10日

国内の電力復活から一年と一ヶ月。

NEXA本部に衝撃が走った。

日本の様子を映した写真が、世界中の新聞にでかでかと載つていたのだ。

NEXAの暗殺者はたしかに、国内に潜伏していた不穏分子を完封した。だが、執念は相手のほうが一枚上手だった。彼らは自分の命さえ囮にして、証拠となる資料をそれとわからぬ形で自國に送つていたのだった。

7月17日

電気はついに極東の地で蘇った。科学的に納得できない事情はともかく、まずは国交回復であると、列強諸国は我先にと密使の船を送つた。これに対しNEXAは、巡視船や沿岸の砲台などをもつて外国船をことごとく追い払つた。

その日、NEXA本部に一つの報告が入つた。海外に潜入している諜報員からだ。日本の鎖国姿勢に危機感を募らせた列強諸国は、『地上で唯一の発電国となつたのをいいことに、科学文明帝国による一極支配の野望を抱いている』と日本を悪役に仕立て上げ、制裁に向けて軍備を整えはじめているとのことだった。

自室でそれを知つた孫は、珍しく怒気をこめて言った。

「今まで日本をないがしろにしてきたくせに、電氣があるとわかつた途端にこれだ！」

「局長……」

和藤は不安げな瞳を孫へ流した。

「核弾頭の開発を急がせてくれ」

日本国内には原発由来の核燃料が密かに残されていた。戦艦や要塞を一から造ることを考えたら、核ミサイルの開発などたやすい。

「……」

「心配するな、栄美。第一、わが国は直接誰かに迷惑をかけたわけではない。従つて彼らには他国に攻めこむだけの理由がそろわない。それでも、権力にのぼせ上がった愚か者はなにをしてかすかわからぬ。だから万が一に備える。それだけのことだよ」

二口はこの会話を密かに録音し、翌日、隙を見てアルに送信した。

7月18日

バクたちの焦りは頂点に達しようとしていた。

孫は構想を練り上げた当初、核開発など予定していなかった。外國が日本を忘れている間に技を磨き、充分に力の差を見せつけられ、大袈裟な兵器など必要ないとさえ口にしていた。だが、日本の実態は海外に知られることとなり、孫の『ささやかな復讐』のシナリオに大きな狂いが生じはじめた。このまま問題を放置しておけば世界中との開戦もあり得る。とはいえる孫の言うとおり、日本は隣国を侵略したわけでも宗教的対立があるわけでもない。諸国首脳が世論を納得させるだけの大義名分を探している間は、睨みあいが続くだろう。だが、ケンカは意外と些細なきつかけで起こるもの。一時たりとも油断はできない。

ルウ子は手にしていた鎌を丸太小屋の外壁に突き刺し、孫の愚行を嘆いた。

「あんの腐れ納豆、本気で勝てると思つてゐるらしいわ！」

バクは言った。

「勝てるもなにも、戦争なんか起こらないだろ？」

「わかつてないのね。ヤバイ兵器を隠し持つていろいろで、たしかな証拠もないのに平氣で戦争しかける国だってあるのよ。そいつらがどれほど世界を迷惑させたことか……」

「それでも、孫には核きりふたがある」

「マスター・ブレイカー 最大の弱点、忘れたの？」

「弱点……あ！」

バクは手を打った。

たとえ長距離ミサイルを開発したとしても、一二の影響下、つまり本土上空にあるときしか制御できないのだ。

蚩は開戦した場合の日本の未来を仮想した。

「わが国には負けしかありません。海上で現代兵器を使えない以上、物量に勝る列強は難なく日本各地に上陸を果たすでしょう」

「上陸した何万もの兵がいっせいに首都へなだれこみ、この国はつ！」

「ルウ子は壁に刺さっていた鎌を引き抜くと、蚩が手にしていたキュウリを奪い、これを真つ二つにした。「はいおしまい！」

バクは草の上に落ちたキュウリの片割れを拾い、そのまま頬張つた。

「クソ……どうすれば孫を倒せるんだ……」

「リスクは高いですが……」 蚊は北の空を見上げた。「離島の首脳陣に本土の現実を見せ、海軍に動いていただく、といつのはどうでしょうか？」

「現実？」

「二二七さんによれば、NEXAの兵器生産は大電力と送電効率を考慮し、主に統京湾岸で行われているとのこと。海の上からほんの一部でもいいんです。その恐ろしい光景を見てもらえれば、島人の心に変化があるかもしません」

7月23日

バクたちは離島海軍の将、大村猛に『統京湾岸調査団』の結成を提案した。日本の『鎮国返し』に列強が色めき立つてはいるという話に、大村は乗ってきた。離島海軍の中には遠洋調査隊という小さなチームがある。航海先で知りあつた、国境や肌の色を越えた海の男同士の交流によつて、海軍は海外情勢に多少は通じていた。

大村はバクたちに言つた。

「それは連盟としても無視できねえ問題だ。離島は正式に日本から独立したわけじゃねえからな。大戦に巻きこまれんのは『ゴメンだ。俺がジジイどもに話をつけてやろう』

あくまでも離島の安全を中心に据えた考へだが、この際、協力が得られれば理由はなんでもよかつた。

7月27日

その日、富根島で伊舞諸島地区だけの臨時会議が開かれ、各島の首脳陣から一人ずつと、バク一行と大村、計十三名の調査団を送り出すことが決定した。

7月31日

統京湾での偵察を終え、母港で船を降りた調査団に言葉はなかつた。

8月5日

「NEXAがいかにヤベえ連中か、それはわかつた。だが、各島に散らばる兵力をあわせても三千に満たない小勢が、政府をも手なしけちまた巨人相手にいつたいなにができるってんだ……ってのが、ジジイどもの言い分よ」

大村は口をへの字にして、だらしなく両手を挙げた。

大村は隣島で開かれた連盟本会議に出席し、ついさっき南根島に帰ってきたところだつた。

先日の調査団の報告を受け、会議は紛糾した。独立宣言。列強との交渉。他国への移住。無為静観。様々な意見が出た。NEXA討伐派はごく少數だった。海戦ならともかく、現代兵器で迎え撃たれる上陸戦は自殺行為である。というのが大方の批判だ。

「根性なしめ！」

バクは桟橋に転がっていた空の木箱を蹴り壊した。

大村はバクをなだめた。

「まあそりゃうな。あんたらと島の民じや、生きてきた環境がちがいすぎる。血路を開く、なあんてことはほとんど経験してねえからな」

「海軍だけでもなんとかならないのか？」

「なると思うか？」

「聞いてみただけだ」

バクが下を向くと、大村はぼそつと言つた。

「ただし、民が動けというのなら、動く」

8月6日

離島連盟には、地区人口の八割分の『署名血判』を持つてくれば、その地区的海軍は独自の判断で動いてもよいという、有事における超法規的な例外が存在した。

その日バクたちは、単純に数を稼ぎたいという理由から、伊舞諸

島最大の島である雄島おしまへ渡つた。

島の人間関係は都市の人々とちがつて濃密であり、人数が集まれば批判が批判を呼んで、それだけ保守的になつてしまつ。その経験からバクたちは、一軒また一軒と、しらみつぶしに民家を訪ね歩くこととした。

一行はNEXAの脅威を説き、海軍をもつて彼らを討つべきであると、署名血判の必要性を訴えていった。

現実は厳しかつた。誰一人として耳を貸す者はなかつた。千の言葉より一枚の絵、ということで軍需工場のスケッチや写真を見せもしたが、人々は「創作だ」「偽造だ」と一笑するばかり。果てしない空と美しい海と小さな大地しか知らない彼らにとつて、世界でこれから起ころうとしていることは、想像力の彼方にあるようだつた。ある民家でのこと。ルウ子が玄関をノックすると、引き戸が開くや砲弾のような拳が飛んできた。近所の噂を聞きつけていたのだろう。バクはとつさにルウ子をかばつた。そんなことが何度か続き、バクの顔は最終ラウンドでマットに沈んだボクサーのよになつてしまつた。

それを見かねたのか、ルウ子は珍しく弱音を吐いた。

「バク……もう帰ろ」

バクはニヤと紅白まだらの歯を見せた。

「戦争になつたらこんなもんじやすまないさ」

それからすぐ、滝のように雨が降つてきた。

結局、その日の活動はそこで終つた。

バクたちは港にとめてある シーメイド のキャビンで一夜をすごした。

8月7日

朝、雨が上がつたのを機に、バクたちは活動を再開することにし

た。バイト先がくれた休みは一日間だけだ。全住民に説いてまわるのは当然無理である。だが、島民の性格上、口口ミといるのはバカにならない。たつた一人からでも、全体を揺るがす連鎖反応が起きる可能性はある。

身なりを整えたバクたちは、ヨットを下りて桟橋を歩いた。そして、埠頭に足を踏み入れようとしたときだつた。

どこからともなく人が集まつてきて、三人の行く手を塞いだ。

ルウ子は立ち止まる、微笑んだ。

「署名血判の件、興味を持つていただけたかしら？」

地元衆は互いに顔を見あつてゐる。

誰が代表して答えるべきか、段取りができるでないのだろう。ほどなく群衆の後方で動きがあつた。じよめく扇が一つに裂けていき、その間を槍を手にした禿頭が突貫する。

老人はルウ子に穂先を向けて叫んだ。

「出でいけ！」

続いて竹刀を持つた婦人が進み、上段にかまえる。

「島に本土なんかの災いを持ちこまないで！」

ルウ子は山のごとく落ち着いていた。

「離島連盟が日本から独立したなんて、海外の連中は誰一人思つちやいないわ。誰かがNEXAの暴挙を止めなければ、いずれこの国は滅ぶ。離島も例外じゃ ない」

老人は衆に言つた。

「騙されるな！ こいつらはな、海軍が出払つた隙に島を乗つ取ろうとしているだけなのだ！」

「そうだ！」「海賊だ！」「殺し屋だ！」「要塞を造つた意味を忘れるな！」

地元衆は手持ちの農具や漁具をかかげ、ルウ子につめ寄つた。

ルウ子は一步も引かない。

「どうすれば話を聞いてくれるワケ？」

「出でいけと言つところうが！」

老人が銀光をちらつかせると、ルウ子は笑った。

「いい歳こいて恥を知りなさい。そんなものがなれば、女一人とも話せないの？」

「だ、黙れ、本土者！」

老人は女の喉もとめがけて槍を突き出した。

ルウ子は老人を見据えている。

「くぬ！」

老人は前足をざざとすべらせ踏ん張った。おそるおそる槍を引いていくと、女の喉もとからツツと赤い筋が流れた。

ルウ子は老人を見据えている。

老人は持ち手のふるえが止まらない。

「ワシらは……ワシらはただ静かに暮らしていいだけなのだ。頼む！」

老人は槍の握りを短くすると、穂先を自分の喉へ向けた。

「！」

ルウ子はカツと目を剥き、拳を突き出した。

間一髪……セーフ。

ルウ子は槍を手放すと、力無く言った。

「今日は……帰るわ」

8月23日

「ここに住み続けるのはかまわない。だが、他の島でトラブルを起こすことだけは勘弁してくれ」

その日、富根島の長はバクたちに対し、向こう一年間の原則渡島禁止を命じた。

バクたちは雄島の事件の後にも一つの島を訪ねたのだが、すでに噂が伝わっているらしく、渡ったその日に限ってどの地区もゴース

トタウンだつた。まるで姿を見られたら石にされてしまう、といったあわてぶりで、人々は窓も玄関もすっかり閉め切つてしまつた。

誤算だつた。味方にするはずの島人たちから逆に疎まれ、肩身の狭い生活を強いられることになるとは。富根島の人々が中立の立場を取つてくれなければ、バクたちの希望は完全に絶たれてしまうところだつた。

バクたちは富根島に引きこもり、二ヵからの情報を悶々と待たねばならない日々が続いた。

9月3日

調査団の派遣からひと月。

離島連盟の姿勢は今後どうあるべきか。諸派の小競りあいだつたものは、やがて三つの派に絞られていき、対立を強めていった。

一つは、離島の独立を正式に宣言して、もはや日本ではないことを国際社会にアピールし、戦火を回避しようという、独立派。

一つは、戦争などそう簡単に起きるわけがなく、余計なことはせず流れにまかせればよいとする、静観派。

一つは、独立も静観も無駄であり、海軍をもつてNEXAを討ち鎮国を解除せんとする、討伐派。

前者二つが拮抗する多数派で、討伐派はバクら三人と大村をはじめとする一部の海軍関係者だけの小勢だつた。

離島連盟の足並みはそろわず、バクたちの訴えは通らず、時間だけがむなしくすぎていつた。

その日の夕暮れ。山麓の丸太小屋。

台所の竈に火が入り、バクたちはせわしなく夕食の準備に取りかかっていた。

バクが釜の蓋を閉め、湯の温度を上げようと薪を手にしたときだつた。

バクは薪を山へもどした。

「林に誰かいる」

「？」

ルウ子は青菜を刻む包丁の手を止めた。

「島人の気配じゃない。気をつけろ」

バクは壁にかかっていた手斧を取ると、勝手口の脇に身を寄せた。ルウ子は包丁を持ったまま、扉をはさんでバクの向かいに立つた。蚩は壁に通してある細管に片目を近づけ、外の様子をうかがう。

「男が一人、木陰から出てきまし……あつ！？」

蚩は手にしていたおたまを取り落とすと、膝をふるわせ、土間の上にへたりこんでしまった。

バクは蚩に代わってのぞき穴から外を見た。

男の姿はない。気配も消えてしまった。

「密偵かもしれない。捕まえて吐かせてやる」

バクは勝手口から外に出た。

正面、島の中心にすわる『富根富士』の裾野に夕日が沈み行こうとしている。

一步踏み出すことに、毛羽だつた無数の黒い触手が迫つてくる。怖れるこではない。夕暮れの疎林が影絵のように映つているだけだ。

なだらかな上り坂を少しへ行くと、島人たちが御神木と呼ぶ古樹が近づいてきた。樹齢五百年はあろうかという巨木。その幹には注連縄が巻いてあり、縄には紙製の稻妻が数本下がつている。古くなつたのか、そのうちの一本がちぎれて太い根の上に落ちていた。

嫌な感じだ……。

無数の羽音。

「！」

バクは身がまえた。

カラスの一族だった。

しばらくそこで待つてみたが、怪しい気配を再び感じることはなかつた。

行つてしまつたか……。

バクふつと息をつき、夕日に背を向けた。

そのとき、後ろでなにかが風を切つた。

半身で飛び退くと、手前の若木にナイフが突き刺さつた。

「誰だ！」

バクは神木を見上げた。

「雑魚のほうが釣れちまつたか」

神木の枝から人影が一つ舞い降りると、西日がその半顔を照らした。

傲りと嗜虐に満ちた目。火柱のように尖つた赤髪。

「シバ！」

「調査団をくり出したのはマズかつたなア、ボウズ

シバの唇が左上がりに歪んだ。

「ク……尾行つけられてたのか……」

「ところで、橋本ルウ子は殺し屋でも雇つたか？」

「いきなりなんだ」

「あの殺氣……一瞬熊楠かと思つたぜ」シバは真顔で言つた。「てつきりそいつがかかると思つて退いてみたんだが……。まあいい。ウォーミングアップぐらいにはなつてくれよ」

シバは左右の五指をならした。

「ルウ子が目的か？」

シバはちらと歯を見せた。

「バカを治すイイ薬がそろつたンだとよ

「！」

それがなにを意味するか、バクにはすぐわかつた。孫はルウ子を薬漬けにして忠実な操り人形とするか、あるいは電話番号を吐かせてから殺してしまつか、いずれにしてもアルをNEXAのものにす

るつもりなのだ。孫はあれほどの権力を手にしていながら、なぜ役立たずのアルにこだわるのか。訊きたいことは山ほどある。だがその前に……。

「一つ、あなたにたしかめたいことがある

「ほう？ 生意気だな」

シバの頬に走る爪でかいたような傷痕。海で遭つたときはなかつた。

「富谷を攻め落としたとき、警備隊長を処刑したのはあんたか？」

「あア！？」シバは片目を細めた。「なんで島に籠もつてゐる奴が、んなこと知つてんだ？」

「いいから答える。あんたなのか？」

シバは頬の傷痕を淫らな手つきでなぞると、笑つた。

「いい声で哭いてたぜエ」

「てめえ！」

バクは手斧をかまえた。

「そうこなくつちやな！」

シバも短剣を抜いた。

怒りにまかせてバクが突進すると、シバはそれを軽くいなした。

バクはキッと向き直り、なおもがむしゃらに斧をふるつた。

シバは上体を左右や後ろに揺すつてこれをかわす。

勢いあまつてバクの体が横に流れた。

シバはすかさずバクの小手を狙つた。

バクはハツとした。斧の腹を盾に、かるうじでこれを受け止めた。

形勢は逆転。シバは速射砲のごとく剣をくり出し、興奮から醒めたバクはひたすら受けにまわつた。

シバのスピードに慣れてきたバクは、いつ攻撃に転じるべきかと思案しはじめた。

その矢先、シバの左手でなにかが光つた……と思つた次の瞬間。

「ウツ！？」

バクは手斧を取り落とし、バランスを崩して尻餅をついていた。

シバは機を逃さなかつた。バクの上に馬乗りになると、喉もとに切つ先を突きつけた。

バクはそこでようやく脚の痛みに気づいた。シバは手ぶらだった左手に、密かに一本の投げナイフを忍ばせていたのだ。一つは持ち手、もう一つは右脚を狙われた。

「さアてど、ショーのはじまりだ」

シバはバクの太腿に刺さつているナイフの柄を、ぐいと横にひねつた。

「うああああああ！」

「イイー声だア」

シバはオペラの聴衆のようううつとりしている。

我に返つたシバは次の出し物にかかつた。バクの左手を捕まえると、短剣で甲から串刺しに……。

「！」

シバはなかばで手を止め、ギロリと目を流した。

包丁を携えたルウ子と蚩が、シバに迫るうとしていたのだ。

「ラストの噴水ショーには間にあつたみてえ……」言いかけたところで、シバの顔から狂氣じみた笑みが消えた。「なんだテメエは？」シバの威にも、蚩は歩みを止めようとしない。

「よくも……お父さんとお母さんを……」

あの温厚そうな蚩は見る影もなかつた。その形相はまるで、激しい離脱症状にあえぐ薬物依存者のようだ。

「なんの話だ？」

「ゆ、許さない……」

「ああ、あんときの娘か」シバは卑猥な目つきで舌なめずりした。

「そこの魔女さえ来なけりや、俺様のもんだつたのによ」

「こんな日が来るのをずっと待ちこがれてた」

「あの夜の続きをしてもらえる日をか？」

「……」

蚩は黙つて一步進める。

「「」のガキは許してやつてもいいんだぜ？」

シバは左手でこの字を作ると、その中に切つ先を一度二度と挿入した。

蚩はそれでも止まらない。秘めていた怨念にその体を乗つ取られてしまつたか、肩を左右に揺すり、呼氣をふるわせ、開ききつた瞳孔で、ひたすら仇の男だけを見据えている。

「「」、殺してやる……」

蚩はついに必殺の間合いに入つた。

「そうかい。誰も死なずにするんだのによ」

シバは蚩の手首めがけてびゅっと剣をふり上げた。手練れの素早い迎撃に蚩は反応できない。蚩の手首が飛ぶ寸前……。

「！？」

シバの手が動かなくなつた。

バクが上半身をぐつと起こし、シバの腕をつかんでいたのだ。バクは苦しげに片目を閉じ、かすれた声で言つた。

「あなたの相手はこつち……だぜ」

「悪い悪い、忘れてたぜ」

バクの太腿で再び肉が裂ける音。

「ぐがあああああ！」

「バク！」

ルウ子の絶叫。

「はわつ！？」

正氣にもどつた蚩はよたよた後ずさり、腰から碎けた。

バクは痛みのあまり、思わず本音をもらした。

「ク、クソ、早く沈みやがれ……」

「沈む？ なにがだ？」

シバは切つ先をバクの喉もとに返した。

「太陽さ」

「太陽？」シバは山に田をやつた。「とつぐに沈んでるじゃねえか

夕日はすでに山の向こうに隠れているが、空はまだ明るさを残している。

「あと少し……もう少し……」

「？」

顔をしかめるシバ。

一番星がチカと光った。

「俺の時間だ」

バクはカツと田を見開くと、跳ね起きる勢いでシバを吹っ飛ばした。

「な!? その脚、まともに立てるワケは……」

シバは狼狽えつつも、すぐに立ち上がって剣をかまえた。

バクは静かに宣告した。

「あなたの負けだ」

シバは片目で笑った。

「聞いたことがあるぜ。稀にだが、地下賊ソン中に闇のチカラが異常発達したガキが生まれるってな」

「蚩の両親、そしてミーヤの仇」

バクは太腿に刺さっていたナイフを引き抜いた。

「チツ……プライベートタイムはここまでか」

シバがすっと手を挙げると、木陰から一人また一人と戦闘服の男が現れた。

「条件はフェアじゃねえとな」

シバは神木の枝へ飛び、二十人の傭兵軍団と素早く入れ替わった。一人高みの見物というわけだ。

「二人とも下がつてろ!」

バクは右脚が壊れていることも忘れ、ナイフ片手に男どもの中へ飛びこんでいった。

バクはつづらと目を開けた。

そこは丸太小屋のいつもの寝床だった。

小鳥のさえずり。朝日が目を突く。

「あれ……俺……」

バクは体を起こそうとしたが、すぐに右脚を押されて悶絶した。シバに刺された場所が包帯でふくれている。

「つたく、無茶するわ。まる一日も寝こんでたのよ」

傍らにいたルウ子は、絞つた手ぬぐいをバクの腫れ上がった瞼に押しつけた。

バクはそのまま口を開いた。

「俺……」

「うん?」

「はじめて人を殺した……いや、厳密には二度目か」

「そう」

「あんな奴らでも、気持ちのいいもんじやないな」

ルウ子はクスと笑った。

「あなたはまだ、免停にならずにすみそうね」

「メンテイ?」

「人間の普通免許よ」

「フ……そんなんじや笑えねえよ」

そう言いながらもバクの口もとは緩んでいた。

あの晩の記憶が曖昧だ。最後の一人を倒したところから先が、どうしても思い出せない。

バクは訊いた。

「シバは?」

「逃げたわ。部下を見捨てて」

「そうか……」

バクは再び眠りに落ちた。

ブーン! ブーン!

ルウ子の懐で、アルがしゃべらせると体をふるわせている。

ルウ子は螢を連れて小屋の外に出た。

ルウ子はケータイを開いた。

「なによ」

アルは上目遣いで言った。

「それがその……電話だよ」

「電話？ 誰から？」

「出ればわかるよ」

アルは自分の姿を消した。

スース姿の男の半身はんしんが映つた。細筆で引いた傍線のよくな字がさらに細まる。いつものメガネはない。

『お久しごりですね。元気そうでなによりだ』

「孫」ルウ子はため息をついた。「あなたはもう少し利口な男だと思つてたわ」

『その物言い……どうやらいろいろの情報がもれでているようですね』

「！」

ルウ子はしまつたという顔で舌打ちした。

『フフ……そんなに気にしなくてもいいですよ。これからはむしろ知つて頂きたいくらいだ』

『たいした自惚れっぷりね』

『それにしても、シバ君率いる精銳がたつた一人の青年にやられてしまつとは……。彼の能力を見落としていたことには、少しだけ後悔してますよ』

『そうまでしてアルを欲しがる理由はなんなの？ 太陽光しか扱えないアルに、決死隊を送るほどの価値があるとは思えないわ』

『ところがあるんですよ。今日明日のことしか見えていないあなたでは、一生導き出せない発想でしおうけどね』

『で、お次はどうするわけ？ 海兵隊を満載した艦隊でもよこす？』

『まさか。近海の王者を敵にまわすつもりなど毛頭ありませんよ。』

離島海軍にはこれからも日本の海を守つてもらわねば

ルウ子は不敵な笑みを浮かべた。

「あたしに時間があたえたら、後悔することになるわよ」

孫も微笑んだ。

『それはお互い様でしょっつ..』

「フン！」

ルウ子はそっぽを向いた。

『そんな顔しないでください。あなたがそこに閉じこもつてている限り、私には短い栄光はあつても勝利はない。いや、地上の誰にとっても勝利はないのです』

「どういうこと？」

孫はその理由を語った。

『発電の大黒柱だった国内の石炭はいづれ尽きる。それにもない、科学頼みだつた国力も先細つていくでしょう。再び飢餓の底に落ちた国民は、わが国の資源の少なさを改めて痛感し、私の首を差し出して世界に救いを求める。そうなれば二コをめぐり、一介の島国を脅すつもりで整えていた各国の軍備が、別の目的で行使されることになる。今度こそ第三次大戦のはじまりです』

ルウ子は不服そうに言った。

「二コを分かちあうつて発想にはならない？」

『あなたは人間というものをなにもわかつていない。私的な欲望を抑えられるのはほんの一握りの聖人だけです。パワーショックの襲来によつて世界のつながりは希薄となり、国連は事実上消滅した。そんな今、発電の全権が集中したユニット……マスター・ブレイバーをいつたいどこで誰が管理するというのです』

『だとすれば、人類の運命はもつ決まつたようなもんじゃない』

『まだですよ。あなたが私に従つていただけるのなら、最悪のケスは回避できます。わが国が圧倒的な科学力を維持できるつちは、誰も手出しあしない』

『アルには、それを長く叶え続けるだけの秘めた力があると?』

『あります』

「大陸でつながってる国々も、ある程度の資源や相互援助があるつてだけで、決して豊かになつたわけじゃない。仮にあんたの話が正しいとして、アルを手にした後、他の国の不便や貧困はどうするのよ」

『知りません』

「は？」

『かつて彼らもそう答えましたよ。瘦せこけた我々使節に向かつてね』

ルウ子は激しくかぶりをふつた。

「くだらないわ」

『私もそう思います』

孫は笑顔で言い放つた。

「……」

ルウ子はなにか言い返そつと口を開きかけたが、出てきたのはため息だつた。「ま、島に引きこもつても、口クなことにならないのはたしかなようね」

『従つて、いただけますね？』

「……」

ルウ子は答えず、空を見上げた。

まぶしげに浮き雲を見つめていたかと思うと、登頂に失敗したばかりの冒険家のような顔になり、成果がなかつたわけではないと慰める友人の顔になり、表情を消すと、キッと眉を逆立てて微笑んだ。

「一つだけ作戦が浮かんだわ。結果の是非はわかんないけど、あんたのよりは全然マシよ」

『ほう、それは？』

「……」

ルウ子は肩をすくめるだけだ。

『それを成就するためには、私を倒す必要があるのですね？』

『そのようね』

孫は寂しげに微笑んだ。

『そうですか……。では、せめて良い舞台を『用意しましょう』

「信用の証しは?」

『この失った左腕に誓つて』

孫は右手でそこに触れた。

「いいわ。鼻クソでもほじりながら待つてなさい」

ルウ子は孫の招待に応じた。

孫は現代最強の武装を脇に置き、ルウ子と対等の勝負をしようとした。

「ううだ。

二人の打ち合いを見守っていた蛍は不安でならなかつた。

孫は本当に約束を守るだらうか?

## 第八章 ルウ子の敗北宣言

9月30日

孫の電話から三週間余りたつた。

その日の早朝。宮根島。

港の桟橋では、バクとルウ子が激しく揉めていた。ルウ子が孫の招待を受けたと知つて以来、バクはこの無謀な対決に反対し続けてきたのだが、ルウ子はいつさい聞き分けようとしなかつた。

「奴がなんの策もなしに、あんたを迎えるわけないだろ！」

「あいつは最愛の母親に誓つた。それでもあたしを騙すというのなら、あいつは自分の人生を否定することになるわ！」

いつたいどこで薬を見つけ誰に依頼したのか、ルウ子の双竜頭はすっかり黄金の輝きを取りもどし、くたびれきついていたブレザーやスカートは真つさらも同然だった。そのせいか、表情や言葉の端々からは、かつてのみなぎる自信がうかがえる。

ルウ子は立ちはだかるバクを避け、桟橋に控える シーメイドのほうへ歩みを進めた。

「待てよ！」

バクはルウ子の腕をぐいとつかみ、力ずくで引きとめた。

「放しなさい！ でないと……死ぬわよ」

ルウ子は腰の短剣を抜くと、切つ先をバクの鼻先に突きつけた。バクは動じない。

「ああ、やつてみろ。やれるもんならな！」

「まだわかつてないのね。あたしのこと」

ルウ子は低く言つと、バクの首めがけてびゅっと剣をふるつた。そのとき、海のほうから男の声があがつた。

「報告します！ 太平洋上に大艦隊発見！」

着岸を待ちきれない船長が、偵察船の甲板から叫んだのだ。

「俺のこともわかつてないようだな」

バクはわずかに削がれた黒髪を払い落とすと、白い歯を見せた。

「あの声がなければホントに死んでたわ」

ルウ子もちらと歯を見せた。

「いいや死んでねえ」

「いいや死んだ」

「何度もかわしてやるさ！」

「今度こそ真つ二つよ！」

一方、蛍は虫歯を煩ったような顔で、二人の意地の張りあいを見守っていた。なにを思つたか、彼女はバケツに海水を汲むと、ぎゅつと田をつぶり……。

「報告です！」

と叫ぶや一人にぶちまけた。

きょとんと蛍を見つめるバクとルウ子。

蛍はひたすら頭を下げる。

「す、すみません！ 私にできることは、これくらいしか……」

ルウ子は空になつたバケツを奪うと、蛍の頭にすっぽりかぶせた。

「フフ……たすがあたしが見こんだだけのことはあるわ。で、なに？」

「で、ですから外国の大艦隊が迫つて……」

「それを早く言いなさい！」

ルウ子は短剣の腹でブリキのバケツをガーンとたたいた。

「\* - @ @ \* %？」

蛍は意味不明の声を発しながら、桟橋の上をふらつきまわつた。と、そこに大村が現れ、「こんなときになに遊んでやがる」とあきれ顔で蛍を抱きとめた。

離島海軍の全面協力の裏には、大村猛の存在があつた。伊舞諸島の民衆は独立派に傾きつつあつたが、海軍は方針を一転、討伐派に与した。その気になれば地球の裏側まで足をのばせる彼らは、各国

の不穏な動きに危機感を募らせていましたのだ。

そしてついに、終末への歯車は動き出した。

離島海軍は数日前、太平洋上で第二次大戦以来の大艦隊を見つけた。一番乗りを狙っているのか、列強諸国の船は競うように集まつてきている。幸い、その針路を塞ぐように「一つの台風が暴れまわつており、艦隊は足止めを食らつていた。まさに神風だ。

ルウ子は剣を收め、鼻をならした。

「フン、やっぱ来たわね」

欲にかられた列強は世論を無視し、いつか必ずしかけてくる。制裁を口にしてはいるが、その実はマスター・ブレイカーを手中にしたいだけなのだ（彼らはその存在を知っているはずなのだが、ライバルを出し抜きたいがために、あえてそのことを極秘にしているのだろう）。ルウ子の読みはあたつた。ルウ子は孫の招待を受け、シメイドでの上京を計画していたが、その一方、大村を通じて海軍にも出撃準備させておいたのだった。

「うなると日本の命運の如何は、孫だけでなく時間との闘いでもある。民の血判がどうのなどと言つてはいる場合ではない。まずは一刻も早く孫を打倒し、戦争を回避する。その先のことはそのときだ。ルウ子は足の速い海軍の船で上京することにした。

「作戦は『プラン<sup>ダブルゼータ</sup>』に変更。いいわね？」

大村は舶刀を華麗にふるつてみせた。

「どうやらもう、あんたらに賭けるしかなさそうだな。護衛はまかしどきな」

「あんたたちは船を出してくれればいいの」「だがなあ……」

「こっちが約束守らないでどうすんのよ」

実際は、ルウ子と孫は言葉で約束を交わしたわけではない。だが、当事者以外の武装解除は二人の暗黙の了解だった。

大村は剣を收めると、笑つた。

「あなたの肝つ玉は狂氣そのもんだ」

「百回も死を覚悟したら、狂氣だつてもうお友達よ。」

ルウ子は両肩にかかる竜巻毛をパーンと払うと、大村の帆船が控える隣の桟橋へさつそつと歩いていった。

10月1日

離島船団は追い風に乗つて北上し、その田の風すき、統京湾に突入した。

ルウ子は護衛の船などいらないと言い張つたが、足を提供するのは海軍である。不満はあっても彼らの方針に従つしかなかつた。船団は南北に散らばる島々を通過するたびに一隻また一隻と増え、結局、十隻という大所帯となつた。彼らはその船倉に武器ではない『なにか』を隠し持つてゐるようなのだが、軍の機密だと書いて、バクたちには明かそうとしなかつた。

バクは帆船 臣蔵 の甲板に立ち、薄暗い空の下に広がる左右の半島を見渡していた。

しばらくの間そうしてゐたのだが、物々しい雰囲気はほとんど感じられなかつた。軍用の艦艇は港で大人しくしてゐる。戦車の姿も兵員輸送車が走る様子もない。NEXAは約束を守つてゐる、といえばそうなのだが……。

バクは首をかしげずにはいられなかつた。

本土の姿が見えた頃からぽつぽつと降り出した雨は、列強艦隊との差を伝える警鐘の「」とく、徐々に強まつてきている。

日没まであと少し。

離島船団はいよいよ統京港に近づいた。

船室で控えるバクとルウ子は、丸窓をはさんで向きあい、雨の力一テソ越しに湾岸地帯を見つめていた。

今からちょうど五年前、バクが蒸気船から見た景色とはまるでちがっていた。壊れた工場や倉庫などどこにもなく、ゴミ捨て場で泣いているオモチャのようだつた遊園地は見事に復元され、湾岸道路では自動車が行き交い、高層ビルの窓のあちこちに白い光の粒が点り出す。

ルウ子は感慨深げにそれらを見つめていた。

「元通りになつてる。なにも……かも」

そこには、ルウ子が地獄の底で思い描いた『2016年の統京』があつた。孫はルウ子の夢をルウ子の代わりに完璧にやつてのけたのだ。

「あたしがずっとNEXAの玉座に居すわつていたら、これほどの復興はなかつたかもね」

「才能があるからつて、なにをやつてもいいつてわけじゃないぞ」「バクは埠頭で待ちかまえる戦闘服姿の男たちに目をやつた。

ルウ子は窓に背を向けた。

今にも泣き出しそうな顔<sup>うな</sup>がのぞいた。

「ルウ子……」

バクはルウ子の背中に寄ると、両肩に手をやつた。

「そこじゃない」

ルウ子は腕を交わしてバクの両手をつかむと、ぐいと前に引き寄せた。

ルウ子の手はひどく冷たかった。

臣蔵 が接岸した。

バクとルウ子と虽、招待を受けた三人だけが船を降りた。

甲板に立つ大村は、喉に魚の小骨が刺さったような顔で三人を見下ろしている。

埠頭ではNEXAの兵隊たちが一列に整列して道を作っていた。武装はしていないが、そこしか通るなと脅しているようなものだ。

バクたちは雨に打たながら列の間を行つた。

その先には黒い高級車が待ちかまえていた。運転席のドアが開き、ピンクの傘がぱっと咲く。

スース姿の和藤は微笑んだ。

「孫がタワーの上でお待ちしています」

ルウ子はためらうことなく後部座席に乗った。

バクと蚩はしばし顔を見あわせ、ルウ子に続いた。助手席は空いている。和藤にボディガードはない。

「少し、遠まわりしますよ」

和藤は車を走らせた。

ルウ子と乗った蒸気自動車が野牛の大移動なら、こちらは池の上の鴨。ワイパーのこすれから隣席の息づかいまで、なんでも聞こえる。

バクが車の性能に感心していると、和藤が口を開いた。

「橋本ルウ子。あなたをここで捕らえ、薬でアルの番号を吐かせようと思えばいつでもできる。わかつていながら、なぜ島を出たのです？」

「……」

ルウ子は窓の外を見つめたまま黙っている。

「私には理解できない。自分からすべてを奪った者の言葉を信じるなんて」

「……」

「どんなに忠実な部下でも、上司の命令を必ず守るとは限りませんよ？」

和藤はちらりとルームミラーに目をやった。ルウ子と田があつ。

「フ

和藤はアクセルを踏みしめた。

雨夜の街道をしばらく走り、坂を下つていいくと、広々としたスクランブル交差点に出た。そこで信号待ちとなつた。

「！」

バクは思わず窓にへばりついた。

和藤はその様子をミラーで見ていた。

「懐かしいでしょ？ バク君」

バクは『夜田』を細めながら、眩しすぎる街の様子を眺めた。

そこはバクのアジトがあつた街だった。だが、懐かしさなど微塵も感じなかつた。瓦礫がない、ひび割れもない、屍もない、そもそも闇がない。

交差点を行き交つ傘の群れ。傘の下はどれもシ一一つないおろしたての服。

ガラスの壁の向こう側に集う少女たち。巨大なハンバーガー、山盛りのアイスクリーム。

これが、ほんの少し前までボロを身に纏い、一つの米袋一つの缶詰をめぐつて血を流してきた人々の姿なのか。

街角には生ゴミの入つた袋の山々。

車の窓ガラスに滴る雨水は不気味に黒ずんでいる。

脳裏に一つの記憶がよぎつた。赤ヶ島を探索した帰り、昭乃はたしか別れ際にこう言い残した。

……電気など無いままのほうがよかつた。そう思つときが必ず来る。必ずな……

信号が変わつた。

和藤は郊外へ車を走らせた。

住宅ばかりが密集する、ある私鉄の駅のそばで車は止まつた。それまでひと言も発せず、ぼうつと統京の街を眺めていたルウ子の顔が一変した。

「！」

和藤は自慢気に言つた。

「懐かしいでしょ？ ルウ子さん。この街はひどく荒れていたのですが、パワーショック以前の写真や地図をもとに、街並みを再現してみました」

そこはルウ子が生まれ育つた街だった。

ルウ子の手がすつと街へのびていく。その指先を、ガラス窓が

遮った瞬間、生命維持装置が切れたアンドロイドのよつ、ぱたと手が落ちた。

ルウ子の涙が頬まで伝つたのを、バクははじめて見た気がした。

和藤は続けた。

「あなたの望みはすべて叶つた。飢餓や争いは消え失せ、街並みは蘇り、大好きなケータイさえも使えるようになつた。あなたがこの世にしがみつく理由はもつないはずです。ちがいますか？」

「……」

「アルの番号を教えてください。その代わり、我々NEXAは『初代局長・橋本ルウ子』の偉大なる功績を未来に語り継ぐことを約束します」

和藤はルウ子に引導を渡そうとしている。彼は残してやるから死ねと言つてゐるのだ。

ルウ子はそこでようやく口を開いた。

「悪いけど、答えはノー。しがみつく理由、あんたたちが新しいのを作つてくれたから」

「！」

和藤は懐に手をやると、ふり向きざま、ルウ子に銃口を向けた。

ルウ子は微笑んだ。

「なかなかやんちゃな部下だわね。上司の顔が見たいものだわ」

「……」和藤は呼氣をふるわせながら銃を収めた。「余興はこれでおしまいです。行きましょうか」

和藤がアクセルを踏もうとしたとき、バクは言った。

「ずいぶんと見せつけてくれたが、その余裕は諦めの境地なのか？」和藤は前を見つめたまま言った。

「諦め？ なにを諦めるというの？ まだなにもはじまつていな

わ

「そうか……やつぱ知らないのか」

「？」

「明日の朝、何千何万もの軍隊が日本に上陸するんだ」

「「フフ……」和藤は吹き出した。「なにを言い出すかと思えば。どんなに立派な軍備をそろえたとしても、戦争なんてそう簡単に起せるものじゃないのよ坊や。どうせならもつと上手な嘘を考えてきなさい」

「できれば……嘘であつてほしいわ」

バクと和藤はルームミラー越しに見つめあつた。  
せわしなく左右に揺れるワイヤー。

和藤は油の切れかけた口ボソトのよう、「きいちなくふり返つた。

「本当……なの？」

「俺たちを本土まで送つてきたのは誰だつた？」

「離島海軍……が動いた！」

和藤はカツと田を剥き、あちこち懐をまさぐりケータイを探しあて、目にも止まらぬ速さで親指を動かし、孫につながると、熟練アナウンサーの「」とき滑舌で状況を報告していった。  
しばらくの間、和藤の単調な返事ばかりが続いた。  
やがて孫のあるひと言が、和藤の声を上ずらせた。  
「ほ、本気で言つてるんですか？」

『……』

「そう……ですか」

『……』

「はい、予定通りそちらへ向かいます」

和藤はそこで電話を切り、力無くシートに沈んだ。

バクは訊いた。

「孫はなにを企んでいる

「……」

「おい！」

バクは和藤の肩をつかんだ。

よく見ると、和藤はむせび泣いていた。

「お願ひ……あの人を止めて……」

「孫はなんど？」

「乗りこんできた兵もろとも、首都を灰にすると……」

「孫は核を使う気なんですね？」

「董が訊くと、和藤は素直にうなずいた。

「あの野郎……人の命をゲーム盤の駒だと思つてやがる！」

バクがそう叫んだときだつた。

それまで賑わっていた街から急に人の姿が見えなくなつた。

「こ、これはいつ……」

董はせわしなく辺りを見まわす。

和藤はその謎を明かした。

「甚大な災害が起きたとき、都民は地下シェルターへ避難する手筈になつてゐる。地下には都民を半年養えるだけの食料や物資がそろつてゐるわ。でも、それは表の顔。實際は戦争に備えて、あの人が造らせたものよ」

バクは訊いた。

「都民はそれで本当に助かるのか？」

和藤はかぶりをふつた。

「手筈はあくまで手筈よ。相手は数百万の都民。避難命令を発したからといって全員が従える状況にあるとは限らない。一パーセント……たつた一パーセントの人が逃げ遅れただけでも、数万の命が灰になる。あの人はそれを承知の上で核のスイッチを押そうとしているのよ！」

和藤はステアリングにもたれかかつた。

「彼ね……たくさんお酒を飲んで私を抱くと、必ず『母さん』って叫ぶの……。あの人の人生、あの人の生き甲斐はもう、三十年も前に終わつていた……。私なんか……私の声なんか届くわけない……」

和藤は被災地のように乱れきつた顔を上げた。

「死んだ人には絶対勝てないもの！」

ワイパーの音だけがしばらくあつた。

ルウ子は言つた。

「一つ、方法があるわ」

「え？」

和藤はふり返った。

「あたしをタワーに連れてく」と

和藤は吃<sup>しゃく</sup>逆りながら笑った。

「どっちが勝つたってダメじゃない……」

「じゃあ、このままここで灰になる?」

ルウ子はハンカチを差し出した。

和藤はルウ子の手をパンと弾くと、アクセルを踏んだ。

四人を乗せた車は外門内門と一重のゲートをくぐり、低層のビルが立ちならぶNEXAの敷地をしばらく走った。

めざす新統京タワーは敷地のほぼ中心にすわっている。NEXAの中核がある周囲の施設群とあわせてその区画だけが天高く突き出ており、他を圧する存在感を示していた。

和藤はタワーの麓で車を止めると、ダッシュボードの収納に拳銃を収めた。四人は車を降りた。和藤が三人を先導し、エントランスへ通じる階段を上つていく。入口の左右に控えていた丸腰の警備員たちはこちらを一瞥しただけだ。バクたちは一階ホール中央のシースルーモデリーナに乗った。

和藤は最上階のボタンを押した。ほどなく、2016年当時に劣らぬ煌びやかな夜景が広がった。規則的に視界を遮る鉄骨。透き通つた壁を流れ伝う雨粒<sup>いさな</sup>。無数に散乱する光が明滅して、四人をつかの間の幻想に誘う。

ルウ子はふとつぶやいた。

「新統京タワー。この日本で一番高い建物を、NEXAの象徴に据えようと提案したのが、孫英次。そのときに気づくべきだったわ」

バクは鼻をならした。

「いかにも野心家らしい発想だな。この高みから見下ろす自分以外の人間は、みんなバカだと言いたいんだろ」

「そうじやないのよ。そうじやない……」

ルウ子は小さくかぶりをふつた。

「じゃあなんで……」

バクが言いかけると、ルウ子は遮つた。

「こーれだから男つて面倒くさいのよねえ」

そのとき、ベルの音とともにドアが開いた。最上階だ。外に出ると、思わず顔を歪めたくなるほどの蒸し暑さだった。足もとの淡い間接照明が、夜の植物園をぼうつと照らす。ここは地上450メートル、タワー完成当初は特別展望台と呼んでいた場所。そして、バクのひと言がきつかけでルウ子がアルの封印を解き、大河の流れが変わりはじめた場所でもある。

そこは以前とは少し趣がちがっていた。壁がガラス張りになつておらず、部屋が縮んでしまつたような妙な圧迫感があつた。

和藤は三人を引き連れ、外壁に向かつて歩道を歩いた。四人はのっぺらぼうの扉の前で立ち止まつた。扉は自動で開いた。一步進むと、鬱蒼とした庭から一転、視界が180度に開けた。一面のガラス越しに雨の夜景。あとは絨毯と天井しかない。照明は暗いまだ。四人はドーナツ状の空間を半周した。

窓際で外を眺める隻腕の男が一人。孫はふり返ると、屈託のない笑顔で言つた。

「やつと来てくれましたね。待ちわびていた」

電話のときは素顔だつたが、今日は黒縁メガネをかけている。

「このバカが無茶するもんだからね」

ルウ子はバクの耳たぶを引っ張つた。

バクはそれを手で払う。

「俺のせいだつてのかよ！」

「あんたがまともに歩けない間、誰が食わしてやつたと思つての！」

「じゃあ、シバの奇襲から守つてやつたのは誰だ！」

二人が睨みあうと、螢がそこに割つて入つた。

「こ、こんなときにはケンカしなくて……」

孫は笑顔のままルウ子に言つた。

「彼女の言うとおりだ。日本の命運を賭けようといつときにも、不謹慎ですよ」

「悪かったわね。十秒前までは、このマヌケを教育する」とのほう

が大事だったのよ」

「フフ……」孫はメガネのブリッジに手をやつた。「ま、いいでしょう」

「時間がないわ」ルウ子は短剣を抜き、切つ先を孫に向けた。「さつさと決着つけましょ」

「その前に、こんな危険を冒してまで私がアルに執着するのはなぜか。知りたくありませんか?」

「どうせ話したくてしようがないんでしょ?」

ルウ子は剣を収めた。

「テスランの属性が二つに大別されることは知つてのとおり。私が持つてゐる二つは地属性。火力や水力など、手軽に電気を作れるのが長所です。ただし、多くの電力を生むには多くの資源に委ねなくてはならない。残念なことに、わが国は化石資源に乏しく、水力をはじめとする自然エネルギー利用に必要な国土もそう広くはない。そこで救世主アルの登場です。

天属性のアルには、無限の可能性が残されているのです。私はある大学の廃墟から発掘した、太陽エネルギー利用に関する資料を見て愕然としました。四国の形を想像してみてください。その三分の一の面積に太陽電池のパネルを敷きつめるだけで、日本の総発電量が半永久的にまかなえてしまうのです。すごいことだと思いませんか?」

「ふむ……なかなかおもしろい話ね」

ルウ子の瞳に一筋の光がよぎつた。

バクはその話の裏にある真意を暴いた。

「要するにあんたは、永遠のエネルギーを手にして、永遠の命をもつて、永遠に世界を後悔させたいだけなんだろ?」

「フ」と笑つただけで、孫は再びルウ子に言つた。「太陽電池の生産工場はすでに稼働している。原料の問題は技術的に解決できる見通しが立つた。この難局さえ……この難局さえ乗り切れれば、飢餓も汚染もない永遠の楽園が築けるのです。今からでも遅くはありません。私に従つていただけるなら、お三方の身の安全は保証します。屋上にヘリを用意してあります。今なら統京が灰になる前に脱出できますよ」

「そんなことをしなくても、列強を帰らせる方法はあるわ」

ルウ子は短剣を抜いた。

孫は笑つた。

「決闘で私を倒し、他の者に「」を引き継がせ、あなたと一人で大陸の中立国に逃れる。そして各国メディアに向け、マスター・ブレイカーの世界共有を宣言。目的を失つた列強は「」と母国に引き返すより他ない……といったところですか」「

「さすがね。わかってるじゃない」

「あなたはまだそんな甘いことを……」孫はため息をついた。「やはり、こうするより他ないようですね」

孫は懐から拳銃を抜き、ルウ子に狙いを定めた。

「汚いぞ！ 決闘なら同じ条件で勝負しろ！」

バクは怒鳴つた。

「お母さんに誓つたことを忘れたんですか！」

蛍は潤んだ目で訴えた。

「母への誓い？ なんですかそれは？」

孫は肩をすくめた。

「え？ だ、だつてあなたはたしかに、なくした左腕に誓つて……」

「ええ誓いましたよ」

「ならどうして……」

「ああ、まだあの話を信じていたんですか。橋本ルウ子、あなたも疑うことを知らない人だ」

孫はいびつな笑みをルウ子へ送つた。

「……」

ルウ子は黙したまま、孫を見据えている。

「母を食わせるために左腕を切り落とした？ まったくの『テタラメ』ですよ。仮に私が極度のマザコンだったとしても、そこまではやらないでしきう？ 私の左腕は生まれつきのものです。奇形ですよ。私はむしろ、こんな体に生んだ父や母を恨んでいた。実を言つとね、母を殺したのは私なんですよ。平時ならそんな勇気はなかつた。飢えというのはまったく恐ろしい……」

孫はかぶりをふつた。

「ま、まさか親を食つ……」

バクは想像しただけで猛烈な吐き気がこみ上げた。

孫は爽やかに微笑んだ。

「ま、ともかく、はじめからないものになにを誓つたつて無意味でしそう？」

「フフ……あたしの負けね」ルウ子は短剣を手放した。「電話番号は下着の裏に控えておいたわ」

孫はその細すぎる目を精一杯に見開いた。

「これは意外だ。不屈の人、橋本ルウ子ともあうつあなたが軽々しく敗北宣言とは。なにを企んでいるかは知りませんが、私を止めることなどできませんよ」

「なにを怯えてこるの？」ルウ子はすっと歩き出した。「勝負はついたのよ。さつさと撃ちなさい」

「と、止まりなさい！」

孫の銃口はひどくふるえ、狙いが定まらない。

「この期におよんで、なに？ 往生際の悪い

ルウ子は立ち止まつた。

言つていることがあべこべだ。

「なぜだ！ あれほど生に執着していたあなたが、こんなことくらいで諦めるとは……」

「なあに？ あたしに死んで欲しくないワケ？」

「そ、そんなことは……」

「ならないじゃない」

ルウ子は再び歩を進めた。

「止まれと言つている！」

孫はトリガーやを引いた。

銃弾はあさつてのほつに消えた。

ルウ子は立ち止まり、ふと懐かしげな顔をした。

「あんたとはじめて語らつたのはここの真下、タワー一階のラウンジだつたわよね？ 当時はまだ飢餓闘争が下火になつて間もない頃で、カフカらしきものはヤシしか営業つてなかつた」

「……」

「2016年のあの日あの時からやり直したい。あたしは窓際の席ですつぱいコーヒーをすすりながらそつ言つた

「……」

「その後、あんたはあたしの反対を言葉巧みに押し切つて、タワーとその周りをNEXAの拠点にした。はじめは権力の象徴が欲しいだけだと思つてた。けど……」

ルウ子は雨夜の統京を見つめた。2016年と瓜二つの統京を。

「ごめんね。鈍くつて。そういうの」

ルウ子は最後の一歩を踏み出した。

かすかに頬を染めるルウ子の胸に、孫の銃口がめりこんだ。

「知つていたら、世界はこんな事にはならなかつたかもね」

「ル……ルウ子……」

ルウ子は手のかかる子供を見るような目で微笑んだ。

「バカね……あんな嘘までついて。お母さん、雲の上で泣いてるわ

「……」

孫は銃を下ろすと、そのまますつと手放した。

絨毯をたたく湿つた音がした。

バクと革は吐息をつき、和藤は固く目をつぶり、そしてルウ子は両手を差し出した。

両手の行き先は黒縁メガネだった。

素顔になつた孫。

ルウ子は改めて男の頬を包みこんだ。こわばる顔を引き寄せつつ、自らも唇を寄せていく。

そのときだつた。

爆音とともに壁のガラスが激しく吹き飛んだ。大きな風穴の前に、ロープを携えた黒ずくめの男が立つていた。なにが起きたのかすぐには理解できず、呆然とする五人。真つ先に我に返つたバクは思わず声をあげた。

「熊楠！？」

蛍が続いた。

「引退したはずでは？」

「私は黒船島に骨を埋めるつもりだつた。だが、ペリー商会はこの男に追われた」ずぶぬれの熊楠は孫を指した。「私は逃亡先で、昭乃とともにこの国の未来を案じていた。電力網が復活すると、昭乃の予言通り、かつてのような汚染と破壊がはじまつた。人はパワーショックからなにも学んではいない。ゆとりを手にした途端、目先の利益や快樂のことばかり考えるようになる。人間は少し飢えているくらいがちょうどいいのだ」

熊楠は拳銃を抜くと、銃口を孫に向けた。

「孫よ！ 電気は人の手に余るのだ！」マスター・ブレイカーは永久に封印させてもらう！」

ルウ子は両手を広げて孫をかばつた。

「話はもうついたのよ。あたしたちはこれから大陸の中立国に逃れ、広く発電できるように働きかけるわ。これで世界のパワーショック問題もなかば解決よ」

「私の話を聞いてなかつたのか？ かえつて死の闇が広がるだけだ！」

「電気がないせいでも食っている人が、世界にはまだ何十億もいる。あたしはそれを見すごすことはできない」

「地球は人間だけのものではない。人は人だけの力で生きているわけではない。人を救いたければ、草一本虫一匹さえ疎かにしてはならんのだ」

「！」

ルウ子の瞳に光の筋がよぎった。これで二度目だ。ルウ子はこらえるように笑つた。

「なるほど……昭乃が選んだだけのことはあるわ」

「大罪を犯した私がここまで生きながらえたのは、この田のためだと思っている。頼むからそこをどいてくれ！」

「マスター・ブレイカーはここにもう一組あるわ」ルウ子は胸に手

をやつた。「手間が省けてよかつたじゃない」

「君は今、自分の誤りに気づいた。それをどう扱うべきか心得たはずだ。それがわかつた以上、君の可能性を絶つなど私にはできない。そこをどくんだ！」

銃声。

「クツ……」

熊楠は拳銃を取り落とした。手の痺れに顔を歪めている。

撃つたのは和藤だつた。彼女は別の拳銃を隠し持つっていたのだ。

「ぐずぐずしている暇はないのよ」

和藤は銃口を熊楠からルウ子へ流した。

「最初からルウ子を殺すつもりだつたな！」

バクは怒鳴つた。

「万が一敗れたときはそのつもりだつた。けれど、彼は勝つた。なのに……それなのに……」

女の頬に光の筋が走つた。

そつと撃鉄を起こし、和藤はトリガーを引いた。

胸を押さえる手。指の間から赤いものが溢れ、ボタボタと床を濡

らしていく。

苦しそうな息づかいは……孫英次のものだつた。とつさにルウ子をかばつたのだ。

「そんな……」

和藤は銃を手放すと、よろめく男に駆け寄った。

孫は女にどうと身を預けた。

「すまない栄美……自分で自分を『まかすこと』はもつ……でもそつにない……」

「ひどい……ひどすぎます……」

「そう……だな。私は……ひどい男だった」

「英次さん……」

「……」

「英次！？」

孫は白田を剥きかけたが、唇を噛んで止られた。

「少し……風にあたりたい」

和藤は孫を風穴のそばへ連れて行つた。

そこにいたはずの熊楠は、いつの間にかバクのそばに立っていた。

孫は雨の統京を眺めていた。

勢いを増す雨粒。地上の光たち。街は銀糸に包まれていた。

やがて、孫はルウ子に笑顔を向けた。

「死に満ちた世界でこそ生は輝くものです」

「えつ？」

「ルウ子……君なら……できる」

孫は息絶えた。

和藤の腕の中、謎めいた言葉を残したまま。

「孫！」

ルウ子は駆け寄ろうとしたが、すぐにためらつた。

和藤の執念から生じた見えない壁が、ルウ子の行く手を阻んでいるのだ。

「英次……」

和藤は孫の唇にそつと唇を寄せると、勝ち誇ったようにルウ子を見た。そして、孫を抱いたまま風穴の向こうへ身を預けていった。

「和藤！ ちょっと待……」

ルウ子はだつと駆け寄り、手をのばした。

あと一センチ……ルウ子の手は届かなかつた。

ルウ子が四つん這いにうなだれると、遅れて他の三人が駆けつけた。

ルウ子を慰めようと、バクが口を開きかけたときだつた。

廊下の間接照明がふわりふわりと消えていった。タワーのライトアップは下に向かつて失われ、NEXAの施設群は黒のスポットを浴びた。闇のさざ波は次第に荒れていき、ついには怒濤となつて光の国を呑みこんでいった。それはまるで、膨張するブラックホールだつた。絶望半径はあつという間に地平の彼方を越えた。

なにもかも消えた。

残つたのは窓を打つ雨音だけだつた。

バクはそつと手を差しのべた。

ルウ子はその手を取つて立ち上がると、言つた。

「あの夜と、同じね」

## 第九章 最後の戦い

ルウ子と螢は非常階段を降りていく。手すりを頼り、足もとをたしかめながら。しんがりに熊楠。バクの姿はない。

エレベーターは使えなくなつた。電灯もすべて消えてしまつた。パートナーを失つた二コのスイッチが自動的に切れ、日本中に散つていた地属性のテスランたちが皆、青いケータイの中へ強制収容となつたのだ。

一方、バクは夜目を活かしていち早く地上にたどり着くと、傘の下ですくんでいる職員たちを横目に、人工池のほうへ走つた。

浅い池の底。孫と和藤の遺体。

突風でも吹き上げたのだろうか、驚くほど傷みが少ない。密着して落ちたはずの二人は、少し離れて横たわつていた。

バクは池に入ると、和藤の左手を持ち上げ、孫の右手に組ませてやつた。

「俺にあんたほどの執念があれば、ミーヤは死なずにすんだかもなバクはうなだれた……が、すぐにかぶりをふると、孫のスーツを探つて胸ポケットからケータイを取り出した。試しに開いてみたが二コは姿を現さない。真つ暗のままだ。

バクはケータイを懷にしまうと、タワーの非常階段口へ駆けもどつた。

そこでルウ子たちと落ちあつはづだつたのだが……バクは我が目を疑つた。

NEXAの傭兵五人が出口を塞いでいたのだ。熊楠は女二人の盾となつて防戦しているが、この闇と豪雨のせいで思うように戦えず、圧されっぱなしだつた。

腑に落ちなかつた。孫や和藤の手際とはどうしても思えなかつた。が、今はそんなことを考えている場合ではない。

「ルウ子！」

バクが叫ぶと、ルウ子は声がしたほうに抜き身の短剣を放った。剣は弧を描いてアスファルトに突き刺さった。

バクは剣を引き抜くと、雄叫びを上げながら戦いの中へ突っこんでいった。

「オラアアアア！」

バクは一閃で五人すべて斬った。

闘神熊楠でさえ一瞬目を奪われるほどの早業かつ力業だった。もう誰も失いたくない。その一心が闇の力を増幅させたのだろう。叫声を聞きつけたのか、周りにいた影がこちらへ近づいてくる。

「二コは確保した。はぐれるなよ！」

バクの声にルウ子たちはうなづく。

四人はゲートめざして突っ走った。

タワーの周囲に比べ、ゲートの警備は手薄だった。

バクは詰所に押し入るや三人を気絶させ、残る一人をロープで縛り上げた。

一味の中に熊楠がいるとわかると、その男はひどく怯え、すぐに口を割つた。

停電のせいで開閉システムは機能しない。すべて手動でやるしかなかった。

バクは詰所を出て地面の鉄蓋を開けると、門番の言つていたハンドルを見つけた。

熊楠が駆け寄つてバクと代わると、男は機関車のじとく鉄輪をまわした。

巨大な格子門扉が横にスライドしていく。

そこを抜けて少し走ると、また同じ構造があつた。

バクが外門の詰所に押し入つている間、熊楠が蓋下のハンドルをまわす。

犬の声が近づいてくる。

今度の門扉は一秒に一センチずつしか開いてくれない。待つ時間

がもどかしい。

先頭の犬が内門のすき間に鼻をのぞかせた。

外門が小さく開いた。二十センチあるかないか。

四人はそれぞれ、横に向けた体をそのすき間へ強引にねじこんだ。

犬が吠える。兵隊も吠える。

バクたちはゲートを抜け、雨と風と暗闇の街へ駆け出した。

皮肉なことに、NEXAが発したはずの避難命令は、お膝元の街にはうまく伝わっていなかつた。

オフィスビルの玄関や軒下はラッシュアワーと化していた。一寸先を怖れてとりあえず避難したのだろう。エンストした車を降りてポンネットを調べるのは若者ばかりだ。年長のドライバーは前か後ろにもたれかかり、なにを思い出したのか悲嘆に暮れている。

誰もいなくなつた水浸しの歩道を、バクたちは走る。

「あつちだ」

バクは地下鉄口の一つを指した。

バクにとって地下は庭だつた。訪れた地域の地下鉄口はすべて頭に入つてゐるし、構内図と路線図を一度見れば、たいていの場所は迷わず行ける。

一行はバクを先頭に列車のよつに縦列して、階段を降り、改札を抜け、プラットホームから線路へ飛び降りた。

地上の人々は、不安や不満を口にしながらも行動は冷静だつた。それに対し、地下の人々は早くも理性の留め針<sup>ビン</sup>が外れていた。闇雲に出口を探して人や壁に激突する者。メガネをなくした近眼者のごとく地べたを這いまわる者。暗所恐怖に悲鳴を上げる者。

凄惨な恐慌を背に、『責』と刻まれた巨石に押し潰されそうになりながらも、バクは心中で人々に呼びかけた。

すまない……。朝までの辛抱だ。

バクたちは、大村と 臣蔵 が待つ港の最寄り駅をめざした。

線路を歩きはじめてすぐ、電車がトンネル内で立ち往生している

場所にぶちあたつた。一行は六両編成の脇、幅一メートルもない退避空間を行く。車内で怯える人々。暗闇、密室、孤独……。重いトラウマを抱えてしまうかもしれない、と螢が心配している。

それからしばらく、なにもない直線が続いた。

昂ぶりが引いてきたバクは、そこでやつと口をきく気になつた。

「熊楠。孫との決闘のこと、なんで知つてた

「うむ。実はな……」

熊楠は廃港でバクと別れた後のこと語つた。

「私は昭乃の介護をしつつ、看護師見習いとしての日々を送つていた。といつても、患者は海賊ばかりだがな。そんなある日、昭乃が夢の中で富谷の異変を察知した。私はそばを離れたくなかつたが、昭乃がどうしてもと言うので様子を見に行つた。昭乃のそれは正夢だつた。富谷はすでに滅んでいた」

バクはあえて訊いた。

「ミーヤの最期はどうだつた？」

熊楠は一度ためらつてから、口を開いた。

「私は見ていない

「そうか」

バクはうつむいた。

熊楠は続けた。

「私が富谷からもどると、黒船島に大きな変化があつた。ヌシが亡くなり、タチが拾つた富谷難民が新たなヌシとなつていて。百草先生だ」

「先生は無事だつたか……」

バクはほつと息をついた。

「それからしばらくは安泰な日々が続いた。ペリー商会が重症患者を出さないでくれたおかげで、私と昭乃は一人きりの時間を満喫できた。やがて私たちは夫婦の契りを結んだ。だが……幸せは長くは続かなかつた」

「NEXAか？」

「つむ。電力網の復活で人々の生活環境は向上した。そのせいで、今まで空氣のように思えていたものが、黒煙のように目立ちはじめた。治安問題だ。孫は湾岸住民の不安や不満に応えるべく、海賊討伐を宣言した。有力海賊のペリー商会は真っ先に攻撃目標となつた。

NEXA軍は苦手な海戦を避け、湾岸からの執拗な砲撃で黒船島を痛めつけていった。我々は一戦も交えることなく、残った船で逃亡するしかなかつた。一隻、また一隻と沈められ、私と昭乃と百草先生が乗る帆船が最後に残つた。砲台の射程からは逃れたが、今度は蒸気船団が待ちかまえていた。私は一緒に乗りあわせていたタチとともに矢で応戦した。四隻対一隻……数では圧倒的に不利だつた。そこで私は望楼に上がり、敵の士官ばかりを狙い撃つた。指揮官をすべて失つた連中は、混乱を極めた末に追撃を諦めてくれた

「昭乃が言つてたよ。あなたの矢は、まるで的のほうからあたりにいくようで怖いってな」

熊楠は苦笑いして続けた。

「どうにか統京湾を抜けた我々は、これというあてもなく北へ逃げた。積んでいた清水が尽きようとしていたとき、連なる断崖のすき間に小さな港を見つけた。我々は商船を装つて寄港すると、とりあえず港町にくり出した。

このまま逃避行を続けるべきかと悩んでいたところ、街角である男が私に声をかけてきた。私は驚かずにはられなかつた。その男は富谷の生き残り、しかもお互によく知る旧友だつたのだ。彼はなにも訊かず、自分が暮らす山村に来ないかと誘つてくれた。私と昭乃は決断した。船には乗らず、その男についていくと、百草先生も同行を決めた。それともう一人、タチもだ

「タチは根っからの海賊じやなかつたのか？」

「そのようだが、私の戦いぶりに惚れたから弟子にして欲しいと言つてきた。海賊からはいっさい足を洗うと」

「弓使いからすれば、あんたは神様みたいなものか……」

「そして我々は田之崎<sup>たのさき</sup>という名の村に入った。そこには旧友の他にも三十人ほど生き残りがいた。昭乃や百草先生の無事に皆は涙したが、私一人だけは歓迎されなかつた。故郷を捨てて殺戮に走つたのだ。昭乃の夫でなければ、私がその村で暮らすことは叶わなかつたろう。私は人目を避けて小屋に籠もり、ひたすら昭乃の介護に尽くした。やがて、診療所を開いた百草先生から看護師をやらないかと誘いがあつた。私は迷つたが昭乃が背中を押してくれた。私はしばらく村人に疎まれていたが、仕事を続けていくうちに少しづつ認めてもらえるようになつた。

田之崎ではかつての富谷に劣らぬくらい、静かで平和な暮らしが続いた。だが、私の頭からは孫やNEXAのことがどうしても離れなかつた。できることなら様子を探りたいが、私には昭乃がいる。仕事もある。そこで私はタチを密偵に仕立て、統京へ送りこむことにした。

しばらくして、タチは統京<sup>つけ</sup>湾でシバを見つけた。巧みに海軍網を抜ける工作隊の後を尾行していくと、その先は富根島だつた。君とシバの戦いには間にあわなかつたが、決闘の話を耳にしたタチは、急ぎ私のもとへ帰つてきた。孫を倒すなら今しかない。そう判断した私はすぐに上京、潜伏し、奴が油断する機会を密かに待つていたといふわけだ

「なるほど……」

バクは熊楠やタチの活躍に感心しつつも、一つの疑問が浮かんだ。「ところで、昭乃のことは放つといつていいのか？ 寝たきりなんだろ？ 診療やつてる先生一人じや……」

「ああ、そのことなら問題ない。こうなることもあるかと、私の代わりとなる看護師を一人育てておいた。腕力に乏しいのが少々心配だが、昭乃は安心して身をまかせている」

「あなたの腕力を基準にされたら、そいつはたまらないだろうな」

10月2日

夜が明ける少し前、バクたちは埠頭にたどり着いた。雨は小降りになっていた。

臣蔵 以下、離島船団は健在。列強艦隊の姿はまだない。上陸作戦に巻きこまれぬよう、バクたちは急いで 臣蔵 に乗りこんだ。

一行の無事に一人号泣する船長大村。

バクは彼の耳もとで、行き先だけをそつと告げた。

雨上がりの朝焼けのもと、離島船団は湾を脱して外海に差しかかった。

前を行く九隻はそのまま直進し、島への帰路に就いた。

一方、最後尾の 臣蔵 だけは取り舵を一杯にして、本土の東岸に沿つて北上する航路を取つた。

バクは 臣蔵 の船首に立ち、果てしない海原を眺めていた。

嵐は去つたが、海はまだ大きなうねりを残している。船室にいた

ほうが安全なのだが、どうもじつとしていられない。

速い潮に流されているのかそれとも風のせいか、岸からはだいぶ離れてしまつて目印になるものがない。大洋での単獨行はひどく心細いものだが、離島船団の者たちのことを考えれば、それはまつたくもつて贅沢な悩みといえた。列強艦隊は伊舞諸島の南東方面から押し寄せてきており、両者が遭遇する可能性は高かつた。軍の機密とやらの用はもうすんだらしく、船倉はすべて空なので、大きな騒ぎにはならないはずだが……。敵の大将が紳士であることを祈るしかない。

あれこれと思いをめぐらせていくと、水平線上に黒い鉢のようなものが、一つまた一つと増えていくことに気づいた。

「？」

バクは目をこらした。

鉢はどんどん増えていく。四つや五つなどではない。それらは頭に縮れ毛のようなものを一本ずつ生やしていた。十や二十……いや三十どころでもない！

望楼の男が叫んだ。

「敵だ！」

船員がどやどや集まつてきて、手にしていた双眼鏡を目にやつた。南方からやつて来る艦隊とは国籍がちがつていた。その数、五十を超える。

離島海軍はその戦力のほとんどを領海内の警備にまわしている。遠洋の索敵能力には限界があった。

危険を避けたつもりが裏目に出了のか。いや、どのみちこうなる運命だったのだ。

下を向いていると、熊のようないつに手がバクの肩をがしつかんだ。

「絶望すんのは死んでからにしろい」

バクはキッとふり返った。

船長の大村だった。

バクは弱気を悟られたのが癪で、つい声を荒げた。

「死んじまつたら絶望なんかできねえだろ？」

「ダッハッハ！ それもそうだ」

豪快な笑いとは裏腹に、いつもの田焼けした虎髭顔は船酔い客のようになに色を失っていた。

考えていることはバクとそう大差はないようだった。だが、心底になにか期するものがあるのだろう。絶対に生かして港まで届けてやる。そんな強い意志が熱風のように伝わってくる。

一人のすぐ後ろにいた細身の副長が大村に進言した。

「このままでは巻きこれます。迂回しましょう！」

大村は副長の胸ぐらをつかみ上げた。

「ど真ん中だ！ そのまま真ん中を行けい！ 一ミリでも舵切りやがつたら……殺す！」

大村の指示は狂氣の沙汰かと思われた。

だがその読みはあたつた。大村は海図ではなく風を読んでいたのだ。下手に逃げようとすれば乱氣流に巻きこまれ、逆に航行の邪魔をしてしまつところだった。抵抗の意志ありと誤解されたらそれこそおしまいだ。

艦隊が近づいてくると、大村をはじめとする船員たちは、漁網を片手にいかにも不機嫌そうな顔で待ちかまえた。

列強の海兵たちは双眼鏡を手に、臣蔵の装備を焦がさんばかりに観察している。

臣蔵は戦艦と戦艦の谷間を行つた。

すれちがつてゐる間も、海兵と『漁師』の睨みあいは続いた。艦隊は何事もなかつたように、ひたすら直進していった。

早々に船室に放りこまれたバクは、ルウ子とともに、丸窓から半分だけ顔をのぞかせ、物量にものをいわせる大艦隊を見送つた。二口は虫の胸の谷間、アルはルウ子のパンツの中で眠つてゐる。

臣蔵は一路、北をめざした。

10月3日

臣蔵は無事、断崖の狭間にある武慈港の埠頭につけた。船員たちに別れを告げ、バク、熊楠、ルウ子と渡り階段を降りていつた。

虫がそれに続こうとしたときだつた。

「すまなかつた！」

大村はいきなり土下座した。

虫は大声にびくつとして、ふり返つた。

「大村さん？」

「松下が死んだのは俺のせいだ。『あれ』は……俺がやらせた」

「顔を上げてください」

蛍は微笑んだ。

「……」

大村は伏せたままだ。

「大村さんがいなかつたら、今の私たちは在りません。あなたは孤独だつた私たちに手を差しのべてくれた。それで充分です」

「……」

大村は動かない。

蛍は笑顔のままふつと息をつくと、明るい声で言った。

「ああ、そういうば」と手を打つ。「どうしてくれるんですか、大

村さん」

「？」

大村は顔を上げた。

蛍は手を差しのべた。

「昨日の分で、お釣りを出さなければならなくなつたじゃないですか

か

「す、すまねえ」

蛍と大村は固く握手をして別れた。

大村はいつまでも子供のように泣きじやくつていた。

臣蔵 が島へ帰つていく。

バクたちは埠頭を後にした。

武慈の港町は天も地も鈍色に煙つていた。統京のようなパニックこそないものの、色あせた商店街のそこには、地元の人々が冴えない顔を突きあわせていた。

一行はそれを横目に、熊楠の案内で田之崎村へ向かつた。最も近道なのは、廃線跡の半自然歩道を利用する三十キロの道程。バクたちは市街地を離れると、リアス式のうねつた海岸沿いに走る線路の上をひたすら歩いた。

かつてはここを地元経営の短い列車が走つていたという。軌道、踏切、信号機、鉄橋、駅舎、プラットホーム……人の手が入らなく

なった鉄道設備は潮風のなすがまま、あるものは赤茶けた砂に、あるものは雑草の肥やしに還るゝとしていた。

一行は五キロほど歩いたところで、早くも顔に疲れの色を浮かべていた。海沿いとはいえ数百メートル級の山脈の片側をばっさり切り落としたような地形だ。山がちな路線の勾配は、激動の一一日間をすごしてきた三人にとつてはきついものがあった。

それを見かねたように、熊楠は「馬を連れてくる」と囁いて線路から逸れ、山手の崖を野鹿のごとく駆け上つていった。

バクはそれを呆然と見送った。とうに四十をすぎた男の脚力とはとても思えなかつた。

トンネルをいくつかぐぐると、断崖のすぐそばに出た。左を見下ろせば絶壁と海。右を見上げれば急斜面と密林。崖崩れでもあつたのか、線路の左半分は地面がなく、剥き出しで、道幅は大人の身長分もなかつた。カーブのせいで視界が悪い。ここが最大の難所だ。

一行はバク、茧、ルウ子の順で縦列し、線路の右側の砂利を慎重に歩いた。

列はすぐいちぎれた。バクが一人先を行き、茧とルウ子が団子になつてゐる。

断崖の高さに茧の足がすくんでいるのだ。単独で敵地に紛れる度胸はあつても、じつじうことはまつたく別の次元にあるらしい。

「つたぐ！」

ルウ子は茧の尻を足蹴にした。

「ひやあ！」茧はあわてふためき、その場に縮んで石になつた。「す、すみません……」

茧が慣れるのを待つしかなさそうだ。

バクは立ち止まり、水平線に目をやつた。

曇り空。海は凧。鏡と化した海面は、どこまでも続く雪原のようだ。

これまでいろんなことがあつた。想い出を白いスクリーンに投影する。

上映が終わると、これからのこととに思いを馳せた。

ルウ子は中立国に逃れるなどと言つておきながら、結局ここまでついてきてしまった。一口を誰かに託す気配もない（螢は単に持たされているだけだ）。あの大艦隊を実際に見て気が変わったのだろうか。

孫がルウ子に言つたという、厳しいひと言が脳裏をよぎる。

……国連は事実上消滅した。そんな今、発電の全権が集中したコニット……マスター・ブレイカーをいつたいどこで誰が管理するといふのです……

孫が倒れ、ルウ子は黙し、欲望と破壊の時代は去りつつあるのかもしれない。人間という爆弾を抱えてしまった自然界にとつては、望むところのだろうが……。では、これから飢えようとする国民や、すでに飢えている世界の人々はどうなるのか。人と自然……立體交差をくりかえす一つの道はいつひじで交わるべきなのか。悩みは尽きることがない。

顔にほのかな熱を感じ、バクはふと空を見上げる。雲が薄まつたのか、日輪のかたちを認めた。

視線を下げていくと、秋色に染まりかけた斜面の林が目に入った。枝葉のすき間に煌めく、銀の柳葉一つ。

「しまつた！」

バクはルウ子たちのもとへ駆けもどつた。

間にあわない！

「アアアアアツ！」

矢は螢の太腿に突き刺さつた。とつさにルウ子をかばつたのだ。

「螢！」

ルウ子はふらつく螢を背中から抱きとめた。

「だ、大丈夫です……」

螢は笑顔を見せるも、脣がひどくふるえている。上から舌打ちが聞こえた。

バクはそれで正体がわかつた。

「出てこい！ シバ！」

「油断したなア、ボウズ！」

赤髪の男が姿を現した。斜面の中腹、密林から突き出た太枝に立つている。

「今さらなんの用だ！ 孫は死んだ。NEXAはもう終わりだ！」

シバは尖った鼻先を斜めに上げた。

「知ってるゼエ！ 流浪の魔女一味が、お宝を持ち逃げしたこととなア」

ルウ子は言った。

「なるほど……タワーの周りで兵を指揮してたのは、あんたね？」

「フツ」シバは鼻で笑つた。「さアて、今持つてんのは誰だ？ ン

ン？」

シバは眼下の三人を見比べた。

バクは言った。

「二口をどうする気だ！」

「知れたことよ」

蚩は痛みに顔を歪めつつ、シバに怒りをぶつけた。

「電氣があるうがなからうが、他人が苦しもうが関係ない。永遠の若さを手にして、永遠に享楽の人生を続けたいだけ。あなたの頭の中身なんて、その程度よ！」

「ヘッ」

シバはまともに答えようとしない。

ルウ子は意地悪そうに言った。

「残念だつたわね。孫が死んだ今、二口の電話番号知つてんのはあたしらだけよ」

「湾岸の発電所を漁つていたら、こんなものが出でたんだがなア」

シバは十一桁の番号が書かれた紙切れを見せ、それを読み上げた。

「あ！」

バクとルウ子は同時に叫んだ。

二口の前のパートナー、平賀源蔵は番号を覚えるため何度も紙に

書いていた。その処分が不完全だつたのだ。

シバは高く笑つた。

「そういうことだ。なに考へてんのか知らねえが、契約を済つたの  
で皆殺しだつたろう。いや、どのみち奴はそうするつもりなのだ。  
シバとはそういう男だ。」

？

もし誰かが二口と契約を交わしていたら、今頃三人はシバの『銃

で皆殺しだつたなア。素直によこしゃあ、助けてやつてもいいんだぜ

シバとはそういう男だ。

「従うことないぞ」

バクは女二人をかばうように立つた。

「やめとけよ。そんなヤワな盾じや突き抜けちまつ」

「俺はただの盾じやないぜ」

バクはゴールキーパーの「J」とく大きくかまえた。

「なら、試してやろ」

シバは矢を放つた。

バクはそれを片手で払いのけた。

二の矢。

バクはそれも払つた。

「ずっとそこでそうしてゐる。そのうち熊楠がもどつてくる」  
シバから笑みが消えた。

「ボウズ、逃げんじやねえぞ！」

シバは矢を捨て、猛然と斜面を駆け下りた。

バクたちとシバは十メートルほどの間をおいて相対した。

「あんときはてめえに運<sup>ツキ</sup>があつた。だが……」シバは天を指した。

「今度は俺様だ！」

厚い雲の彼方、日はまだ高いところにある。

「それはどうかな！」

バクとシバは同時に短剣を抜いた。

戦いの場は平均台のようにな狭い。進むか退くかだ。

シバは一步また一步と砂利の上を行く。

バクは動かない。

シバは歯を見せた。

「今度こそ噴水ショーにしてやるぜ！」

シバは獲物を定めた豹のごとく駆け、ヒュツと剣を突き出した。

バクはかろうじてこれを払う。

シバは打ちこむ。

バクは払う。

一方的な攻防がしばらく続いた。

シバは打ちこむ。

「諦める！」

バクは払う。

「まだだ！」

シバの顔に焦りの色がにじんでいく。熊楠との接触を怖れているのだ。

「そうかい！」

シバの左腕。手中に光るものがあった。

シバは右で剣を打ちこむ。

バクはそこに剣をあわせる。

その隙、ナイフを放たんとシバは左腕を引いた。  
来た！

バクはさつと頭を下げた。

その背後。

石を手にしたルウ子のジャンピングショット！

「ウツ！？」

石はシバの左手を直撃。一瞬動きが止まった。

「シバアアアアアア！」

バク、渾身の突き。

「.....」

「.....ク」

切つ先はシバの脇腹を貫いていた。

バクは剣を引き抜く。

シバは剣とナイフを手放すと、片膝を落とし、ゴロと横たわった。バクはシバの武器を拾うと、崖下の海へ投げ捨てた。

シバは赤黒くなつた腹を押さえ、かすれた声で言った。

「き、汚ねえぞ……いきなり助つ人……アリかよ」

「暗器使いのあんたに言われる筋合いはないわ」

ルウ子は赤茶けた手の埃を払つた。

富根島でシバを取り逃がしたバクは再戦に備え、先の連携撃をルウ子と打ちあわせておいたのだった。

それにもしても、恐るべきはルウ子の集中力だ。ぶつつけ本番。風に暴れる小旗のごとく不安定なターゲット。一度きりしか通用しない戦法。その道のプロでも外しかねない場面だつた。

バクは深く深く息を吸い、そして吐いた。

ともかく、決着はついたのだ。

「蚩」

バクは赤く染まつた短剣を蚩に差し出した。

「……」

片足引きずる蚩はルウ子にもたれかかると、力無くかぶりをふつた。

「仇はいいのか?」

「そんなことをしても、私の両親は喜びません。それにルウ子さんも」

蚩の言葉に、ルウ子はうなずいた。

「カラスの餌なんかほつといて、さつさと行くわよ」

バクは剣の汚れを太腿の間で拭うと鞘に収めた。

負傷の蚩をルウ子から引き受け、背負つたときだった。地面が低く笑つた。

「へへ」

「！」

バクたちは固まつた。

シバは腹から赤いものを滴らせながら、ゆらりと立ち上がつた。そしてなにを思つたか、右手で左手首をぐいと引っ張ると、肘から下が根こそぎちぎれて、刀の先端のよつなものが露わになつた。

シバの左腕は義手だつたのだ！

「左腕さえ失つてなけりや……あの細田野郎にこき使われることはなかつた。奴は海でしくじつた俺を拾い……戦車の試作にまわすはずだつた大金を……この世界一精巧な義手につぎこんだのサ」シバの息は荒いものの、まだ数太刀報いるだけの氣力も血液も残つてゐるようだ。

バクは虫を下ろしてルウ子に預け、さつと剣を抜いた。

「逃がさねえ……てめえら道連れだ！」

シバは叫ぶや、バクに襲いかかつた。

バクは冷静だつた。

腕では劣る。とにかく時間を稼ぐんだ。

シバの一閃。

バクはそこに刃をあわせた……。

「？」

……が、そこに光るものはなかつた。

代わりに、バクの腹から赤いしぶきが飛び散つた。

幻惑された！？ 牽制フェイントに引っかかつてしまつた！

激痛に目が眩む。体中の全感覚が裂けた一点に集まり、手足に力が入らない。

シバが立ち上がれたのは、拷問に耐える訓練を受けたプロの戦士だからだ。その差が命取りとなつた。

「死ねやあ！」

シバはバクの心臓めがけて刃を突き出した。

バクは動けない。

「バクウウ！」

ルウ子と虫の絶叫。

……ひどいもんだ。

……残りの人生と引き替えに稼いだのが、たったの数秒とはな。

……こんなんじや、あの世で『あいつ』にあわせる顔がない。

……そんなことないよ。

……えつ？

バクはそこで我に返った。

シバの全靈を賭けた突き……が寸止めのまま固まっている。

赤髪の男は尖った左腕を突き出したまま、おそるおそる下を向いた。

鋭く隆起した左胸。その突端から赤水が噴き上げた。

「逃げ切れなかつたのは……俺か」

シバはどうと地に臥し、そのまま果てた。

遮るものが多くなつたその先には、弓を携えるタチがいた。雑草のごとき蓬髪や髭はさつぱりして、今や別人だ。

タチは低く言つた。

「裏切り者は生かさねえ。それが海の掟だ」

タチの背後に、一頭の馬を連れた大男が近づいた。

「そのセリフはこれで最後になるんだろうな？」

タチの肩がびくっと跳ねた。

「も、もちろんスよ師匠！」

「それより手当だ」

熊楠はバクと蛍の応急処置をすませると、三人をタチに預け、線路に咲いた一輪の矢羽のほうへ歩んでいった。

タチは意識なかばのバクを一人馬に乗せ、自身は女一人ともう一頭にまたがり、熊楠を待つた。

熊楠はうつ伏せの男を見下ろした。

「孫を殺し、二口をわが物にする機会は何度もあつたはずだ。我欲の塊のような貴様が、義手一つの恩にこだわつていたとはな」

熊楠はシバを抱え上げた。

「海に還つて出直してくるがいい」

亡骸は崖下の海に消えた。  
一頭の馬は村へ急いだ。

10月4日

バクは病室で目覚めた。

秋の優しい西田が足もとを温めていた。

四人部屋。ベッドは一つ空いている。

正面に蚩の顔があつた。先に起きていたようだが、まだ目が一本

線だ。隣のルウ子は無傷のくせにまだ泥眠している。

深手を負つてからのことは、なにもかもうろ覚えだつた。坂道を登り切り、森を抜けると、小麦色の絨毯が広がつた。はじめて見るのにどこか懐かしい感じがした。白衣の男となにか一言一言交わした。先生の顔は絞りたての真夏のTシャツみたいだつた。思つていたより傷は浅かつたのか、それとも先生の腕の賜物か、トイレくらいなら一人でも行けそうな気がした。

バクは布団をめぐると、もぞもぞと起き上がり、スリッパをはいた。

病室は空氣を入れ替えるためか、ドアを開け放してある。

廊下から女たちの声が近づいてきた。

「クツ、まだまだ……」

これは昭乃の声だ。すぐにでも駆けて行きたかったが、急には動けない。

棒が倒れたような音。

「ダメですよ、無理しちゃ。練習は三十分までつて言われたでしょ？」

「これは熊楠が育てたという新米看護師か？ それにしてもどこかで……。」「ダメ？」

「少女の目をしたつて無駄です」

「！」バクはバツと立ち上がった。「イツツツ……」

あまりの痛みに腹を押さえるしかなかつた。

「一摩さんより厳しいな」

昭乃のため息。

イスがきしむ音。

車輪が床をする音。

病室の出入口に昭乃の姿が見えた。

昭乃はバクを見つけると微笑んだ。

「起きたか」

そこでぴたりと車椅子が止まる。

昭乃は続けた。

「あれからずいぶん苦労したそうだな」「ま、まあな。つていうか昭乃」

「うん？」

「まさか……歩けるようになつたのか？」

「夫と手を繋いで歩きたい。私はひたすらそれだけを願つた。先生はよく言つていた。奇跡の決め手は医師の力ではなく」昭乃はぎこちない手つきで胸に手をやつた。「『意志』の力にあつたのだと」「それを言つなら」バクは頭突きの真似をした。「『石』みたいなガンコさじやないのか？」

昭乃はしらつと目を細めた。

「おまえもそんなくだらんことを言つよつた歳になつたか」「ちょっと乗つかつてみただけだつて」

二人は笑つた。

車椅子はなぜか止まつたまま、それ以上進もうとしない。昭乃はじれつたそうにふり返つた。

「なにをしている。恥ずかしいのか？」

「だ、大丈夫です」

車椅子の脇から白衣の女が現れ……。

ナースキャップを外し……。

おさげ頭を露わにした。

「おかえりなさい、バク」

「ミーヤ！ ゆ、幽靈じやないよな？」

「さわってみる？」

ミーヤは歩み寄ると、潤んだ瞳でバクを見上げた。バクは抱きしめた。

「ミーヤ……」

「バク……」

言葉も、ふるまいも、それで精一杯だつた。光が満ちてなにも見えない。

真つ白だ。

喜び、安堵、そして苦悩の記憶……咲ぶる三つの原色が一つに重なりあつていた。

白んでいた視界が少しずつ晴れしていく。

二人は唇を重ねた。

それがあまりに長かつたせいか、騒ぎで目覚めたルウ子が野次を入れた。

「世界を一人だけのものにしないでくれる？」

そこでようやく、バクとミーヤは我に返つた。

ルウ子は続けた。

「ほつといたら、そのままそこでベッドインしそうだつたわ」

二人はそろつて赤い顔を下に向けた。

バクはミーヤに訊いた。

「処刑されたつて聞いた。いつたいどんな魔法を使つたんだ？」

ミーヤが口を開きかけたとき、廊下のほうから男の声がした。

「私はそんなことを言つた覚えはないぞ」

白ずくめの熊楠が車椅子を押しながら入つてきた。

「は？」

「私は『ミーヤの最期は見ていない』と言つただけだ」

熊楠は事情を語つた。

彼がそう言つても当然だつた。ミーヤを窮地から救つたのが彼自身なのだから。

「知つてて……黙つてたのかよ」

バクは大粒の涙を床に落とすと、ミーヤを再び抱き寄せた。

熊楠はあたふたと両手の平を見せた。  
「す、すまん。言えば一度と口をきいてやらんと、昭乃に脅されて  
いたのだ。君を村に連れてくるなら、どうしても驚かせたいからと  
昭乃は激しくかぶりをふつた。

「ち、ちがう！ 私は百草先生に入れ知恵されたんだ」

そこへ百草が入ってきた。

「妙だな。私は熊楠君に相談を受けたんだが……」  
むなしい責任のなすりあいだつた。

なぜなら、そのときすでにバクとミーヤは……。

11月28日

バクとミーヤの再会から二ヶ月。  
統京で情報収集を続けるタチから便りが届いた。

列強軍団は難なく本土上陸を果たした。孫と電気を失つたNEX

A軍に戦う意思はなく、NEXA本部は無血開城となつた。

『科学帝国日本』が世界支配の野心を抱いている、というのは軍拡  
のための建前で、彼らの眞の目的はルウ子が読み切つたとおり、マ  
スター・ブレイカーなるものをその手に、発電の利権を独占するこ  
とにあつた。

軍人たちには母国と変わらぬ停電の国に戸惑つてゐた。諜報員が命  
がけで送つた報告書や写真はいつたいなんだったのか。調査隊の結  
成が急務だつたが、上陸した国々の間で牽制合戦がはじまる、互  
いに身動きが取れなくなつていつた。

そんなとき、世界中の新聞に上陸作戦時の写真が載った。

見出しへ『大義なき侵略』

非列強諸国はおろか、出遅れた列強国までもが態度をがらりと変え、この事件を痛烈に非難した。侵略者のレッテルを貼られた国々の立場は悪くなる一方だった。

そして当月25日、ついに全軍撤収命令が下った。日本に駐留していた軍隊は、マスター・ブレイカーを手にするどころか、その存在の真偽さえ確認できずに母国へ引き返していった。

列強が日本上陸を果たして間もない頃、世界各地で離島海軍の船が目撃された。欲に目が眩んでいたのか、列強首脳はその報告を「些事である」と歯牙にもかけなかつたといつ。

11月29日

その日の晩。バクと蛍の全快を祝い、近所の住民を集めて宴会が催された。

その席でのこと。

酔いのまわつた蛍は、仲むつまじいバクとミーヤを物欲しそうに眺めていた。

「いいな……」

蛍は人差し指をくわえた。

「あんたには、あたしがいるでしょ？」

ルウ子はその指を取り、「はむ」とくわえた。

蛍はバツと身を引いた。

「えええええつ！？ ル、ルウ子さんて実は『そういう』趣味だつたんですか？」

「バーク！ あたしにはまだやることが残つてんのよ。自動的にあなたも道連れ

「は、はあ……」

「それが一段落ついたら、オトコを探してあげるわ」

11月30日

ルウ子と螢が忽然と姿を消した。

今朝、ミーヤが一人を起こしに宿舎の部屋を訪ねたとき、そこはすでにぬけの殻だつた。

ミーヤは宿舎前に人を集め、捜索にあたろうとした。

そこに、一枚の紙切れを持つてバクが駆けつけた。

バクが酔いつぶれて眠っている間に、ルウ子が懐に忍ばせたようだ。

それはたつた三行の短いメッセージだつた。

死に満ちた世界へ行つてきます。

あなたたちも、生きのびてね。

ルウ子（Witch 螢）

夕方、タチから便りがあつた。

ふた月前の大停電以来、首都圏は混乱を極め、食料をめぐる争い事が絶えない。

人々はそろつて同じことを口にしていた。

「第一次パワーショックがはじまつた」と。

2057年5月6日

ルウ子と螢が、バクたちのもとを去つて六年と半年。バクは二十九、ミーヤは一十七となつた。

田之崎村の周囲にそびえる高い石垣。のどかな山村の風景はすっかり殺伐とした要塞に変わつていた。

孫と和藤の死後、大黒柱を失つたNEXAは一年もたたずに解体となつた。NEXAとの癒着を深めていた新政府の権威も完全に失墜。中央政府に見切りをつけた地方はそれぞれ独自に政治を行うようになり、事実上、日本は四十七にも及ぶ小さな国々に分かれてしまつた。

年を追つじとに偏りが増す天候。豊作凶作の年差や地域差は広がる一方だつた。飢えが生じた地域の周辺には、必ずといつていいほど争いがあつた。

国境に近い田之崎村は狙われるほつの立場だつた。

その日もバクとミーヤは矢倉に立ち、石垣の周囲を監視していた。山賊なのか隣国の斥候なのか、怪しい人影が森の木陰にちらほらと見える。

東北の龍虎將軍と恐れられている、熊楠夫妻の目の黒いうちはまだいい。だがこの先、田之崎がいつまで持ちこたえられるか、わかつたものではない。

バクは双眼鏡から目を離すと、言った。

「まるで戦国時代だな」

半年に一度くらいは同じことを口にしている。わかりきつたことなのだが、言わずにいられないのだ。

ミーヤは言った。

「それでも、二ノ口と契約しなかったのは正解だつたと思つ

「そりやあ、そうだけどさ……」

大きな力を扱うにはそれに釣りあう抑制が必要だが、人の心の進化は科学の発展ほど早くはない。ミーヤの言葉が道理なのはわかるが、それでもバクは浅はかな望みを捨てきれなかつた。人々が努力を惜しまなければ、人が飢えず破壊もない社会だつて作れないはずはない、と、心の底では信じていた。

それはそうとルウ子だ。六年以上も音沙汰なしとは、彼女にしてはあまりに大人しすぎる。手紙にあつた『死に満ちた世界』とはいつたいどこを指しているのか。孫の最後のメッセージを解読してそこへ渡つたのだろうが……。

矢倉の下から昭乃の声がしたので、バクは地面を見下ろした。昭乃はリハビリを半年前に終え、有事に備えて日々武芸に励んでいた。もう一つの大事なことにも励んだらどうかと、昭乃は村人によく冷やかされるのだが、「子供に武器を持たせたくない」の一点張りだった。

「タチから便りがあつた。『チーム地球』の協力を得て、このたび統京に新たな政府が立つそうだ。先週、日本の四十七国の代表が集まり、国家統一を宣言した。戦国の世は終わりだ。首相も内閣もすでに決まっている」

「政府つたつて、どうせまた綱渡りの半軍事政権だろ?」

「いや、今度のは案外しつかりしているようだ」

「ふーん」バクは一応は信じてやるという顔をした。「で、チーム地球つてなんだ?」

「さあな」

「さあな……つて、どんな組織かくらい書いてあつたんだろ?」  
なにを思い出したのか、昭乃は額にびきつと青筋を立てるといきなり怒鳴りだした。

「ともかく、百聞は一見にしかずだ! 来月、統京で世界同時中継による重大発表がある。おまえたち一人には、村を代表してそれを

見てきてもうつ

「は？ 中継？ 発表？」

「たしかに伝えたからな！」

昭乃はどすどすと地響きをたてながら去つていった。

喜ばしい一報だといつのに、いつたいなにが気に入らないといつのか。

わからずじまいのまま、月日は流れた。

6月3日

「ナントカビジョンつていうのは……あれか？」

バクは新統京タワーの中腹、大展望台の壁面を独占する大きな平板を指した。

「東西南北に同じものが一つずつあるよ

ミーヤは『統一政府』が発行したパンフレットを見ていた。

日はすっかり西に傾き、コンクリートの林を琥珀色に染めていた。集合時間は日没後とあり、バクたちはそれにあわせてタワー下へやつてきたのだった。

タワー以外の旧NEXA施設群はすべて解体撤去され、そのスペースは広々とした公園になつていて。そこにはバクたちと同様、緊急中継の知らせを受けた地域の代表者たちが続々と集まつていていた。公園はタワーを中心としてすり鉢状の階段が広がる、太古の劇場を平たくしたような造りだった。

「『』の辺にすわるつか？」

ミーヤが言うと、二人は段差の上に腰を下ろした。

日が沈み、辺りが暗くなつてみると、そこらじゅうにかがり火が灯つた。

『あ、あー、きこえますかあ？』

突然、耳をつんざく大音量が響き渡つた。女の声だ。

割れと残響が著しいその音は、明らかに生声ではなかつた。

『えー、皆さま。誠に恐れ入りますが、カウントダウンをお願いします』

「なんだつて?」

バクは思わず聞き返した。

『さん、にい、いちい……』

脳天気な独りカウントはそこで途切れた。

沈黙。

「?」

バクとミーヤは顔を見あわせた。

『えつ? 『』挨拶が抜けてる? は、ひや、『』めんなさい!』  
女はそばにいた男と台本の確認をはじめた。本人は声をひそめて  
いるつもりなのだろうが、その音は増幅されて、数万の耳もとにす  
っかり届いていた。

『えー、失礼しました。わたくし、チーム地球の報道官を務めさせて  
いただいております、松下蛍と申します。さて、今日といつ日を  
迎えるにあたつて私たちは、紆余曲折、意匠惨憺、粒々辛苦……ん  
? つぶつぶ?』

ガサガサと紙をめくる音。

「け、蛍? あの蛍なのか?」

バクは目をこらすが、遠すぎてよくわからない。

蛍はマイクを手にしたままささやいた。

『これ、なんて読むんでしたつけ? えつ? 時間が押してる?  
私のせいですか? ひああ……』

薄い本がパシと閉じる音。

『えつと……と、とりあえずスクリーンを『』覗くださいっ  
ざわつく聴衆。

『つたく、カウントダウンはどつたんだよ』

バクが蛍の醜態を嘆いていると、ミーヤがスクリーンを指した。  
「な、なんか映つたよ?」

真つ黒だつた平面に、突如として砂漠の景色が広がつた。人々は画えの内容よりもスクリーンの明かり 자체に驚き、歓声をあげた。

バクはそれでようやく実感した。

そう、電気が復活しているのだ！

茫漠とした鳥瞰だつた。どこまで行つても砂しかない。生き物などとも住めそうにない土地だ。日はまだ昇つてまもないようで、灼熱地獄というよりは、夜の間に冷えきつた大地を熔つている最中といった感じだ。

バクは言った。

「あんなの映してどうしようってんだ？」

ミーヤが画面を指した。

「あれ、なんだろ？」

一ヶ所だけ極端にコントラストのちがう、黒光りする湖のような広がりがあつた。

そこにカメラが寄つていく。

正体は太陽に顔を向けた無数のパネルだつた。よく見ると、透き通つたドームが敷地をすっぽり囲んでいる。砂防用なのだろう。カメラが地上に切り替わる。

巨大パネルの足もと。画面の右側から金髪の少女が現れた。

「あーっ！」

バクとミーヤは同時に叫んだ。

少女は一礼した。

『どうも橋本ルウ子です。一部の人は知らなかつたと思いますが、三年前からチーム地球のカントクやつてます。えつと……本日をもちまして、すべての国と地域に電気が行き渡りましたので、ここに世界電力の復活を宣言します』

水を打つたような静寂。

バクもミーヤも、あまりに唐突の知らせに言葉がない。

ルウ子はなにも変わつていなかつた。顔の左右に黄金の竜巻を裝

備。紺色のブレザー。挑発的に短いチェックのスカート。瑞々しい太腿に走る傷痕。十二年前、NEXA所長室での屈辱の『初対面』。六年前、泡まみれのジョッキ片手に董とじやれあつていた最後の晩。写真の中から飛び出してきたのかと思えるほど、あのときのままだつた。少なくとも見た目は。

バクはそれがうれしくもあり、少しだけ哀れにも思えた。

ルウ子は片手を広げた。

『そこにあるのはすべて太陽光発電のパネルです。知つての通り、太陽光は環境負荷が少ないクリーンなエネルギー。なるべく自然を壊さず、それまでどおりに電気を使えるのなら、それに越したことはない』

聴衆は聞き入っている。

ルウ子は続けた。

『みんな頭ではそれをわかつてゐる。でも国家とか人種とか宗教とか個人の都合とか、いろんなしがらみが邪魔してゐる。そこであたしは、何人だらうと何教だらうと何歳だらうと長者だらうと一文無しだらうと、気持ちさえあれば誰でも参加できる『チーム地球』を設立し、このプロジェクトを取りまとめました』

「取りまとめた？ 脅迫したとか強制したのまちがいだろ？」「

バクのツッコミにミーヤが苦笑いした。

『人材や物資は集まつた。問題はパネルをどこに展開するかだつた。そこで白羽の矢が立つたのが、砂漠。こんな死に満ちた世界に人生かす種が隠されていたなんて、世の中まだまだ不思議なことだけよね』

聴衆は見入つてゐる。

ルウ子は続けた。

『で、そんなペラペラの板で世界の電気をまかなえるのかつて？ 驚くなれ、世界にある砂漠のうちの五パーセント。たつたの五パーセントよ。そこにパネルを置くだけでいいの』

信じられないという聴衆の顔、顔、顔。

人類史上最大ともいえる大偉業を、クラスの委員長が教室で語るかのように、さらっと口にするルウ子。その陰でいつたいどれほどのかの苦労があつたのか、あの李の<sup>すわせ</sup>ような幼顔からはなにも感じ取れない。

ルウ子は断じて天才ではない。俗にいう学力で測れば（本人には悪いが）見た目どおりだ。それでもたつた一人、たつた一つの机からNEXAを興し、数々の挫折を乗り越え、ついには地球全体をホールムグラウンドにした巨大な『チーム』まで作り上げてしまった。闇に埋もれた世の中に、まばゆい陽光を投じることができたその根底にあるもの。それは優れた論理でも山のような札束でもない。太陽さえ火傷しそうな『熱い心』だったのだ。

不意にルウ子は視線を落とした。

『ここで一つ、非常に残念なニュースがあります』  
聴衆のざわめき。

『先日行つた、史上最高性能の地球シミュレート実験で、あたしらが一番恐れていたことが確定的になつた。今やそれを疑う学者はない。どんな楽観主義者も、どんなへそ曲がりもよ。今後の発展を禁じ、現状の文明活動を維持したとしても、人間が遭した数え切れないほどの破壊分子の影響で、人類は……』

ルウ子はうつむき、声を沈ませた。

『あと三百年と保たないの。次のミレニアムは迎えられないのよ』  
ざわめきがぴたりと止んだ。

ルウ子は顔を上げた。

『だけど絶望するのはまだ早いわ。人間には知恵がある。科学がある。科学の力で乱れた自然を良いほうへ変えていくことはできる。でもその前に一つ、変わるべきことがあるの。』

科学はこれまで、人を生かすためだけに在るものだつた。だから自然とは真っ向対立するハメになつた。環境に良かれと思つてやつていることでも、その環境つていうのは、めぐりめぐつてみればみんな自分のため、人間の都合のため、種族保存のため。それは獣が

やつていることと一緒。人間も獸だつてことの証拠。

これまで、おおらかなるこの惑星は、人間がまだ獸であることを免じてくれていた。だけど、免許の有効期限はもう残り少ないらしいわ。しかも更新できないときてる。あたしたちは、これから一つ上級の免許を取るしかないのよ。

上級だからつて怯むことはないわ。まずは、そうね……近くの山や塔のてっぺんから、自分の住んでいるところを見下ろしてごらんなさい。ただ、ぼーっと突つ立つてるだけじゃダメよ？ あたしがさつき報告したこと、人類はあと三百年しか保たないってこと、目の前の景色と重ねてみるの。きっと、あなたのなかにかが変わると思う。でも、それだけじゃあ間にあわないし、それどころじゃない人たちもいる。というわけで……』

ルウ子は満面の笑みを見せつつ、さりげなく片手を背中にまわした。

突如、すべての画面が暗転した。かがり火の仄かな揺らめきだけが残った。

バクは声をあげた。

「な、なんだ？ また停電か？」

ミーヤがくすっと笑う。

「ちがうよ。ルウ子さんがアレを……」

「ああ、アレね」

この放送は世界中に流れている。今この瞬間、各地で戦慄が走つたにちがいない。

画面は再び、砂漠とパネルとルウ子を映した。

『今後、世界電力の半分は、『地球のための』環境修復と『人間のための』飢餓救済に使うことにします。今日の話を踏まえてもなお不服があるなら、カントクのあたしに直接電話しなさい。ただし、その前に一つ言つておくわ』

ルウ子は腰にぶらさげていた水筒の水を口に含むと、続けた。

『テレビ見たい。エアコンつけたい。部屋を明るくしたい。指先一

つ荒れない楽な暮らしをしたい。その気持ちはわかる。でもね、それは住むところがあつてこそなのよ。生かしてもらえる大地があつてこそなの。地球は人類の大家だつてこと、忘れて欲しくないの。それでも、どうしても贅沢を我慢できないっていうのなら……』

『ルウ子はびしとカメラを指して叫んだ。

『それに見あう家賃を地球に払いなさい！』

続けて低く言つた。

『あたしの言いたいことは、それだけよ』

聴衆から疎らな拍手があつた。それは徐々に会場全体に広がつていき、一人また一人と立ち上がり、最後にはその場の全員が立つて大きな歓声をあげた。

バクは拍手を続けながら言つた。

『まったく、たいした人だよ』

ミーヤはうなずいた。

『かなわないよね』

『ゴホン。えー、最後に私事で恐縮ですが……』

『うん？』『え？』

二人は改めて画面を見つめ直した。

ルウ子はカメラめがけて突進すると、両手でがしつとフレームを押さえつけた。

『バク！ ミーヤ！ 戦いは終わつたんだから、さつさと子供作つてこつちに一度連れてきなさい。砂の海ばかり見てたつて退屈でしょがないわ！ 以上。ルウ子でした』

ルウ子の特大の笑顔を残し、画面は暗転した。

『あんのバカ！』

バクは額に手をやり、ぐつたりとうなだれた。

『……』

ミーヤはバクの背中の裾をツツと引っ張つた。

『うん？』

バクは顔を上げ、ふり返る。

「……」

ミーヤは潤んだ瞳でバクを見上げるだけだ。

二人はしばし無言で見つめあつた。

「わかつたから、そんな目で見るなつて」

バクは笑いながら片手を差し出した。

ミーヤは笑いながらその手を握つた。

そして、二人は家路についた。

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5172f/>

---

パワーショック・ジェネレーション

2010年10月8日11時16分発行